国横断自動車道広島浜田線建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書 III

本 文 編

郷路橋遺跡
滝ノ屋谷城跡
桜尾城跡
森迫城跡
内ヶ原城跡
後河内古墓群

1991年3月

育委員会

中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　正誤表

本文編

P	行	誤	正
P150	3行目	図版103-1	図版103~106
P167	4行目	（第14図）	（第14図、図版116-2）
P227	15~24行	（2）	（4）
		（3）	（5）
		（4）	（6）
		（5）	（2）
		（6）	（3）
P357	註(1)	島根県教育委員会	金城町教育委員会

図版編

P	誤	正
図版８	14-2	14-3
	14-3	14-2
図版13	17-3	17-4
	17-4	17-3
図版15	21-4	21-5
	21-5	21-4
	22-3	22-4
	22-4	22-3
図版25	30-14	30-22
	30-15	30-21
	30-16	30-20
	30-17	30-19
	30-19	30-17
	30-20	30-16
	30-21	30-15
	30-22	30-14
図版29	36-6	36-7
	36-7	36-6
	36-8	36-9
	36-9	36-10
	36-10	36-11
	36-11	36-12
	36-12	36-13
	36-13	36-14
図版41	50-3	50-2
	50-4	50-3
	50-5	50-4
	50-6	50-5
	50-7	50-6
	50-8	50-7
	50-9	50-8
	50-10	50-9
	50-11	50-10
	50-12	50-11
	50-13	50-12
	50-14	50-13
	50-15	50-14
	50-16	50-15
	50-17	50-16
	50-18	50-17
	50-19	50-18
	50-20	50-19
	50-21	50-20
	50-22	50-21

P	誤	正
図版41	50-23	50-22
	50-24	50-23
図版42	50-25	50-24
	50-26	50-25
	50-27	50-26
	50-28	50-27
	50-29	50-28
	50-30	50-29
	50-31	50-30
	50-32	50-31
	50-33	50-32
	50-34	50-33
	50-35	50-34
図版53	60-14	60-15
	60-15	60-16
	60-16	60-17
	60-17	60-18
	60-18	60-19
	60-19	60-20
	60-20	60-21
	60-21	60-22
	60-22	60-23
	60-23	60-24
図版53	60-24	60-25
	60-25	60-26
	60-26	60-27
図版56	63-24	63-23
	63-25	63-24
	63-26	63-25
	63-27	63-26
	63-28	63-27
	63-29	63-28
	63-30	63-29
	63-31	63-30
	63-32	63-31
	63-33	63-32
	63-34	63-33
図版63	71-6	71-7
	71-7	71-6
図版64	72-1	72-2
	72-2	72-1
図版243	41-2	41-4
	41-3	41-2
	41-4	41-3

中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書 III

本　文　編

序

島根県教育委員会は，日本道路公団広島建設局の委託を受け，昭和57年度（1982）以来，中国横断自動車道広島浜田線建設地内遺跡の調査を行ってまいりました。本書は昭和62年度（1987）から平成２年度（1990）に実施した遺跡発掘調査のうち郷路橋遺跡をはじめとする６遺跡の調査結果をまとめたものであります。

中国太郎と呼ばれる江川は多くの支流を集めて日本海に注ぐ大河であり，古来より山陰と山陽を結ぶ動脈として利用され，その流域には多くの交通路が開かれていたことは広く知られているところであります。今回対象地域となった邑智郡瑞穂町市木地区と那賀郡旭町市木・本郷・重富・和田地区も江川の支流，八戸川の流域に位置し，古くから山陰と山陽を結ぶ重要な役割を担ってきたところであります。この度の調査により，７～8,000年前の縄文時代から江戸時代までの遺跡がみつかりました。日本国内でも最古級に属する古墳時代後期の製鉄遺跡をはじめとして，縄文時代の集落跡，中世の城郭跡，江戸時代の古墓などいずれもこの地方の歴史を解明していくうえで重要な資料となるものと考えております。

本書においては，多岐にわたる出土遺物について十分な検討ができず，不備な点も少なからずありますが，この調査結果が多少なりとも埋蔵文化財に対する理解に役立つことができれば幸いであります。

なお，発掘調査および本書の刊行にあたりましては日本道路公団広島建設局浜田工事事務所をはじめ，各方面から多大なるご支援，ご協力をいただきましたことに対し心よりお礼申し上げる次第であります。

平成３年（1991）３月

島根県教育委員会　教育長

原　田　俊　夫

例　　言

1．本書は，1987～1990年度（昭和62～平成２年度）の４箇年にわたって島根県教育委員会が日本道路公団広島建設局の委託を受けて実施した，中国横断自動車道広島浜田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち下記の遺跡の発掘調査報告書である。

郷路橋遺跡（ごうろばし）　島根県邑智郡瑞穂町市木1356－１外
滝ノ屋谷城跡（たきのやだに）　島根県邑智郡瑞穂町市木6634－３外
桜尾城跡（さくらお）　島根県邑智郡瑞穂町市木6712－６外
森迫城跡（もりさこ）　島根県那賀郡旭町市木6815－４外
内ヶ原城跡（うちがはら）　島根県那賀郡旭町市木7198－３外
後河内古墓群（うしろごうち）　島根県那賀郡旭町本郷 396－３外

2．挿図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系Ｘ軸の方向を指す。従って瑞穂町市木では真北より0°5′52″，旭町和田では真北より0°4′6″東の方向を指す。

3．出土遺物および実測図・写真は島根県教育委員会で保管している。

4．各遺跡とも出土品の石材同定にあたっては，三浦 清氏の御教示を得た。

5．掲載図面は主に松本岩雄，三宅博士，足立克己，佐伯徳哉，角田徳幸，林　健亮，寺尾　令，佐々木聡，錦織　弘，小笹　基，永瀬伸二，土谷　徹，森山敏広，松尾千枝子，足立郁子，吉田典子，近藤純子が作成した。写真は松本岩雄，三宅博士，足立克己，佐伯徳哉，角田徳幸，小笹基，林　健亮が主に撮影した。

6．本書の執筆分担は目次および文末に記すとおりであるが，発掘調査員以外の下記の方々にも御寄稿いただいた（敬称略・順不同）。

清永欣吾（日立金属株式会社）　寺井　毅（山陰中世城郭研究会）
伊藤晴明（島根大学）　時枝克安（島根大学）
大澤正己（新日本製鉄八幡技術研究部）　三浦　清（島根大学）
渡辺　誠（名古屋大学）　中村俊夫（名古屋大学）

7．本報告書は調査担当者が協議し，松本岩雄，足立克己，角田徳幸が編集した。

本　文　目　次

第Ⅰ部　調査の経過と周辺の遺跡

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査の経過 ---------- （松本岩雄・森山敏広） ---- 1

1．調査に至る経緯 ---------- 1

2．調査の経過 ---------- 2

3．調査組織 ---------- 6

第Ⅱ章　位置と環境 ---------- （松本岩雄） ---- 11

1．瑞穂町市木・旭町市木地区 ---------- 11

2．旭町本郷・重富・和田地区 ---------- 17

第Ⅲ章　遺跡の概要 ---------- （錦織　弘） ---- 23

1．郷路橋遺跡 ---------- 23

2．滝ノ屋谷城跡 ---------- 23

3．桜尾城跡 ---------- 23

4．森迫城跡 ---------- 24

5．内ヶ原城跡 ---------- 24

6．後河内古墓群 ---------- 25

第Ⅱ部　各遺跡の調査

第Ⅰ章　郷路橋遺跡 ---------- 27

第1節　調査の概要 ---------- （足立克己） ---- 27

第2節　縄文時代の遺構・遺物 ---------- （足立克己） ---- 31

第3節　室町時代の遺構・遺物 ---------- （角田徳幸） ---- 112

第4節　江戸時代の遺構・遺物 ---------- （角田徳幸） ---- 116

第5節　自然科学分野の分析 ---------- 133

(1)　郷路橋遺跡のテフラ ---------- （三浦　清） ---- 133

(2)　郷路橋遺跡E区第2黒色土下面貯蔵穴出土トチの実の年代測定結果報告 --- （中村俊夫） ---- 135

(3)　郷路橋遺跡鍛冶炉跡の自然残留磁気測定 ----- （伊藤晴明・時枝克安） ---- 136

(4) 郷路橋遺跡（昭和62年度調査）出土鉄滓の調査 ……（清永欣吾）…… 140
(5) 郷路橋遺跡出土鉄滓の調査（Ⅱ） ……（清永欣吾）…… 144
第Ⅱ章 滝ノ屋谷城跡 ……（林 健亮・佐伯徳哉・森山敏広）…… 149
1．調査の概要 …… 149
2．遺構と遺物 …… 156
(1) 第2郭 …… 156
(2) 第3・4郭 …… 160
(3) 第5・6郭 …… 160
(4) 北郭群 …… 165
(5) 東 郭 …… 167
3．小 結 …… 167
第Ⅲ章 桜尾城跡 ……（小笹 基・松本岩雄）…… 175
1．調査の概要 …… 175
2．Ⅰ区（東1郭）の調査 …… 175
3．Ⅱ区（東2郭）の調査 …… 184
(1) 北側テラス …… 184
(2) 東側テラス …… 184
4．Ⅲ区（北1郭）の調査 …… 190
5．小 結 …… 190
第Ⅳ章 森迫城跡 ……（林 健亮）…… 197
1．調査の概要 …… 197
2．遺構と遺物 …… 207
(1) 主 郭 …… 207
(2) 西1郭・西側斜面 …… 208
(3) 堀 切 …… 213
(4) 東1～4郭 …… 213
(5) 溝・土坑 …… 222
(6) 横穴遺構 …… 226
(7) 遺 物 …… 227
3．小 結 …… 329
(1) 土器について …… 229

(2) 山城について …… 231
第Ⅴ章 内ヶ原城跡 …… (小笹 基・松本岩雄) …… 233
1．調査の概要 …… 233
2．第Ⅰ区の調査 …… 237
(1) 第1トレンチ …… 237
(2) 第2トレンチ …… 237
(3) 第8トレンチ …… 237
(4) 第9トレンチ …… 240
(5) 淡赤褐色土層上面 …… 240
(6) 淡赤褐色土層下面 …… 241
(7) 弥生土器包含層 …… 241
3．第Ⅱ区の調査 …… 244
(1) 主郭 …… 244
(2) 主郭西斜面 …… 252
(3) 西1郭 …… 252
(4) 帯郭・西2郭 …… 257
(5) 竪堀状遺構 …… 257
4．出土遺物 …… 257
(1) 石器ほか …… 257
(2) 弥生土器 …… 259
(3) 土師質土器 …… 263
(4) 土錘 …… 264
(5) 陶磁器類 …… 265
(6) 石臼 …… 268
(7) 金属製品その他 …… 270
5．小結 …… 270
(1) 弥生時代の遺構について …… 270
(2) 山城跡について …… 271
第Ⅵ章 後河内古墓群 …… (角田徳幸・永瀬伸二) …… 277
1．調査の概要 …… 277
2．Ⅰ区 …… 278

(1) 遺構の配置状況 …… 278
(2) 1号墓 …… 283
(3) 2号墓 …… 283
(4) 3号墓 …… 284
(5) 4号墓 …… 285
(6) 5号墓 …… 286
(7) 6号墓 …… 287
(8) 7号墓 …… 287
(9) 8号墓 …… 288
(10) 9号墓 …… 290
(11) 10号墓 …… 291
(12) 11号墓 …… 292
(13) 12号墓 …… 294
(14) 13号墓 …… 294
(15) 14号墓 …… 295
(16) 15号墓 …… 296
(17) 16号墓 …… 296
(18) 17号墓 …… 297
(19) 18号墓 …… 297
(20) 19号墓 …… 280
3．Ⅱ　区 …… 301
(1) 遺構の配置状況 …… 301
(2) 19号墓 …… 302
(3) 20号墓 …… 303
(4) 21号墓 …… 308
4．Ⅲ　区 …… 312
(1) 古　墳 …… 312
5．小　結 …… 317
(1) 古墳の時期とやつおもて古墳群との関係 …… 317
(2) 古墓群の時期と構造 …… 319
付論　後河内古墓群出土鉄滓の金属学的調査 …… （大澤正己） …… 323

第Ⅲ部　総　　括

第Ⅰ章　縄　文　時　代 ---------- （足立克己） ---- 331

1．縄文土器について ---------- 331

2．石器について ---------- 339

3．トチの実の貯蔵穴について ---------- 340

第Ⅱ章　福屋氏の城郭 ---------- （寺井　毅） ---- 343

1．はじめに ---------- 343

2．福屋領の城郭概要 ---------- 343

3．おわりに ---------- 357

第Ⅲ章　市木地区中世城郭群をめぐる歴史的背景 ---------- （佐伯徳哉） ---- 359

1．はじめに ---------- 359

2．市木地区の地理的・歴史的環境 ---------- 359

3．福屋氏の成立から滅亡まで ---------- 360

(1)　福屋本領の形成 ---------- 360

(2)　南北朝内乱～応仁の乱までの福屋氏 ---------- 363

(3)　応仁の乱以降の芸石国人領主連合 ---------- 363

(4)　戦国期石見における福屋氏の動きと滅亡 ---------- 363

4．結びにかえて ---------- 367

第Ⅳ章　江戸時代大鍛冶場跡について ---------- （角田徳幸） ---- 369

1．操業年代 ---------- 369

2．構　　造 ---------- 370

挿 図 ・ 表 目 次

第Ⅰ部　調査の経過と周辺の遺跡

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査の経過

第１図　調査対象地の位置 ---------- 1
第２図　遺跡の位置 ---------- 5
第１表　中国横断自動車道広島浜田線建設地内遺跡発掘調査状況 ---------- 5

第Ⅱ章　位 置 と 環 境

第１図　瑞穂町市木・旭町市木地区遺跡分布図 ---------- 13～14
第２図　堀城跡縄張図 ---------- 15
第３図　高畑石塔略測図 ---------- 16
第４図　旭町本郷・重富・和田地区遺跡分布図 ---------- 19
第５図　旭町大字和田地区内の石塔略測図 ---------- 20
第６図　野地背戸山城略測図 ---------- 21
第１表　瑞穂町市木・旭町市木地区遺跡一覧 ---------- 12
第２表　旭町本郷・重富・和田地区遺跡一覧 ---------- 18

第Ⅱ部　各遺跡の調査

第Ⅰ章　郷 路 橋 遺 跡

第１図　郷路橋遺跡範囲図 ---------- 28
第２図　郷路橋遺跡調査区設定図 ---------- 29
第３図　Ｃ区試掘グリッド(G－5)における水田盛土と大鍛冶場との土層関係 ---------- 30
第４図　Ｄ～Ｆ区基盤層上面地形測量図 ---------- 32
第５図　Ｇ区土層断面図 ---------- 33
第６図　Ｄ～Ｇ区土層相関図 ---------- 33
第７図　Ｇ区第５黒色土下面地形測量図 ---------- 34
第８図　Ｇ区第４黒色土下面地形測量図 ---------- 35
第９図　Ｇ区第４黒色土下面SI09実測図 ---------- 36

第10図　G区第３黒色土下面地形測量図 ---------- 37
第11図　G区第３黒色下面住居跡状ピット群および土壙実測図 ---------- 38
第12図　G区第３黒色土出土遺物実測図 ---------- 39
第13図　D～F区第３黒色土出土土器実測図 ---------- 40
第14図　D・E区第３黒色土出土石器実測図 ---------- 41
第15図　F区茶褐色土出土土器実測図 ---------- 42
第16図　F区茶褐色土出土石器実測図(1) ---------- 44
第17図　F区茶褐色土出土石器実測図(2) ---------- 45
第18図　F・G区火山灰上面地形測量図 ---------- 46
第19図　G区火山灰上面SI06実測図 ---------- 47
第20図　F区火山灰上面遺構実測図 ---------- 48
第21図　G区灰褐色土出土遺物実測図 ---------- 49
第22図　F区火山灰上面出土土器実測図 ---------- 49
第23図　D～G区第２黒色土下面地形測量図 ---------- 50
第24図　G区第２黒色土下面遺構実測図 ---------- 51
第25図　F区第２黒色土下面遺構実測図 ---------- 52
第26図　D・E区第２黒色土下面遺構実測図 ---------- 53～54
第27図　D・E区第２黒色土下面土壙および貯蔵穴実測図 ---------- 55
第28図　D・E区第２黒色土下面出土土器実測図(1) ---------- 57
第29図　D・E区第２黒色土下面出土土器実測図(2) ---------- 58
第30図　D・E区第２黒色土下面出土土器実測図(3) ---------- 59
第31図　D・E区第２黒色土下面出土石器実測図(1) ---------- 61
第32図　D・E区第２黒色土下面出土石器実測図(2) ---------- 62
第33図　F区暗褐色土上面遺構および遺物出土状態実測図 ---------- 63
第34図　F区暗褐色土上面土器出土状態実測図 ---------- 64
第35図　F区暗褐色土上面土器出土遺物実測図(1) ---------- 65
第36図　F区暗褐色土上面土器出土遺物実測図(2) ---------- 66
第37図　D～F区第１黒色土下面地形測量図 ---------- 67
第38図　D区北半第１黒色土下面SI05実測図 ---------- 68
第39図　D区北半第１黒色土下面SI05内炉跡状遺構実測図 ---------- 69
第40図　D区南半～E区第１黒色土下面遺構実測図 ---------- 70

第41図　D区南半～E区第１黒色土下面土壙実測図 ---------- 71
第42図　F区第１黒色土下面遺構実測図 ---------- 72
第43図　F区第１黒色土下面柵列状遺構およびSI01・02実測図 ---------- 73～74
第44図　F区第１黒色土下面SI03実測図 ---------- 75
第45図　F区第１黒色土下面SI04実測図 ---------- 76
第46図　F区第１黒色土下面SK01・02実測図 ---------- 77
第47図　F区第１黒色土下面SK03～06実測図 ---------- 78
第48図　D・E区第１黒色土出土土器実測図(1) ---------- 80
第49図　D・E区第１黒色土出土土器実測図(2) ---------- 81
第50図　F区第１黒色土出土土器実測図(1) ---------- 82
第51図　F区第１黒色土出土土器実測図(2) ---------- 83
第52図　F区第１黒色土土壙出土土器実測図 ---------- 84
第53図　E・F区第１黒色土出土石器実測図(1) ---------- 86
第54図　E・F区第１黒色土出土石器実測図(2) ---------- 87
第55図　E・F区第１黒色土出土石器実測図(3) ---------- 88
第56図　B・C区黒褐色土下面地形測量図 ---------- 90
第57図　B・C区黒褐色土下面遺構実測図 ---------- 91～92
第58図　C区黒色土下面土壙実測図 ---------- 94
第59図　C区黒褐色土下面住居跡状遺構実測図 ---------- 95
第60図　C区黒褐色土下面出土土器実測図 ---------- 96
第61図　C区黒褐色土下面土壙出土土器実測図 ---------- 98
第62図　C区黒褐色土下面土壙およびピット出土土器実測図 ---------- 99
第63図　C区黒褐色土出土土器実測図(1) ---------- 101
第64図　C区黒褐色土出土土器実測図(2) ---------- 102
第65図　C区黒褐色土出土土器実測図(3) ---------- 103
第66図　C区黒褐色土出土土器実測図(4) ---------- 104
第67図　C区赤褐色土出土土器実測図 ---------- 105
第68図　C区黒褐色土出土石器実測図(1) ---------- 106
第69図　C区黒褐色土出土石器実測図(2) ---------- 107
第70図　C区黒褐色土出土石器実測図(3) ---------- 108
第71図　C区赤褐色土出土石器実測図(1) ---------- 109

第72図　C区赤褐色土出土石器実測図(2) ---------- 110
第73図　E区第1黒色土下面掘立柱建物跡実測図 ---------- 113～114
第74図　E区第1黒色土下面掘立柱建物跡出土遺物実測図 ---------- 115
第75図　G区大鍛冶場跡地形測量図 ---------- 117～118
第76図　G区大鍛冶場掘立柱建物跡実測図 ---------- 119
第77図　G区大鍛冶場跡1号炉跡実測図 ---------- 120
第78図　G区大鍛冶場跡2～4号炉跡実測図 ---------- 121
第79図　G区大鍛冶場跡円形土壙実測図 ---------- 122
第80図　G区大鍛冶場跡出土遺物実測図(1) ---------- 124
第81図　G区大鍛冶場跡出土遺物実測図(2) ---------- 125
第82図　G区大鍛冶場跡出土遺物実測図(3) ---------- 126
第83図　D区石組遺構実測図 ---------- 128
第84図　D区石組遺構出土遺物実測図 ---------- 129
第85図　その他の出土遺物実測図(1) ---------- 130
第86図　その他の出土遺物実測図(2) ---------- 131

第Ⅱ章　滝ノ屋谷城跡

第1図　滝ノ屋谷城跡の位置 ---------- 149
第2図　滝ノ屋谷城跡調査区図 ---------- 150
第3図　滝ノ屋谷城跡調査前地形測量図 ---------- 151～152
第4図　中央郭群地形測量図（調査後） ---------- 153～154
第5図　2～4郭遺構図 ---------- 155
第6図　2郭西側石列実測図 ---------- 156
第7図　中央郭群土層断面図（2～6郭） ---------- 157～158
第8図　中央郭群土層断面図（A～A′） ---------- 159
第9図　北0郭土層断面図 ---------- 160
第10図　北郭群地形測量図（調査後） ---------- 161
第11図　北郭群土層断面図（A～A′） ---------- 162
第12図　北郭群土層断面図（北1・2郭） ---------- 163
第13図　北郭群土層断面図（北3～6郭） ---------- 164
第14図　東郭地形測量図（調査後） ---------- 166
第15図　東郭土層断面図 ---------- 166

第16図　東郭出土鉄釘実測図 ---------- 167
第17図　滝ノ屋谷城縄張図 ---------- 168
第18図　堀城、滝ノ屋谷城、桜尾城、森迫城跡周辺切図 ---------- 171～172
第１表　堀城、滝ノ屋谷城、桜尾城、森迫城跡周辺小字名一覧表 ---------- 173
第Ⅲ章　桜　尾　城　跡
第１図　桜尾城跡の位置 ---------- 176
第２図　桜尾城跡調査前地形測量図 ---------- 177～178
第３図　Ⅰ区地形測量図（調査前） ---------- 179
第４図　Ⅰ区東西方向土層断面図 ---------- 180
第５図　Ⅰ区土層断面図 ---------- 181～182
第６図　Ⅰ区地形測量図（調査後） ---------- 183
第７図　Ⅱ区地形測量図（調査前） ---------- 185
第８図　Ⅱ区掘立柱建物跡実測図 ---------- 186
第９図　Ⅱ区土層断面図 ---------- 187～188
第10図　Ⅱ区地形測量図（調査後） ---------- 189
第11図　Ⅱ区出土遺物（石斧）実測図 ---------- 190
第12図　Ⅱ・Ⅲ区土層断面図 ---------- 191～192
第13図　Ⅲ区地形測量図（調査後） ---------- 193
第14図　Ⅲ区SK01実測図 ---------- 194
第15図　桜尾城縄張図 ---------- 195
第Ⅳ章　森　迫　城　跡
第１図　森迫城跡の位置 ---------- 197
第２図　森迫城跡調査前地形測量図 ---------- 198
第３図　森迫城跡地形測量図 ---------- 199～200
第４図　森迫城跡断面図 ---------- 201～202
第５図　主郭遺構実測図 ---------- 203～204
第６図　主郭土層断面図 ---------- 205～206
第７図　主郭土層断面位置図 ---------- 207
第８図　主郭西斜面、西１郭土層断面図 ---------- 209～210
第９図　西斜面土層断面図 ---------- 211～212
第10図　西１郭谷部土層断面位置図 ---------- 213

第11図　掘切～主郭東斜面土層断面図 ---------- 214
第12図　東１～３郭遺構実測図 ---------- 215～216
第13図　掘立柱建物跡（SB－１）実測図 ---------- 217～218
第14図　東１～３郭土層断面図 ---------- 219～220
第15図　東３～４郭間帯郭土層断面図 ---------- 221
第16図　東１～３郭土層断面位置図 ---------- 222
第17図　東３郭溝状遺構（SD01）土・平面図 ---------- 223
第18図　溝状遺構（SD01）土層断面図 ---------- 224
第19図　横穴遺構実測図 ---------- 225
第20図　森迫城跡出土遺物(1) ---------- 225
第21図　森迫城跡出土遺物(2) ---------- 226
第22図　松ヶ迫遺跡群出土土器実測図（報告書より転載） ---------- 228
第23図　瑞穂町内出土須恵器実測図 ---------- 228
第24図　京羅木山城塞群 ---------- 229
第25図　東３郭付近地形測量図 ---------- 229
第26図　森迫城縄張図 ---------- 230

第Ⅴ章　内ヶ原城跡

第１図　内ヶ原城跡の位置 ---------- 233
第２図　内ヶ原城跡調査区配置図 ---------- 234
第３図　内ヶ原城跡調査前地形測量図 ---------- 235～236
第４図　Ⅰ区第１・２・８・９トレンチ断面図 ---------- 238
第５図　Ⅰ区遺構検出状況 ---------- 239
第６図　Ⅰ区南東壁土層断面図 ---------- 240
第７図　Ⅰ区掘立柱建物跡実測図 ---------- 241
第８図　Ⅰ区弥生土器出土状況実測図 ---------- 242
第９図　主郭発掘前地形図 ---------- 243
第10図　内ヶ原城跡調査後地形測量図 ---------- 245～246
第11図　主郭遺構検出状況実測図 ---------- 247～248
第12図　主郭掘立柱建物跡（SB01）実測図 ---------- 249
第13図　溜井戸状遺構実測図 ---------- 250
第14図　主郭遺物出土状況実測図 ---------- 251

第15図　Ⅱ区土層断面図 ---------- 253～254
第16図　西１郭・竪堀状遺構土層断面図 ---------- 255～256
第17図　石器実測図 ---------- 258
第18図　弥生土器実測図（A） ---------- 259
第19図　弥生土器実測図（B） ---------- 260
第20図　土師質土器実測図 ---------- 263
第21図　土錘実測図 ---------- 265
第22図　陶磁器実測図 ---------- 266
第23図　石臼・陶器実測図 ---------- 267
第24図　金属製器・土製品実測図 ---------- 269
第25図　内ヶ原城縄張図 ---------- 272
第26図　内ヶ原城跡周辺切図 ---------- 275
第１表　弥生土器一覧表 ---------- 261
第２表　内ヶ原城跡周辺小字名一覧表 ---------- 273
第Ⅵ章　後河内古墓群
第１図　調査区配置図 ---------- 277
第２図　Ⅰ区遺構実測図（検出時） ---------- 279～280
第３図　Ⅰ区遺構実測図（完掘後） ---------- 281～282
第４図　１号墓実測図 ---------- 283
第５図　２号墓実測図 ---------- 284
第６図　３号墓実測図 ---------- 285
第７図　３号墓出土遺物実測図 ---------- 285
第８図　４号墓実測図 ---------- 286
第９図　５号墓実測図 ---------- 286
第10図　５号墓出土鉄釘その他実測図 ---------- 287
第11図　６号墓実測図 ---------- 287
第12図　７号墓実測図 ---------- 288
第13図　７号墓出土遺物実測図 ---------- 288
第14図　８号墓出土遺物実測図 ---------- 289
第15図　８号墓実測図 ---------- 289
第16図　８号墓出土鉄釘実測図 ---------- 290

第17図　9号墓実測図 …… 291
第18図　10号墓実測図 …… 291
第19図　11号墓実測図 …… 292
第20図　11号墓出土遺物実測図 …… 293
第21図　12号墓実測図 …… 293
第22図　13号墓実測図 …… 293
第23図　13号墓出土鉄釘実測図 …… 294
第24図　14号墓実測図 …… 294
第25図　14号墓出土遺物実測図 …… 294
第26図　15号墓実測図 …… 295
第27図　15号墓出土鉄釘実測図 …… 295
第28図　16号墓実測図 …… 296
第29図　17号墓実測図 …… 296
第30図　17号墓出土鉄釘実測図 …… 297
第31図　18号墓実測図 …… 297
第32図　Ⅰ区出土遺物実測図(1) …… 299
第33図　Ⅰ区出土遺物実測図(2) …… 300
第34図　Ⅱ区遺構実測図（完掘後） …… 301
第35図　19号墓実測図 …… 302
第36図　20号墓実測図 …… 303～304
第37図　20号墓出土鉄釘実測図(1) …… 305
第38図　20号墓出土鉄釘実測図(2) …… 306
第39図　20号墓出土鉄釘実測図(3) …… 307
第40図　21号墓実測図 …… 308
第41図　21号墓出土遺物実測図(1) …… 309
第42図　21号墓出土鉄釘実測図(2) …… 310
第43図　21号墓出土鉄釘実測図(3) …… 311
第44図　古墳実測図 …… 312
第45図　Ⅲ区遺構実測図 …… 313～314
第46図　竪穴式石室実測図 …… 315
第47図　竪穴式石室断面実測図 …… 316

第48図　竪穴式石室墓壙実測図 …… 316
第49図　Ⅲ区出土須恵器実測図 …… 317
第50図　後河内古墳とやつおもて古墳群の分布 …… 318
第51図　古墓墓壙主軸の方向 …… 320
第１表　後河内古墳群一覧表 …… 321

第Ⅲ部　総　　括

第Ⅰ章　縄　文　時　代
第１図　郷路橋遺跡を中心とした西中国山地周辺の縄文遺跡 …… 336
第１表　西中国産地周辺の縄文遺跡地名表 …… 337
第２表　郷路橋遺跡の石器組成 …… 339
第Ⅱ章　福屋氏の城郭
第１図　本明城略測図 …… 344
第２図　家古屋城略測図 …… 344
第３図　尼御前城略測図 …… 345
第４図　大石谷城略測図 …… 346
第５図　熊ヶ峠城略測図 …… 347
第６図　松山城略測図 …… 348
第７図　佐賀里松城略測図 …… 349
第８図　神主城略測図 …… 350
第９図　龍ヶ城略測図 …… 351
第10図　桜尾城略測図 …… 351
第11図　波佐一本松城略測図 …… 352
第12図　源太ヶ城略測図 …… 353
第13図　福屋氏を中心とする主要豪族及び城郭分布図 …… 355～356
第Ⅲ章　市木地区中世城郭群をめぐる歴史的背景
第１図　鎌倉南北朝期福屋氏関係地名 …… 361～362
第２図　戦国期福屋氏関係地名 …… 365～366

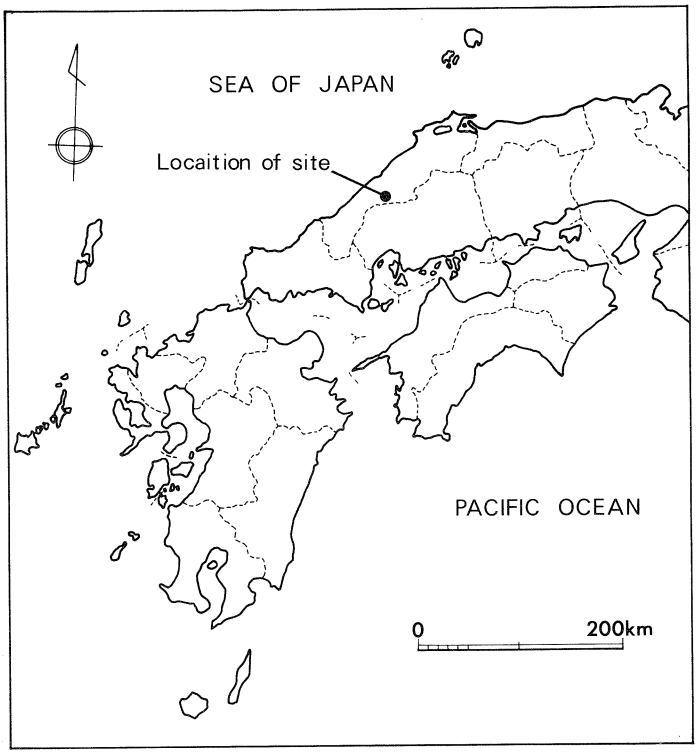
第Ⅰ部　調査の経過と周辺の遺跡

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査の経過

1．調査に至る経緯

昭和54年（1979）1月に開催された島根県土地利用調整会議で，山陰と山陽を直結する中国横断自動車道建設計画（第7次区間－浜田市～那賀郡旭町）が議題として提出された。日本道路公団広島建設局（以下，公団とする。）はそれまでの環境影響調査報告書作成にあたって，文化財の分布状況等を勘案し，路線決定は文化財をはずすよう計画を立案していた。しかし，環境影響調査報告書作成時点以後に発見された遺跡等が計画地内に含まれる可能性が充分にあると考えられたので，島根県教育委員会（以下，県教委という。）は建設計画地内の遺跡分布調査を行い，開発と文化財保護の調整を行うことになった。

浜田市，金城町，旭町各教育委員会の協力を得て，昭和54年8月20日～30日の間で第7次区間の遺跡分布調査を行ったところ岩塚遺跡他8遺跡の存在が判明した。昭和56年度（1981）には国庫補助事業として第8次区間（那賀郡旭町～邑智郡瑞穂町）の遺跡分布調査を実施し，やつおもて古墳群，郷路橋遺跡などをはじめとする多数の遺跡を確認した。[(1)] このうち，やつおもて古墳群と重富遺跡は石見地方の古代史を考えるうえでとりわけ重要な遺跡であると判断されたため，県教委と公団は取り扱いについて協議を重ねてきた。その結果，やつおもて古墳群のうち大半の古墳と重富遺跡の中心部を計画路線からはずすことで両者の合意に達した。その他の遺跡については，道路建設工事着手前に当該遺跡の発掘調査を実施し，調査結果に基づいて遺跡の取り扱いを決定しながら今後の事業を



第1図　調査対象地の位置

進めることとなった。

発掘調査は，まず第７次区間について昭和57年度（1982）から県教委と公団の間で契約を締結し，道路建設予定地内の用地買収が終了した地点から順次行った。当初報告書作成期間を含めて４箇年の計画でスタートした調査であったが，岩塚Ⅲ遺跡の調査をとりやめたこと（昭和58年度中に，県教委独自の予備調査を行ったところ，本格的な発掘調査が不要であると判断したため。）から３箇年で終了することになった。第７次区間内の埋蔵文化財発掘調査結果については，昭和59年度（1984）に報告書を刊行した。(2)

その後，発掘調査は一時中断していたが，昭和62年（1987）７月に第８次区間内の遺跡調査について依頼があり急遽分布調査を実施した。年度途中ではあったが，中国横断道は陰陽を結ぶ大動脈として早期全線開通を強く要請されていたところでもあり，10月12日に委託契約書を締結し，特に事業が急がれる瑞穂町猪子山トンネル入口付近（郷路橋遺跡）から調査に着手することとなった。

その後，平成２年度（1990）まで継続して現地における発掘調査を実施した。

２．調査の経過

(1)　昭和62年度（1987）の調査

中国横断道広島浜田線第８次区間（那賀郡旭町～邑智郡瑞穂町）の発掘調査は，昭和62年度から着手した。昭和62年度の調査期間は，10月12日から昭和63年（1989）３月31日までで，郷路橋遺跡の調査を実施した。発掘調査は，ルート内の谷水田一面ごとにＡ区～Ｉ区の調査区名を付し，各調査区内に任意の調査グリッド（３×３ｍまたは４×４ｍ）を１～７箇所設定して掘り下げることにした。谷部西側の斜面についても発掘調査を行う予定にしていたが，用地交渉の決着をみず，この部分の調査は次年度送りとし，これに替えてＦ区全面とＥ区西半分の全面調査を実施した。グリッド調査は昭和62年10月13日から11月13日まで，Ｅ・Ｆ区の調査に11月14日から12月15日まで，それぞれ約１箇月の期間を要した。なお，Ｅ・Ｆ区の調査は完掘することができず，一部次年度調査に送ることにした。

(2)　昭和63年度（1988）の調査

昭和63年度の調査は，４月１日から平成元年（1989）３月31日までで，郷路橋遺跡・内ヶ原城跡Ⅰ区の本調査，重富遺跡・後河内古墓群・柳ヶ谷古墓・今佐屋山遺跡・小才遺跡の第１次調査のほか建設予定地内の分布調査を実施した。県境のトンネル工事の関係で，まず郷路橋遺跡の第２次調査から着手し，第１地点（Ｄ～Ｃ区）の調査を５月10日～７月18日に実施した。この調査の終了後，第２地点（Ｂ～Ｃ区）の調査に移り，基盤層に掘り込まれた遺構群を検出し，調査が終了したのは８月８日であった。郷路橋遺跡調査に引き続き，８月18日からは内ヶ原城跡の第１次調査（確認調

査），第２次調査（Ⅰ区本調査）と，建設予定地内の分布調査および重富遺跡・後河内古墓群・柳ヶ谷古墓・小才遺跡・今佐屋山遺跡の第１次調査（確認調査）を２班に分かれて行った。内ヶ原Ⅰ区では弥生時代後期の集落跡が検出された。分布調査では新たに小才遺跡と森迫城跡が発見されたのをはじめ，各遺跡の第１次調査によって縄文時代から江戸時代にわたる住居跡・古墳・城跡・古墓などの各種の遺構が明らかになり，大きな成果をあげて12月23日に現地調査を終了した。

なお，昭和56年度（1981）分布調査の折に観音寺原遺跡（瑞穂町市木）として扱ってきたものは，この年の分布調査，第１次調査等により確認した地点の小字名を冠して今佐屋山遺跡，堀田上遺跡，米屋山遺跡（主要地方道浜田八重可部線予定地内），と称することにした。

(3)　平成元年度（1989）の調査

平成元年度の調査は，４月１日から平成２年（1990）３月31日まで実施した。調査対象遺跡は，今佐屋山遺跡，滝ノ屋谷城跡，桜尾城跡，森迫城跡，内ヶ原城跡，重富遺跡，後河内古墓群，小才遺跡である。対象遺跡が各種多数にわたるため３班を編成して対応した。

Ａ班はまず，今佐屋山遺跡の調査を５月１日から10月20日まで行い，古墳時代後期の製鉄遺構など貴重な遺構を検出した。10月23日からは後河内古墓群の調査に着手し，12月12日に終了した。

Ｂ班は，４月25日から重富遺跡Ⅱ区の調査に着手した。弥生時代終末期～古墳時代前期の木棺墓群や奈良時代頃の土壙，溝状遺構などの調査を行い10月30日に終了した。これと併行して重富遺跡Ⅰ区の調査を実施し，奈良時代の掘立柱建物跡や溝状遺構，中世の火葬墓，近世の土壙などを検出した。調査期間は６月13日から11月22日までを要した。さらに重富遺跡Ⅲ区の調査を11月13日から開始し，奈良時代の竪穴式住居跡・溝など多数の遺構を検出した。この調査区は，Ⅱ区とやつおもて古墳群との間の谷部に位置し，年度当初の計画では，南向きの斜面と谷底部およびⅡ区に続く一部の斜面のみを調査対象地としていたが，Ⅱ区を調査した結果，遺構がないと考えていた部分まで遺構・遺物が広がっていることが判明し，Ⅱ区以西の谷部全体を調査する必要が生じた。また新たにバスストップの建設計画が具体化したため，ルート南西側の調査対象区域がさらに広がり，約3,000㎡の面積増加となった。現調査体制ではこれらの対応は不可能であったため，公団と協議の結果，調査区北斜面およびⅡ区との間の斜面を次年度にまわし，これを除いた部分を平成元年度調査範囲とすることになった。調査は12月下旬終了を目標に努力したが，多数の遺構が検出されたことや，降雨・降雪等の悪条件にもみまわれ，結局年を越して平成２年１月25日まで現地調査を実施した。このほかにＢ班は小才遺跡のうち南端の工事進入路に相当する部分の調査を行い，２基の古墳を確認した。調査期間は７月31日から11月７日までを要した。また，５月９日から５月25日にかけては旭町本郷地内の遺跡と考えられる場所の確認調査も実施した。

Ｃ班は，まず４月25日から内ヶ原城跡の調査に着手し，10月30日に終了した。また，森迫城跡

（９月７日～12月27日），桜尾城跡（10月19日～12月18日）の調査を併行して実施した。その間，11月６日に桜尾城跡の東側丘陵において城跡が新たに発見され，所在地の小字名が「滝ノ屋谷」であることから滝ノ屋谷城跡と称することにした。直ちに遺跡の取り扱いについて公団と協議したところ，橋脚建設の工程上，城跡北端部分のみでも早急に着手したいとのことであり，やむを得ずその部分について11月27日から急遽発掘調査を実施することとなった。山道等もない急峻な丘陵である上，風雪等により調査は困難を極めたが，平成２年（1990）２月16日に予定区域の調査を終了した。

なお，今佐屋山遺跡Ⅰ区では現在のところ日本で最古クラスの製鉄遺構とそれに関連する竪穴式住居跡が発見され，極めて貴重な遺跡と判断されたため，その取り扱いについて県教委と公団の間で協議を重ねてきた。この地点は瑞穂インターチェンジ管理施設予定地にあたることから遺構面に砂を敷いたのち盛土を行い，植栽によって遺構表示をすることで合意を得た。また県土木部道路課とも合わせて協議を行い，主要地方道浜田八重可部線バスストップ内に説明板を設置することとなった。

(4)　平成２年度（1990）の調査

平成２年度は，４月１日から平成３年（1991）３月31日まで実施した。調査対象遺跡は，今佐屋山遺跡，滝ノ屋谷城跡，重富遺跡，やつおもて古墳群，柳ヶ谷古墓，小才遺跡である。工事の工程上，どうしても９月には現地調査を終了しなければならない状況であったため，県教委としては係を越えた調査体制を組織することにし，５班を編成して対応することとなった。一方これだけの調査体制に見合う作業員確保が地元の瑞穂町，旭町のみでは極めて困難であったため，近隣の石見町，金城町，浜田市方面にも協力を依頼し遠距離地域については送迎車を出して確保に努めた。その結果，連日100人以上の作業員確保が可能となり，当初計画に沿って調査を進めることができた。

Ａ班は，４月９日から今佐屋山遺跡Ⅰ区の調査に着手した。ここは盛土によって保存することが決定した地点であるが，古墳時代の遺構の下層にある縄文時代の包含層の状況を確認しておくためにトレンチ調査を実施し，４月14日に終了した。それと併行して４月９日からやつおもて古墳群の調査も開始した。古墳５基を調査したほか弥生時代の土壙墓などを検出し，９月５日に終了した。

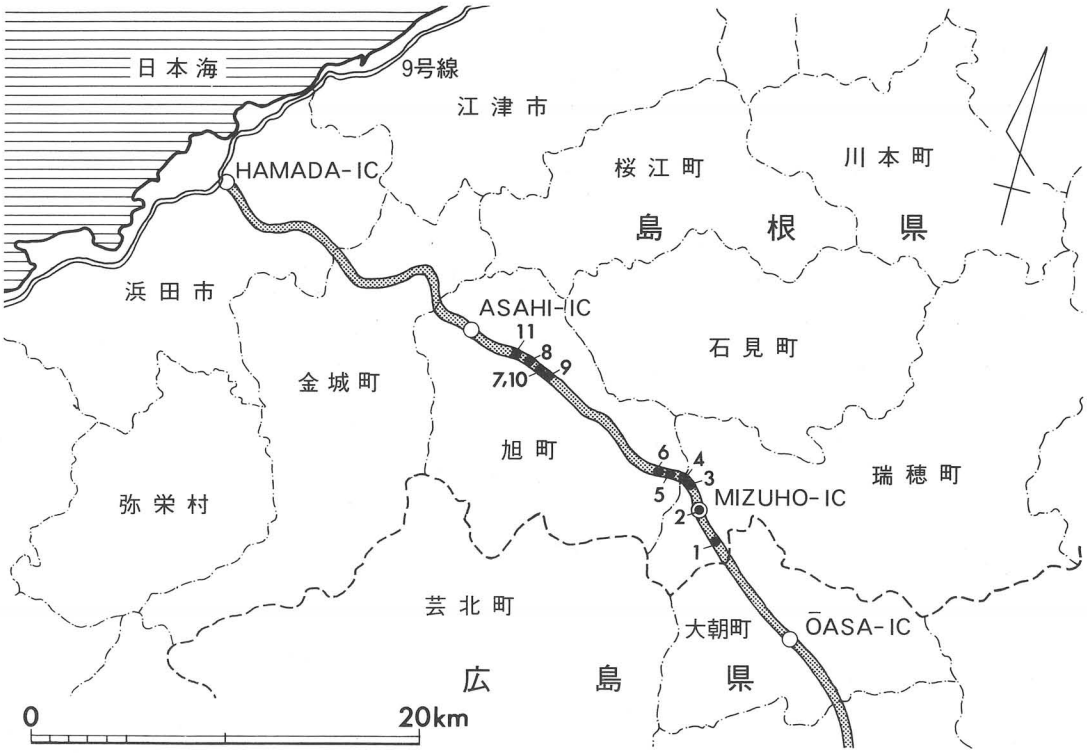
Ｂ班は，重富遺跡Ⅱ・Ⅳ区の調査を４月６日から開始した。奈良時代の竪穴式住居跡や瓦窯跡を検出し，９月７日に終了した。

Ｃ班とＤ班は，４月６日から小才遺跡の調査に着手した。横穴式石室を持つ古墳５基，小石室を持つ古墳１基，木室墳とでも称すべきもの２基，横穴墓２基などの調査を行い，７月24日に終了した。その後Ｃ班は７月27日から８月21日まで柳ヶ谷古墓の調査を実施し，Ｄ班は，米屋山遺跡（主要地方道浜田八重可部線予定地内）の調査を実施した。

Ｅ班は，滝ノ屋谷城跡の調査を４月６日から６月17日まで行った。

第１表　中国横断自動車道広島浜田線建設地内遺跡発掘調査状況

項目／遺跡名	所在地	発掘調査面積（m²）					遺跡の概要
		62年度	63年度	元年度	2年度	計	
1 郷路橋遺跡	瑞穂町市木	545	1,950	0	0	2,495	縄文時代集落跡，近世の大鍛冶場跡
2 今佐屋山遺跡	瑞穂町市木	0	83	2,100	285	2,468	古墳時代製鉄遺構と集落跡，縄文時代集落跡
3 滝ノ屋谷城跡	瑞穂町市木	0	0	450	650	1,100	中世山城跡
4 桜尾城跡	瑞穂町市木	0	0	1,200	0	1,200	中世山城跡
5 森迫城跡	旭町市木	0	0	2,300	0	2,300	中世山城跡，中世以前の溝・土坑
6 内ヶ原城跡	旭町市木	0	1,050	4,000	0	5,050	中世山城跡，弥生時代集落跡
7 後河内古墓群	旭町本郷	0	365	480	0	845	古墳，近世古墓群
8 柳ヶ谷古墓	旭町本郷	0	83	0	214	297	古墓
9 重富遺跡	旭町重富	0	360	6,650	3,686	10,696	弥生時代の土壙墓，奈良時代集落跡・瓦窯跡，近世古墓
10 やつおもて古墳群	旭町重富	0	0	0	1,881	1,881	弥生時代土壙墓，中期～後期の古墳群
11 小才遺跡	旭町和田	0	245	120	3,655	4,020	古墳（横穴式石室），奈良時代集落跡
12 確認調査	旭町本郷	0	0	43	0	43	
計		545	4,136	17,343	10,371	32,395	
調査費（千円）		4,100	53,000	121,879	123,790	302,769	



第２図　遺跡の位置（番号は第１表に一致する）

10月以降は報告書作成作業に着手した。平成２年度は，郷路橋遺跡，滝ノ屋谷城跡，桜尾城跡，森迫城跡，内ヶ原城跡，後河内古墓群の報告書を作成した。

なお，昭和62年（1987）から平成２年度（1990）にわたる調査期間中には，各現場において折々に現地説明会を開催した。また，現地調査終了後の平成２年９月14日・15日には旭町開発センターにおいて中国横断道関係埋蔵文化財調査の報告会・展示会（「石見古代史への招待」）を開催し，約700名におよぶ多数の方々の来場を得た。４箇年にわたる調査にあたっては，地元の方々を始め，瑞穂町教育委員会，旭町教育委員会，石見町教育委員会，金城町教育委員会，浜田市教育委員会には終始格別の協力をいただき，無事に終了することができた。

註

（１）　島根県教育委員会　『中国横断道予定地内遺跡分布調査報告書』　1982年
（２）　島根県教育委員会　『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　Ⅱ　1985年

３．調査組織

調査は昭和62年度（1987）から平成２年度（1990）までの４箇年にわたって実施した。各年度の関係者は下記のとおりである。

○昭和62年度〔1987〕

調査指導者　清永欣吾（日立金属安来工場冶金研究所長），吉川　正（島根県文化財保護指導委員）

事　務　局　熊谷正弘（文化課長），安達富治（文化課課長補佐），勝部　昭（文化課課長補佐），矢内高太郎（同文化係長），吾郷朋之（同文化係主事），陶山　彰（同嘱託），板倉仁志（財務課主任主事）

調　査　員　川原和人（埋蔵文化財第２係長），西尾克己（同主事），北脇孝夫（同主事），足立克己（同主事），丹羽野　裕（同主事），角田徳幸（同主事）

調査補助員　井上　薫（瑞穂町教育委員会），花田宣之（旭町教育委員会）

分　析　者　清永欣吾（日立金属安来工場冶金研究所・鉄滓）

協　力　者　三枝健二，小田正明，水野尚志

○昭和63年度〔1988〕

調査指導者　伊藤晴明（島根大学教授），時枝克安（島根大学助教授），清永欣吾（日立金属安来工場冶金研究所長），山根正明（平田高校教諭），村上　勇（広島県立美術館主

任学芸員），吉川　正（島根県文化財保護指導委員）

事　務　局　内藤仁男（文化課長），井原　譲（文化課課長補佐），勝部　昭（文化課課長補佐），野村純一（同文化係長），吾郷朋之（同文化係主事），陶山　彰（同嘱託），板倉仁志（財務課主任主事）

調　査　員　川原和人（埋蔵文化財第２係長），内田律雄（同文化財保護主事），足立克己（同主事），丹羽野　裕（同主事），角田徳幸（同主事），小笹　基（同(兼)主事）

分　析　者　伊藤晴明（島根大学教授・地磁気測定），時枝克安（島根大学助教授・地磁気測定），清永欣吾（日立金属安来工場冶金研究所長・鉄），渡辺　誠（名古屋大学教授・木の実）

協　力　者　瀬崎博史，佐藤　豊，水田　稔，大賀　健，津金沢吉茂，田口正美，上原啓巳，石守　晃，佐藤元彦

遺物整理　北野富美子，斉木美穂子

○平成元年度〔1989〕

調査指導者　田中義昭（島根大学教授），伊藤晴明（島根大学教授），時枝克安（島根大学助教授），三浦　清（島根大学教授），河瀬正利（広島大学講師），吉川　正（島根県文化財保護指導委員）

事　務　局　泉　恒雄（文化課長），井原　譲（文化課課長補佐），野村純一（同文化係長），吾郷朋之（同文化係主事），別所重一郎（同嘱託），三浦宏二（同嘱託），加田恵康（教育文化財団嘱託），陸浦英哉（財務課主事）

調　査　員　勝部　昭（文化課課長補佐），松本岩雄（埋蔵文化財第４係長），足立克己（同主事），角田徳幸（同主事），錦織　弘（同(兼)主事），小笹　基（同(兼)主事），永瀬伸二（同(兼)主事），森山敏広（同(兼)主事），林　健亮（同臨時職員）

調査補助員　宮本徳昭（島根県文化財保護指導委員），竹広文明（広島大学大学院生）

分　析　者　伊藤晴明（島根大学教授・地磁気測定），時枝克安（島根大学助教授・地磁気測定），三浦　清（島根大学教授・石材）

協　力　者　潮見　浩，中越利夫，下澤公明，森田尚宏，松田直則，田村　悟，馬田弘稔，丸山康晴，川村　博，後藤　直，田村寿夫，小方良臣，古後憲治，近藤　滋，田路正幸，林　博通，松井和幸，篠原芳秀，道上康仁，木原　明，高橋一郎，杉原清一，隅田正三，駅場春樹，原　裕司，平滝　賢，古瀬清秀

遺物整理　平井明子，渡辺栄子，樋口裕子，新田明美，大平淳子，上田千里，大賀由香里，伊野陽子，川島洋子，岩田陽子

○平成２年度〔1990〕

調査指導者　田中義昭（島根大学教授），伊藤晴明（島根大学教授），時枝克安（島根大学助教授），渡辺貞幸（島根大学助教授），長友恒人（奈良教育大学助教授），松村恵司（文化庁記念物課），井上貴央（鳥取大学医学部教授），大澤正己（新日本製鉄八幡製鉄所技術研究部），大橋康二（九州陶磁文化館資料係長），村上　勇（広島県立美術館主任学芸員），吉川　正（島根県文化財保護指導委員），新井卯市（旭町文化財保護審議委員），佐伯充男（同），寺井　毅（山陰中世城郭研究会）

事　務　局　泉　恒雄（文化課長），藤原義光（文化課課長補佐），野村純一（同文化係長），坂根　繁（同文化係主事），三浦宏二（同嘱託），田部利夫（同嘱託），加田恵康（教育文化財団嘱託），野津健二（財務課主事）

調　査　員　勝部　昭（文化課課長補佐），松本岩雄（埋蔵文化財第３係長），足立克己（同主事），角田徳幸（同主事），佐伯徳哉（埋蔵文化財第１係主事），林　健亮（同主事），寺尾　令（埋蔵文化財第３係(兼)主事），佐々木聡（同(兼)主事），錦織　弘（同(兼)主事），小笹　基（同(兼)主事），永瀬伸二（同(兼)主事），土谷　徹（同(兼)主事），森山敏広（同(兼)主事），三宅博士（島根県教育文化財団学芸主事）

調査補助員　森口正和（川本町教育委員会主任主事），今田修二（旭町教育委員会主任主事），竹広文明（広島大学大学院生）

分　析　者　伊藤晴明（島根大学教授・地磁気測定），時枝克安（島根大学助教授・地磁気測定），長友恒人（奈良教育大学教授・熱ルミネッセンス年代測定），大澤正己（新日本製鉄八幡製鉄所・鉄滓）

協　力　者　穴澤義功，福田正継，松岡浩太郎，山磨康平，仁木康治，中山俊紀，小郷利幸，湊　哲夫，葛野泰樹，木戸雅寿，坂田孝彦，中井　均，土井一行，宮内克己

遺物整理　足立郁子，松尾千枝子，吉田典子，近藤純子，毛利まつみ，松本玲子，大屋悦子，山本由紀子，日高真理

発掘調査作業員

高木重信，福浦由則，大平頼一，石橋次良兵衛，畠田房夫，河野頼人，河手隆人，田城滝美，竹内末夫，盛岡茂登，小糠米太郎，平川正寅，松島　実，国信勇之進，森田　登，荒田　浄，大賀俊雄，大賀秀雄，佐伯初之利，原田　覚，大賀　亮，波山晴義，徳川信介，田中繁人，尾崎敏郎，谷　巖，兼子　清，上田一郎，北島康則，山田房徳，大賀　操，岡本義市，三上春雄，山田真二，洲浜軍太郎，田代秀一，松島年春，石本義春，佐々岡昇，藤本利春，田村

滝ノ屋谷城跡調査風景

郷路橋遺跡現地説明会

博貞，寺本清美，芳川末市，岩谷義秋，岩田保喜，三島定男，植田亀之丞，服部清六，漆谷幸郎，田中　実，間　篤志，東田玄海，白須政信，日野原卓郎，服部敏郎，高畦憲三，酒井博，市川徳市，大賀　積，垰田　聡，中浦謙郎，祝　寿，平石安雄，滝本　敏，原田　篤，漆谷努，松島　久，中垣耕吉，田村忠悳，山本権吉，岡本　弘，芳川浩章，野田三次郎，田中久男，砂田影義，鉄森清六，小田義人，山下庄一，山藤勝利，田畑　恵，澄川久信，梅岡季好，吉岡崇夫，大屋森夫，河村　巧，森川貴義，河野友次郎，岡本俊信，勝田正義，杉原美年，森脇岸雄，宇川　悟，佐古春行，中野谷留治，菊田義雄，向原正治，山田秀夫，小川利雄，河野　明，上田　章，岡本末市，三沢政雄，藤川高広，神田保秋，岩地律夫，新井芳太郎，高川秀夫，竹添繁人，佐伯一郎，戸津川孝夫，山根良雄，岩田龍也，寺本嘉造，寺本　剛，松本喜代三，岡本和徳，林　浅一，田村次郎，拝上伸司，山崎フジヨ，西　清子，石橋トキヨ，福浦幸代，青葉治子，石田ヨシエ，小笹スミエ，梶原昭子，篠原玲子，戸津川里美，沖ハツエ，尾崎保子，原田正子，国信サカエ，横山知江子，塚崎百合江，吉村サカエ，酒井アヤメ，寺本ヨシエ，原田ユキエ，湯浅信子，渡辺ヒサミ，井上ヨシエ，加藤キクヨ，佐伯キミエ，岩谷リツヨ，服部アサ子，森脇浩美，麻原一枝，石橋光江，実田ハマヨ，日高フミエ，水口ヒフヨ，寺本竹子，滑川松枝，児玉クニヨ，椿　君子，野田美枝子，夏川アサ子，中浦義美，祝ハルヨ，松井喜久江，森脇ヨシエ，小林量子，岩本ナミヨ，大山タキヨ，垰田フミエ，野村重子，佐々本妙子，岡本シカヨ，西川勝恵，田中サツヨ，平石フサエ，山根ナツミ，砂田シナヨ，小田しずえ，森内定代，渡辺ミサヨ，西川フジヨ，糀谷トミヨ，中野春子，池田安喜枝，宇川美須子，横田和枝，梅岡三千子，大崎淑恵，玉川春子，高橋隆子，山根タツエ，大屋朝子，坂井啓恵，野田とし代，林　久子，三好ミサ子，岩田ハツヨ，中田ユキエ，中田ハルヨ，松浦アサ子，山口俊枝，坂井玉江，尾崎キヨネ，浜本美子，佐々木茂子，中田

シエコ，益岡ヨシノ，花田ハルミ，徳川澄江，山本みよこ，佐々木一子，木野下孝子，佐々木イワ，室崎さとよ，宮崎ハル子，岡本すえこ，仲岡キミヨ，池田トミヨ，砂田キヨノ，三上君子，品川コミツ，日高房美，中浦義美，青葉清美，高畑ハツエ，志谷ナカヨ，殿川満江，松原カズエ，日高イツヨ，遠藤ヨシ子，佐々木マスヨ，近重カツ，植田千鶴，坂本フサコ，樋口イツヨ，三浦　栄，川本鈴枝，栗生ウメノ，竹原サダ子

調査協力

日本道路公団浜田工事事務所

小島敬克，工藤　泉，高田博行，荒瀬義幸，片山　勇，江口　智，木立一生

上浦正廣，松浦　聰，権藤清郷，西尾宗雄，西山宣正，梁川俊晃

瑞穂町教育委員会

高橋律郎，澤田隆之，井上　薫，谷口昌三，星野暢子，森岡弘典

旭町教育委員会

河野　明，中山　猛，太田房男，芳川栄佑，藤本孝男，花田宣之，今田修二

佐々木勝二，岩倉純子

石見町教育委員会

兼　常磐，服部文明，松川伸作，湊　健一

金城町教育委員会

西田雅俊，佐々原熊雄，井川成則

浜田市教育委員会

古原忠雄，飯泉清次，原　裕司

（松本岩雄・森山敏広）

第Ⅱ章　位置と環境

中国横断自動車道広島浜田線第８次区間の建設予定地となっている邑智郡瑞穂町と那賀郡旭町は島根県のほぼ中央の浜田市より南西にあたる山間部で，広島県との県境付近に位置する。今回紹介する邑智郡瑞穂町市木地区と那賀郡旭町市木・本郷・重富・和田地区は，江川の支流である八戸川流域にあたる。江川は「中国太郎」とも呼ばれ，その源は遠く広島県に発しいくつもの支流を集めながら日本海に注ぐ大河である。この川は古くから山陰と山陽を結ぶ動脈として利用され，その流域には多くの交通路が開かれてきたところでもある。以下，地理的条件から瑞穂町市木・旭町市木地区と旭町本郷・重富・和田地区に分けて周辺の遺跡の概要を紹介する。

１．瑞穂町市木・旭町市木地区

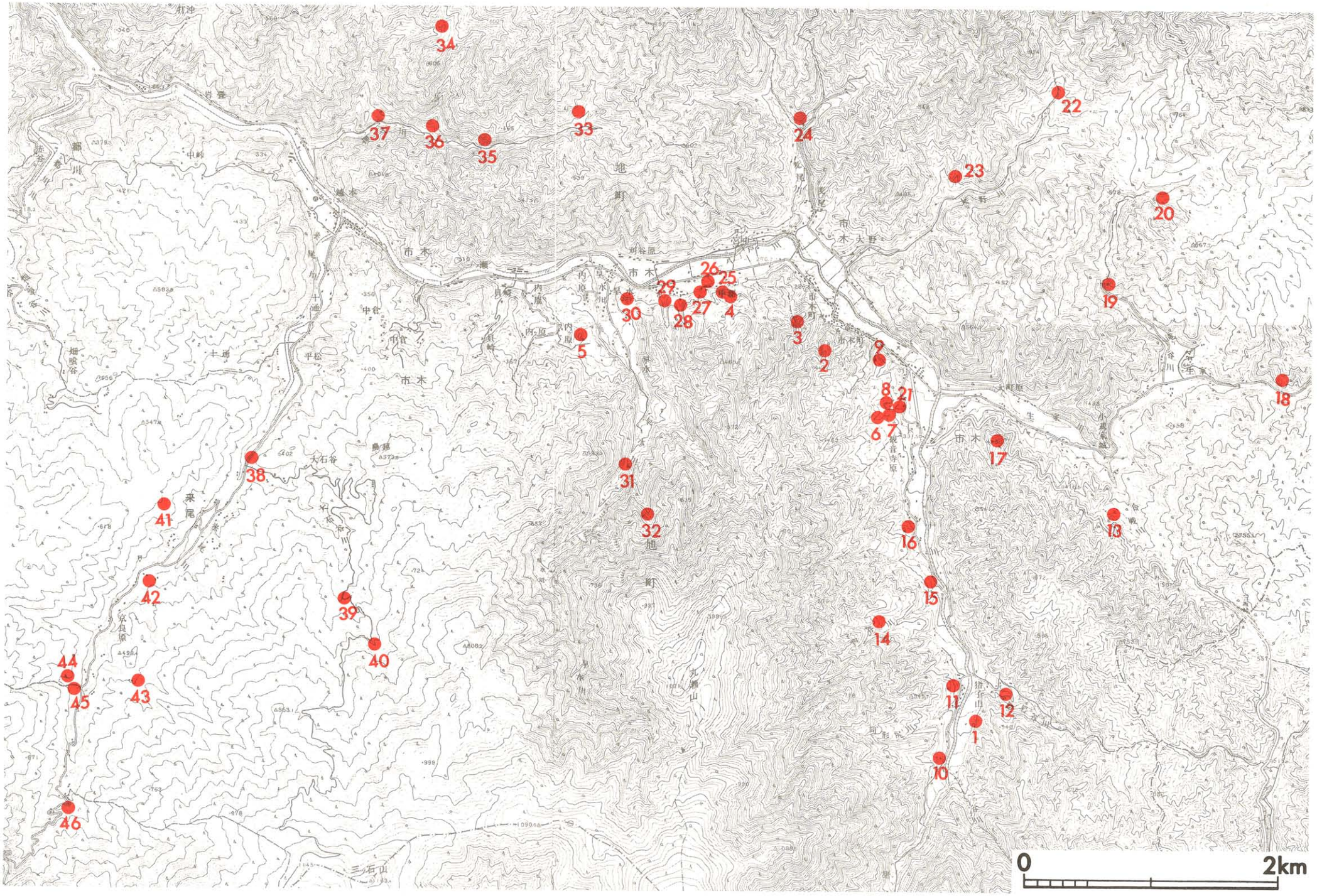
邑智郡瑞穂町と那賀郡旭町にまたがる市木地区は，八戸川の最も上流にある集落である。八戸川の両岸は狭隘ながらも比較的まとまった河岸段丘が広がっている。ただし，その周囲は観音寺原を除けばいずれも急峻な山地となっている。この地区は南側の三坂峠を越えると広島県山県郡大朝町に通じ，山陰と山陽を結ぶ交通の要所である。たとえば，南北朝の争乱の頃にはこの地区に多くの有力な武将が入り込み，争いを繰り返してきたところであり，江戸時代には浜田藩主の参勤交代の通路になり本陣が置かれていた場所でもある。本書で報告するこの市木地区の遺跡は，郷路橋遺跡，滝ノ屋谷城跡，桜尾城跡，森迫城跡，内ヶ原城跡である。以下，その周辺の主な遺跡について紹介しておくことにする。

堀田上遺跡　八戸川左側の丘陵上に位置し，旧石器時代，縄文時代，弥生時代の遺構・遺物がみつかっている。なかでも縄文時代の遺構は，早期中頃の竪穴式住居跡と考えられるもの（円形，径３ｍ，深さ12㎝）と早期後半の住居跡と考えられるもの（柱穴が直径約５ｍの円形に並ぶ）が層位的に確認されている。平成元年（1989），主要地方道浜田八重可部線改良工事に伴って一部が調査されたが，その周辺には良好な遺物包含層と遺構が残されている。(1)

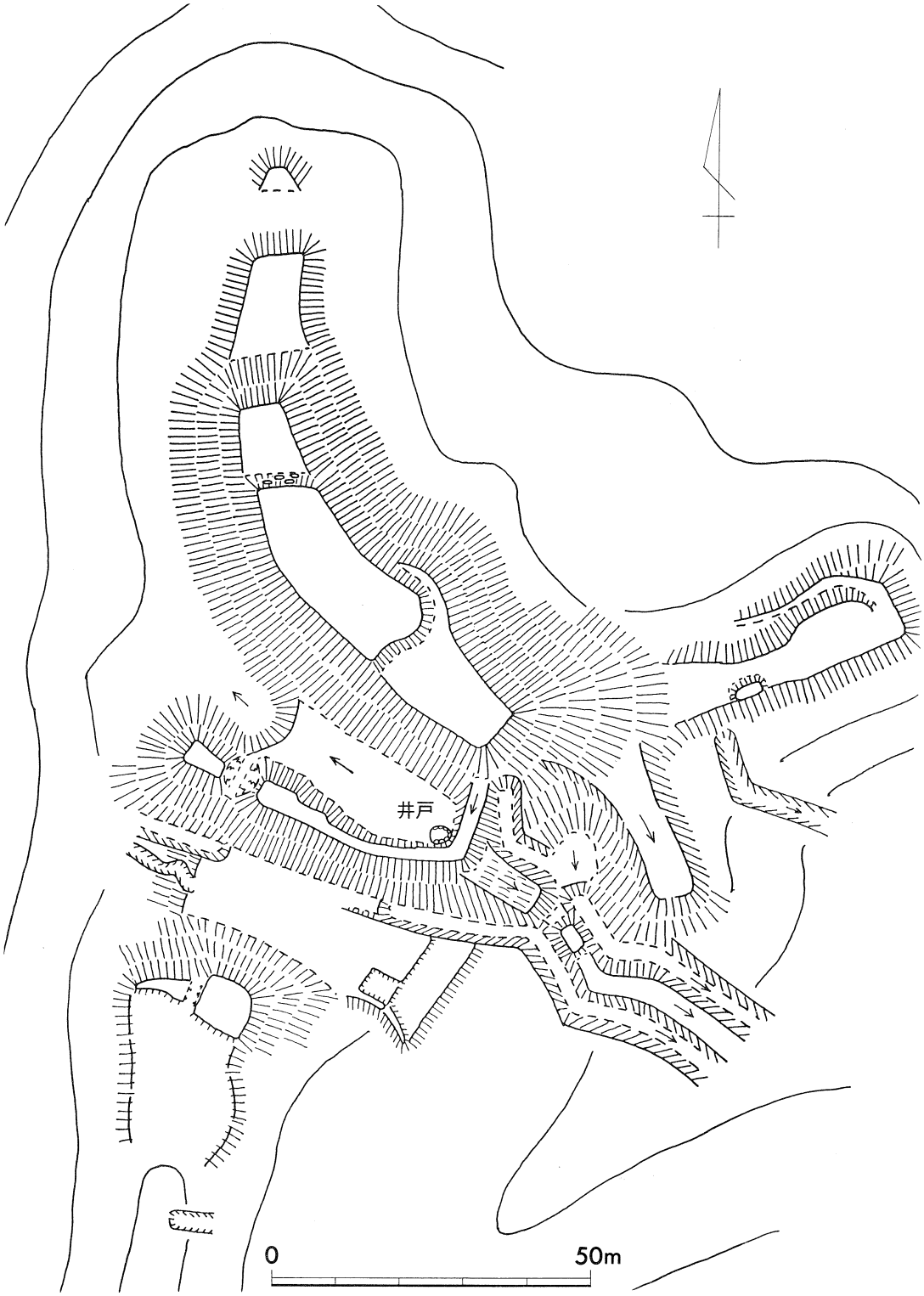
今佐屋山遺跡　堀田上遺跡より南西へ150ｍ入ったところで，丸瀬山（標高1,021ｍ）から北東に派生する丘陵の小さな谷間に位置する。谷部を流れる小川を挟んで南北の斜面に広がっており，南側斜面で古墳時代後期の製鉄遺構と竪穴式住居跡３棟が検出された。製鉄遺構は丘陵斜面を造成した平坦面の中央に炉床（45×38㎝）を設け，その両側に作業用の円形土坑を備えたものであった。北側の斜面では古代末～中世の製鉄遺構が調査されている。丘陵斜面を加工して作業面をつくり，炉床部は粉炭を敷きつめた本床をもつもの(規模は長さ4.8ｍ，幅1.5ｍ)であった。ほかに縄文時代

第1表　瑞穂町市木・旭町市木地区遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	備考
1	郷路橋遺跡	邑智郡瑞穂町市木	縄文集落，近世大鍛冶場跡
2	滝ノ屋谷城跡	邑智郡瑞穂町市木	中世山城
3	桜尾城跡	邑智郡瑞穂町市木	中世山城（高城跡，桜井城跡）
4	森迫城跡	那賀郡旭町市木	中世山城
5	内ヶ原城跡	那賀郡旭町市木	中世山城（早水城跡），弥生集落
6	今佐屋山遺跡	邑智郡瑞穂町市木	縄文集落，古墳時代製鉄遺構・集落
7	米屋山遺跡	邑智郡瑞穂町市木	近世炭窯跡
8	堀田上遺跡	邑智郡瑞穂町市木	旧石器・縄文・弥生集落
9	堀城跡	邑智郡瑞穂町市木	中世山城（桜尾城跡）
10	猪子山鈩跡	邑智郡瑞穂町市木	製鉄遺跡
11	同形尻鈩跡	邑智郡瑞穂町市木	製鉄遺跡（高殿）
12	聖岩鈩跡	邑智郡瑞穂町市木	製鉄遺跡（高殿）
13	合戦鈩跡	邑智郡瑞穂町市木	製鉄遺跡（高殿）
14	芦屋鈩跡	邑智郡瑞穂町市木	製鉄遺跡（高殿）
15	宝祖原鈩跡	邑智郡瑞穂町市木	製鉄遺跡（高殿）
16	鉄穴鈩跡	邑智郡瑞穂町市木	製鉄遺跡
17	小武家城跡	邑智郡瑞穂町市木	中世山城
18	熊山Ⅰ鈩跡	邑智郡瑞穂町市木	製鉄遺跡（高殿）
19	滝ケ谷鈩跡	邑智郡瑞穂町市木	製鉄遺跡
20	熊山Ⅱ鈩跡	邑智郡瑞穂町市木	高殿
21	丸瀬山山麓古墳	邑智郡瑞穂町市木	横穴式石室か
22	タタラ山遺跡	邑智郡瑞穂町市木	製鉄遺跡
23	中ノ原遺跡	邑智郡瑞穂町市木	製鉄遺跡
24	鳥免鈩跡	邑智郡瑞穂町市木	高殿
25	森迫古墳	那賀郡旭町市木	横穴式石室か
26	西ノ上石塔群	那賀郡旭町市木	宝篋印塔
27	高畑石塔	那賀郡旭町市木	宝篋印塔，五輪塔
28	天代石塔群	那賀郡旭町市木	宝篋印塔，五輪塔
29	天代遺跡	那賀郡旭町市木	経塚
30	早水遺跡	那賀郡旭町市木	散布地，陶磁器
31	早水Ⅱ鈩跡	那賀郡旭町市木	製鉄遺跡
32	早水Ⅰ鈩跡	那賀郡旭町市木	製鉄遺跡
33	ホトコロ鈩跡	那賀郡旭町市木	製鉄遺跡
34	大原鈩跡	那賀郡旭町市木	製鉄遺跡
35	新所Ⅱ鈩跡	那賀郡旭町市木	製鉄遺跡
36	新所Ⅰ鈩跡	那賀郡旭町市木	製鉄遺跡
37	四百谷鈩跡	那賀郡旭町市木	製鉄遺跡
38	大石谷下の鈩跡	那賀郡旭町市木	製鉄遺跡
39	大石谷中の鈩跡	那賀郡旭町市木	製鉄遺跡
40	大石谷上の鈩跡	那賀郡旭町市木	製鉄遺跡
41	久仁古墓	那賀郡旭町市木	
42	来尾経塚	那賀郡旭町市木	
43	岩屋谷鈩跡	那賀郡旭町市木	製鉄遺跡
44	下つ谷鈩跡	那賀郡旭町市木	製鉄遺跡
45	下つ谷鍛冶屋跡	那賀郡旭町市木	製鉄遺跡
46	京良原鈩跡	那賀郡旭町市木	製鉄遺跡



第１図　瑞穂町市木・旭町市木地区遺跡分布図（番号は第1表に一致する）



第２図　堀城跡縄張図(寺井毅 作図)

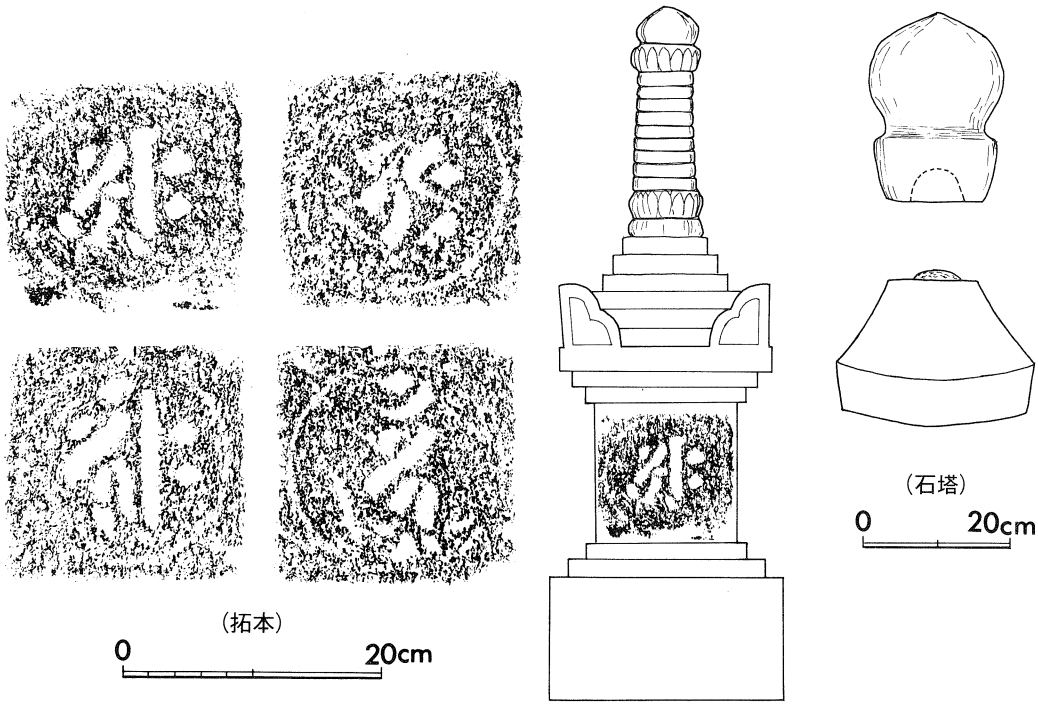
早期の遺物包含層も確認されている。[2]

丸瀬山山麓古墳　市木観音寺原の丸瀬山山麓に築かれた古墳で，横穴式石室を内部主体とした小円墳と考えられているが現存しない。遺物としては，須恵器瓿の出土が伝えられている。[3]

森迫古墳　旭町市木の森迫城跡のある丘陵の北側斜面に位置する。横穴式石室の天井石と思われる長さ１ｍあまりの大きな石が２個露出している。

堀 城 跡　瑞穂町市木岩ヶ迫の独立丘陵状の小山に位置する。標高約365ｍの丘陵頂部を削平して主郭とし，その南側下方の郭には土塁をめぐらし，東端には石組の井戸がある。さらに，東南部と西南部には竪堀を設けて防護している（第２図）。

高畑石塔　森迫城跡北西側の丘陵麓に位置し，宝篋印塔と五輪塔がある。宝篋印塔は花崗岩製で，総高92cmを測り，相輪から基礎まで完全に残っている。基礎は幅31cm，高さ21cmを測り，基礎上部は階段状につくり，反花座はない。塔身は幅19cm，高さ18cmで四面に月輪を彫る。月輪の中には薬研彫りで金剛界四仏種子を刻む。笠は高さ22cm，軒の上部に６段，下部に２段を設ける。隅飾突起は２弧で，突起面には輪郭を刻出す。高さは８cm，幅は先端で28cmありほぼ垂直に立ち上がる。相輪は高さ30cmあり，伏鉢は径９cm，高さ2.5cmを測る。造立時期は室町時代と思われる。五輪塔は，



第３図　高畑石塔略測図（拓本は佐伯充男氏による）

風・空輪部と火輪部が遺存している（第３図）。

天代石塔群　高畑石塔から西方約180mの谷間に位置する。東向きの斜面に２箇所の造成地があり，その平坦面に石塔が置かれている。完全に遺存しているものはないが，少なくとも下段平坦面には五輪塔５基，宝篋印塔４基，上段平坦面には五輪塔１基，宝篋印塔３基を確認することができる。

タタラ山遺跡　瑞穂町市木大野の谷の最奥部に位置する。東面する丘陵斜面を造成してつくられており，12×20mと７×13mの二つの平坦面が存在する。この平坦面の下方には鉄滓や炉壁片が散布している。規模や立地条件が今佐屋山遺跡の中世製鉄遺構に類似していることから，中世のものと推測される。

中ノ原遺跡　タタラ山遺跡の南西約１㎞の丘陵斜面に位置する製鉄遺跡である。南面する急斜面を造成して20×10mの平坦面をつくり作業面としている。この平坦面の下方に鉄滓が散布しているが，量的には少ないようである。

市木地区は，山の幸に恵まれていることから旧石器時代から人々の生活をうかがうことができ，縄文時代にも，相当数の集落があったものと思われる。古墳時代後期から中世，近世にかけては製鉄関連遺跡が多数知られており，中国山地山間部の特徴をよく示している。また，陰陽を結ぶ重要な地域にあたることから中世山城跡が６箇所も知られているほか，宝篋印塔などの石塔類も多い。

２．旭町本郷・重富・和田地区

この地区は，市木地区より10㎞あまり下流にあたる。本郷川，重富川，昭見川といった八戸川の小支流ごとにややまとまった平地がみられ，遺跡の多くはその周辺に分布している。本書で報告する遺跡は後河内古墓群であるが，以下その周辺の遺跡について簡単に紹介しておくことにする。

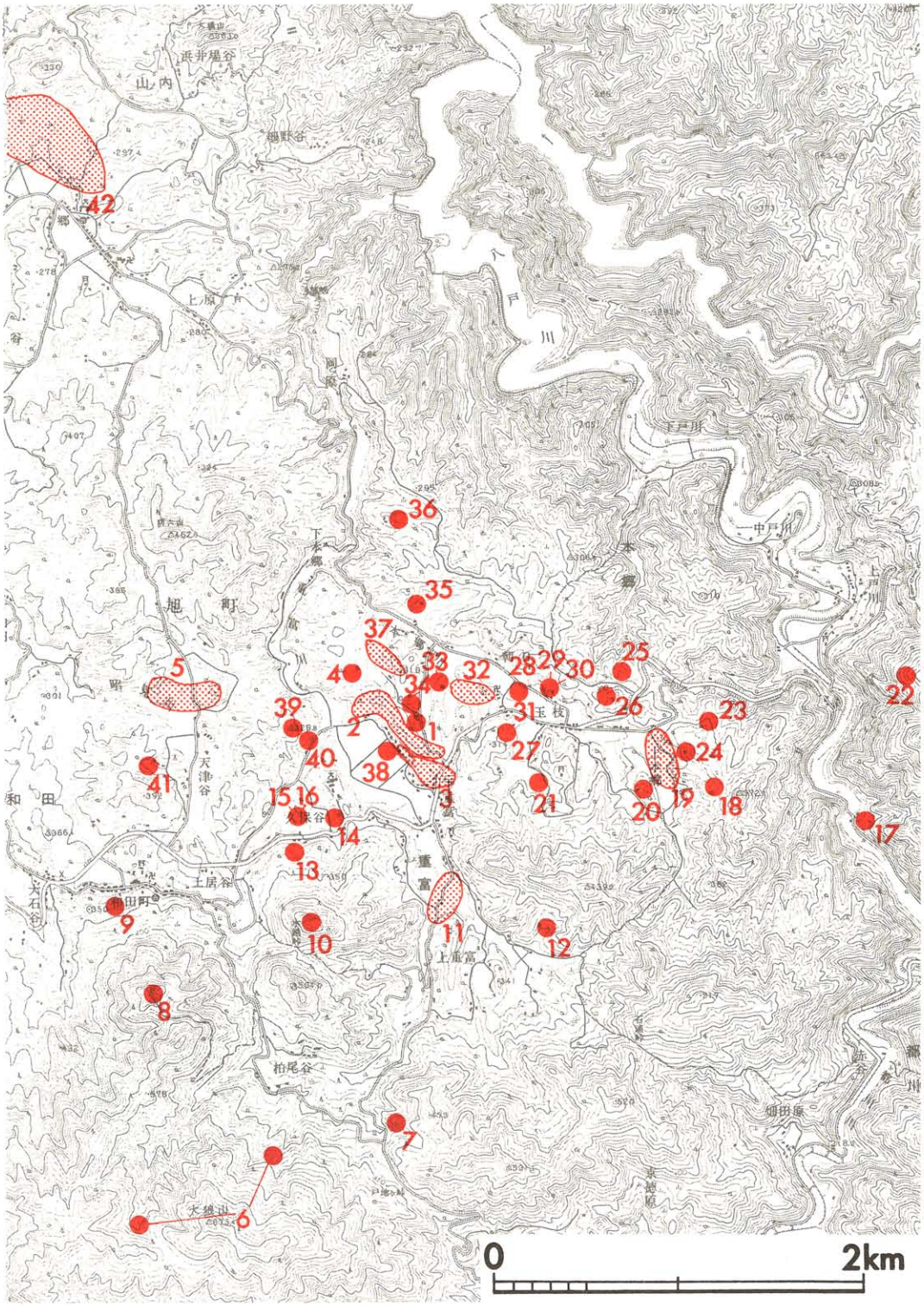
やつおもて古墳群　重富川右岸の低丘陵上にあり，前方後円墳１基，円墳20基以上からなる古墳群。横穴式石室を内部構造とするものが多いが，平成２年度（1990）の発掘調査により，竪穴式石室・箱式石棺・木棺を埋葬施設とする中期から後期前半の古墳も確認された。[(4)] また，18号墳のように径22mの円丘に長さ４ｍの造り出しを設けた，この地域としては大規摸なものも含まれている。

重富遺跡　やつおもて古墳群の南西側隣接地の谷部から丘陵にかけてひろがる大規模な遺跡。丘陵上には弥生終末～古墳時代前期の木棺墓群，斜面には奈良時代の竪穴式住居跡群，瓦窯跡などがある。ほかに，中・近世の古墓や炭窯跡もみつかっている。[(5)]

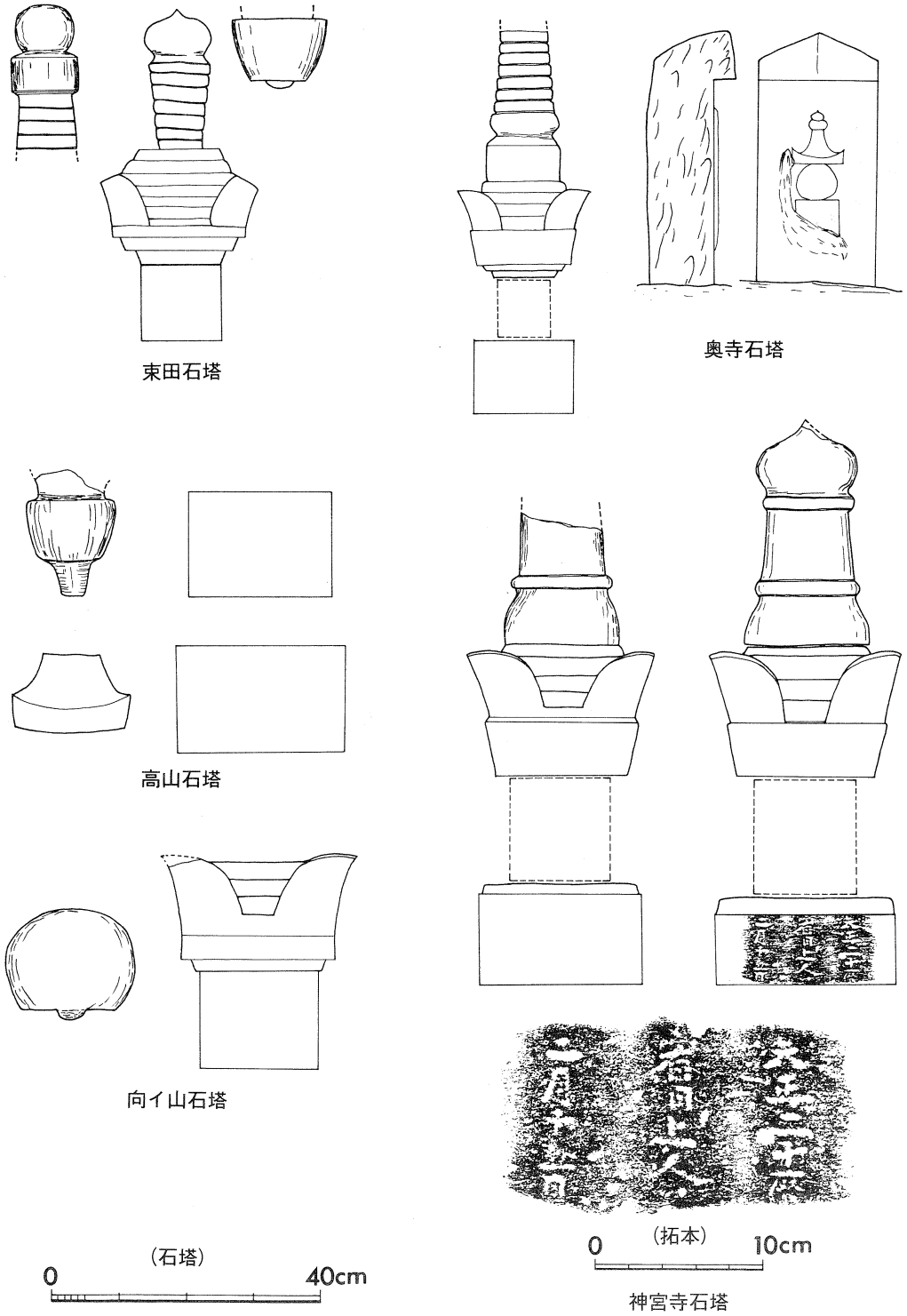
小才遺跡　和田字天津谷の丘陵上に位置する。横穴式石室をもつ古墳８基，小石室をもつ古墳１基，木室墳とでも称すべきもの２基，横穴墓２基などがある。１号墳は一辺約８ｍ，高さ約1.5mの方墳で，横穴式石室内から鉄刀，鉄鎌，鉄釘，須恵器，土師器，土錘などが出土しており，７世紀代の古墳と考えられる。[(6)]

第２表　旭町本郷・重富・和田地区遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	備考
1	後河内古墓群	那賀郡旭町本郷	集石墓（近世），古墳１
2	やつおもて古墳群	那賀郡旭町重富	円墳20基，前方後円墳1，横穴式石室
3	重富遺跡	那賀郡旭町重富	集落跡，土壙墓21
4	柳ケ谷古墓	那賀郡旭町本郷	集石墓
5	小才遺跡	那賀郡旭町和田	集落跡，古墳11，横穴２，石組１
6	柏尾谷鉄穴溝跡	那賀郡旭町重富	
7	戸地谷峠鉄穴溝跡	那賀郡旭町重富	
8	大石谷城跡	那賀郡旭町和田	中世山城（和田城跡）
9	神宮寺石塔	那賀郡旭町和田	宝篋印塔２　いずれも塔身を欠く
10	尼御前城跡	那賀郡旭町重富	中世山城（重富城跡）
11	土居ノ内遺跡	那賀郡旭町重富	集落跡？
12	福原宅裏横穴群	那賀郡旭町重富	５穴　須恵器
13	高山石塔	那賀郡旭町和田	五輪塔(空風輪1，火輪1，地輪2)
14	枝田鈩跡	那賀郡旭町和田	製鉄遺跡
15	向イ山石塔	那賀郡旭町和田	宝篋印塔(笠•塔身1)，五輪塔(空輪1)
16	向イ山古墳群	那賀郡旭町和田	横穴式石室か，須恵器
17	大賀鍛冶屋跡	那賀郡旭町都川	製鉄遺跡
18	正利庵石塔	那賀郡旭町本郷	宝篋印塔(笠・相輪のみ)
19	本郷遺跡	那賀郡旭町本郷	集落跡？
20	別名石塔	那賀郡旭町本郷	宝篋印塔(笠・相輪のみ)
21	叶山鈩跡	那賀郡旭町本郷	製鉄遺跡
22	焼板鍛冶屋跡	那賀郡旭町本郷	製鉄遺跡
23	大槇峠鈩跡	那賀郡旭町本郷	製鉄遺跡
24	後屋敷門石塔群	那賀郡旭町本郷	五輪塔を少なくとも10
25	すずが谷鈩跡	那賀郡旭町本郷	製鉄遺跡
26	五歩一ソラ古墳	那賀郡旭町本郷	円墳？
27	小堀石塔	那賀郡旭町本郷	宝篋印塔１，五輪塔(火輪１)
28	本郷の大墓	那賀郡旭町本郷	盛土墳
29	大墓石塔群	那賀郡旭町本郷	五輪塔(数十基)，宝篋印塔(若干)
30	大墓横穴群	那賀郡旭町本郷	横穴
31	桜ケ坪遺跡	那賀郡旭町本郷	散布地　弥生前期甕片
32	迫田遺跡	那賀郡旭町本郷	弥生土器・土師器・須恵器片
33	曽川石塔	那賀郡旭町本郷	
34	朝日宝篋印塔	那賀郡旭町重富	宝篋印塔
35	生塚	那賀郡旭町本郷	転石２個
36	小池鍛冶屋跡	那賀郡旭町本郷	製鉄遺跡
37	新塚古墳群	那賀郡旭町本郷	横穴式石室
38	重富廃寺	那賀郡旭町重富	軒丸瓦，須恵器
39	野地背戸山城跡	那賀郡旭町和田	中世山城
40	野地遺跡	那賀郡旭町和田	散布地　須恵器片
41	興寺石塔群	那賀郡旭町和田	宝篋印塔３，五輪塔３
42	山ノ内古墳群	那賀郡旭町山ノ内	32基以上



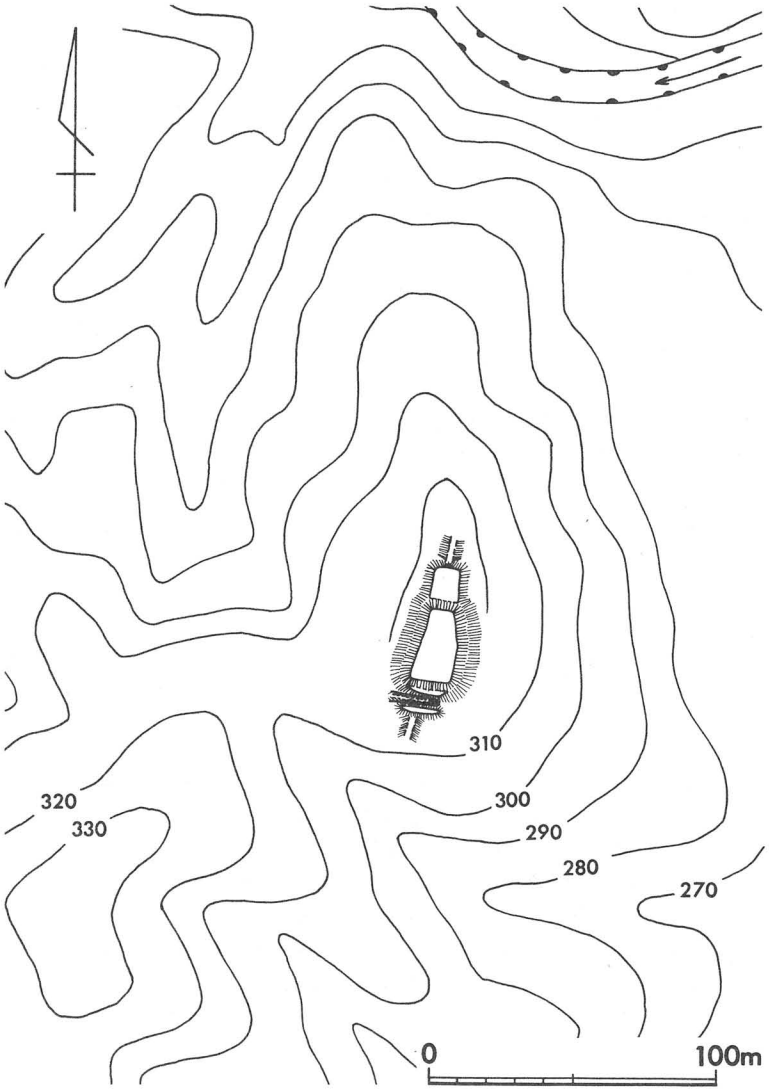
第４図　旭町本郷・重富・和田地区遺跡分布図（番号は第２表に一致する）



第５図　旭町大字和田地区内の石塔略測図(拓本は佐伯充男氏による)

重富廃寺　やつおもて古墳群の南西側の水田部に位置する。昭和48年（1973），耕地の基盤整備事業中に，軒丸瓦，平瓦，丸瓦，須恵器等が発見された。礎石等は確認されていないが，瓦が出土したことにより廃寺と推定されている。(7)

大石谷城跡　和田城とも称する。標高580mあまりの急峻な山で，頂上に電波中継塔が置かれている。土塁，竪堀等はみられないが，主郭（丘陵頂部）およびそこから東方と南東方向に派生する尾根上には多数の郭が階段状に設けられている。主郭からは家古屋城を遠望することができる。



第6図　野地背戸山城略測図

またこの山の北西麓には「土居」という地名があるほか，その周囲の谷は「土居谷」と称されている。

尼御前城跡　尼子勢城とも称する。大石谷城の北東に位置し，その間の谷は「土居谷」と呼ばれている。地形は急峻であるが山頂部に削平地がみられる程度で，あまり大規模な造成等は行われていない。

野地背戸山城跡　和田字野地にある小規模な山城。標高約330mの丘陵に位置し，丘頂に2段の郭があり，その南側に堀切・竪堀がある（第6図）。

神宮寺石塔　大石谷城の北麓にある東光寺西側の墓地にある。宝篋印塔が２基あり，いずれも塔身を失っている。１基には基礎に銘文が彫り込まれている。不明瞭ではあるが「天正二十暦　宥日上人　二月十五日」とみえる。基礎は幅27cm，高さ13cmある。笠は高さ19cmで，軒の上部に三つの段を設ける。隅飾突起は１弧で，高さは10cm，幅は先端で29cmあり，外方に開いて立ち上がる。相輪は高さ33cmで，請花，九輪は簡略化されている。石塔のつくりは全体に簡略化されており，近世の作風をもつことから天正20年（1592）の銘とは合致しないように思える（第３図)。

本郷・重富・和田地区は中国山地山間部としては比較的平地のまとまった地域であり，弥生時代以来の数多くの遺跡が確認されている。特に古墳時代にはやつおもて古墳群や小才遺跡などでは前方後円墳を含む多数の古墳が築造されている。さらに，奈良時代には寺院が造営されていたことも考えられ，その近くでは瓦窯跡，集落跡などもみつかっており古墳時代から奈良時代にかけて有力な氏族がいたものと推測される。そうしたことからこの地域は山間部においては古代において中心的な地域の一つであったと思われる。

（松本岩雄）

註

（１）　平成元年（1989）島根県教育委員会調査 島根県教育委員会 『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 1991年
（２）　平成元年（1989）島根県教育委員会調査
（３）　瑞穂町教育委員会 『瑞穂町誌』 第３集　1976年
（４）　平成２年（1990）島根県教育委員会調査
（５）　平成元年（1989）・平成２年（1990）島根県教育委員会調査
（６）　平成２年（1990）島根県教育委員会調査
（７）　旭町教育委員会 『旭町誌』 1977年

第Ⅲ章　遺跡の概要

1．郷路橋（ごうろばし）遺跡

瑞穂町市木の通称猪子山の谷部にある。遺跡は大きく縄文時代の集落関係のものと江戸時代の製鉄関係のものに分けられる。遺構は，間層を挟んで幾層にも遺構面が重複していて層位的に遺構・遺物をはっきりと把握することができた。

縄文時代の遺構は，竪穴住居跡と考えられる遺構が，早期２棟（Ｇ区），前期２棟（Ｆ・Ｇ区），後期１棟（Ｃ区），晩期５棟（Ｄ・Ｆ区）の計10棟確認できた。いずれも円形に並ぶピット列で大きさはまちまちである。土壙は全部で30基ほどあり，早期２基（Ｇ区），前期10基（Ｅ～Ｇ区），後期６基（Ｂ・Ｃ区），晩期が12基（Ｄ～Ｆ区）と各時期に認められ，このうち，早期のＳＫ23からは多数の黒曜石のチップが検出され，石器の工房跡を推定させるものであった。またこれらのほかに前期の遺構面からトチの実の貯蔵穴も確認された。その他，各遺構面から多数の大小ピットを確認したが，その中で，柵列状に並ぶピットが，前期で１箇所（Ｇ区），後期で１箇所（Ｃ区），さらに晩期の曲線状に周るものが２箇所（Ｆ区）確認されたほか，前期の遺構面からは三重にピット列が廻る性格不明の遺構なども検出された。

遺物としては，土器と石器があり，土器では，早期後葉から前期前葉にかけての厚手無文・縄文・沈線文・押引文・隆帯文などの土器群，前期前半の爪形文土器，後期初頭から前葉にかけての磨消縄文土器，晩期前葉の土器などが検出された。石器では，石斧や石鏃などの打製石器の他，敲石，磨石，石皿類が多く検出された。打製石器の材質は安山岩や隠岐島・姫島産の黒曜石であった。

製鉄関係では，大鍛冶場跡が確認された。掘立柱建物跡内部に，左下場・本場から成る炉跡と，それらの間の鉄砧石で構成された遺構があり，屋外から９基の円形土壙が確認された。これらの遺構から18世紀～19世紀を中心とする陶磁器類をはじめ，鞴羽口，鉄製品，多量のスラグ類が出土している。なお，そのほかにも，Ｅ区で室町時代頃の中国製白磁青花・備前焼などとともに掘立柱建物跡が２棟以上確認されるなど，幅の狭い谷裾部に立地する遺跡にもかかわらず，複数の時代の多数の遺構・遺物が存在している。

2．滝ノ屋谷（たきのやだに）城跡

丸瀬山から北側に伸びる尾根上に位置する山城で，城跡頂上部（主郭）の標高は約400ｍである。谷を挟んで北西には桜尾城，東側には堀城があり，眼下に瑞穂町市木の街並みを一望することがで

きる。尾根上に堀切を設けており，その北側にある最高所の加工段を主郭，そこから北東方向に並ぶ6つの加工段を1～6郭（中央郭群）とし，6郭の北側下方にある平坦面を北0郭，そこから北方へ伸びる丘陵突出部上のほぼ一直線に並んだ6つの加工段を北1～6郭（北郭群），6郭の東側にある傾斜の緩やかな斜面を東郭とすることにした。調査は2郭以北の部分で，主郭と1郭，主郭南の堀切の部分を除く区域で行った。

2郭は1郭の北側下方で，比高差約3mのところにあり，ほぼ台形に近い平面プランをもつ。郭の東西両側に通路状に伸びる平坦面（通路状遺構）を検出した。郭の西端には，人頭大から拳大の自然石が約4mに渡って並べられていた。また柱穴状のピットが2個確認された。

3郭は，半円形に近い平面プランをもち，2郭とは約2mの比高差がある。4郭は，40cmのなだらかな段差で区切られた台形に近い平面プランをもつ2つの平坦面からなる。3郭との比高差は約1.5mで，3・4郭周辺から7個の性格不明のピットが検出された。また，4郭の先端から5郭に続く斜面で径約80cm，深さ約25cmの内部に炭や焼土が含まれた半円形の土壙（SK01）が検出された。東側の盛土を除去した後で当時盛土工事時になんらかの目的で利用されたと考えられるピットが4穴確認された。5郭は，長方形に近い平面プランをもつもので，4郭と約5mの比高差がある。6郭は，東5郭と約50cmの段差をもつなだらかな斜面で区切られている。5・6郭とその周辺から5個のピットが検出された。うち3個は柵列をなしていた可能性が高い。

北0郭は，6郭のすぐ北側下方にある半円形の平坦面で，更に北側下方比高差約7mの所に台形に近い平面プランをもつ北1郭がある。それに続く北2郭の平坦面で，楕円形に広がる焼土や北3郭に続く西側斜面よりピット1個を確認した。また，北3郭の東側斜面から3個のピットを，北4郭の西側斜面から北3郭と同様のピット3個を確認し，付近に柵列が規則的に配置されていたことが推定された。北4郭からは，性格不明の長方形を呈する土壙1基も確認した。北5郭からも，北2・3郭と同様に平坦面中央部に焼土の広がりを確認した。

東郭は，6郭の北東側斜面下方のやや離れた所にある。平坦部の東側から斜面にかけて焼土の広がりを確認し，周辺部から11個のピットを検出した。このうちの一つから鉄釘が出土している。

3．桜尾（さくらお）城跡

滝ノ屋谷城跡の西隣の尾根筋上にあり，城跡頂上部（主郭）の標高は約420mである。東・北・西の三方に視界がきき，南東に猪子山，北に八戸川を望むところにある。頂部の最も広い平坦部分を主郭とし，その南側に隣接する平坦面を南1郭，北東に伸びる丘陵上の2つの平坦面を東1・2郭，北西に派生する丘陵上の平坦面を西1郭，北方のやや離れた平坦面を北1・2郭とし，このうちの東1郭（Ⅰ区），東2郭（Ⅱ区），北1郭（Ⅲ区）の調査を行った。

東１郭は，標高約410m，主郭から北東方向に伸びる尾根上にあり，市木の街並みを見下ろす見晴らしの良い場所にある。平坦面はきちんと造成されたものではなく，断面形は蒲鉾状にわずかに膨らんでいる。調査区の東端から北側・西側に回り，主郭へと続く通路状の遺構を確認した。

東２郭は，鍵形に曲がる細長い通路状の平坦面で，稜線を挟んで東側と北側に分かれるので，東側テラス，北側テラスと呼び分けた。両テラスとも，丘陵急斜面を切削加工して，平坦部を築いていることが確認された。北側テラスの地山加工面から山側斜面にかけて掘立柱建物跡を推定させる７つのピットを確認した。

北１郭は，主郭から北西方向に伸びる尾根上の平坦面で，主郭から直線で約180m離れ，これとの比高差は約50mある。平坦部の西側斜面で，３つの土坑状の落ち込みが確認された程度で，めだった遺構は確認されなかった。

４．森迫（もりさこ）城跡

丸瀬山から北方へ伸びる尾根の１つにあり，城跡頂上部（主郭）の標高は約340mである。この主郭部からは，東方に桜尾城を見上げることができる。最高所にある２面の平坦面を主郭とし，それより西側の加工段を西１郭，東側の４段の加工段を高いところから順に東１～４郭として調査を行った。

主郭は，中央部の１mの段差によって南側の不整形な三角形の平坦面と，北側の長方形の平坦面とに分かれる。主郭の２面の平坦面から，14個のピットを確認した。ここの北東隅から土壙２基を確認し，うち１基から鉄釘等の金属製品を検出した。西１郭としたものは，主郭の西側斜面の中程，主郭との比高差13mのところに地山を削り出して造られている楕円形の加工段であるが，調査の結果後世の削平である可能性が高いものと判断された。

主郭から堀切を挟み東に伸びる尾根上に東１～３郭がある。東１郭は，主郭との比高差が約10m，ほぼ三角形の平面プランをもつ。ここから比高差４mのところに東２郭がある。東２郭と東３郭は高さ1.5mの段で接した一連の加工段で，それぞれ四角形，砲弾形をしている。東１郭の南側斜面下方に不整形のピットを検出した。また，東３郭では掘立柱建物跡の存在を推定させる幾つかの柱穴を確認した。東３郭から比高差７mのところに長方形の東４郭があり，その間に２条の帯郭を確認した。このほか，東３郭の盛土下層から溝１本，土壙２基などを確認した。

５．内ヶ原（うちがはら）城跡

森迫城の西方１kmの所にあり，頂上部（主郭）の標高が約350mある。丘陵最上部の平坦面を主郭，その西側に並ぶ２つの平坦面を西１・２郭とした。調査は，城跡の南西に位置する谷部をⅠ区，

城跡に直接関係する主郭や西１・２郭をⅡ区として２箇年に分けて実施した。

Ⅰ区の谷部からは，鉄穴溝に利用されたと推定される４本の溝を確認した。さらにその下の層から，弥生土器とともに，ピット群や加工段も確認した。

Ⅱ区の主郭は，後世の鉄穴流しのため破壊されており，原地形が保たれているのは丘陵頂部平坦面と西斜面及び南斜面の一部であった。主郭平坦面からは，掘立柱建物跡と考えられるピットを80数個確認し，少なくとも１棟の建物跡を推定できた。このほか溝，鍵形の落ち込み，溜井戸状遺構を確認した。

主郭西斜面で主郭から比高差2.5mのところに溝を検出，さらにその下斜面中腹に幅２～３mのテラスを確認した。西１郭の西側には高さ約３mの土塁が巡らされていた。西１郭の南斜面に幅約２mの帯郭状のテラスがあり，この帯郭の西端にある平坦面が西２郭としたところである。西１・２郭としたものは，調査の結果後世に造成された可能性が高いものと判断された。このほか主郭南斜面に１つと西１郭斜面に２つの竪堀状遺構を検出した。

６．後河内（うしろごうち）古墓群

古墳時代後期の群集墳として知られるやつおもて古墳群が所在する丘陵の北側斜面に位置している。斜面を段状に加工して造られた古墓群が２箇所と古墳１基があり，中央の調査区をⅠ区，その南をⅡ区，北をⅢ区として行った。

Ⅰ区には18基の古墓があり，これらの古墓は，いずれも墓壙上に人頭大の集石が認められたが，３基ほど集石のみで墓壙が確認されなかったものもある。墓壙は長方形，方形，隅丸方形の平面形を呈するものがほとんどである。遺物は集石の間から肥前系青磁，同白磁染付，瓦質容器などが，墓壙中からは鉄釘や人骨片が検出された。

Ⅱ区は，Ⅰ区より南東に約30m離れた北向きの丘陵斜面にあり，標高はⅠ区とほぼ同じところにある。３基の古墓があり，大型の隅丸方形の墓壙上に基壇状の集石をともなったものや，墓壙中から碗形滓や鍛冶滓，坩堝など鍛冶に関係する遺物が検出されたものもある。

Ⅲ区は，Ⅰ区より北西に約30m離れた東向きの丘陵斜面にあり，Ⅰ区との比高差は約８mある。ここから竪穴式石室をもつ古墳が確認された。墳丘の規模ははっきり分からないが，丘陵斜面上方に「コ」の字形の溝が周る４m前後のものと推定される。石室は，内法で長さ1.0m，幅0.45m，高さは現状で0.7mあり，主軸はほぼ北を向くものであった。出土遺物はなく，周囲で須恵器片が若干見つかっている。

（錦織　弘）

第II部　各遺跡の調査

第I章　郷路橋遺跡

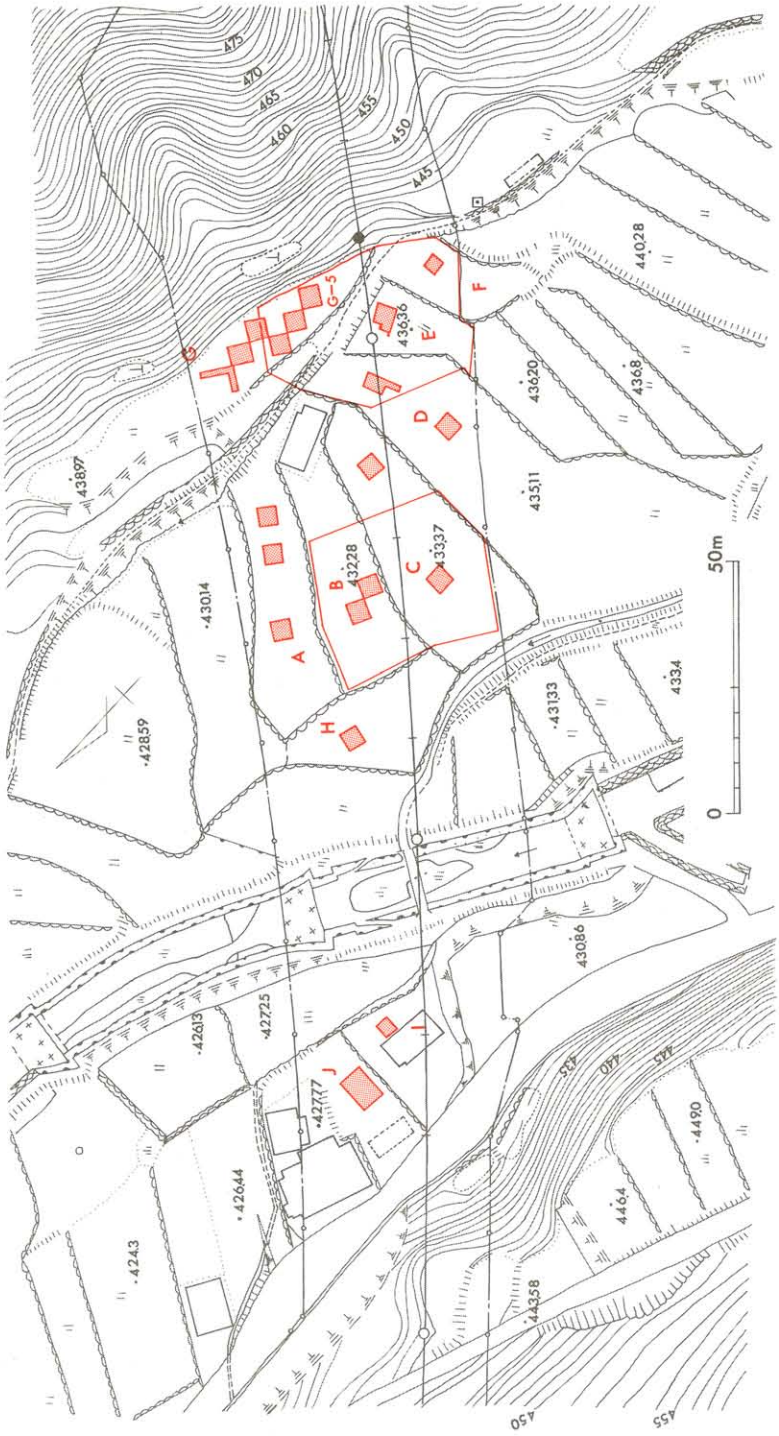
第1節　調査の概要

郷路橋遺跡は，島根県邑智郡瑞穂町市木1356番地１外の，通称猪子山に位置する。この猪子山という所は，江川支流八戸川の最上流部にあり，すぐ南にはその流れの源で，広島県との県境になっている阿佐山や畳山の峻嶺が聳えている。猪子山からさらに上流を猪子谷と呼び，猪子山はその猪子谷の出口に広がる沖積地に相当する。谷の幅は150m足らずで，遺跡は猪子谷川を挟んでその両側山裾に，細長く広がっており，標高は420mから440m程度である。現状はいずれも水田として利用されているが，昭和56年の分布調査の際に一部発掘調査を行った結果では，近世末から明治初期にかけてのたたら遺構や建物跡の存在が予想されていた（第１図)。

昭和62年度の発掘調査では，遺跡の性格とその範囲を正確に把握するため，横断自動車道のルート内の谷水田一面ごとにA～I区の調査区名を付し，各調査区に３m×３mまたは４m×４mの任意の調査グリッドを１～７箇所設定して掘り下げた（第２図)。その結果，A区では耕作土の下に厚さ20～30cmにわたってスラグの層が堆積していたものの遺構は検出されず，H区・I区では厚く砂礫層が堆積するばかりで遺構遺物は確認されなかった。一方C区では，山手側の１箇所では何も出土しなかったものの，西側のC－４区では，地表下80cmのところに縄文時代後期の遺物を包含する黒褐色土が発見され，同層はさらに北側のB区にもつながっていることが判明した（図版48・49－１参照)。D区では，東側の１区で川原石や地山の石を用いた石組遺構と近世末頃の陶磁器類を確認したが，西側の２区では鉄穴流しによる黄色粘質砂の厚い堆積層を検出したのみで遺構遺物は発見されなかった。E・F区はともに耕作土下に縄文時代晩期の遺物包含層があり，その下には遺構も残っていることが判った。

発掘調査前から，たたら遺構の存在する可能性が最も高いと踏んでいたG区では，グリッドを５箇所とトレンチ１箇所を発掘したが，北半の第１・第２グリットでは耕作土の下が直ちに地山となり，第２グリッド南端で急激に落ち込むとともに，南半では西に急傾斜する地山が続き，その上に旧表土とその後の人為的堆積層が厚く堆積することが判明した。この第２グリッド南端から第５グリッドにかけての地山の急傾斜はのちの昭和63年度の本調査で，大鍛冶場跡のある加工段の壁面に当たっていることが判明するわけだが，この段階ではそこまで推定するには至っていない。それはともかく，大鍛冶場の操業が終わって以来，水田に転用されていく過程でかなりの地形改変を受けているわけで，その様子を第５グリッドの土層でみる（第３図，図版３）と，地表下140cmあたりに

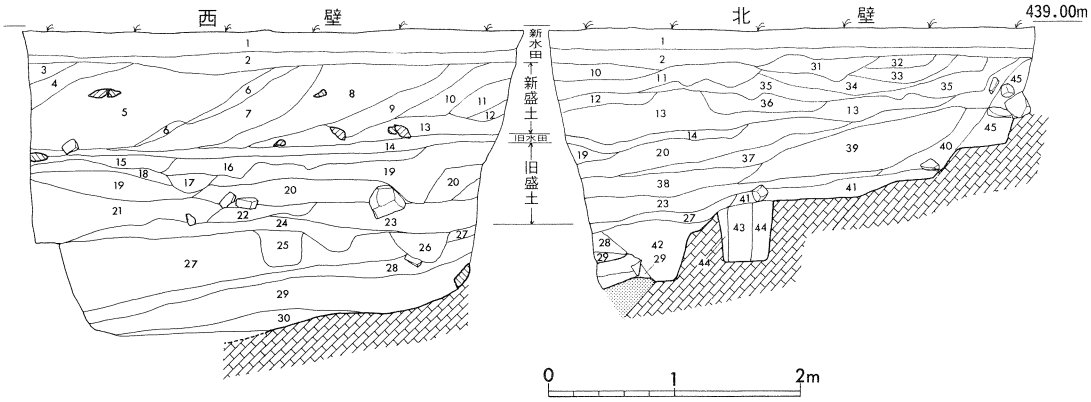
第１図　郷路橋遺跡範囲図(網目は昭和56年度調査地点)



第２図　郷路橋遺跡調査区設定図(試掘グリッドを含む)

柱穴などが掘り込まれた平坦面があり，これが大鍛冶場跡のあった面である。この上に約60cmの盛土をして旧水田が形成される。盛土は比較的水平に盛られており，一部にスラグだけの層がある。旧水田耕作土の上にはさらに地山の花崗岩砂礫層が60～70cmの厚さに盛られているが，北側から南に順次盛られた様子が判る。このことは，現在の水田が第２グリッド以北の地山を削り，南側に盛って作られたことを示しており，以上の事実を総合すると，Ｇ区では，後述（第４節）のように，南半の地山を加工して作られた大鍛冶場跡（ただし，昭和62年度のグリッド調査段階では，まだ遺構の内容は把握できておらず，たたらに関係した建物等が推定できたに留まる。）の操業が停止したあと，この部分は造成されて水田となり，さらにその後，当時もう少し西に向かって迫り出していた北半の尾根を大きく削り出して南側に盛り，現在の水田面が形成されたという経緯が読み取れる。したがって，Ｇ区北半にはすでに遺構遺物はなく，また大鍛冶場跡の下にはＥ・Ｆ区と同様の包含層も存在することも明らかとなった。

これらの確認調査の結果をもとに，昭和63年度に第２図に赤線で示した範囲を本調査することにしたが，昭和62年度中にもＥ・Ｆ区の一部について全面調査を実施した。しかし，12月にはいり積雪量が多くなったため，未終了のまま次年度に持ち越す結果となった。昭和63年度には，工事日程の関係からＤ～Ｇ区の調査をまず行い，その後Ｂ・Ｃ区調査を実施した。調査に当たっては，調査区全域に国土座標の軸方向に合わせた10ｍ方眼を組み，これをもとに遺構の実測や遺物の取り上げを行った。検出した遺構遺物の概要は第Ⅰ部の通りで，以下に時代の古いものから順を追って報告する。なお，昭和63年度の調査面積はＢ・Ｃ区で約950㎡，Ｄ～Ｇ区で約1,000㎡である。また，谷



1.耕作土　2.客土　3.第１黒色土　4.灰褐色土　5.暗褐色土　6.褐色土　7.濁褐色土　8.暗褐色土　9.第２黒色土　10.濁褐色土　11.褐色小レキ層　12.明褐色の小レキ層　13.混砂レキ黒褐色土　14.暗青灰色土　15.黒色土　16.褐色土　17.灰色砂層　18.暗灰色土　19.黒褐色土　20.淡灰褐色小レキ層　21.黒色スラグ層　22.濁赤褐色土　23.濁明褐色土　24.暗灰色土　25.暗灰褐色土　26.混褐色ブロック淡黒褐色土　27.黒色土　28.暗茶褐色土　29.黒色土　30.暗茶褐色土　31.白褐色砂レキ層　32.黒褐色土　33.濁褐色土　34.褐色細砂レキ層　35.黒褐色土　36.暗褐色土　37.黒色土　38.暗褐色土　39.淡褐色レキ層　40.黒色スラグ層　41.淡黒褐色土　42.黒褐色土　43.淡黒褐色粘質土　44.暗褐色土　45.暗褐色土

第３図　Ｇ区試掘グリッド(G-5)における水田盛土と大鍛冶場跡との土層関係

の西側の丘陵斜面でも機械による確認調査を行ったが，遺構，遺物は発見されなかった。

第2節　縄文時代の遺構・遺物

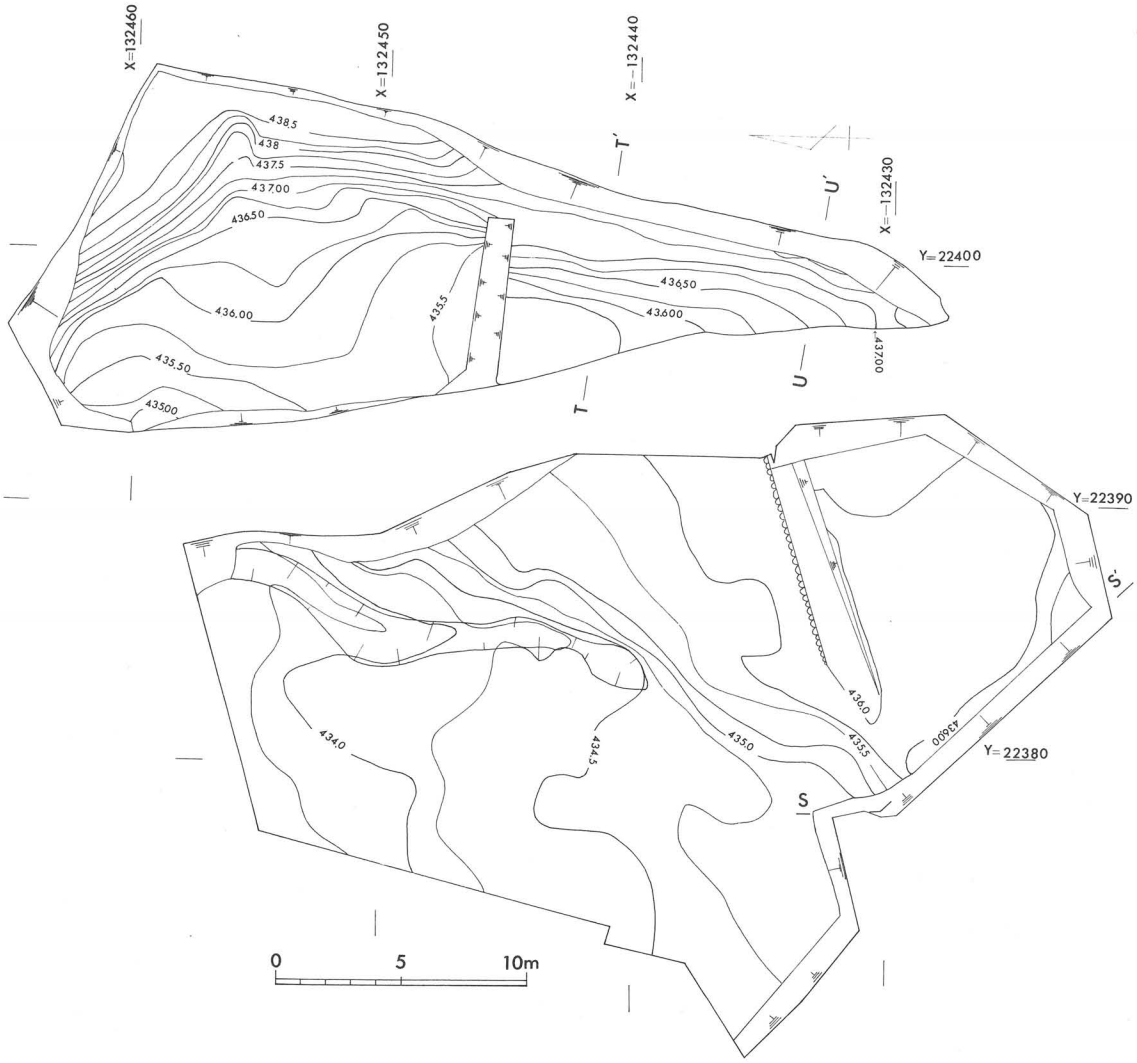
郷路橋遺跡の中心をなすものは縄文時代の遺構，遺物である。B・C区とD～G区の2地点に分かれて検出され，前者が後期前葉，後者が早期後葉から前期および晩期前半で，互いに重なる時期はない。ふたつの地点の間は，厚い砂礫層が南西から北東に向かって流れるように堆積しており，ちょうど沢のような感じに削り取られている。よって両地点の土層的なつながりは摑めていない。時代が古く，また長期間にわたって生活の痕跡が確認されたD～G区から報告を進めたい。

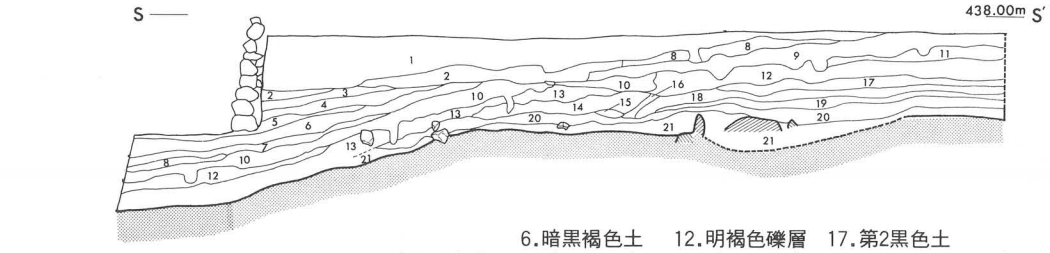
1．D～G区の調査

(1)　土層と各遺構面

昭和62年度の確認調査で縄文時代晩期の遺物包含層と遺構は確認していたものの，その下層については未確認で，昭和63年度に一部をトレンチ調査して土層の確認を行った。第6図はD～Gの各調査区の土層関係を模式的に示したものである。G区では，江戸時代の大鍛冶場跡を検出した面で，南半に2本のトレンチ（トレンチの位置は第4図，図版3を参照）を設定したところ，5層にわたって黒色土の堆積が認められ，このうち第1から第3黒色土までが遺物包含層であった。第1黒色土は縄文時代晩期の土器を含むが，G区でこの層が残っているのは南端部分だけで，中央から北半にかけては第2黒色土がすでに出ている。D～F区でもほぼ全面にこの第1黒色土は観察され，その下面では，G区で不明であった竪穴住居跡などの遺構も検出されている。第1黒色土以下は，黒色土と黒色土の間に褐色あるいは灰褐色の土または砂礫が交互に堆積し，第2黒色土から第4黒色土までの各々の層の下面では各時期の遺構面が存在する。また，第2黒色土と第3黒色土の間で，正確には灰褐色土と第3黒色土の間に，九州鬼界カルデラの爆発によって堆積したアカホヤ（Ah）火山灰が確認され，その上面でもピット群などの遺構を検出した。第4黒色土よりも下には遺構・遺物は発見されず，第5黒色土の下は大形の河原石を含んだ褐色の砂礫層となる（第5図）。

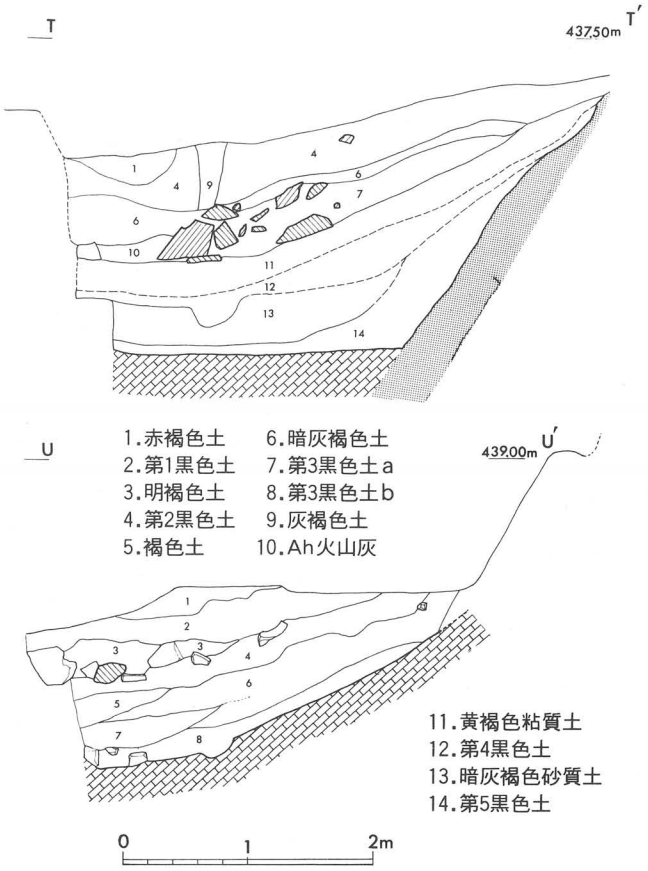
F区でもG区とほぼ同様の土層堆積状況が確認されたが，第2黒色土の上下にさらに1層ずつ，やや層の薄い黒色土（第2a・第2c黒色土）があることが判明し，第2c黒色土の一部がG区南端にわずかながら姿を現していることも判った。また，第1黒色土下の暗褐色土上面には，前期の爪形文土器とそれに伴うと考えられるピットを検出したが，他の調査区ではこれに対応する層は検出されなかった。F区の第4黒色土は調査区中央の窪みに溜まったように厚く堆積するが，遺物はほとんど出土していない。





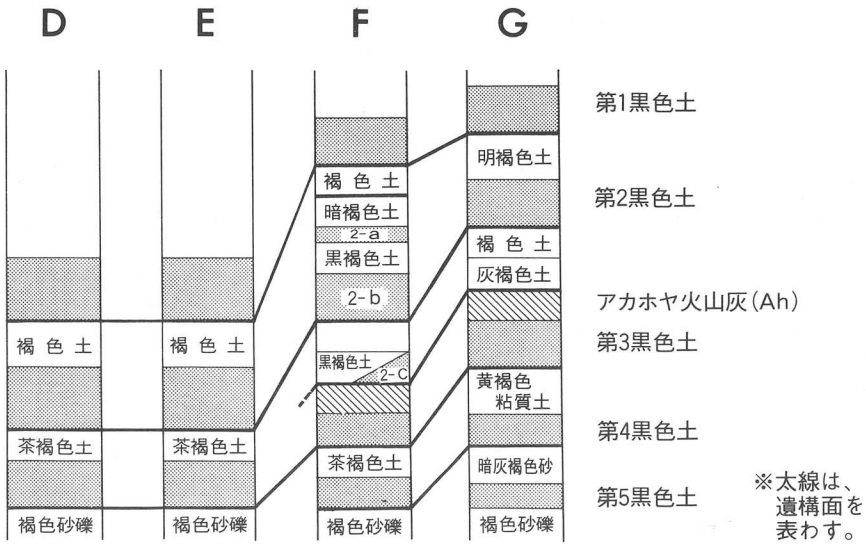
1.淡黒褐色土
2.黒褐色土
3.褐色土
4.淡褐色土
5.淡褐色土
6.暗黒褐色土
7.淡黒褐色土
8.黒褐色土
9.第1黒色土a
10.第1黒色土b
11.灰色土
12.明褐色礫層
13.暗灰褐色土
14.灰褐色土
15.褐色小礫ブロック
16.暗灰色土
17.第2黒色土
18.混Ah火山灰暗褐色土
19.淡灰褐色土
20.褐色砂礫
21.第3黒色土

第４図　D～F区基盤層上面地形測量図

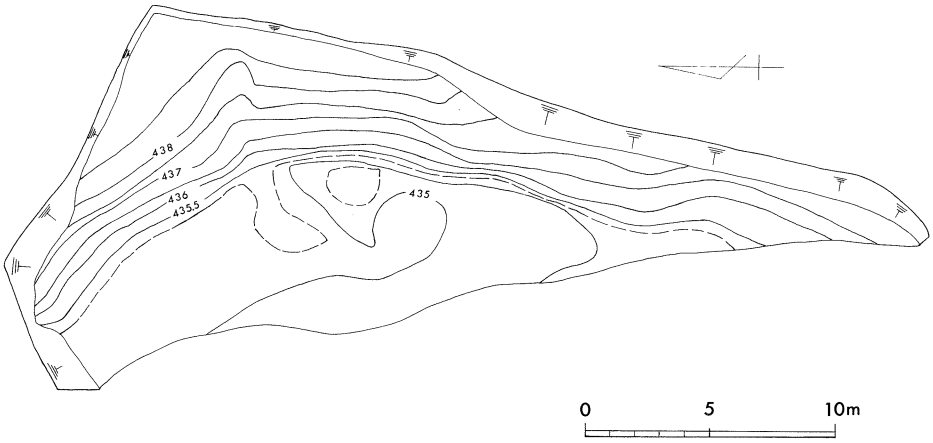


第５図　G区土層断面図

D・E区では，縄文時代以前から，何度となくその北西側が猪子谷川の河道，あるいは水路になったことがあるようで，南東側に比べ１m近く低く段になっている。E区南東部の高い部分は，現在の耕作土の下に薄く第１黒色土が堆積するのみで，その下はすぐ褐色砂礫層になっている。一方，西北側では第１黒色土の下に褐色土を挟んで第２黒色土が存在しており，その東半分ではわずかながら第３黒色土も確認した。しかし，F・G区にみられたアカホヤ火山灰が存在しなかったことや，出土する土器群が類例の少ない特異な土器群であること，さらにE区とF区の境目がちょうど段差の部分に相



第６図　D～G区土層相関図



第７図　G区第５黒色土下面地形測量図

当して土層のつながりが不明瞭であったことなどが原因で，調査当初には，F・G区とD・E区の層位的な関係，特に第２・第３黒色土の関係を充分に把握することができなかった。なお，第３黒色土（一部第２黒色土）の下はやはり褐色砂礫層で，D～G区における遺跡の基盤層は，D・E区の褐色砂礫層からF・G区第４黒色土下の褐色砂礫層および暗灰褐色砂層にかけての層といえる。この基盤層上面の地形は複雑だが，全体的には南東側が高く北西に傾斜し，D・E区第３黒色土が堆積していたところは，落ち窪んで溝状になっている（第４図）。以上のような土層堆積状況と，出土遺物を対照させ，遺構面と包含層のつながりを示したのが第６図の太線である。これを見てわかるように，遺構面としてはD・E区で３面，F・G区で５面あり，Fではさらにもう１面存在する。各区別に層ごとに述べていくと煩雑になるため，ここでは，各遺構面ごとに，その遺構・遺物を報告する。

(2)　遺構面と遺構・遺物

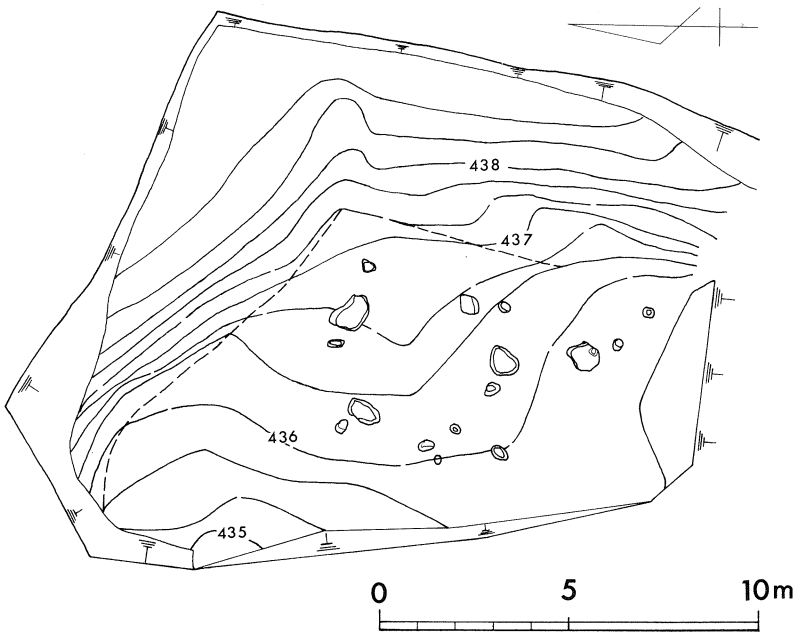
〈第５黒色土下面〉（図版６－１）

第５黒色土は上述のようにG区でしか検出されておらず，遺物も含まれていない。第５黒色土の下の褐色砂礫層は，G区のほぼ中央部が窪んでおり，その東側は高さ約４ｍの壁がゆるやかに弧を描いて廻っている（第７図）。平坦面は砂が中心で，礫は西側に広がっている。これらの状況は，この部分がかつて川の水に洗われていたことを示していると考えられ，第５黒色土はその窪みに溜まった旧表土ではなかったかと推測される。遺物がないため，時期等は限定不可能である。

〈第４黒色土下面〉（第８図，図版６－２）

第４黒色土はF・G区で検出された土層だが，F区では北西端で若干検出できたのみである。G

区では第５黒色土と同様南端にその堆積が認められず，しかも東側の壁の下では第５黒色土の上に直接堆積している。下面の平坦面は西に若干傾斜しており，中央付近がやや西に張り出してその部分だけ高くなっている。この部分に不定形のピットが15個程度検出されたが，南側の数穴を除くとそれらは大小２個を１組として，５組がほぼ円形に並んでいることがわかる（第９図）。大きなピットは長径70～80cm，短径で50～60cmはあり，小ピットは直径30～40cmである。ピットの深さは現状で15～20cmと浅く，遺物や焼土など生活の痕跡を端的に示すようなものがないため断定はできないものの，簡単な小屋掛け程度の住居跡（SI09）であった可能性が強い。層位的に第３黒色土よりも古いことは間違いなく，早期後葉頃の遺構と考えられる。



第８図　G区第４黒色土下面地形測量図

〈D～F区茶褐色土〉

F・G区第４黒色土の上には，茶褐色土・黄褐色粘質土が堆積しており，F区の茶褐色土（～灰褐色土）からは遺物も多く出土した。特に土器では，その上面から出土したものと，層の中程から出土したものでは，少々様相も異なっている。

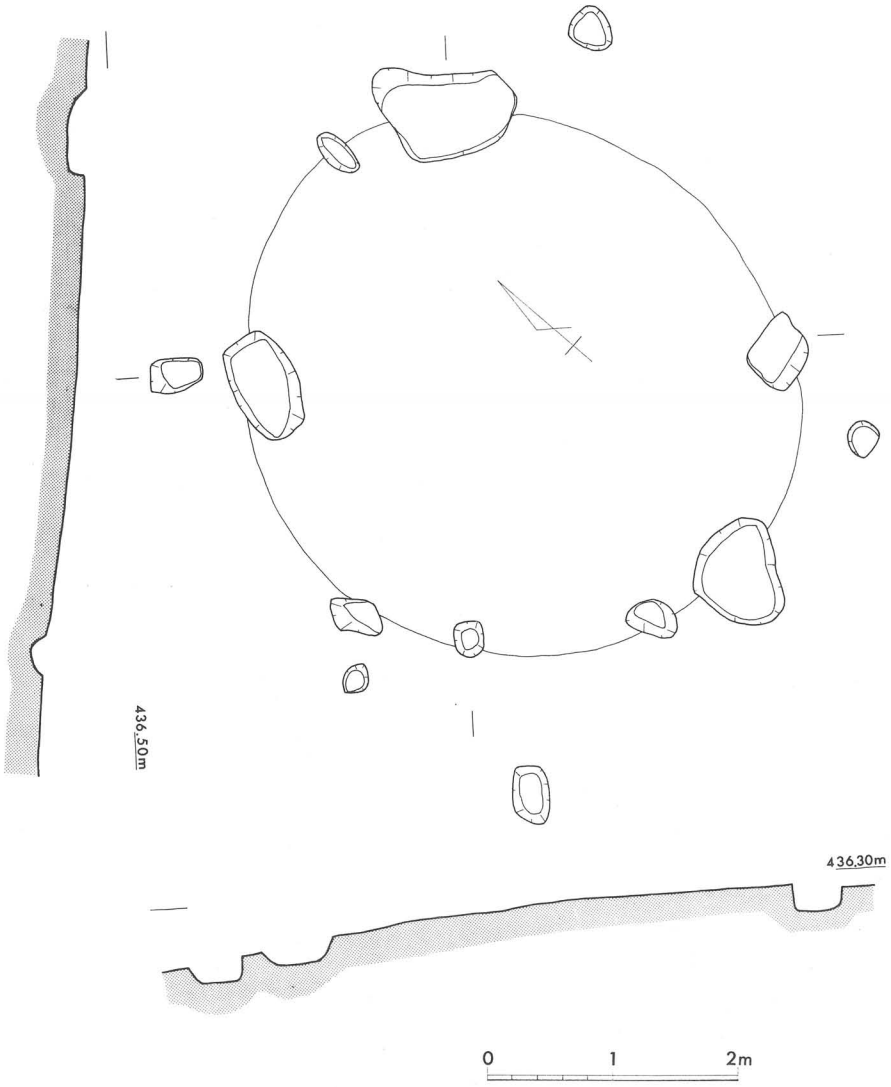
F区茶褐色土出土土器（第15図，図版10～12）

１～５は，器厚0.9～1.2cmの厚手無文土器で，内外面ともにナデ調整を行い，底部は丸底に近い尖底（4）である。胎土の粒子は比較的細かく赤褐色を呈する（図版10）。

６～14は内外面ともに条痕調整を施す土器で，多くの場合調整後さらにナデを行うが，条痕が残っている場合が多い。条痕調整は主に斜め方向に行い，６（内面），13（外面）などのように縦または横方向に施したものもある。口縁部と底部は出土しておらず，全体の形状は捉えきれない。褐色～

赤褐色を呈し，焼成は良好である（図版11）。以上の１～14が茶褐色土中程から出土した土器群で，これに対して以下の15～19が上面出土の土器である。

15・17は内外面条痕地に外面だけ縄文を施した土器である。器厚は７～９㎜で外面赤褐色，内面灰褐色を呈し，胎土には植物繊維を混入した痕が認められる。これに対して，16・18は内面にも縄文を施したもので，色調や胎土はほぼ同じである。19はこれの底部で，内外面ともにナデ調整ののち縄文を施す。底面はほぼ平坦で，肉厚である（図版12）。縄文の撚りはいずれもLRである。



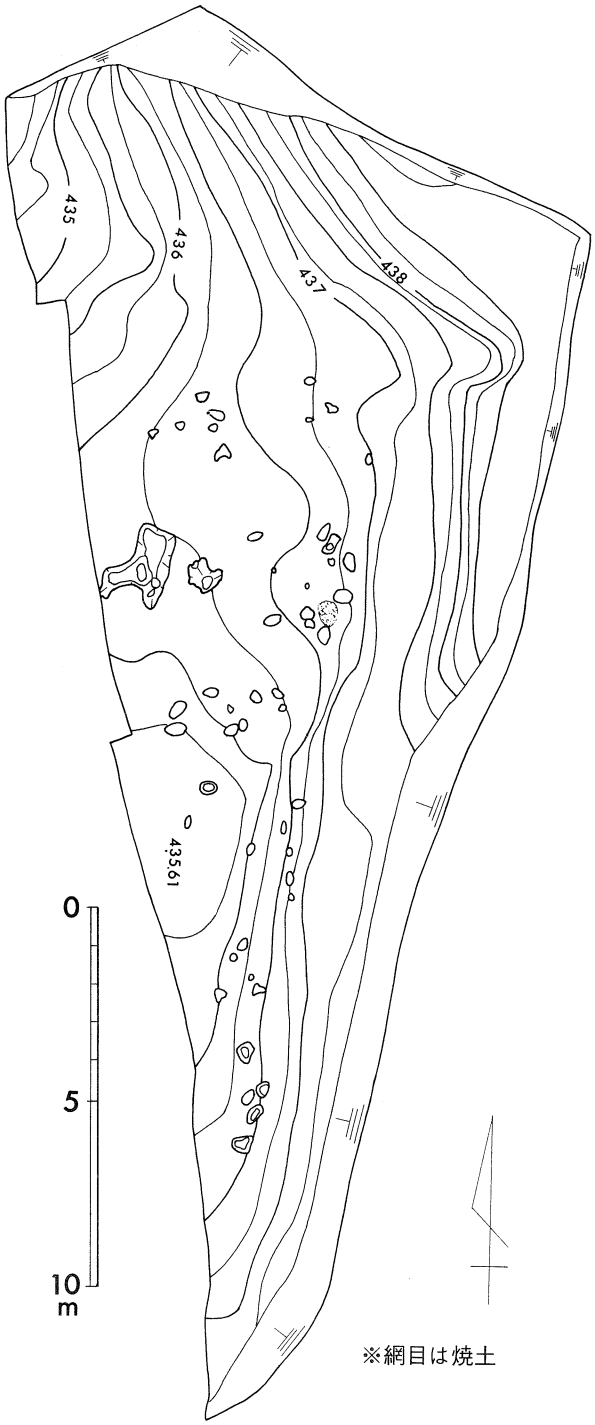
第９図　G区第４黒色土下面SI09実測図

F区茶褐色土出土石器

（第16・17図，図版13－1）

第16図1～5は石鏃で，1・4が安山岩製，2・3・5が黒曜石製である。1はかえりの両方を欠失し，現存長1.9cm，現重量400mgである。若干わたぐりがはいり，表裏ともに側縁からの細かな剝離が加わる。4は完形品で全長1.95cm，重さ540mgを測る。両側縁がやや内弯ぎみで，厚さは4㎜である。2・3は両側縁がかえりの部分で屈折するもので，わたぐりは三角形に深く刳り込んでいる。両側縁の剝離はやや粗く，その先端は中央奥深く伸びている。それぞれ全長2.2cm，1.82cm，重さ820mg，640mg，厚さ4.5㎜，4.3㎜である。5もかえりを欠損しており，現存長1.12cm，現重量300mgを測る小形品である。両面ともに丁寧な調整剝離が施されている。8は黒曜石製の石鏃未成品と考えられるもので，横長のやや弯曲の激しい剝片に調整剝離を加えているところで，先端部は両側縁からの剝離が認められるものの基部側では若干調整が加わっただけである。

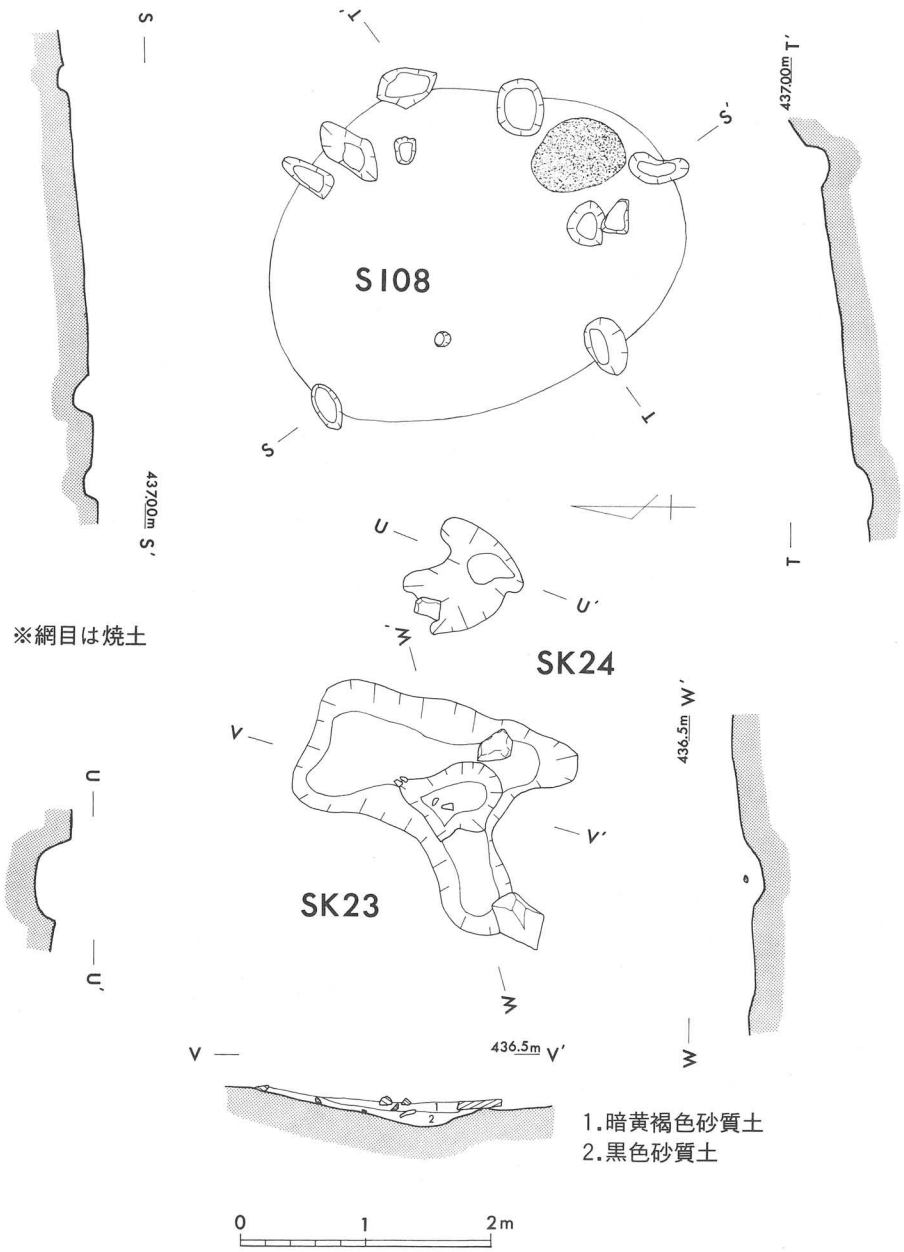
7は黒曜石製の小形石核で，右の一側縁に作業面を整えるための調整剝離が施されている。打面は



第10図　G区第3黒色土下面地形測量図

上面の一面のみで，縦長の不定形剝片を剝取したと考えられる。

6は薄い黒曜石剝片の縁辺に若干の刃部調整を加えて小形の刃器としたもので，全長2.17cmを測る。9は水飽和が進行して透明感の薄れた黒曜石製の小形スクレイパーである。やや横長の剝片の腹面バルブ付近を剝取し，先端部分に細かな刃部調整を施すとともに，左側縁の2箇所に背面から



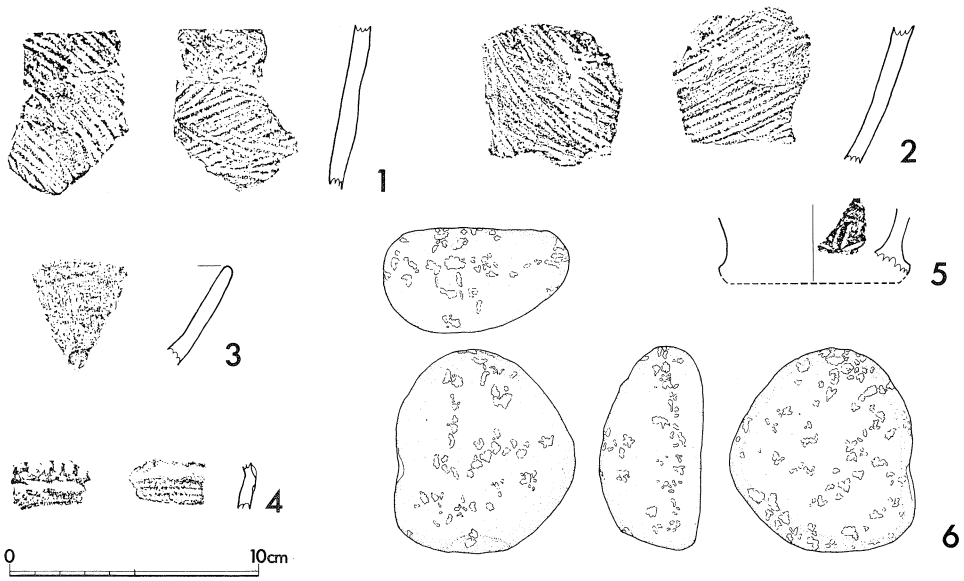
第11図　G区第3黒色土下面住居跡状ピット群および土壙実測図

微細なブランティング状の剝離を加える。背面には剝片を取り出す以前の四方からの調整剝離がそのまま残っている。10は安山岩製の大形の剝片で，やや横長の剝片を２方向から切断し，直角三角形状の剝片を作り出している。直角を挟んだ二辺には両面に平坦剝離が施され，残る長辺が未加工のまま刃部として利用されたと考えられる。11も安山岩製の剝片で，やはり横長の剝片を切断して，直角三角形（あるいは台形）の形に作り出し，上端と両側辺に粗い調整を加えている。腹面はほとんど主要剝離面を残したままである。

第17図は磨石と石皿である。１は石英長石斑岩の扁平な河原石で，大きな面２面を使用している。２は花崗閃緑岩とトナール岩質閃緑岩の混成岩で，平らな２面が使用により滑らかになっている。また，片面と周縁部に敲打痕が観察され，敲石としても使用されたことがわかる。３は溶結凝灰岩製，４は閃緑岩製石皿で，３は表裏両面を使用するが，図の下面の方が表面は滑らかである。４も両面とも使用するが，図の右面には敲打痕も観察される。

〈第３黒色土下面〉（第10図，図版７－１）

第３黒色土はＤ区からＧ区まですべての調査区で検出したが，Ｄ・Ｅ区では溝状に窪んだ部分に堆積していたのみで，Ｆ区では厚く堆積していたものの遺物はごく少量であった。遺構を検出しえたのはＧ区で，黒色土中には地山の風化礫を多く含み，その中に土器・石器が少々混ざっていた。Ｇ区第３黒色土下面の黄褐色粘質土は，調査区中央に西に尾根状に伸びる高まりがあり，その南側

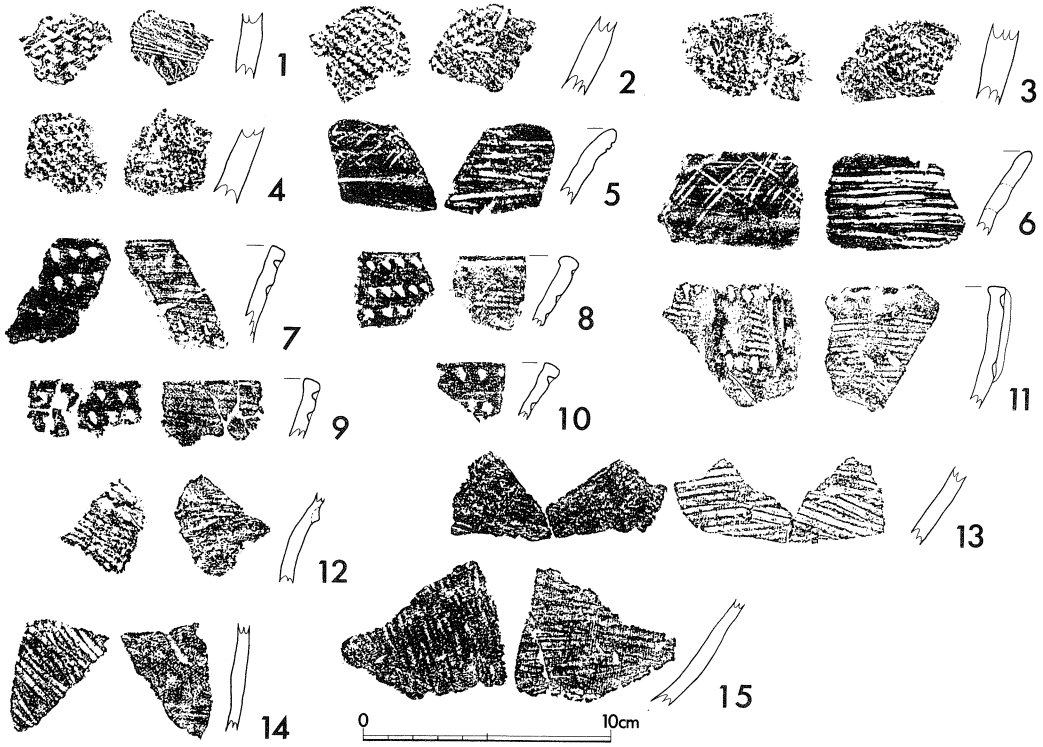


第12図　Ｇ区第３黒色土出土遺物実測図

は谷奥のような若干の深みになっている。中央の高まり部分から調査区南端にかけての広い範囲でピットを検出した。ピットの総数は約50個で，包含層と同質の黒色土が内部に溜まっており，平面形は特に定まっていないが，楕円形が多いようである。直径は20cm程度のものから，50～60cmのものまでまちまちで，検出した場所ごとにいくつかのグループに分けられそうではあるが，性格がはっきり摑めない。ただし，中央の高まり部分ではピットのほかに土壙が２基検出され，他と様相を異にしている（第11図）。

SK23　高まりの西側に検出した土壙で，全体に掘り込みは浅く，中央付近が一段深くなっている。土壙の南北の長さは約2.3m，東西の長さ約1.9mで，南側端にやや大きめの礫が並び，土壙下半には炭化物を多く含んだ黒色砂質土が堆積する。この黒色砂質土からは，縄文土器のほかに長さ５～６㎜までの黒曜石チップが多数出土した。土壙の周囲にピットがないことから，屋外で営まれた石器の工房跡と考えられる。

SK24　SK24はSK23のすぐ東側にあり，他のピット群よりもひと回り大形の落ち込みである。形は整っていないが底面は丸く作っており，黒色土が堆積するが，こちらではチップは出土せず，敲石が１点出土した。

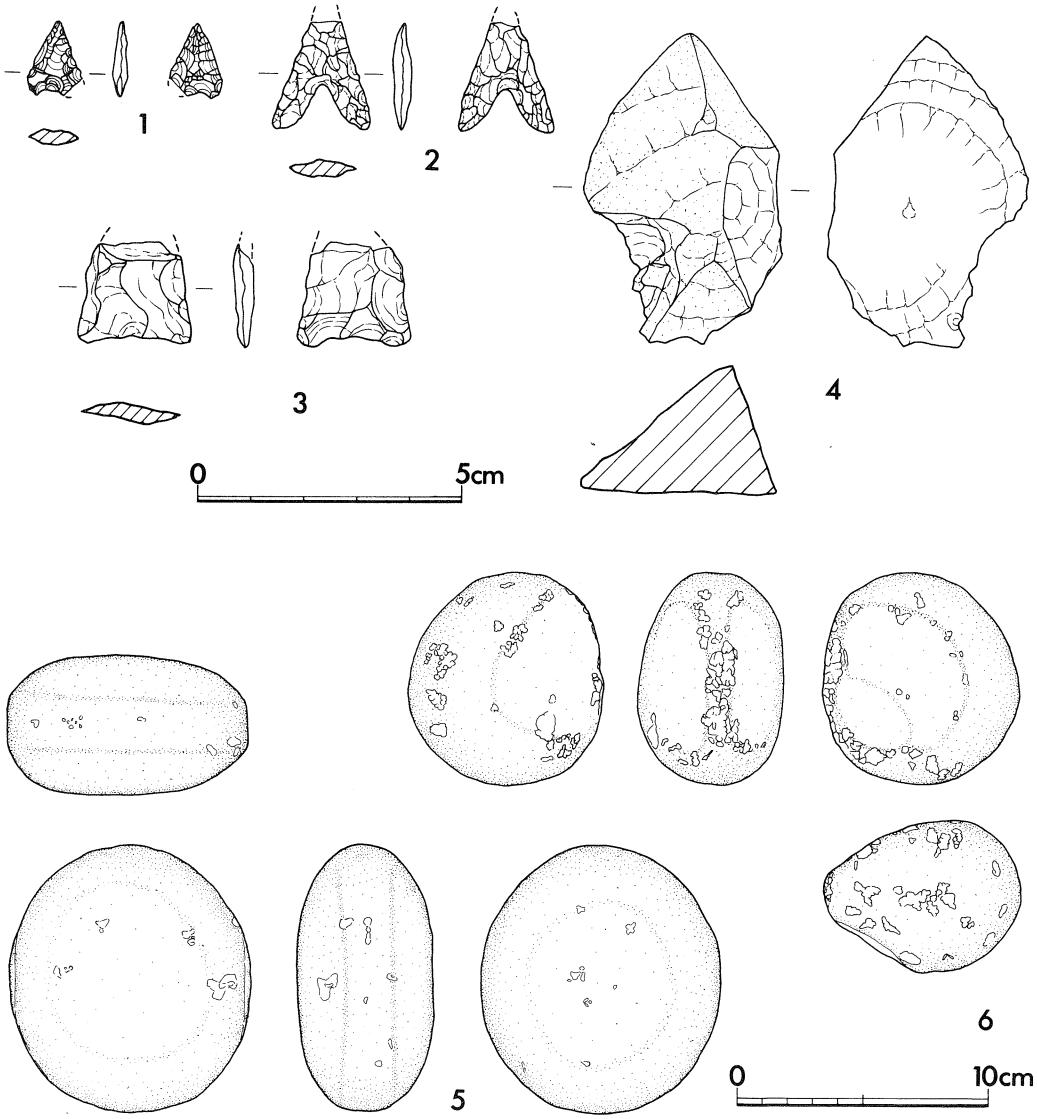


第13図　D～F区第３黒色土出土土器実測図

SK24のさらに東では，焼け具合の弱い焼土が60×80cmの範囲で確認され，これを囲むように6あるいは7個のピットが検出された。ピットの並び方が非常にアンバランスで，不確定な要素が多いが，石器工房跡に伴う住居跡の可能性もあり，SI08としておく。

G区第3黒色土出土遺物（第12図，図版8－1）

1・2はSK21の黒色砂質土から出土した条痕土器である。器厚6～7㎜で赤褐色を呈し，焼成は良好である。これの底部片と考えられるのが5で，端部が外側に張り出し，平底になるようである。

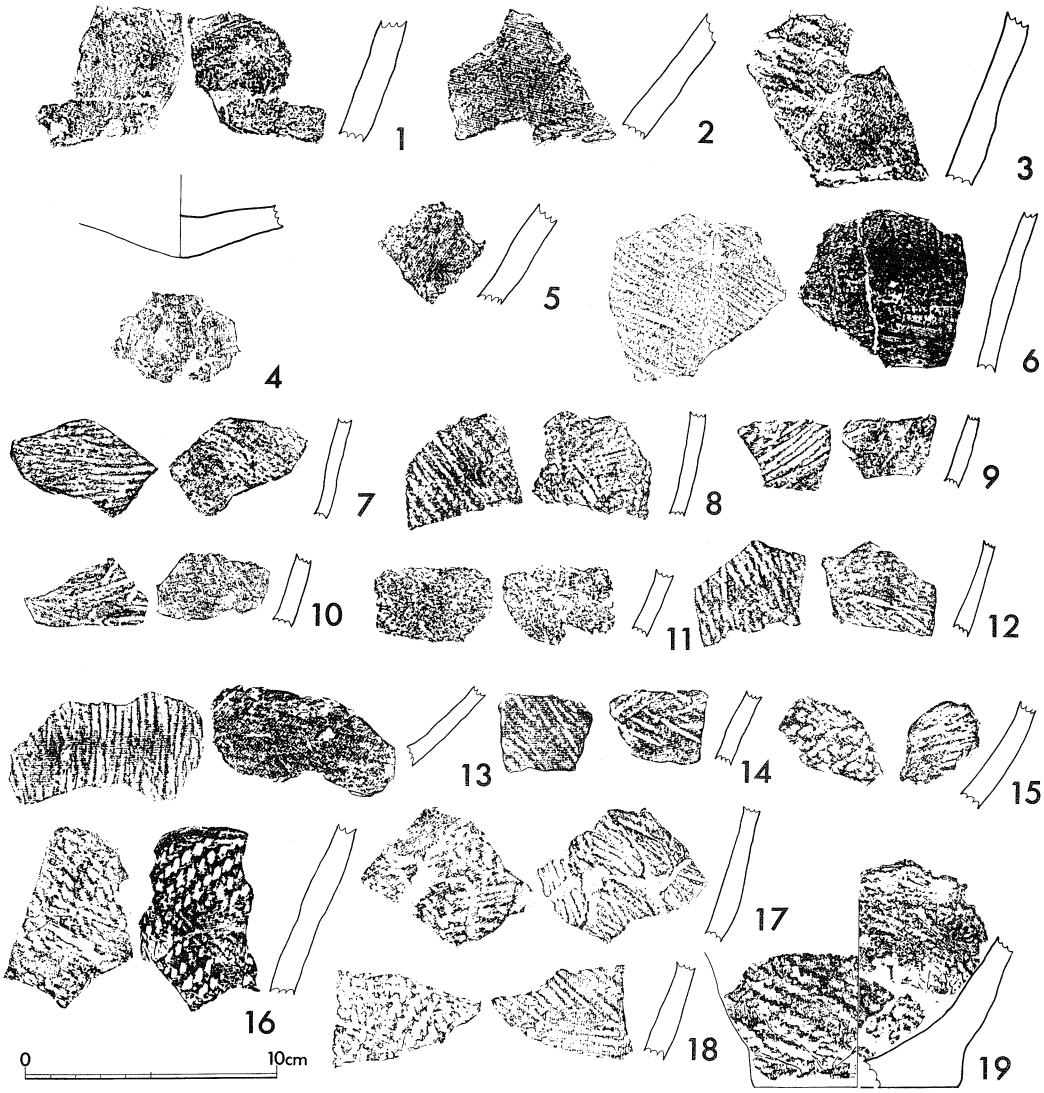


第14図　D・E区第3黒色土出土石器実測図

3は内外面ともにナデ調整の土器で，大きく開口した口縁だが，胴部以下の形態は全く不明である。4も小片でどの部位かもはっきりしないが，逆くの字状に屈曲した外面に，刻目とその下に押引文を施して刻目突帯状の文様を作り出している。6は，SK22から出土した敲石で，扁平楕円形をした河原石のほぼ全面を使って敲打している。花崗閃緑岩製である。

D～F区第3黒色土出土土器（第13図，図版9）

前述したように，D・E区の第3黒色土は溝状の落ち込みに堆積したもので，この中から遺物が少々出土している。また1の1点のみF区から出土した。



第15図　F区茶褐色土出土土器実測図

1～4は，器厚9～12㎜の厚手の土器で，胎土に植物繊維を混入するものである。1は，その中でも薄手で，内外面に条痕調査を行ったのち外面に縄文を施す。2～4は繊維の量が多く，砂粒は少ない。内外面ともナデ調査のうえにLRの粗い縄文を施す。

5・6は大きく開く口縁で，器壁表面を整形段階で平坦にせず，粘土紐の幅をそのまま突帯状に残したものである。外面に上端の2段に半截竹管による平行沈線を口縁に平行に施したのち，さらにその上に斜格子文を重ねたもので，内面には二枚貝あるいは竹管背側による条痕を横位に施す。全体に灰褐色を呈し，外面にはスス状の炭化物が付着する。

7～10は刺突文土器である。いずれもやや外に開く口縁で，内外面ともに二枚貝調整ののちナデを施すが，内面にはほとんど条痕が残っている。外面に先端が細くなった棒状のもので口縁に平行に2段以上の刺突文列を施す。刺突文列の段の数は不明だが，その下は7のように無文になると思われる。内外面ともに灰色～灰褐色を呈している。11は同様に口縁外面に刺突文を施す土器だが，2段目の刺突文列の部分に断面三角形の隆帯を作り出し，また口縁端部から縦方向に突帯を2条貼り付けている。内外面とも二枚貝の条痕調査を行い，黒褐色を呈する。

12は口縁部に近い部位と考えられるが，内外面に条痕調査を施し，外面には断面三角形の突帯を貼り付けた土器である。

13～15は胴部片で，内外面ともに二枚貝条痕調査を行う。

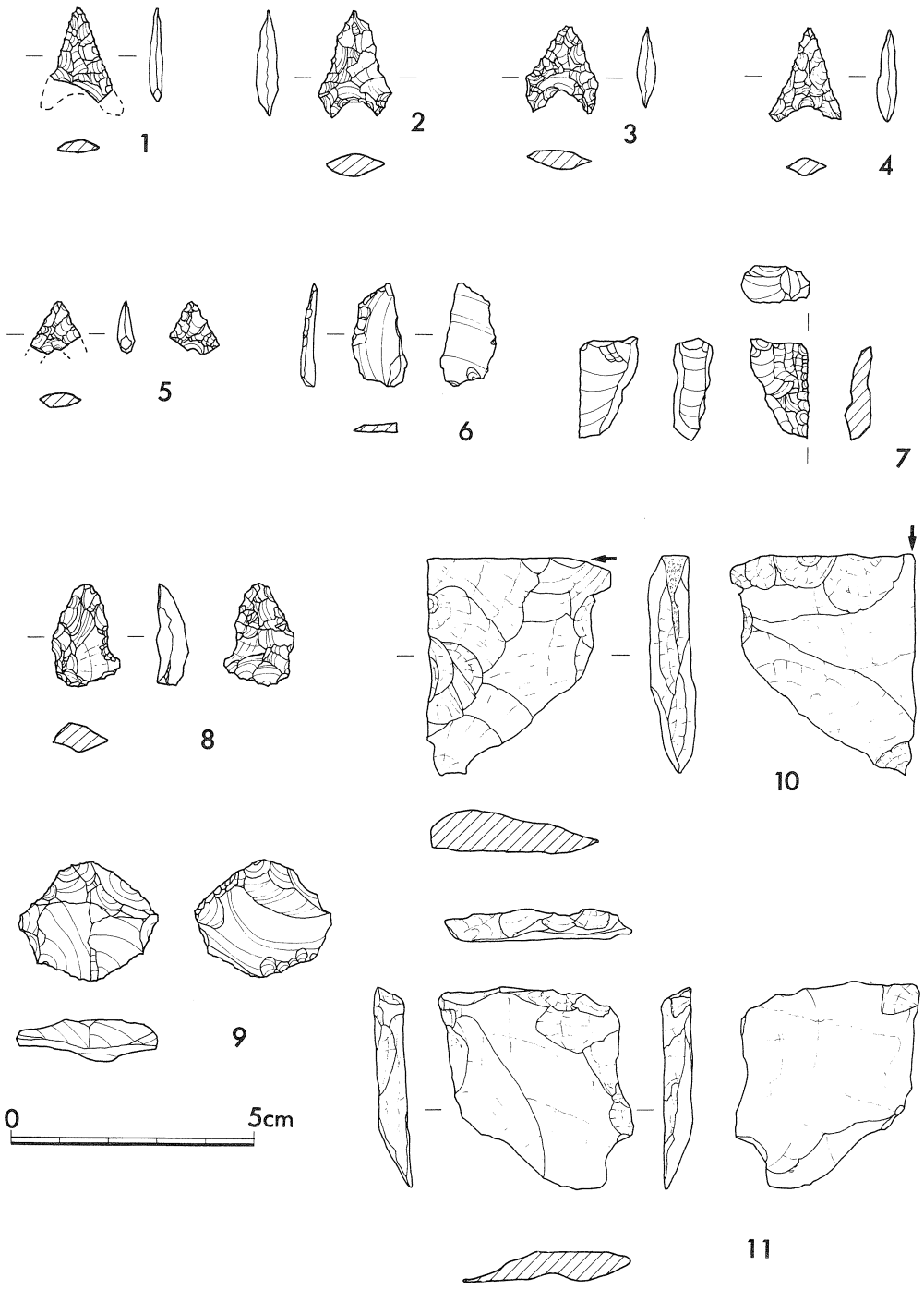
なお，刺突文土器の8・9および13～15には，他の土器よりも金雲母片が多く含まれていると特徴がある。

D・E区第3黒色土出土石器（第14図，図版8－2）

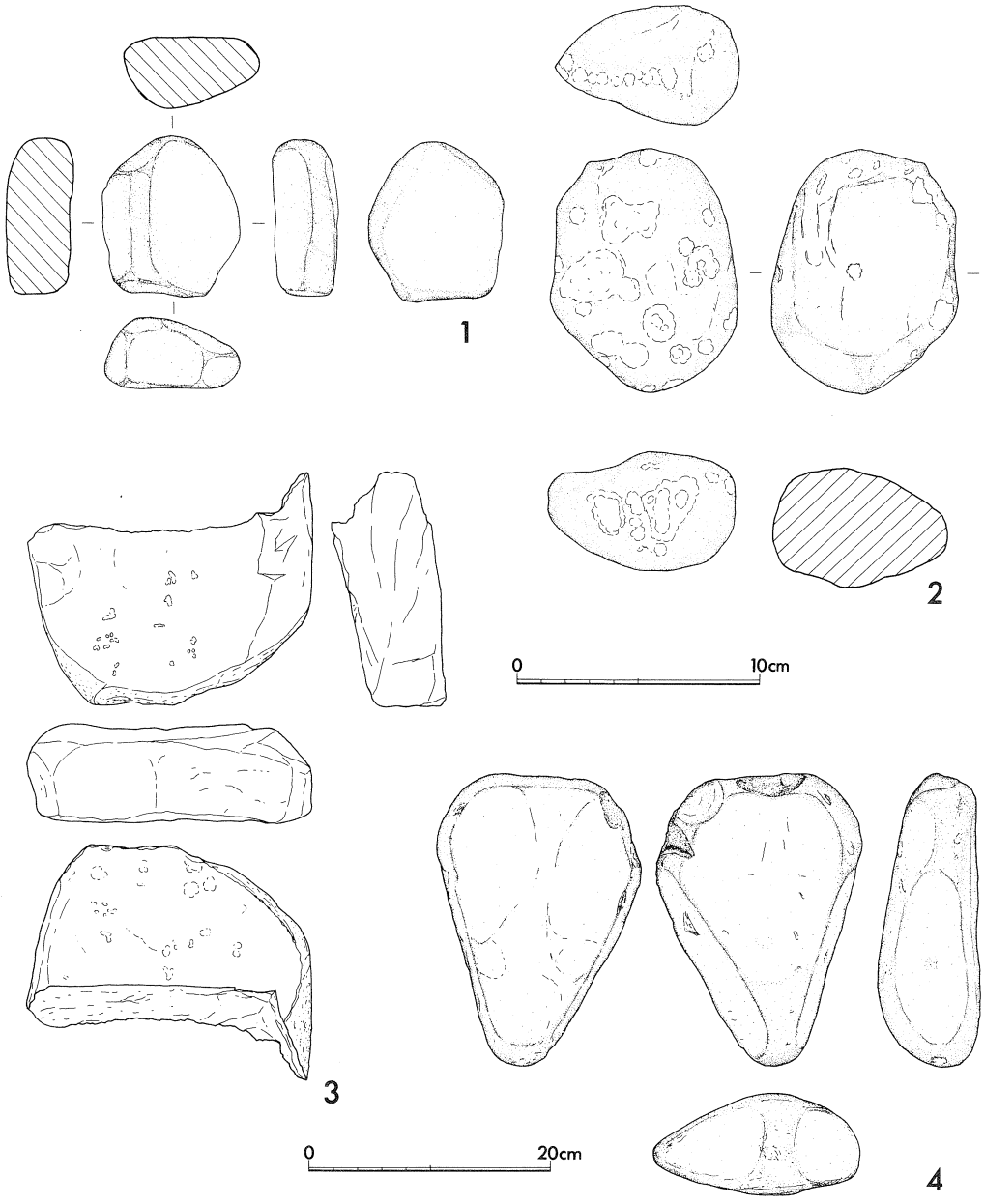
1～3は石鏃である。1は黒曜石製で全長1.4㎝の小形品である。基部は若干わたぐりがはいり，両面ともに両側縁からの二次調整を施すが，片面中央にわずかに主要剥離面が残る。2・3は安山岩製でともに先端を欠損し，現存長で各々2㎝，1.9㎝を測る。2はわたぐりが深く，かえりがハの字状に大きく開く。3は平基式のやや大形品で，両面ともに側縁から粗い調整が加えられているのみである。

4は黒曜石製の剥片である。自然面は残っていないが，転石を利用したもので，背面は水飽和状態に達した剥離面が残り，腹面には主要剥離がそのまま残る。背面に若干の剥離面があり，これからさらに小さな剥片を取っていこうとしたと考えられる。

5は閃緑岩製，6は花崗閃緑岩製の磨石兼敲石で，どちらも扁平で円い河原石を使用している。5は両面ともかなり磨滅して滑らかで，周縁は潰れて平坦面ができている。6は周縁部，特にやや尖った部分に敲打痕が集中する。



第16図　F区茶褐色土出土石器実測図(1)



第17図　F区茶褐色土出土石器実測図(2)

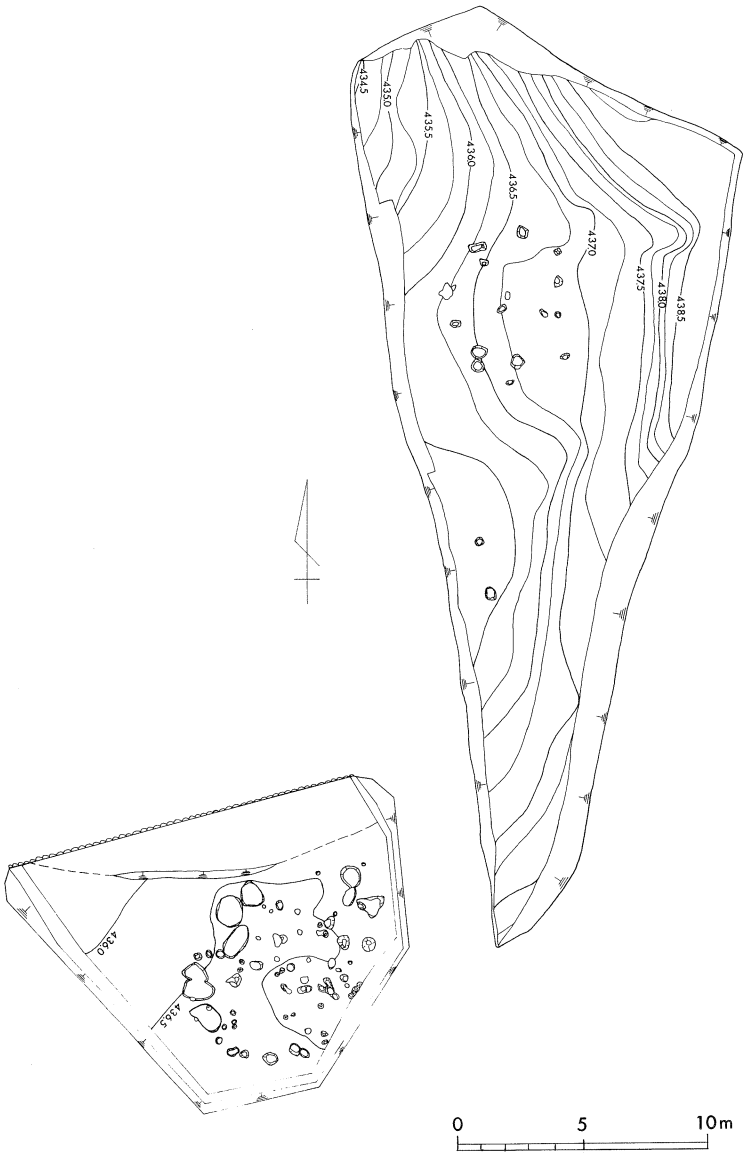
〈アカホヤ火山灰上面〉（第18図，図版13－２・14）

第３黒色土の上にはＦ区東半で厚さ約10cm，Ｇ区では中央付近で厚さ15～20cmにわたって黄色火山灰の堆積が観察され，後述の第５節（１）のように，分析の結果アカホヤ火山灰（Ah）であることが判明した。このAhの上に堆積した灰褐色土から遺物が出土するとともに，Ah上面でも遺構が

検出された。遺構面はG区では全体的に西に向って緩やかに傾斜するが，中央付近に西へ張り出す高まりがあり，F区では若干西に傾く程度でほとんど平坦である。

遺構はG区中央部に住居跡と考えられるピット群を確認したほか，F区では竪穴住居跡と思われる落ち込みとピット群，土壙等を検出した。

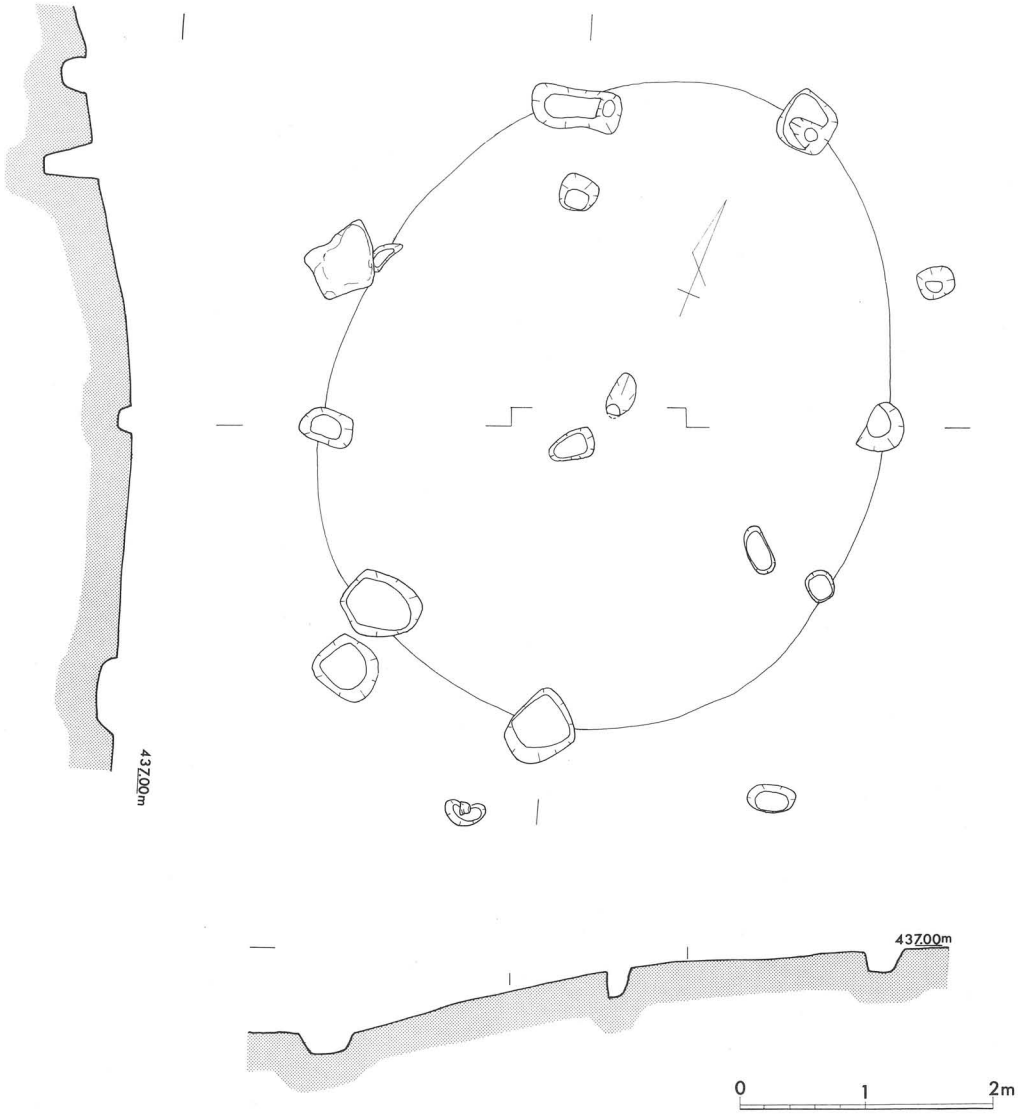
SI06　G区中央の高い部分に楕円形に並ぶピット群である。各ピットは，掘り方は円形に近いが，大きさや形が不揃いで，掘り込みも浅いものが多い。中央には支えとなるピットが2個あり，周囲のピットの半数に補助的なピットが付随している。床面は地形に合わせて北西側に傾斜しており，床面からは焼土は発見されなかった。長径5.3m，短径4.4mを測る（第19図）。



第18図　F・G区火山灰上面地形測量図

SI07　F区南東端に直径3m程度のAhの落ち込みがあり，その肩部やや内側に9個程度のピットがほぼ円形に並ぶ。ピットは直径20～30cm，掘り方円形で，深さは15～20cmである。ピット内には褐色土またはやや青味がかった暗褐色土が堆積し，土器片を混入するものもある。炉跡や焼土などは検出しえなかったが，竪穴住居跡の可能性が強い（第20図）。

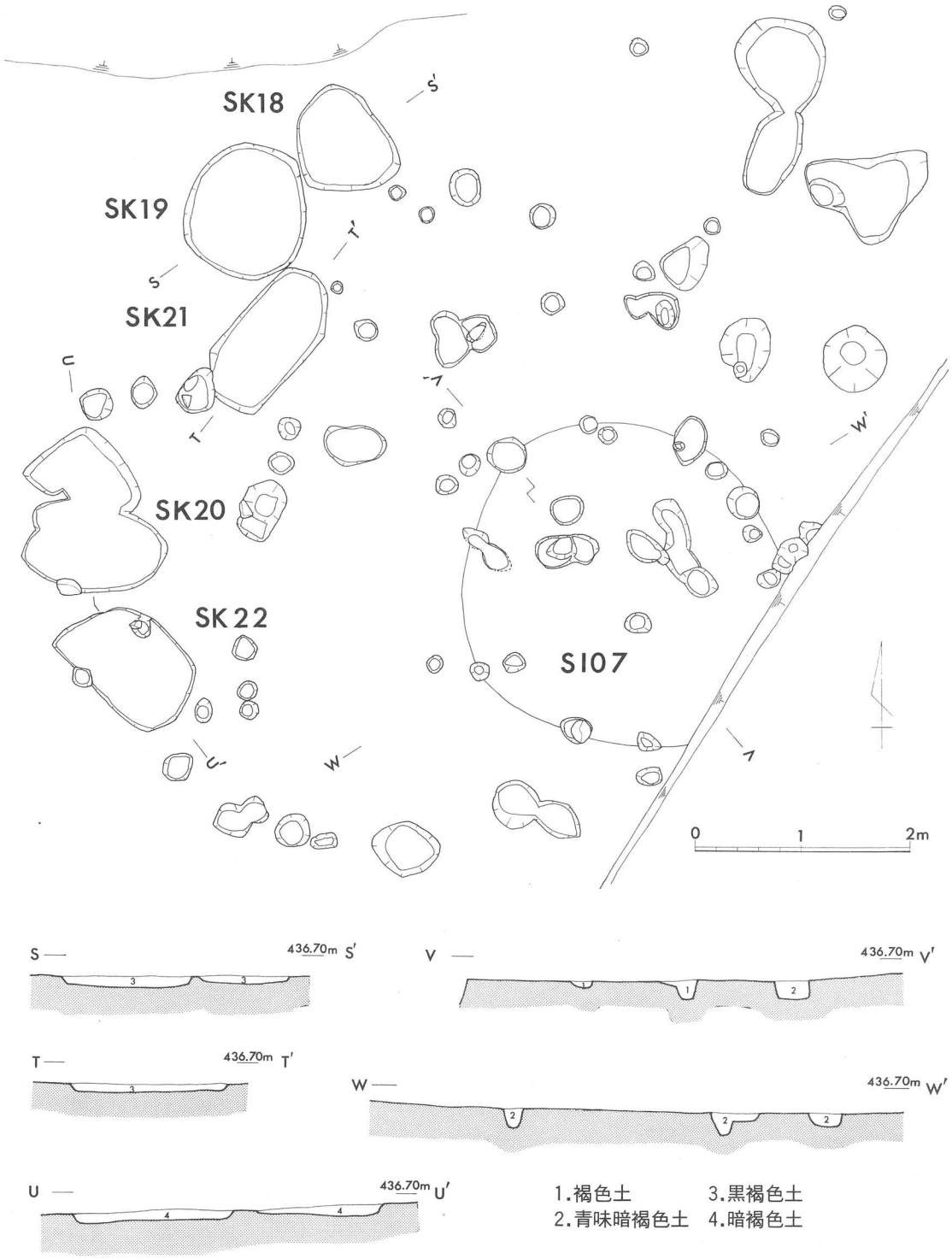
土壙　F区遺構群の西端に，掘り込みの浅い平



第19図　G区火山灰上面SI06実測図

面円形または楕円形の土壙を5個検出した。SK18・19は，それぞれ直径0.8mと1.1mのほぼ円形で，黒褐色土が堆積し，土器片・石器が含まれていた。SK20～22は長楕円形の土壙で，それぞれ全長1.45m，1.3m，1.5mである。SK20は北側にピットが重なっているため，平面形が複雑になっている。SK21でも土器が出土している。

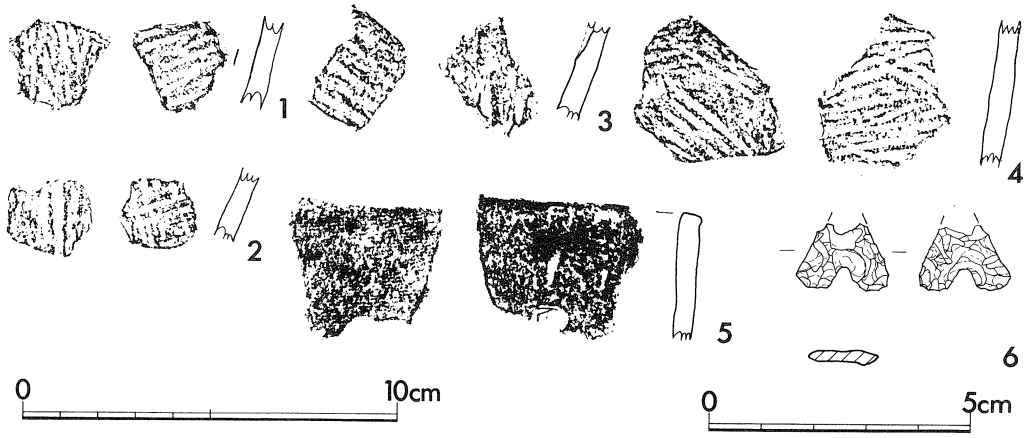
なお，Ah上面ではその他に50余りのピットを検出し，中にはかなり深く掘り込んだものもあるが，遺構の性格を摑むまでには至らなかった。



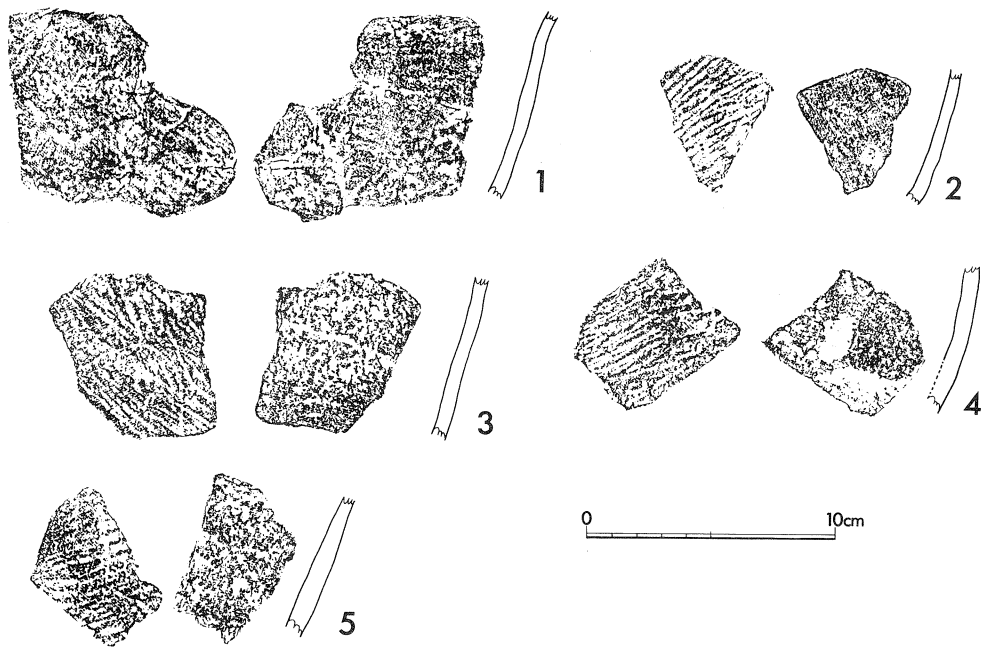
第20図　F区火山灰上面遺構実測図

G区灰褐色土出土遺物（第21図，図版15－1）

G区灰褐色土から出土した遺物はいずれも細片で，図示できたのは数点である。1～4は内外面ともに二枚貝あるいはそれに類似した工具により条痕調整を行う。焼成良好で赤色を呈している。5はほぼ直立する口縁で，内外面ともにナデ調整である。



第21図　G区灰褐色土出土遺物実測図



第22図　F区火山灰上面出土土器実測図

6は安山岩製の石鏃で先端部を欠損し，現存長1.2cm，現重量520mgである。かえりは尖らず丸く仕上げ，両側縁から細かい調整剥離が加わる。

F区火山灰上面出土土器（第22図・図版15－2）

SK18・19・21とその周辺に集中して出土した。いずれも内外面斜め方向の二枚貝条痕調査を行ったのち，内面にさらにナデ調整を行うが，内表面の剥脱が著しい。器壁の厚さは5～7mm程度のやや薄手で，1・4・5は黒色～黒灰色，2・3は黒褐色を呈する。なお，出土した土器は胴部片のみで，口縁部・底部は形態不明である。

第23図　D～G区第2黒色土下面地形測量図

〈第２黒色土下面〉

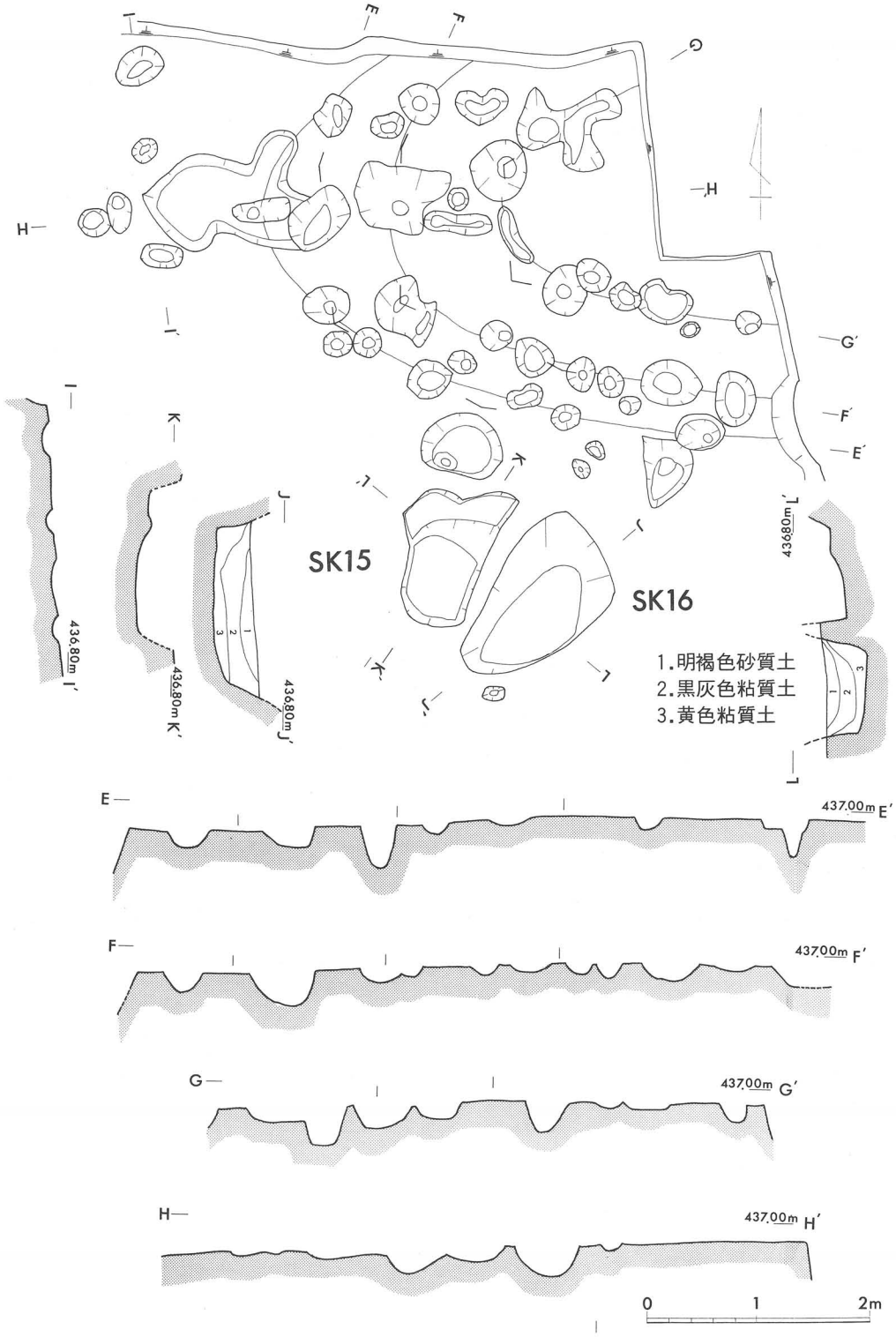
（第23図，図版16～18）

第２黒色土は，D・E区の北西側の低い部分とF・G区の全域に堆積しており，特にD・E区に遺物が集中して出土した。第２黒色土の下面は，G区北半では大鍛冶遺構の掘り込みのため，またF区東半では遺構面自体が不明瞭であったため，それぞれ遺構面の検出が不可能であったが，これら以外のところでは褐色土の遺構面と多数の遺構を検出した。遺構面は，G区南半では西に向ってやや急角度で傾斜し，土壙１基と大小のピット群を検出した。ピット群は平面形や深さは様々で，中には柵列状に一列に並ぶものもあるが断定はできない（第24図）。

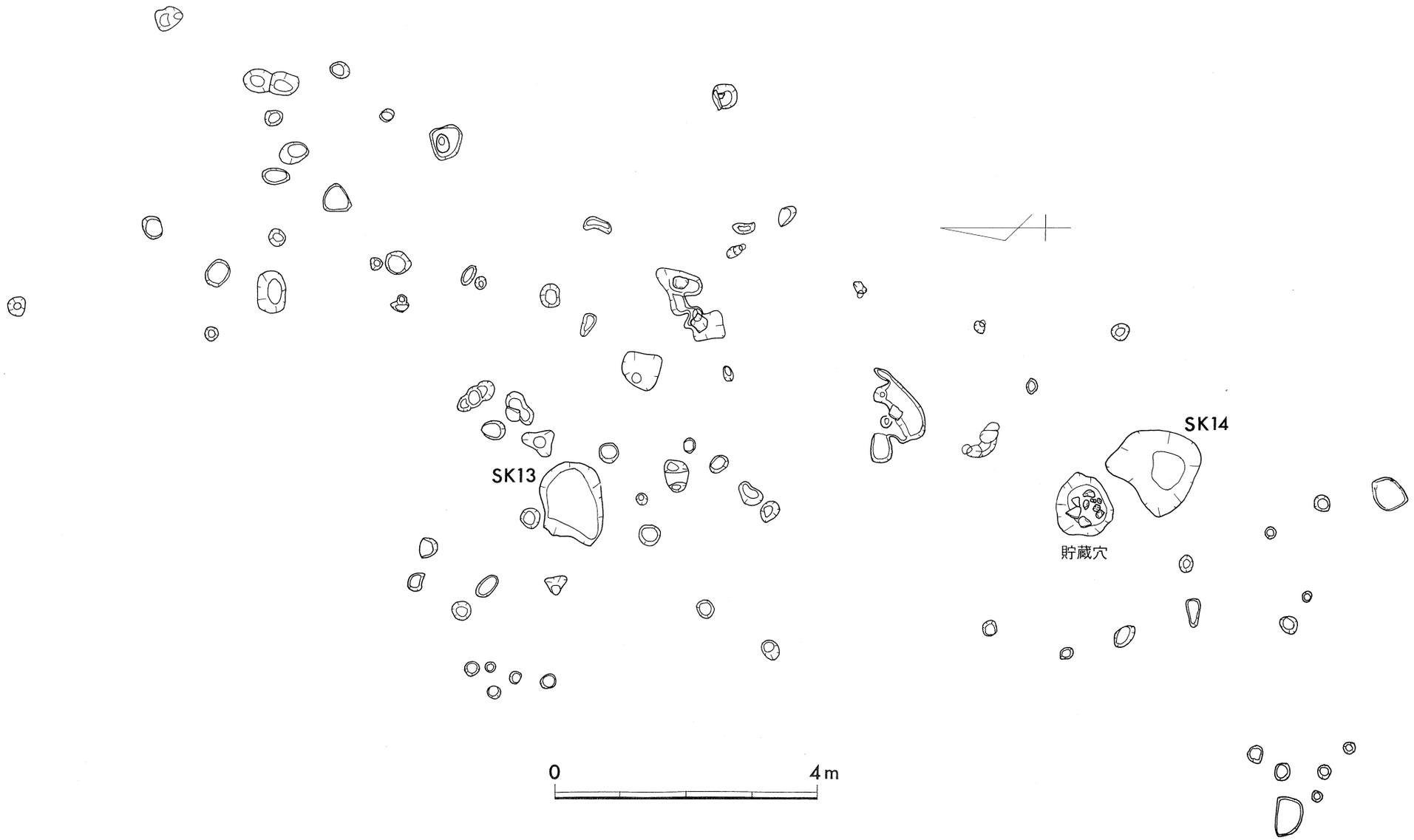
F区は北西に，D・E区では北に向かって緩かに傾斜し，土壙や貯蔵穴をはじめ，多数のピットを検出したが，ピット群については性格がはっきり摑めなかった（第26図）。

土壙　D区SK13は楕円形

第24図　G区第２黒色土下面遺構実測図



第25図　F区第2黒色土下面遺構実測図



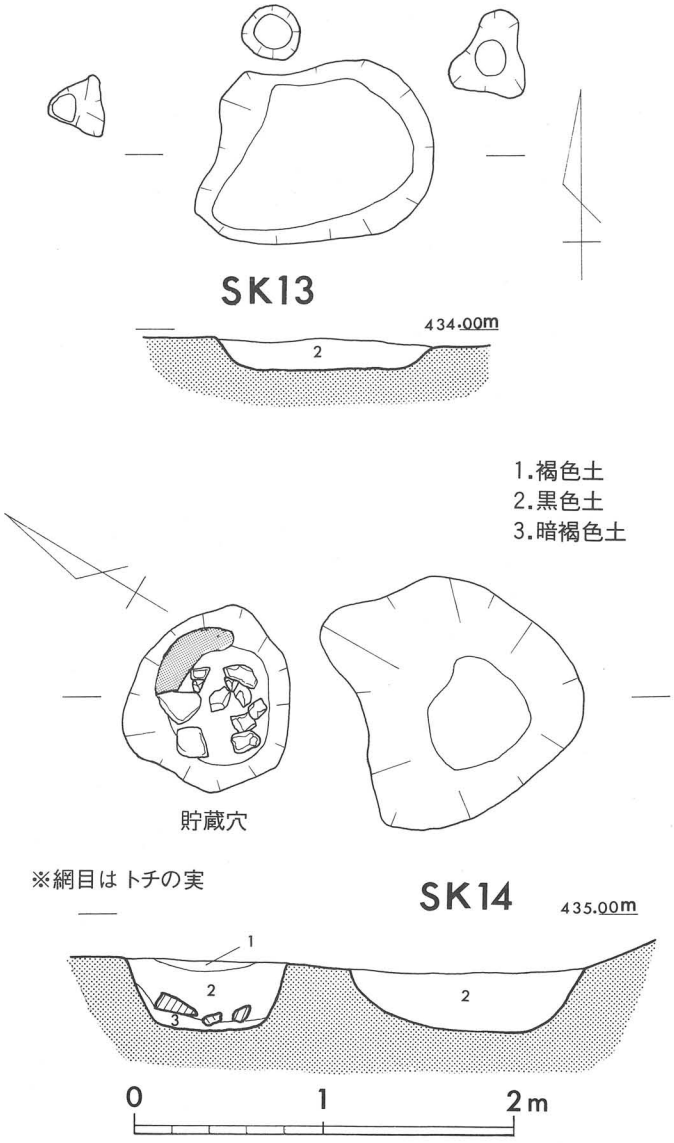
第26図　D・E区第2黒色土下面遺構実測図

の土壙で長径約1.3mあるが，深さは約15cmと浅く，内部に黒色土が堆積する。E区SK14は直径1.2mのほぼ円形の土壙で，底面もやや丸くなっており，深さ約30cmである。SK13・14ともに埋土中から遺物は出土していない（第27図）。

F区SK15・16は，人の足跡のように並んだふたつの土壙だが，15はやや小形で，全長1.1m，16はそれよりも大きく全長1.6mを測り，深さも約40cmで底面は火山灰層を掘り込んでいる。遺物は出土していない（第25図）。

G区のSK17はふたつの円形土壙が重なったような感じで，長径約1.6mを測る。底面は平らで埋土には土器が含まれていた。南側壁近くの礫については性格不明である（第24図）。

貯蔵穴　SK14に隣接して掘られた円形の土壙で，直径0.9m，深さ40cmを測る。底面はほぼ平らで，そこに堆積した暗褐色土と壁面に貼り付くようにして炭化した木の実が出土した（図版20）。暗褐色土と木の実の上面には，一部に黄色の粘土が覆っているところがあり，その上に包含層と同じ黒色土が堆積していることから，貯蔵穴を被うのに粘土を用いていたのかもしれない。図の貯蔵穴内の礫はすべて黒色土中のものである。なお，調査後，名古屋大学文学部渡辺誠教授に木の実の鑑定をしていただいたところ，トチであることが判明した。また，併せてアイソトープ総合センターにてC^{14}年代測定を行ってもらったところ，



第27図　D・E区第2黒色土下面土壙および貯蔵穴実測図

B.P.5140±100年の年代を得た（第５節（２）参照）。

性格不明遺構　Ｆ区で検出した多数のピット群で，長軸を東西方向に向けた楕円形のピット列が３列に並んでいる。各列ともピットの間隔は広くても40cm程度までで，ピットの掘り方は円形である。直径は60cm程度まで大小あり，深さもかなりまちまちである。各ピット列の西端には幅20cmの溝状の窪みや大きな落ち込みがあり，これらも東西に一直線に並んでいる。西端の土壙状の落ち込みの西端には，東西軸に対して南北に対照的にピットが配され，あたかも入口の門柱の跡のような印象を与えている。これら３つのピット列がひとつの構造物であるのか，あるいは時期を異にして作られたものなのかは，調査段階では把握できなかった。しかし，各ピット列が同心の楕円形を呈していることや西端が一連の入口状の構造を示している点など，何を意図したものかは不明ながら一連の遺構とみなした方がよかろう（第25図）。なお，この遺構内からは遺物は出土していない。

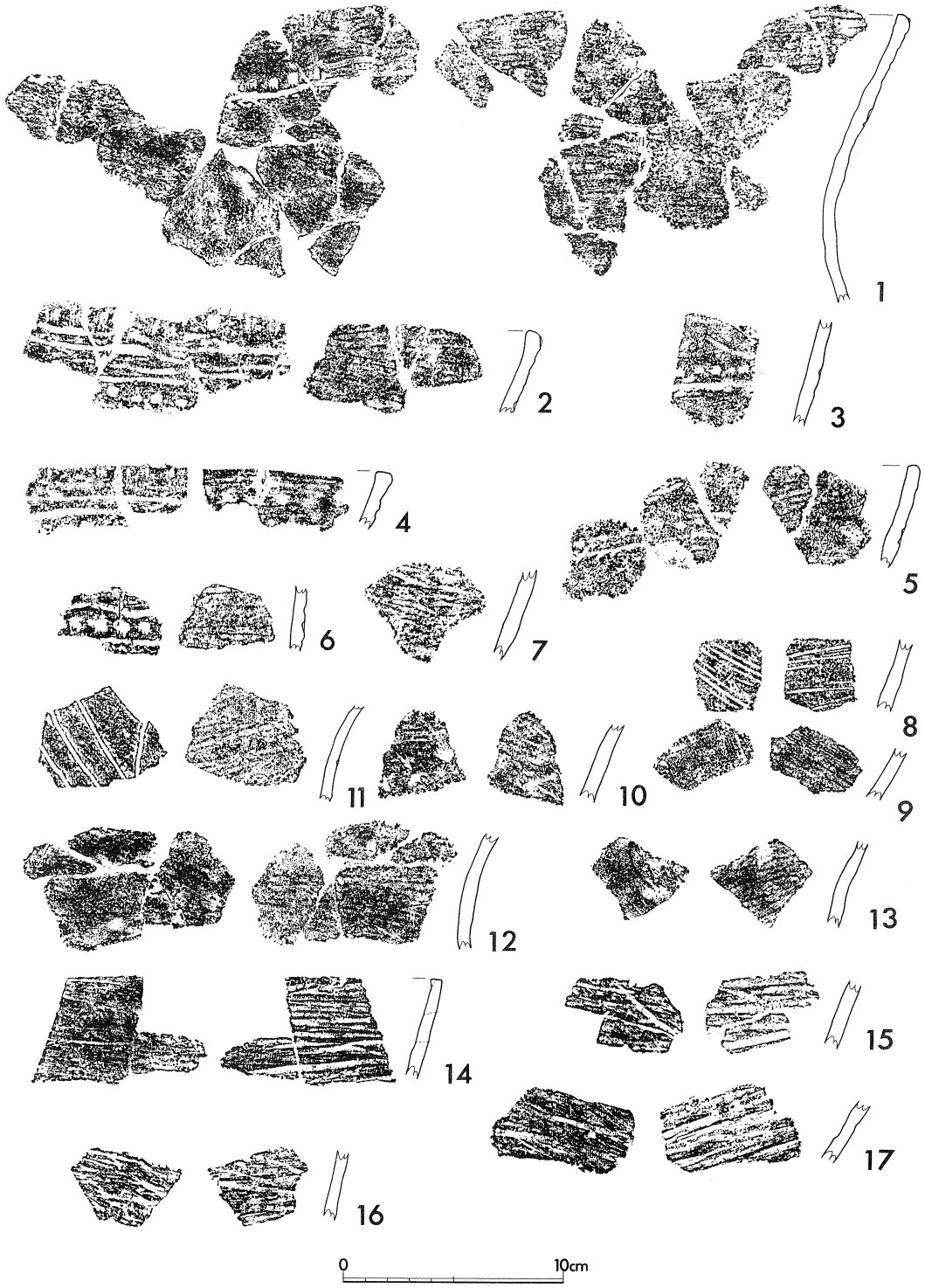
出土土器（第28～30図，図版21～25）

Ｄ・Ｅの東半，第２黒色土の下面で土器が集中して出土している。

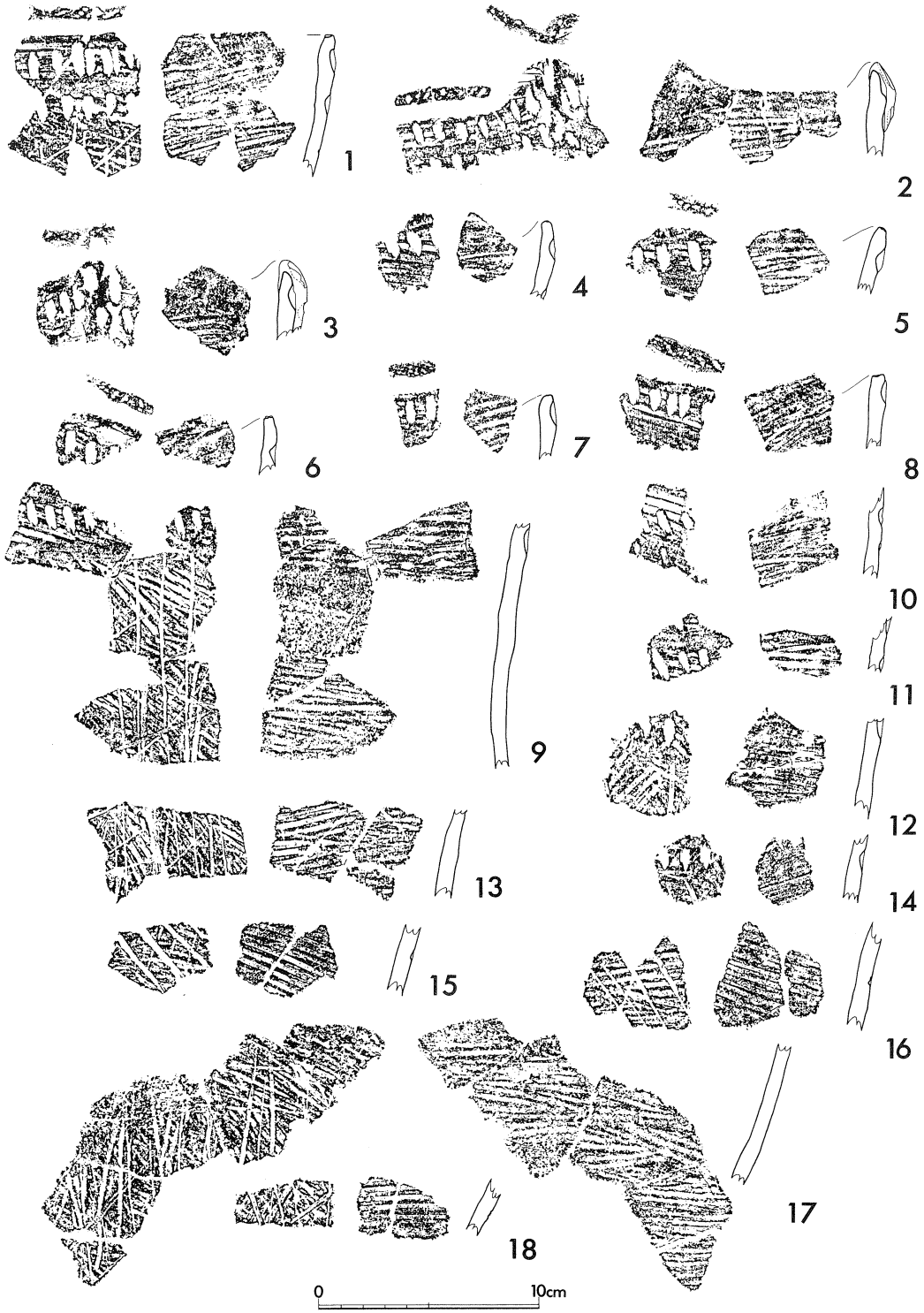
１類（第28図１～10・12・13）　口縁外面に沈線文と刺突文を施した土器である。器形は深鉢形で，若干くびれた頸部から直線的に口縁が開く。口縁端部は若干膨らんで上面がやや平らになり，外側に板状の工具を押圧ぎみに当てた刻目がはいる。口縁下には，下端を刺突文と押引文，縦には単沈線によって区画された文様帯の中に，浅く不鮮明な波状沈線文が４条（部分的に５条）それぞれ波頭部と波頭部が向かい合うように施されている。文様帯を区画する下端の押引文は，口縁部側から斜めに切るように押引かれており，一見沈線文風にみえる。器面調整は外面丁寧なナデ，内面二枚貝条痕ののち横方向にミガキを入れる。外表面の赤い付着物は赤色顔料か。

２類（第29図・第30図１～６）　口縁外面に２段に縦方向の刺突文を施し，その下に沈線文を施した土器である。刺突文は口縁直下に１cm程度の間隔をおいて上下２段に施したのち，その沈線の間と下段下側の，地文の条痕を指できれいにナデ消している。沈線はヘラか木の枝のようなものを原体として用い，長さは１～1.5cmである。口縁端部には山形の隆起が数箇所あり，頂部から粘土を貼り付けた隆帯が刺突文列の中頃まで垂下し，この上にも刺突文が施されている。その他の口縁端部はほぼ平らで，上面に二枚貝によるとみられる刺突文が斜めに加えられている。胴部の沈線文は，刺突文下側のナデの部分から始まり，最初に垂直に底部付近まで沈線を入れたのち，その上に斜格子状にさらに沈線を重ねて施す。器面調整は内外面ともに二枚貝条痕で，胴部に大きなくびれはなく，砲弾形に近い形をなすと考えられるが，底部の形態は不明である。

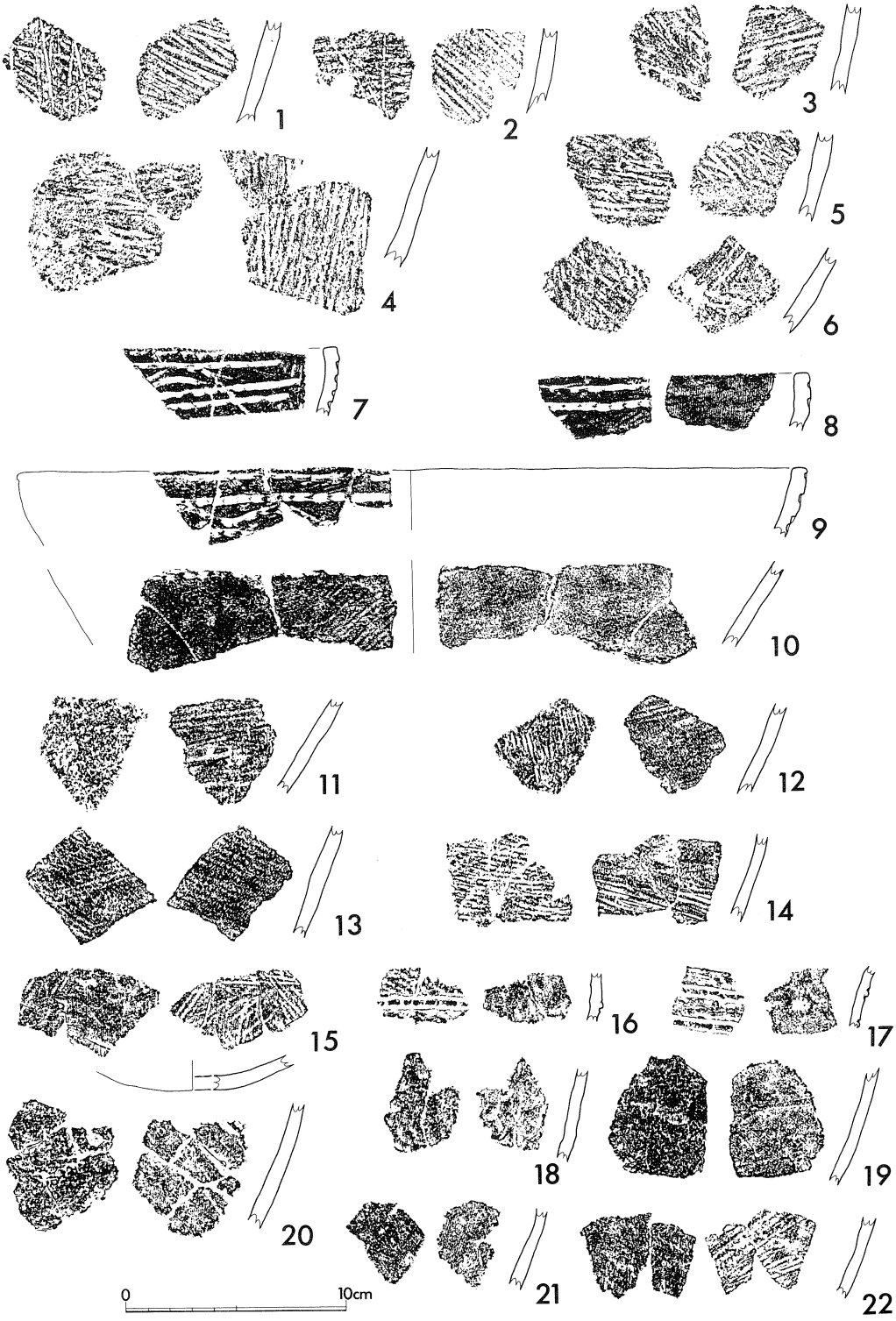
３類（第30図７～15）　押引文土器である。胴部上半が若干くびれ，口縁部は大きく開く。内外面ともに二枚貝条痕調査を行ったのち口縁部のみナデを加え，そこに押引文を施している。押引文は半截竹管状の工具で口縁に平行に上下２条ずつ廻らし，その間に１本または２本波状の押引文を



第28図　D・E区第2黒色土下面出土土器実測図(1)



第29図　D・E区第2黒色土下面出土土器実測図(2)



第30図　D・E区第2黒色土下面出土土器実測図(3)

廻らす。口縁上端は平坦に仕上げ，刻目，刺突文等は施されない。底部は丸底である。

4類（第28図14～17）　胴部に大きな変化はなく，口縁が直線的に開く条痕土器である。内外面ともに二枚貝さらに棒状のもので横またはやや斜め方向に条痕調整を行ったのち，外面にナデを加える。口縁上端は丁寧に平坦面を作り出すが刻目等は施されていない。この土器群の特徴はその胎土と色調にあり，胎土には通有の小微砂粒以外にガラス質の微粒子を大量に含み，そのため，表面に光沢が出てしかも滑らかで，全体的に紫色が加わった灰褐色を呈している。

5類（第28図11）　わずか1点のみの出土だが，口縁外面に沈線文を施す土器である。器厚4～5㎜の薄手の土器で，口縁は大きく外反すると推定される。内外面ともに横方向に二枚貝調整を行ったのち丁寧にナデを施し，外面に幅1.2～1.5㎜の細い沈線を複合鋸歯文風に施しているが，これのみのため，全体の文様構成は不明である。

6類（第30図16・17）　器厚4～5㎜の薄手の土器で，内面はナデ調整。外面は比較的撚りの細かいRLの縄文を地に，細い粘土紐を貼り付けてナデたのち，その隆帯上を半截竹管の腹で押引いており，この押引によって粘土の余りが隆帯の両側にはみ出している。いわゆる里木Ⅰ式土器である。次の7類とともに，D区北西端で出土し，上述の5類までと趣の異なった土器である。

7類（第30図18～22）　6類と同様に薄手の土器で，内外面ともにナデ調整の無文土器である。ナデ整形による凹凸が著しく，外面にスス状の炭化物が付着したもの（19）もある。22のみは内面に条痕が認められる。

出土石器（第31・32図，図版25－2・26）

第2黒色土から出土した石鏃は1点（第31図1）のみで，黒曜石製の小形のものである。全長1.35㎝を測り，両側縁は直線的で，わたぐりも三角形に鈍角にはいる。右面は主要剝離面と平面剝離面を大きく残し，縁辺とわたぐりに調整剝離を加えるのみである。重さ100㎎を測る。

2は安山岩製石匙である。横長の剝片を用いてバルブの両側に刳り込みを設け，下端に直線的な刃部を作り出している。腹面は主要剝離面を，背面（図）は剝取前の調整剝離面をそのまま残し，刳り込みや側面，刃部に細かな調整剝離を加えただけである。図の左側刳り込みから先の刃部を欠損している。

3・4は小形の閃緑岩製磨石である。3はほぼ球状で表面やや滑らかになり，部分的に敲打痕も認められる。4は両端を除いてほぼ全面的につるつるしている。5は球状の花崗岩で，一部に欠けた面があり，あるいは使用によるものかもしれない。第32図1～8も，敲石としても使った磨石で，1が細粒花崗岩，2が花崗岩，5・7が斑状花崗岩，6が花崗閃緑岩，その他は閃緑岩である。1は両面中央に2個ずつ窪みがあり，その周辺は使用により擦り減ってつるつるしている。また周縁には敲打痕が著しく残る。2・3・7は長さ5～6㎝の小形品ながら敲打痕と思われるものがよく残

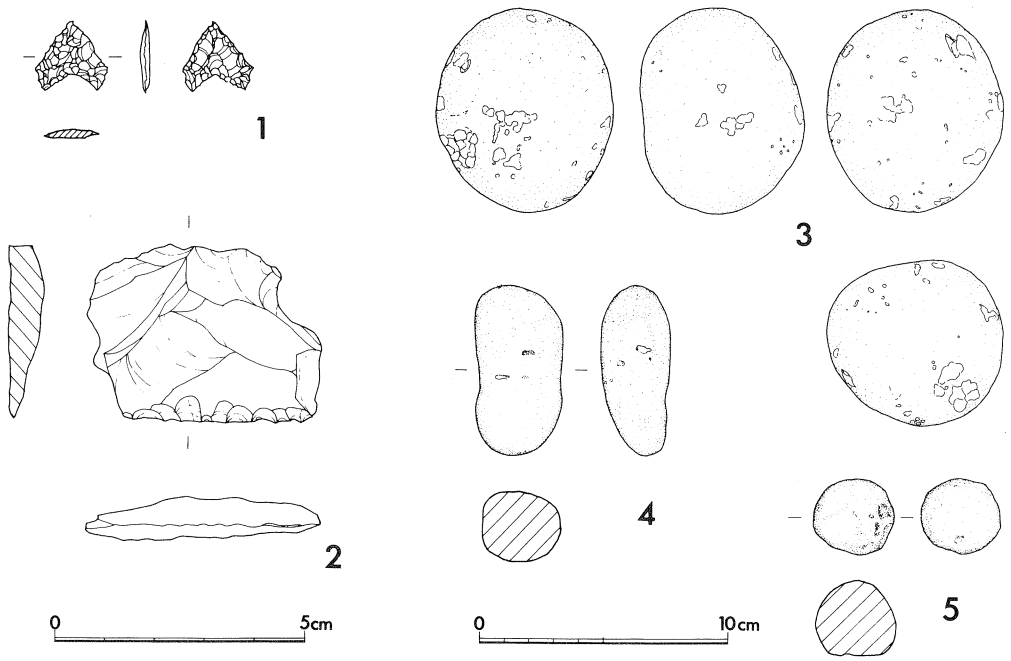
り，5・6・8には周縁部に大きな剝脱が認められる。

〈F区暗褐色土上面〉（第33図，図版27）

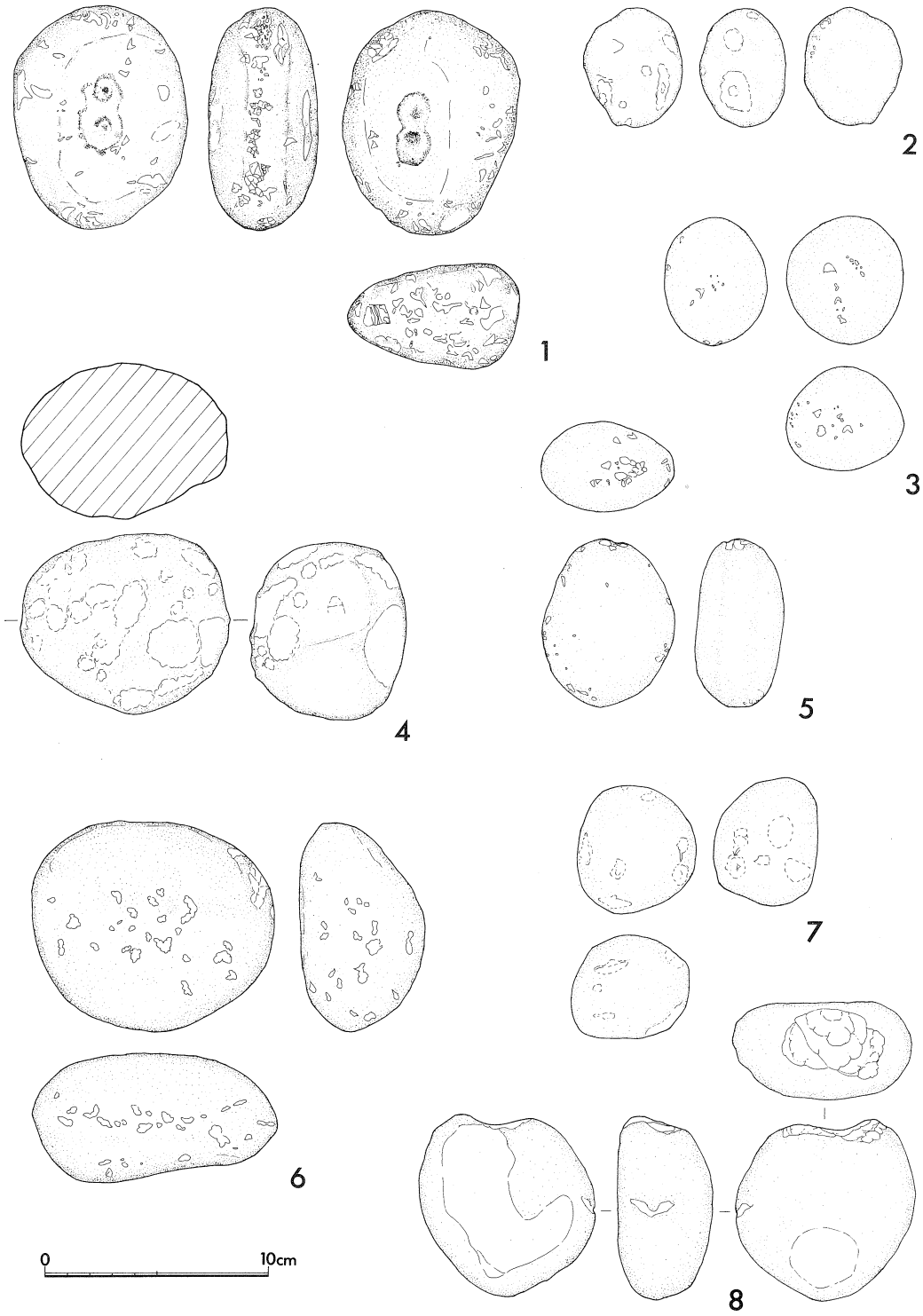
F区の第1黒色土と第2黒色土の間の暗褐色土の上面で，若干のピットと土器群を検出した。ピットはF区北半中央に7個ほどあり，深さ10cm程度の極めて浅いもので，上の方をかなり削り取られたものと思われる。これらのピット以外に遺構はなく，土器群は暗褐色土上面の南西よりの1箇所に集中する状態で出土した（第34図）。また，石鏃などの石器類も数点出土した。

出土土器（第35図，第36図1～13，図版28～30－1）

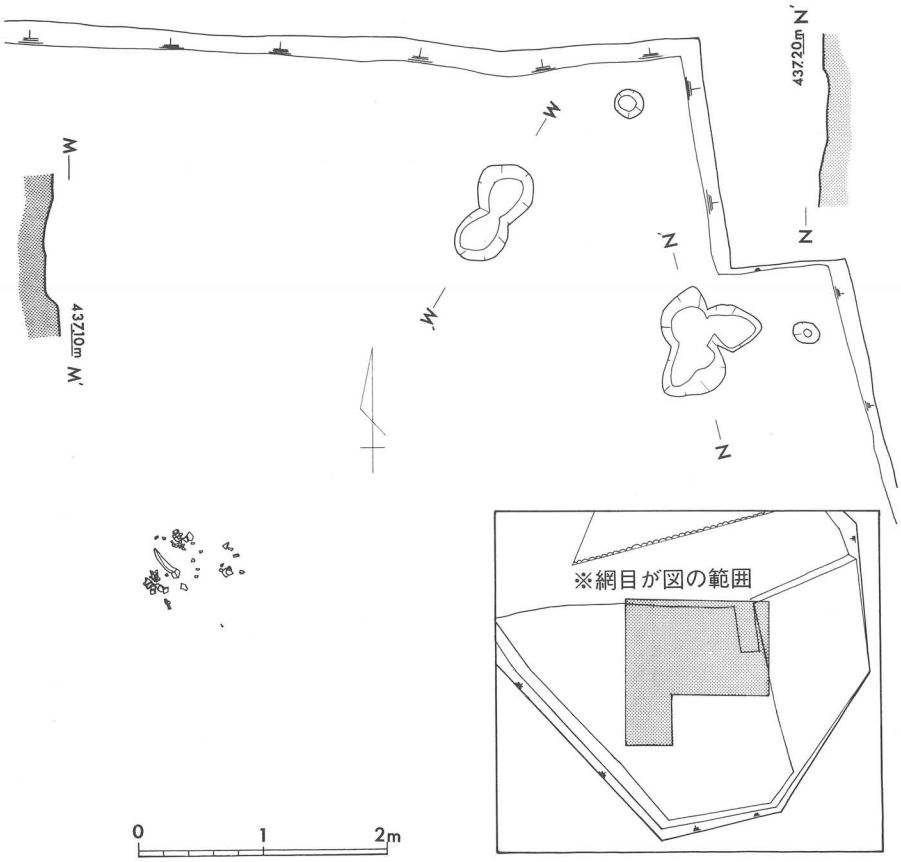
いずれも金雲母片を大量に含み，表面に光沢を持つ黒褐色の土器群で，出土個体数は数個体分と考えられる。胴部に大きなくびれはなく，丸底で，口縁が大きく開口する深鉢形の土器である。外面には，胴部上半は二枚貝条痕調整ののちナデを行って半截竹管による爪形文を施し，下半は斜め方向の二枚貝条痕が残る。内面は上半が横方向，下半が斜めの二枚貝条痕である。爪形文は，左に開いた逆C字形が大半で，中には第35図9・13・15，第36図1・2・4のようにC字形も若干認められ，いずれも一方の端部を基点にして移動させる連続爪形文であるが，竹管の当て具合により爪形の中央が器面に残らないもの（第35図8・9・17）や，一方の端部がつながって沈線状に見えるもの（第35図17・20，第36図6）等もある。完形品がないため全体の文様構成は正確に捉えきれないが，



第31図　D・E区第2黒色土下面出土石器実測図(1)



第32図　D・E区第2黒色土下面出土石器実測図(2)

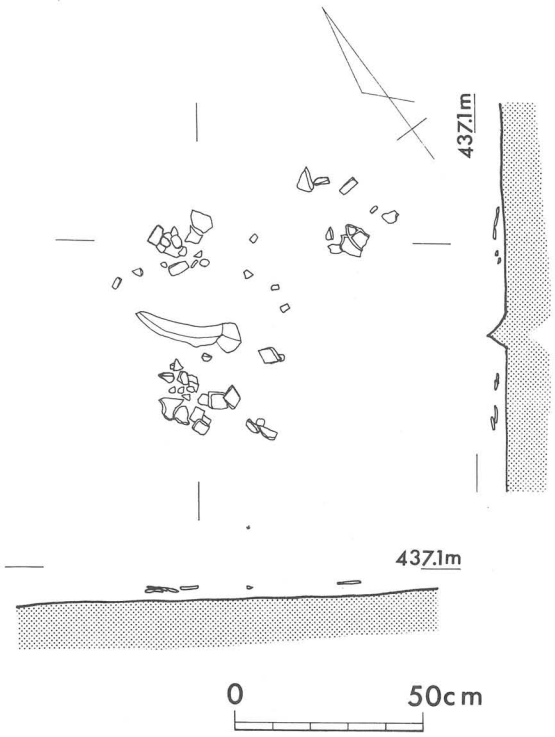


第33図　F区暗褐色土上面遺構および遺物出土状態実測図

口縁直下に口縁に平行に１条廻らし，その下に波状あるいは鋸歯状に２～３条平行爪形文を施しているようで，文様帯下端にも口縁に平行な爪形文列を１条施している可能性が強い。また，第35図９・10・12のように文様が２本以上接したり交叉したりするものもあり，単純な平行爪形文だけではなさそうで，第36図３のように沈線文を施した土器も見受けられる。なお，口縁端部はやや細く尖らせたり（第35図１・５），上面に若干の平坦面を作り出したのち（２～４・６・７），二枚貝腹縁により刻目を施す。

出土石器（第36図14～16）

15・16は黒曜石製石鏃で，15は縦軸方向に３分の１を欠損し，両面ともに側縁からやや大きめな調整剥離がはいる。16は両面に細かく丁寧な剥離がはいる。両側縁は若干湾曲しており，全長1.9cm，重さ520mgを測る。14は安山岩製の剥片で，右面は主要剥離面がそのまま残り，左面（背面）も下からの調整剥離が若干あるものの，剥取前の大きな面を残している。スクレイパーを得るための剥片と思われる。



第34図　F区暗褐色土上面土器出土状態実測図

〈第１黒色土下面〉

（第37図，図版30－２・36）

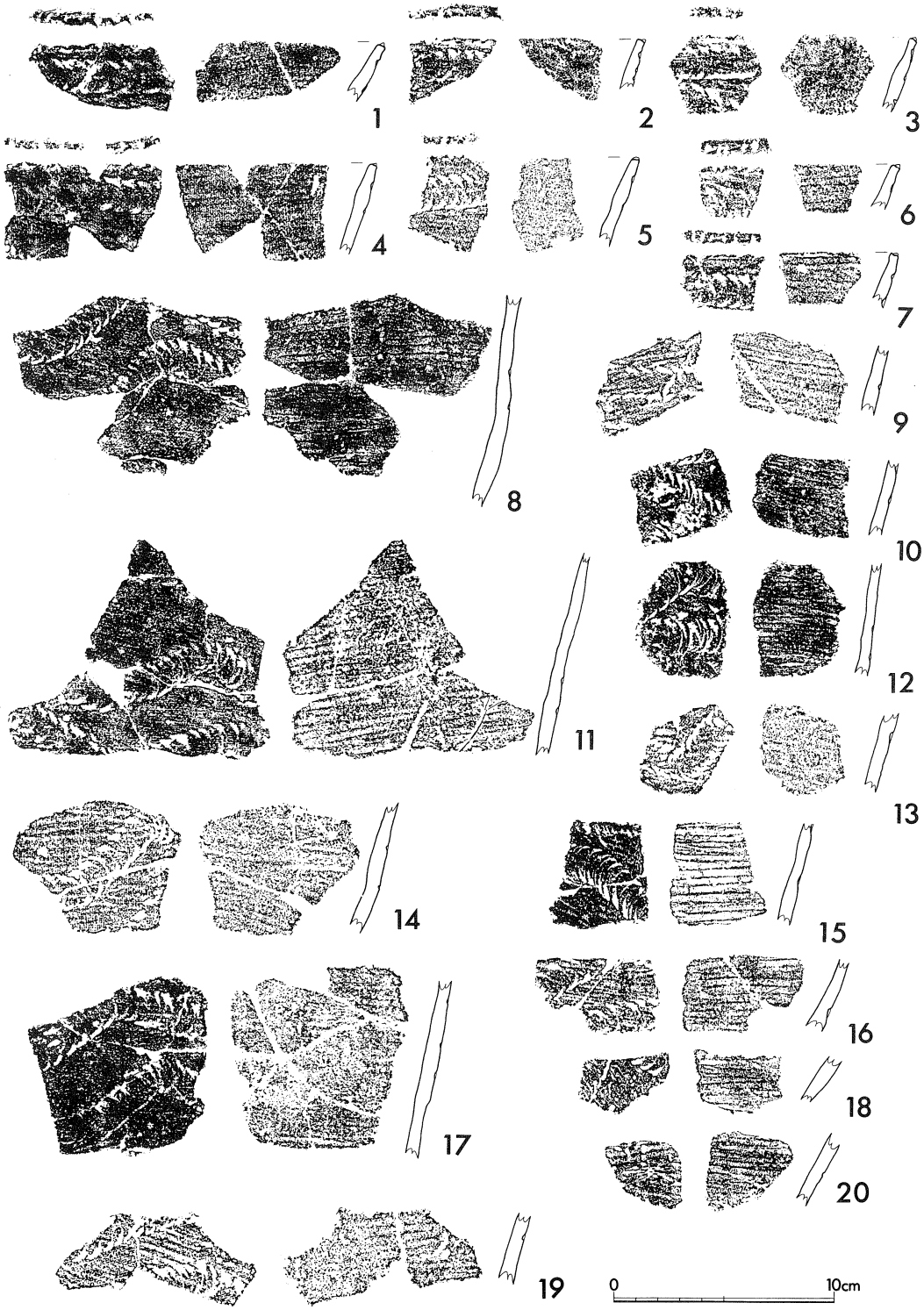
D～G区で最も上の遺構面で，G区では第１黒色土が南端に若干確認されるのみで遺構は検出できていない。D～F区については，後世の遺構があったり攪乱を受けたところ以外はほぼ全域で第１黒色土を検出しており，これを取り除いた面では，南東から北西に向かって緩やかに傾斜する斜面全体に，多数の遺構を検出した。D～G区ではD区西端が遺構面や遺物包含層の西端にあたるが，E・F区側の標高のより高いところでは，南側調査区外にそれらはさらに伸びている。E区中央では南西から北東に向けて，縄文時代早期以前にできた段差の名残りが依然として若干残っているが，遺構はその段の上下両方から検出されている。遺構はピットと土壙で，ピットはいずれも掘り方円形の直径20～60cmのものが多く，埋土の黒色土中に土器を混入しているものも少なくなかった。遺構の密度はD区が最も稀薄で，以下南に向かうにつれて徐々に濃くなる（第40・42図）。

竪穴住居跡（第38・39・42～45図）

竪穴住居跡の柱穴と考えられるピット列をD区北半で１棟，F区で４棟検出した。

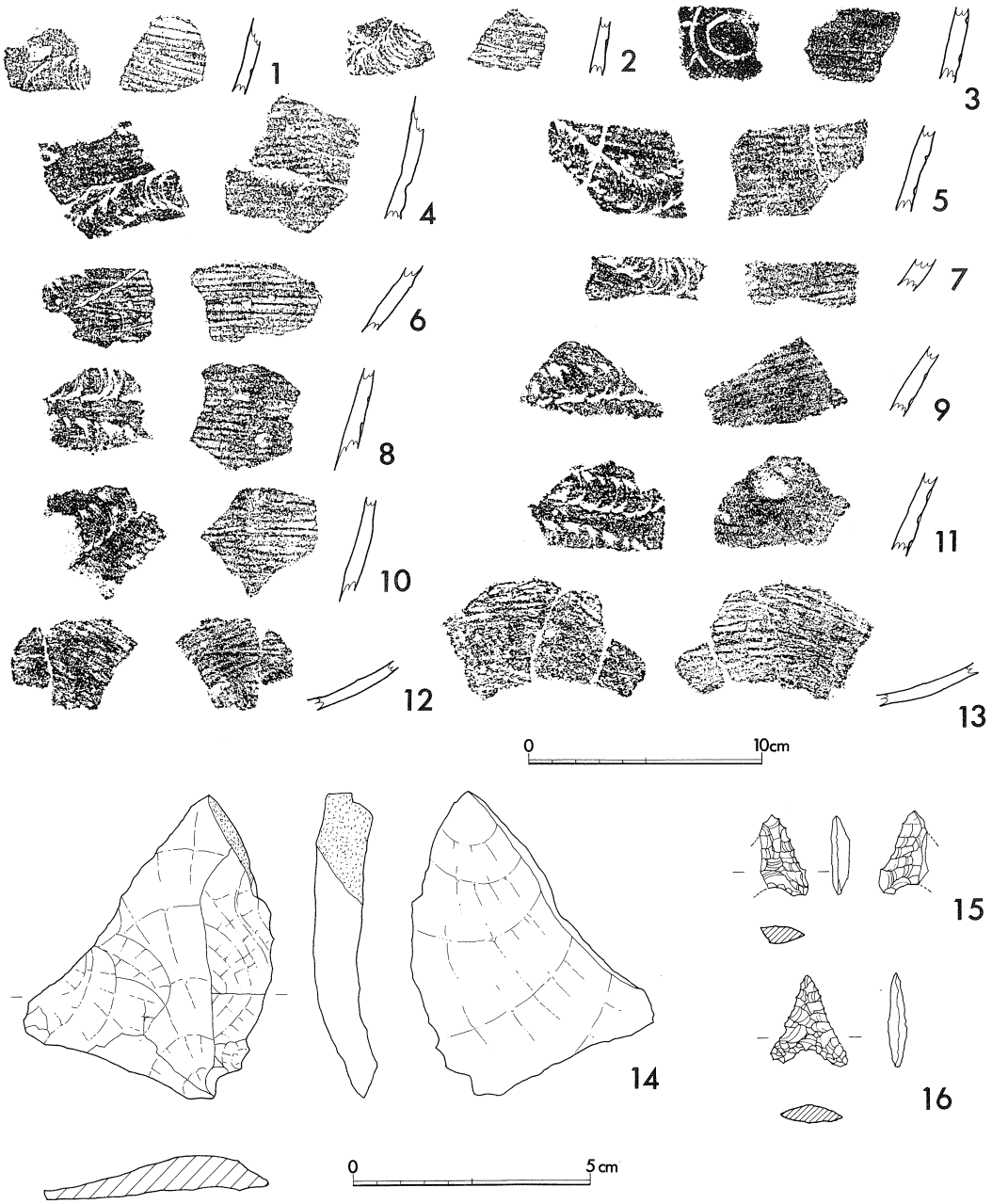
SI05（D区）　北側３分の１が調査区外で既に消滅しているが，直径約7.9mのほぼ円形に並んだピット群で，大形のものである。ピットの大きさは，直径30～60cm，深さ15～20cmで，ピットの間隔は140～160cmである（第38図，図版31－２）。ピット列内には２箇所に浅い窪みがあり，それぞれ一部を深く掘り込んでいる。西側の窪みは小さいが，東側のそれはT字状に５cm程度掘り窪め，さらに南端の掘り込み部分に３個の地山礫をコの字状に配している。この地山礫は掘り込みの肩部に，内側の面がそれぞれ斜め上方を向くように据えられており，落ち込み内部には炭化物を含んだ暗灰色土が堆積する。石の表面に焼けた痕跡はなかったが，炉跡の可能性がある（第39図，図版32）。

SI01・02　F区の北東隅にあり，SI01は長径3.1m，短径2.5mの楕円形を呈する。壁面はすでになく，ピット列のみで，内側に主柱穴になると考えられる２個のピットが並ぶ。楕円形に並ぶピット



第35図　F区暗褐色土上面出土遺物実測図(1)

はいずれも平面円形で小形のものは直径20cm，深さ10～30cm，大きいものでは直径60cm程度である。ピット内には第１黒色土と同じ黒色土が堆積し，土器片も混入する。SI02は01と重なるようにすぐ北に位置し，大半を水田構築の際の工事で破壊されている。10～15cmの深さで一段低くなっており，現存長で約2.2mを測る。内側にピットの数が少なく，住居跡でない可能性もあるが，他の土壙に比



第36図　Ｆ区暗褐色土上面出土遺物実測図(2)

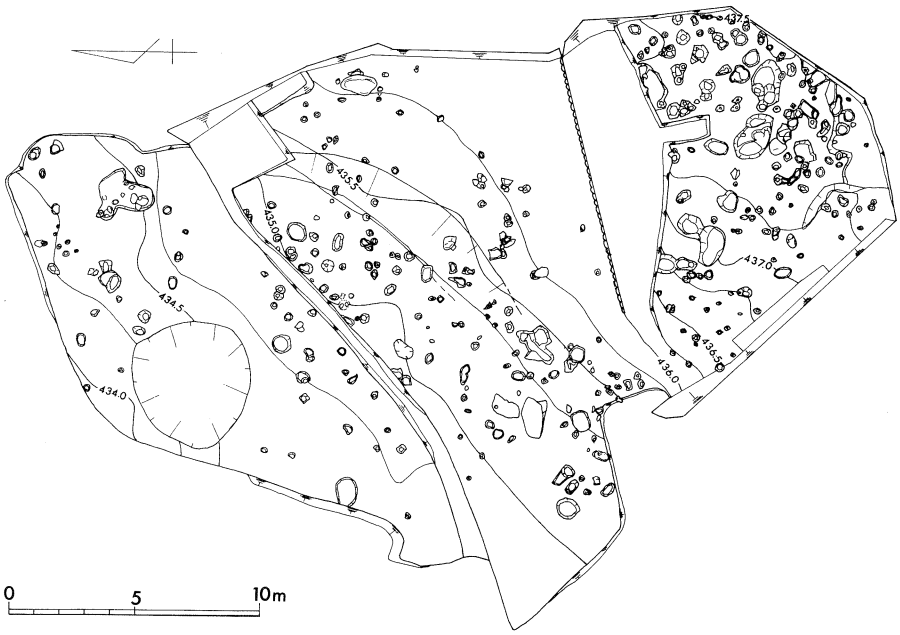
べて掘り込みがさほど深くなく，規模も大きいことから，住居跡の可能性を考えたい（第43図，図版37－1）。

SI03　F区南西隅にあり，第1黒色土下の褐色土に高さ15cm程度の壁が弧状に廻り，その内側底面にピットが検出された。壁は西側の傾斜の低い方ではなくなっており，壁の北西端は土砂が流出したためか，外に開いた形に途切れている。ピットは壁面に検出されたピットを含め，5個が円形に並んでおり，ピットの形は直径20～25cmの円形で深さは15～30cmである。周壁の形状から隅丸方形に近い円形プランを呈すると考えられ，復元推定直径は約4mである（第44図）。

SI04　F区西端の傾斜地にあり，当初は周壁を検出できず，ピットが散在するだけと考えられたが，土層観察を行うため西壁を清掃したところ，竪穴住居跡と考えられる壁面のあることが判明した。西壁にみる壁の高さは約30cmで，傾斜の高い方に向かって床面が徐々に低くなっており，北側の壁は第1黒色土とともに斜面下方に流出している。柱穴は明確には断定しきれないが，図の円形の列がそれに相当すると考えられる（第45図）。竪穴の規模は直径3m程度であろうか。

土壙（第40～42・46・47図，図版37－2・38）

D・E区で6個，F区でも6個の土壙を検出した。いずれも円形または楕円形プランの土壙で，相互の位置的関係や楕円形土壙の軸の方向などに特に法則性は認めれない。多くの場合，埋土中に遺物を数点混入したりするが，F区SK01・02のように完形に近い土器や大きな土器片を包んでいるものもあった。



第37図　D～F区第1黒色土下面地形測量図

SK07・08　D区南半で検出した土壙で，SK07は直径75cmの円形プランである。深さは約25cmあり，壁面は垂直に近い。SK08は卵形の土壙で現存長1.1mを測る。底面は東側が一段低くなっており，埋土は礫を多く含んだ黒色土である（第41図上段）。

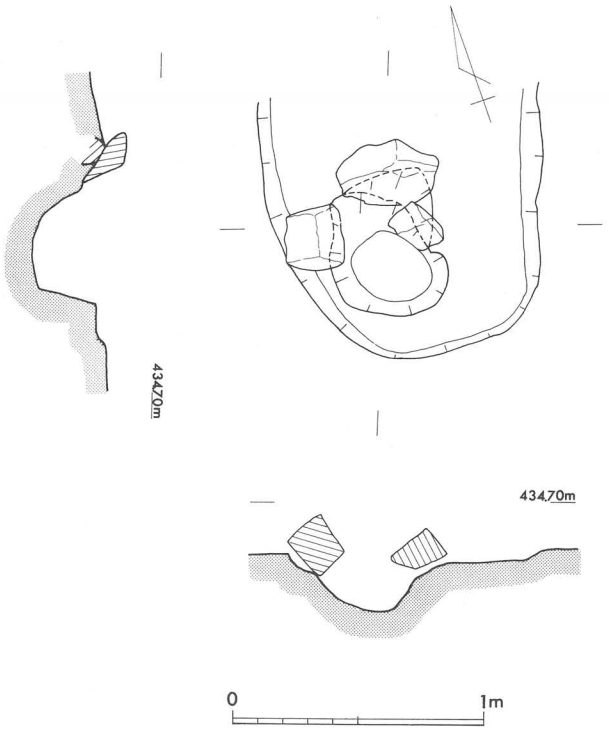
SK09～12　E区西端で検出した土壙で，09は円形，10は隅丸方形を呈する。09は直径85cm，深さ20cmを測り，平らな底面に長さ30cm強，幅・厚さ10cm余りの細長い礫が横たわり，他のD・E区の土壙埋土が黒色土であるのに対して暗褐色土が堆積する。SK10は長さ85cm，幅75cmの浅い土壙で，埋土中に遺物等は含まれていなかった（第41図中段）。SK11・12は長楕円形の土壙で，11は長さ1.7m，12は長さ1.2mを測る（同図下段）。

SK01　F区のほぼ中央で検出した円形プランの土壙で，直径約70cm，深さ約35cmを測る。土壙内には，底面から約25cmの高さに25cm×30cm程度の扁平な石をはじめ，数個の礫があり，その扁平な石の直下には大形の敲石（第55図４）が重なり，さらに縄文土器２個体分が潰れた状態で出土した（第46図上）。第52図１はほぼ完形に近いもので，器厚28.5cm，口縁径27cmを測る粗製深鉢形土

第38図　D区北半第１黒色土下面SI05実測図

器である。口縁は若干内傾して上面を平坦に作り出し，胴部は緩やかに窄んで尖底ぎみの丸底に至る。内外面ともに横あるいは斜め方向の二枚貝条痕調整を行ったのちナデるが，表面の凹凸が顕著である。底部周辺は内外面ともにミガキがはいる。外面灰褐色を呈し，炭化物の付着もごく一部に認められる。同図３は胴部上半の約半分が残存する鉢形土器で，復元口縁径は約22cmである。現存する破片は胴部から口縁端までほぼ一直線に開くもので，外面二枚貝条痕，内面は条痕調整ののちナデである。胎土に砂粒を大量に含んで外表面の凹凸が著しく，外面のスス状炭化物の付着も顕著である。口縁下３cmあたりには内外面から穿孔した補修孔も認められる（図版37－２・38－１・43・44）。

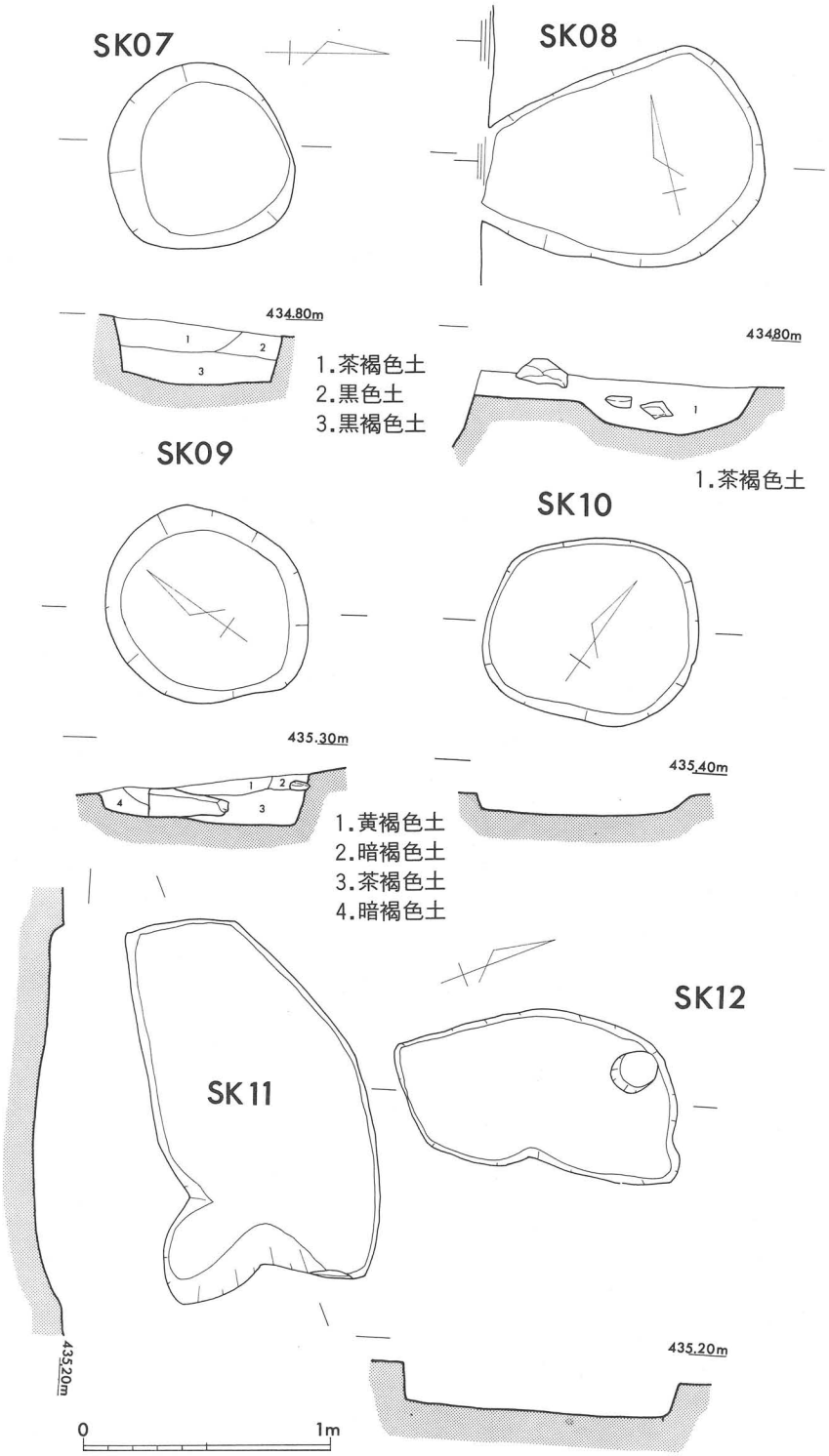
SK02　Ｆ区東端で検出した円形プランの土壙である。土層観察から切り合い関係を摑むことはできなかったが，北側のピットを切ってSK02が掘り込まれたものと考えられる。直径約50cm，深さ約20cmを測る。底面には厚さ７～10cmの礫を４個ばかり置き，その上に土器が散在している。土器は同一個体の破片で，やや直立した胴部から口縁が短く外反する鉢形土器（第52図５）と思われ，復元口縁径は36cmを測る。外面は横方向二枚貝条痕，内面には上半横方向二枚貝条痕，下半条痕のちナデ調整を施し，外面に炭化物の付着が認められる（第46図下，図版38－２・45）。



第39図　D区北半第１黒色土下面SI05内炉跡状遺構実測図

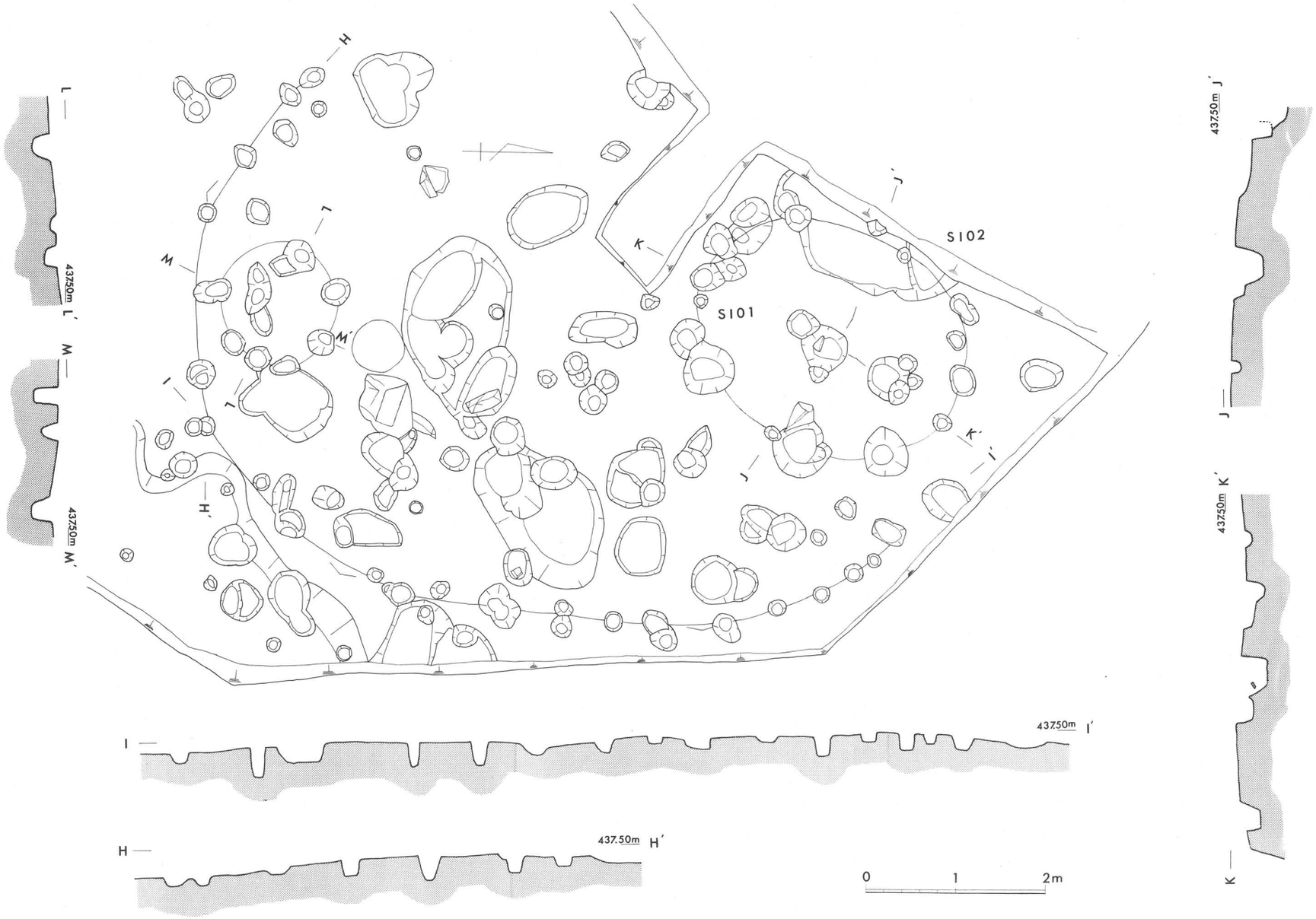
SK03～06　SK03は01の北側に隣接する土壙で，ピットがいくつも重なっているため本来の形態がわかりにくいが，全長1.9m，幅1.2m程度の楕円形を呈していたと考えられる。西側に一段低い部分があり，最深部で深さ20cmを測る（第47図上）。SK04は平面プラン卵形を呈し，全長1.8mを測る。西端にやはり一段低くなったところがあり，深さ約20cmを測る（同図中）。SK05も同様の平面卵形を呈し，底面には段こそないが若干傾斜があり，西側が低くなっている。SK06はほぼ円形に近い土壙で長径１m，短径0.8mを測る（同図下）。SK03～06はいずれも

第40図　D区南半～E区第1黒色土下面遺構実測図



第41図　D区南半～E区第1黒色土下面土壙実測図

第42図　F区第1黒色土下面遺構実測図



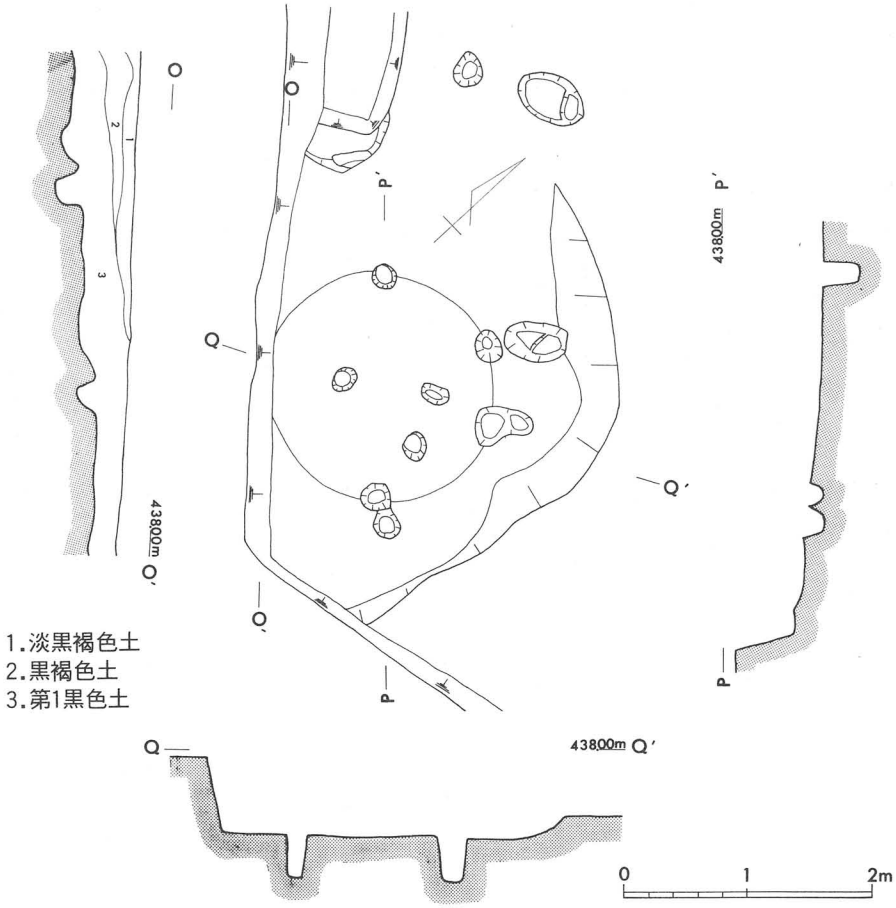
第43図　F区第1黒色土下面柵列状遺構およびSI01・02実測図

黒色土が堆積し，少量遺物も混入する。

柵列状遺構（第42・43図）

Ｆ区のSI01や土壙を取り囲むようにして，全長15ｍにも及ぶ楕円形に並んだピット列を検出した。楕円の長さは約8.5ｍで，北半には対応するピット列が認められない。隣接するピットとピットの間隔は近いところで40cm前後，離れたところでも80cm前後と，比較的均一な間隔が保たれている。個々のピットは直径15～40cmの円形プランで，深さは約10cmから30cm程度のものまでまちまちだが，直径20cm，深さ25cm程度のものが最も多い。楕円形の柵列状遺構内の南西端には，直径1.5ｍ程度の円形に並んだピット列も確認されたが，性格は不明である。

なお，Ｄ～Ｆ区には，第40・42図のように上記以外のピットも多数確認されたが，残念ながらそれらの性格や構造を逐一捉えるまでには至っていない。Ｆ区南端のような曲がりくねった落ち込みなどもあるいは何らかの遺構かもしれないし，逆に焼土や炉跡，集石遺構など，明確な遺構も発見



第44図　Ｆ区第１黒色土下面SI03実測図

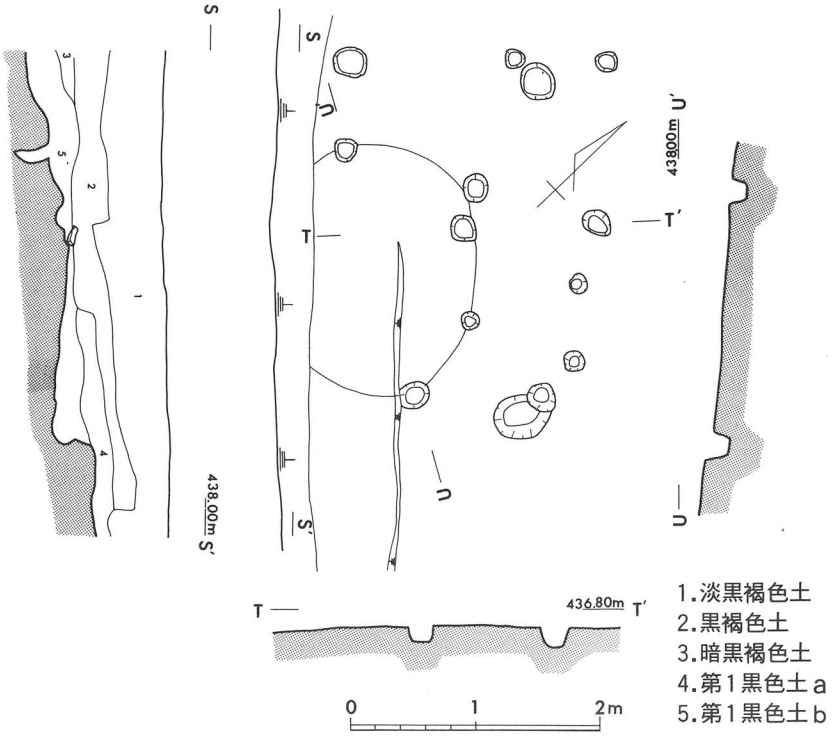
されなかった。

D・E区出土土器（第48・49図，図版39・40）

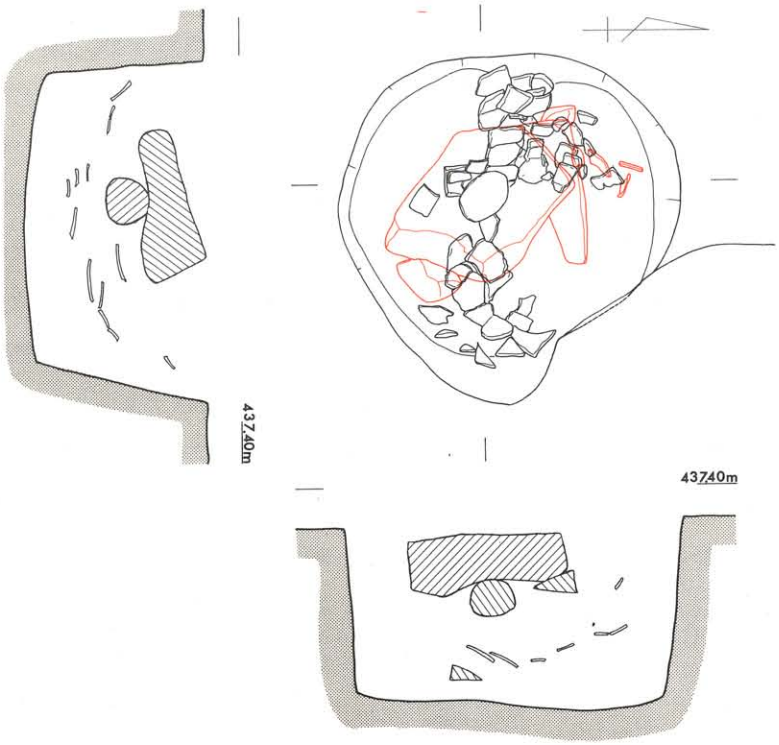
D・E区出土土器のうち，D区から出土したものは第48図1～3などわずかで，大半はE区からである。また，大半は晩期土器であるが，少量ほど早期土器などが混じっている。第48図4～12がその早期土器で，器厚は9～11㎜と厚手で，胎土に植物繊維を混入した，いわゆる繊維混入土器である。4・6・10は内外面ともにナデ調整ののちLRの縄文を施す。5・7～9・11・12は外面にLR縄文を施し，内面には条痕ののちナデを施すのみで縄文はない。

D区から出土した1・2は，内外面ともナデ調整の粗製深鉢形土器の口縁と考えられ，晩期の土器と思われる。外向する口縁の端部は先が尖るように作られている。これに対して，3は後期の粗製土器と考えられるもので，若干開きぎみの口縁端部をやや肥厚させ，上端に口縁に平行に刺突文を施している。内外面ともにナデ調整である。D・E区で出土した後期土器はこれ1点のみである。

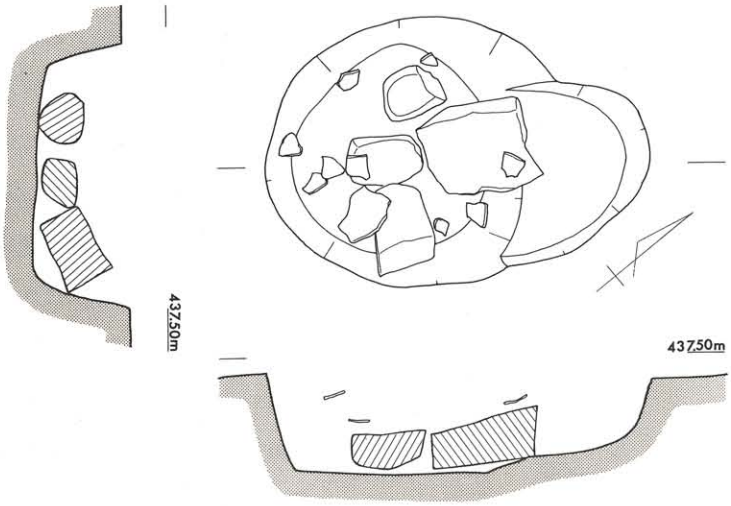
第48図13～19・21～23・25～28，第49図1～7は表面を丁寧に研いた精製土器である。13～19は浅鉢の口頸部で，口縁に向かって大きく外反し，端部は上に向かって短く立ち上がる。13・18はほぼ垂直に，四角くしかも長く立ち上がるもので，14は内側に短く突出させ，突出部内面は屈曲部分を際立たせるため，ヘラ状のもので押えつけている。15・16は口縁端部外側に幅の狭い平坦面を作り出すが，実際には立ち上がりはほとんど突出せず，内面は沈線状に段をつけることで立ち上がりを表現している。17はさらに，口縁端部内面に段をつけただけで，端



第45図　F区第1黒色土下面SI04実測図



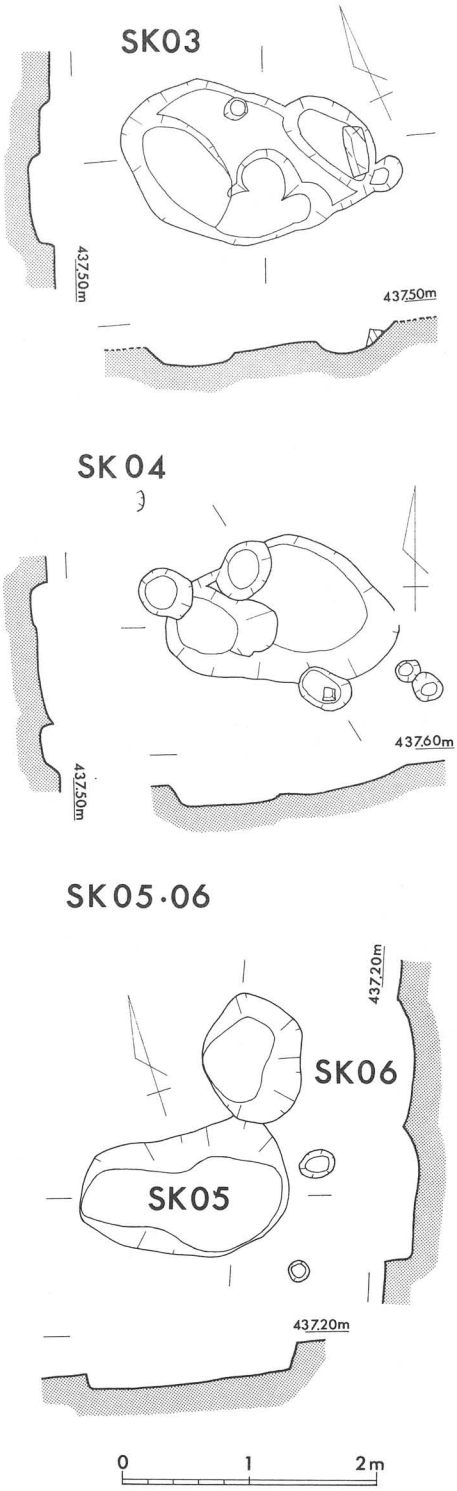
SK01



SK04

0　50cm

第46図　F区第1黒色土下面SK01・02実測図



第47図　F区第1黒色土下面SK03～06実測図

部に何も手を加えていない土器である。また，19は断面三角形の立ち上がりをつけたものである。これらの胴部に相当するのが26・28で，どちらも頸部との接合部分で割れているため屈曲部がわかりにくいが，稜線はさほど尖らず丸味を帯びている。25も浅鉢形土器で，頸部は短く外反し，口縁端部は丸く収める。内面黒色，外面黄褐色～暗褐色を呈する。

21～23・24も浅鉢形あるいは鉢形の土器で，器形は上述の浅鉢形に比べて胴部の屈曲が小さく，器高がややありそうな形態である。21・22はやや内湾ぎみに立ち上がり，口縁端部には平坦面を作り出す。23は外反する口縁で端部はやや丸味を帯びる。第49図2～6がこれらの土器の胴部～頸部に相当すると考えられる。27は頸部の屈曲が極めてわずかで外反の度合も小さい鉢形土器である。

第48図20・24，第49図10は深鉢形土器の口縁部である。20は短く外反した口縁外面に低い断面三角形の隆帯が付く土器で，内外面ともに丁寧なナデが施されている。24・10も同様なナデ調整が施されているが，24は表面の剝脱が顕著である。第49図11～21は深鉢形土器の胴部片で，11～14は内外面ナデ調整。12には内外両面から穿孔された補修孔がある。19・20は内面ナデ，外面条痕調整で，その他は内外面とも条痕のちナデ調整を施したものである。22は鉢形の平底の土器で，表面の剝脱が著しいがナデ調整と思われる。

8は深鉢形土器の胴部上半と思われるもので，内外面ナデ調整ののち外面に横位の細沈

線を何本も廻らしており，下端一部には粘土の剝がれた跡があるので，この部分に突起物が付けられていたと考えられる。

F区出土土器（第50・51図，図版41・42）

第50図1は早期の繊維混入土器で，内面は条痕のちナデ，外面には条痕地に撚りの粗い縄文が施されている。

2～5は精製の浅鉢形土器で，2は口縁部が逆くの字状に立ち上がり，屈折部外側には沈線がはいる。内面は若干肥厚させたような形に，明瞭な段を設けている。山形口縁をなしている。4も口縁外面に沈線が施された土器で，端部を平坦に作り出し，内面の段は消えている。3は立ち上がりが断面三角形を呈する土器で，外面に沈線等は施されていない。

6は，逆くの字状に屈折した口縁の端部がさらに外反し，上端には平坦面が作り出されている土器で，屈折部から上の上下両端に小巻貝による浅く不鮮明な凹線を2条廻らせている。後期後葉～末のいわゆる宮滝式・御領式併行の浅鉢の特徴を有した土器である。

7～20・24・27・28は，深鉢形あるいは鉢形の土器で，器面をミガキ仕上げした土器群である。このうち，口縁部についてはその形態にいくつかの種類があり，まず7・19は頸部からゆるやかに外反しながら立ち上がる深鉢の口縁で，端部に造作を加えないものである。同じ外反の口縁でも，12のように口縁端から2㎝位のところにわずかな屈曲を設けたものもあり，9・14のように外反せず直線的に開口するものもある。9は特に，口縁上端に平坦面を作り出し，内面には横位の条痕が残るものの外面にミガキを行った丁寧な作りの土器である。

また，鉢形土器にも，15・16のように丸い胴部から単純に口縁端まで立ち上がらせるものと，13・18のように口縁端を短く外反させるものの2種類があるようである。

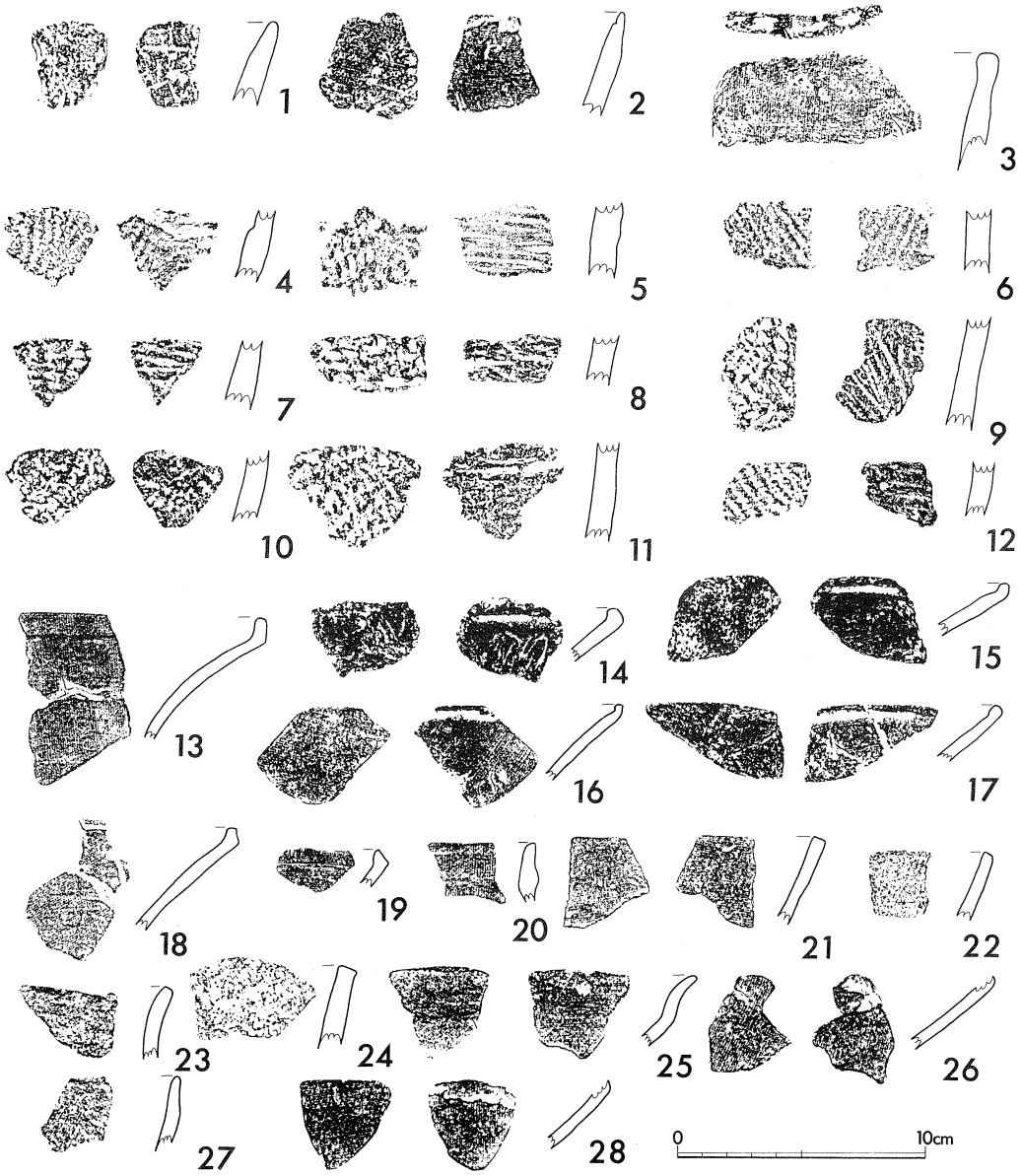
17・24・27は頸部と胴部の境の屈曲部に2本の凹線が施された土器で，17・24には胴部外面に条痕調整が残る。27には凹線間に斜めの刺突文が施されている。後期後葉～末の深鉢形土器であろうか。28は幅6～8㎜の板状の条痕に，同じ工具で横位に凹線を施した土器で，細片のため全体を窺い知ることができない。

21～23・25・30は粗製土器の口縁部でいずれもナデ調整を施す。22は，23のような波頭部の上面に，2個の突起を付けたもので，25には口縁端と外面に円形の刺突文を施している。30～34，第51図は粗製土器の胴部片と底部片である。いずれも頸部下の屈曲部から底部にかけての破片で，大半が内面にミガキか丁寧なナデ調整を行うが，条痕が残っているもの（第51図20）もある。外面調整は，ナデ（第50図30・32，第51図1・6）または条痕調整ののちナデ（第51図3・5・9・10・12～16）が最も多く，その他に条痕（第50図31，第51図2・4・7・19・20）やケズリ（第50図33・34，第51図17・18・22）等がある。底部はいずれも細片が多く断定はできないが，底面が若干上げ底ぎみに

湾曲する平底が大半で，中には平底に近い丸底（25）なども出土している。

E・F区出土石器（第53～55図，図版46・47）

第53図1・2はE区から出土した剝片石器で，1は横長の剝片の上端から片面のみに若干の調整剝離が加わり，上端の湾曲部分はやや磨滅してつるつるしている。2は水晶製の縦長の剝片を用いた小形の刃器で，腹面（図左面）はバルブを除去し，左側面にブランティング状の調整剝離が加わる。

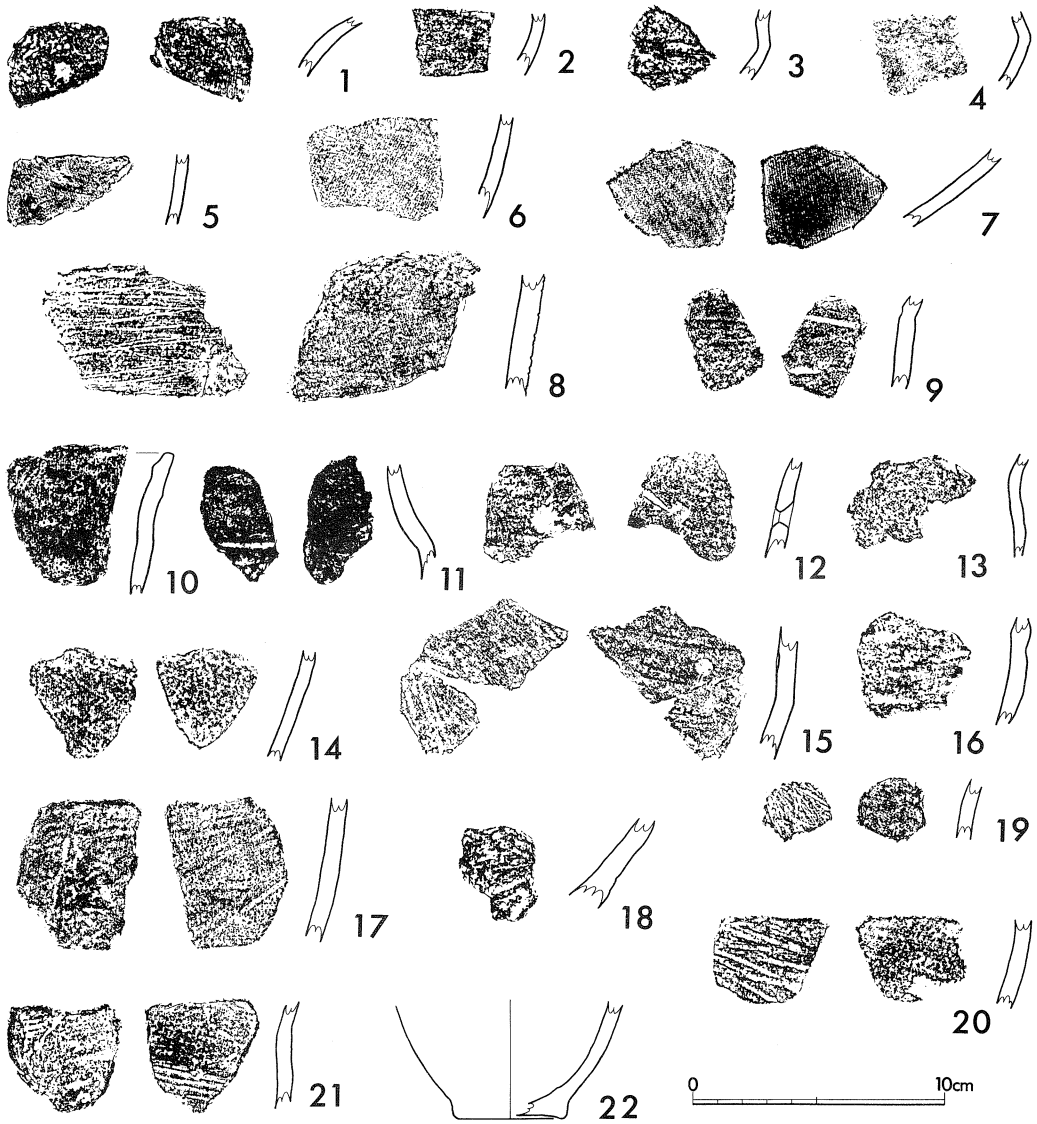


第48図　D・E区第1黒色土出土土器実測図(1)

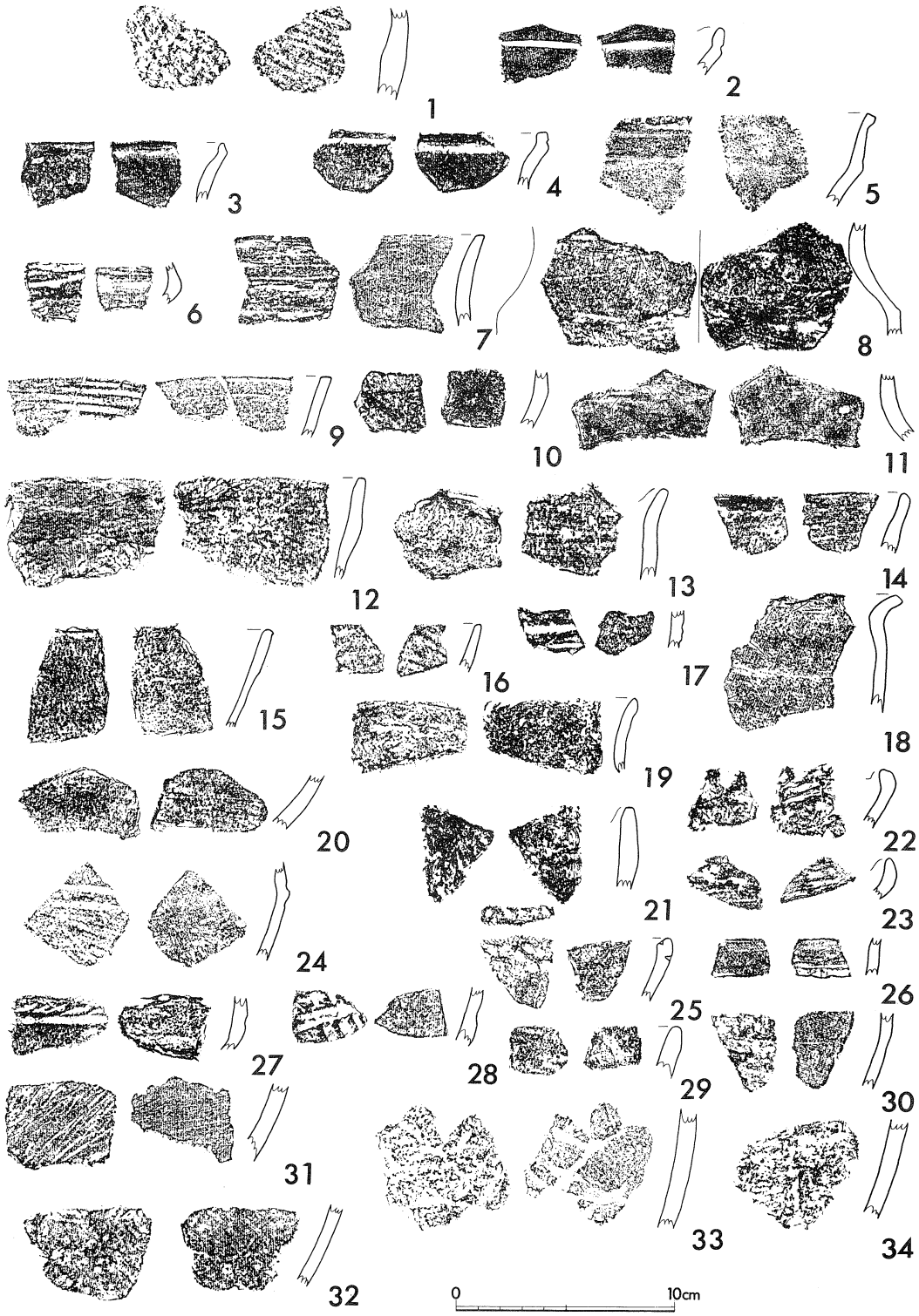
背面（右面）には上と両側面からやや粗い二次調整が認められる。下端を一部欠損している。

3～5は安山岩製の石鏃で，3は長さ1.9cm，重さ800mgを測る。両側縁はごくわずかに外湾し，基部はほとんど平らである。4・5はどちらも形の整っていない平基式の石鏃で，片面に主要剥離面を大きく残し，調整剥離も粗い。

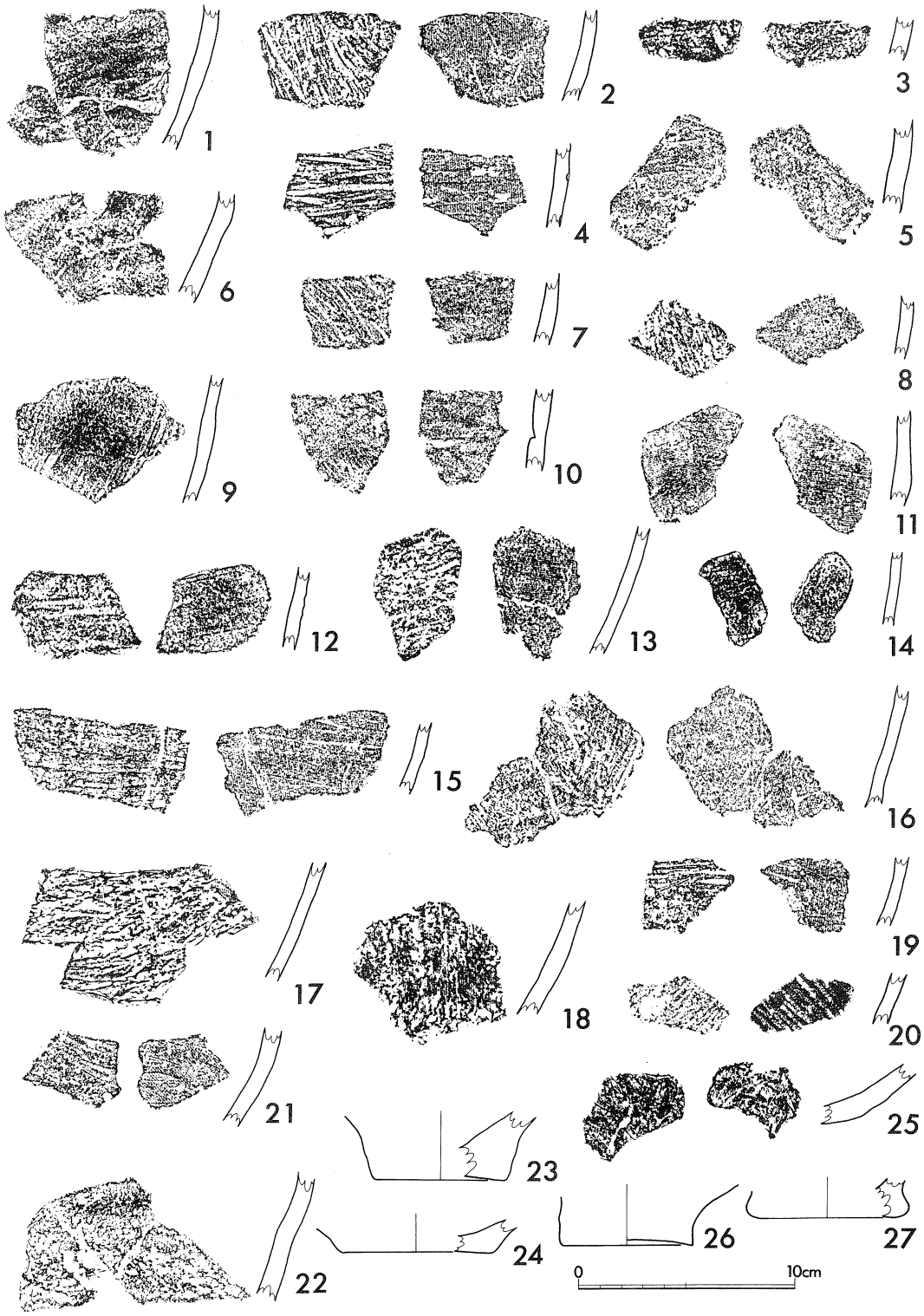
6・7は薄い剥片の一部に細かな刃部調整が加わったもので，小形の刃器と考えられる。8は縦長の剥片の三方を切断し，方形の剥片を作り出し，下端と右側面から調整剥離が施された楔形石器状のもので，これとほぼ同じ形をしたものが10である。上端にはやや磨滅した面に打撃が加わっており，



第49図　D・E区第1黒色土出土土器実測図(2)



第50図　F区第1黒色土出土土器実測図(1)



第51図　F区第1黒色土出土土器実測図(2)

第52図　F区第1黒色土土壙出土土器実測図(1～4:SK01，5:SK02)

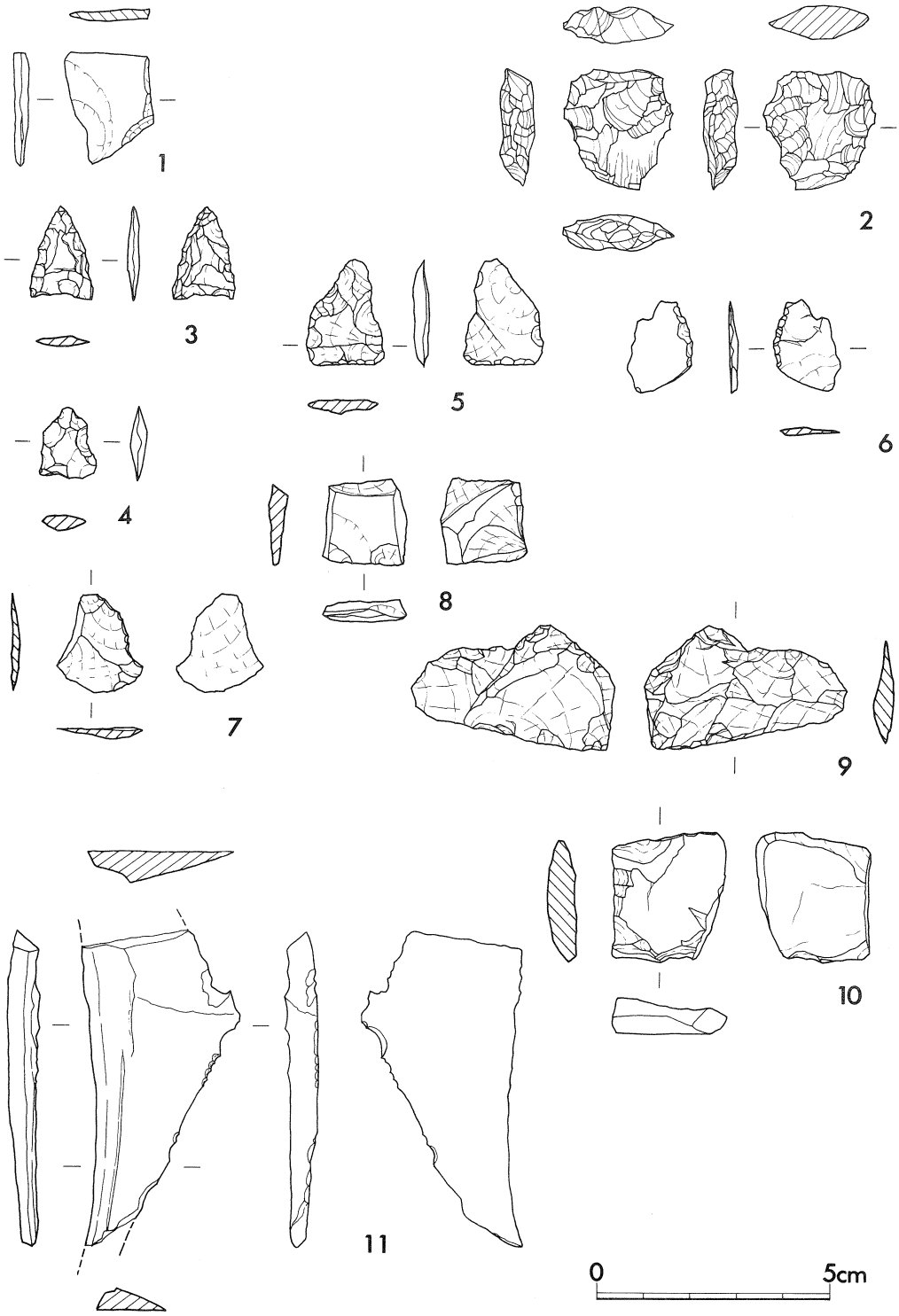
下端には打撃による剝脱が認められる。安山岩製である。

9は横長のスクレイパーで，直線的な刃部には一度粗い調整剝離が行われたのち細かい刃部調整が加えられている。背面には二方向からの平面剝離がそのまま残っており，両面ともに図の上側にも少量の調整剝離が認められる。10は大きな剝片の末端を断ち切り，その先端を未調整のまま刃部として使用した縦長のスクレイパーで，背部は磨滅してつるつるしており，刃部には若干の刃こぼれが認められる。9・10ともに安山岩製である。

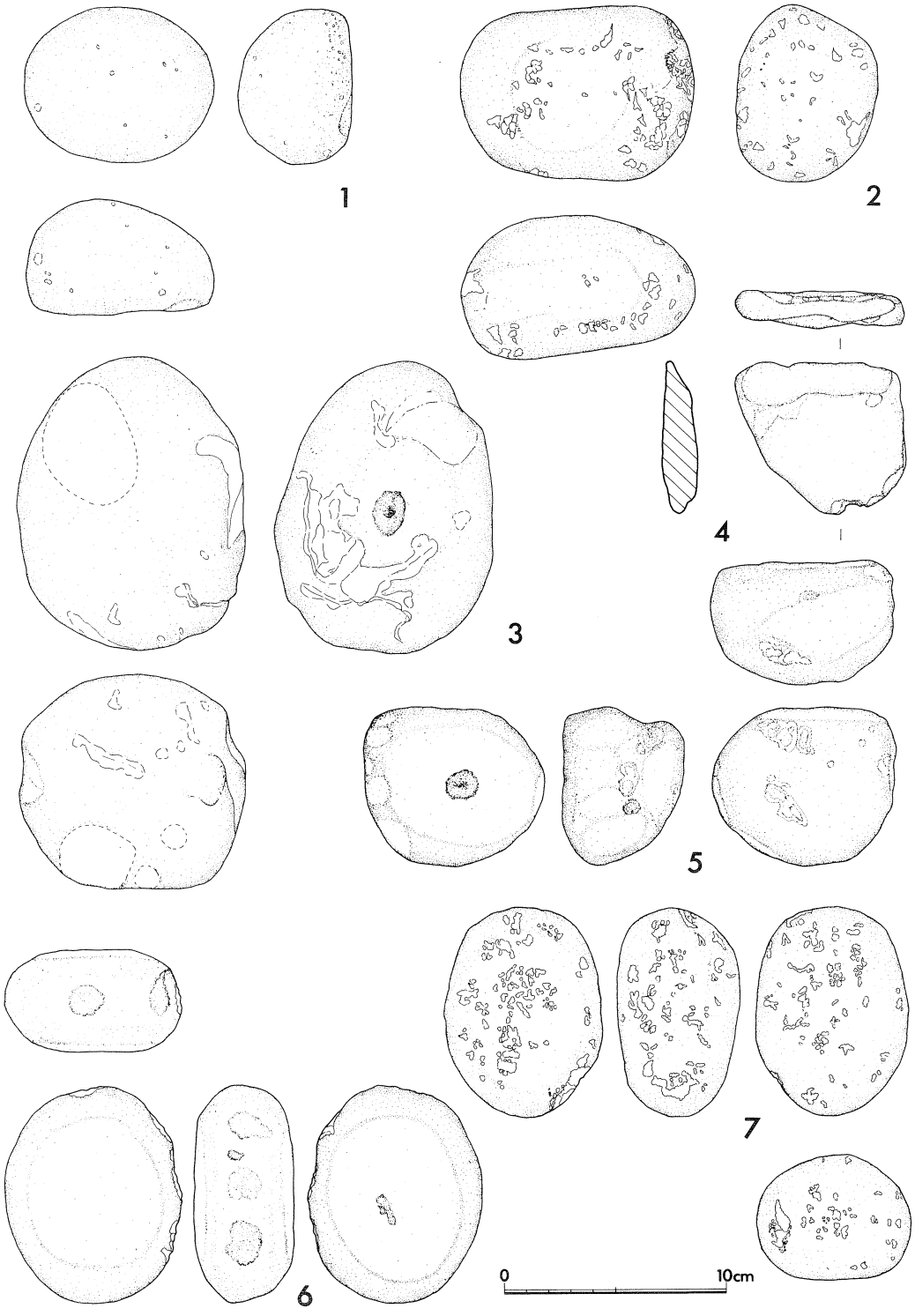
第55図1は結晶片岩の河原石を利用した石斧で，幅広の端部に斜めに剝離を加え，刃部を形成している。基部側には全く加工を加えておらず，端部に一部欠損面がある。全長11.9cm，最大幅5.4cm，厚さ3.8cmを測る。2も結晶片岩製の石斧で，やはり転石を利用して刃を施しているが，剝離は小さく磨滅も進んでいる。両側面には敲打痕の残るところがあり，特に図の左には若干の刳り込みを設けている。この刳り込みに対応するように右側面にも若干凹んで磨滅したところがあり，この部分で柄に緊縛されたものと考えられる。全長9.8cm，最大幅4.0cmを測る。D～G区から出土した石斧は，このわずか2点のみで，しかも転石を利用しているのが特徴的である。石材も安山岩を使用せず，結晶片岩を利用する。これらの結晶片岩は，江津市から浜田市にかけて，また那賀郡三隅町から益田市にかけての地域に比較的まとまって分布する三郡変成岩といわれるもので，郷路橋遺跡が所在する瑞穂町市木周辺では産出されない岩石であり，これらの地域から持ち込まれたものである。

第54図，第55図5～7は磨石，敲石類で，いずれも両方を兼ねている。材質に細粒閃緑岩（第54図1），アプライト質細粒閃緑岩（第55図6），閃緑岩（第54図2・3，第55図7），花崗閃緑岩（第54図7，第55図5），細粒花崗岩（第54図4・6）斑状花崗岩（第54図5）などがあり，当遺跡周辺で入手がいくらでも可能な閃緑岩，花崗岩が専ら使用されている。第54図4を除いて，いずれも平面楕円形あるいは卵形の円礫で比較的厚みのある石が多く，片面は丸く，もう片面は平坦という特徴がある。その中で第54図6，第55図6は比較的扁平で，特に前者は両面とも使用により著しくつるつるしている。敲打痕は，周縁部の比較的尖った部分を中心に周縁全体に及ぶものが多く，もちろん第54図2・7，第55図5・6のように平坦面も用いられている。第54図3・4，第55図7は平坦な面の中央に凹部ができている。第54図1のみE区出土で，その他はF区の出土である。

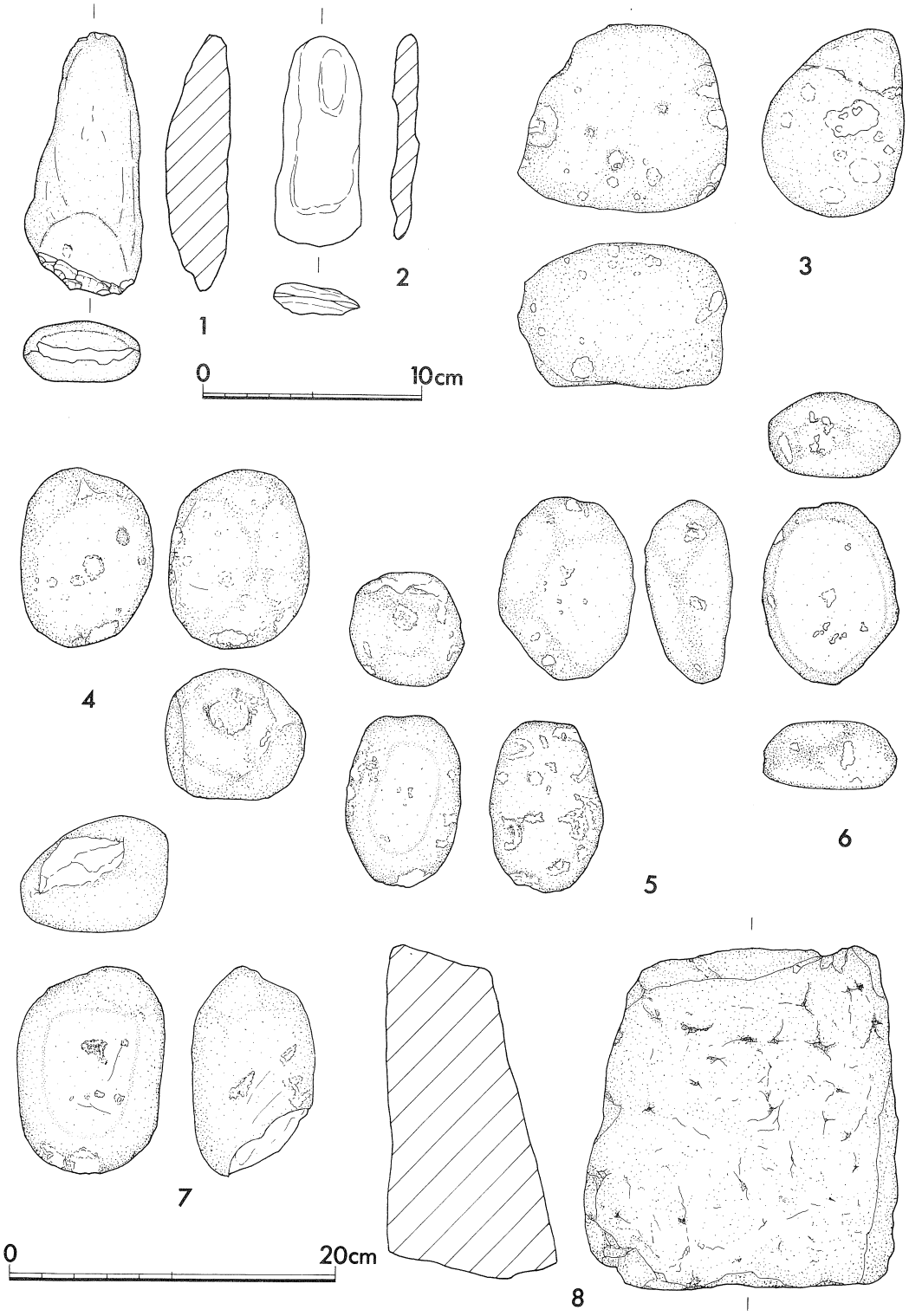
第55図3・4は閃緑岩製の敲石で，磨石として用いたかどうかは判然としない。全体に敲打痕が散在する大形の重い石である。3はF区SK02の底から出土したもので，4はSK01の扁平な石の直下にあったものである。8は斑状花崗岩製の石皿と考えられるもので，図の面の表面がかなり滑らかになっている。



第53図　E・F区第1黒色土出土石器実測図(1)



第54図　E・F区第1黒色土出土石器実測図(2)



第55図　E・F区第1黒色土出土石器実測図(3)

2．B・C区の調査

(1) 土層と遺構面

昭和62年度のC区の確認調査において，C－4グリッドで地表下30cmまで耕作土と床土があり，その下に茶褐色土（厚さ約20cm），暗茶褐色土（10cm），赤褐色砂質土（10cm）黒褐色土（30cm）がほぼ水平に堆積し，黒褐色土の下には黄褐色砂礫層が堆積することが確認された（図版48）。このうち，第6層の黒褐色土からその下面にかけて縄文時代後期の遺物が出土し，下面には遺構も存在することが確認できていた。昭和63年度には，D～G区の発掘調査と並行して重機による表土掘削を行ったが，その際，C－4グリットを貫いて北東から南西に向かって黒褐色土が厚く堆積し，その他の部分では比較的薄い堆積であったり，部分的にはほとんど堆積のないところが存在することも判明した。また，62年度調査では黒褐色土より下から遺物が出土しただけであったが，63年度の本調査では，C区南西端の黒褐色土の堆積の薄いところでは上層の赤褐色土（あるいは赤褐色砂質土）にもかなりの遺物が含まれていた。

赤褐色土と黒褐色土を除去した結果，下層の黄褐色砂礫層は全体的には南から北に傾斜するが，調査区南半では南西から北東に向けて礫のない砂層だけの溝状の窪みが走り，北半ではそれが調査区東端を，北に向きを変えて伸びるとともに，南東側から北西隅に向って別な窪みが伸びていることが判明した。これらの窪地以外は大小の礫に覆われ，この礫塊と砂の窪みの関係は，あたかも川の氾濫原をみているかのようである（第56図，図版49－2）。

(2) 遺構

黒褐色土下面で検出した遺構は，いずれも上述の砂層部分に掘り込まれており，その大半はピットと土壙である。このうち土壙は，C区南西端の一番標高の高い部分に集中し，ピット群はC－4グリッドから北東側に散在している。特にピット群はC区では砂層の両端，すなわち砂層と礫層との境目あたりに，溝状の窪みと同じ方向に連なっており，いずれも掘り方は円形を呈している。直径は小さいピットで20cm程度，大きいものでは60cm程度とその大きさにはかなりのばらつきが認められ，深さも15cm～30cmと幅が広い。これらのピットから考えられる遺構としては，砂層の両端にそれぞれ走る柵列遺構とか，後述する住居跡状ピット列とかであるが，それ以外ではC区中央付近に砂層に直交して並ぶ柵状のピット列があるのみである。このピット列は直径20～30cmの円形のピットが一直線に並んだもの（第57図H－H′）で，規模は4mである（図版50・51）。

B区（B区は調査区の北側約5分の2の範囲）側では砂層の広がりが少なく，したがってピットも少量で，中央のB－3グリッド周辺で検出できたのみである。総数は10個余りで南北方向に並んでおり，北端にはSK30が接している。ピットは小形のものは直径20～25cmで，大形のものは50～60

cmである。B区のピット・土壙からは遺物は出土していない（第57図）。

土壙（第58図，図版52）

C区南西隅に5個がかたまって検出された。SK25は調査区南端にあり，長径1.8m，短径1.6mの楕円形の土壙である。東側の壁は直立ぎみだが，西側の壁はなだらかで底面はほぼ水平になっている。土壙内部には黒色土と黒褐色土が堆積し，長さ60～80cmの大形の礫がいくつも並び，その間から小礫とともに多数の土器片等も出土した。

SK26は25のすぐ北側に隣接する土壙で，長軸を南東から北西に向けた不整長楕円形を呈している。長さ1.9m，最大幅1.5m，深さ30cmの土壙内には，長さ10～30cmの河原石が20個ばかり底面に重なっており，土器は少量含まれているのみである。SK27はSK26の北にあり，中軸を26と同方向に向けた長さ1.25mの土壙である。北西側で幅50cm，南東側で幅80cmを測る。SK27の北東に位置す

第56図　B・C区黒褐色土下面地形測量図

第 57 図　B・C 区黒褐色土下面遺構実測図

るSK29もこれらと同方向を向いた土壙で，北および西面を自然礫で囲まれている。全長1.4m，最大幅0.7mを測り，底面は北側に向かって傾斜する。これらの土壙にはいずれも遺物包含層と同質の黒褐色土が堆積していたが，SK27には遺物は含まれていなかった。

SK28は，長軸がSK25と同じ南東から北西方向に向いた長楕円形の土壙で，全長1.3m，最大幅0.65mを測るが深さはわずか10cmである。土壙内西側から南にかけて，長さ20～30cmの比較的扁平な河原石が並んで出土したが，遺物は発見されなかった。

SK30はB区で検出された唯一の土壙で，ピット群の北側に隣接する。全長2.5m，最大幅1.3mを測る不整楕円形土壙で，底面はゆるやかに丸味を帯びる。深さ約60cmで，礫や遺物は出土しなかった（第57図）。

住居跡状遺構（第59図）

C－4グリッドにその一部を壊されているが，大小ふたつの円形のピット列である。内円ピット列は，推定で長径2.5m，短径2mの楕円形を呈し，4個のピットと溝状の窪みで構成されている。ピットは直径20～30cm，深さは現状で10～25cmである。外円ピット列は計9個（うち，3個はつながっている）のピットが1～1.2m間隔で並んでおり，ピットの大きさは内円よりも大きく直径30～40cmである。このふたつのピット列はほぼ同心円を呈するが，ひとつの関連した遺構かどうかは不明である。しかし，外円ピット列で囲まれた部分は，周辺に比べて若干低くなっており，遺物の出土も特にこの部分に集中していることから，住居跡，あるいはそれに関連した何らかの遺構であると考えられ，ピット内からも土器片が多数出土する。

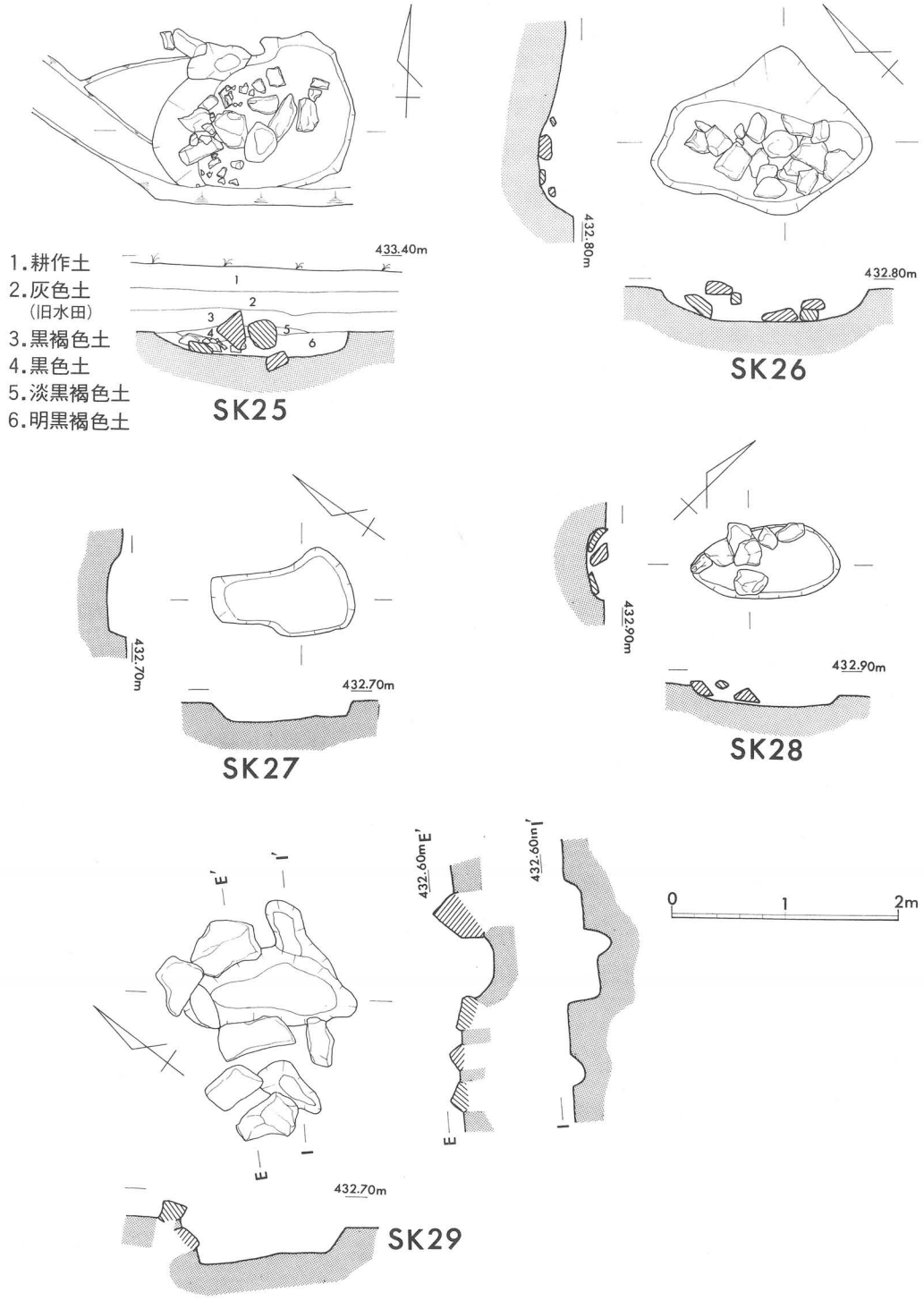
(3)　出土遺物

B・C区では黒褐色土を中心に，その下面から上層の赤褐色土（あるいは砂質土）層までのところで多数の遺物が出土するが，その大半はC区からのものである。ここではC区出土遺物を中心に黒褐色土下面，黒褐色土，赤褐色土の順に説明を加えていきたい。

〈黒褐色土下面出土土器〉（第60図，図版53）

第60図1～10は外面に幅の太い沈線文を施す深鉢形の土器で，口縁は直線的に開く（1）か，若干内湾ぎみに外反（2）する。頸部のくびれは弱く，胴部の張りも強くないようである。内面ナデまたは二枚貝条痕ののち丁寧なナデ調整を行い，外面にはナデまたは二枚貝条痕ののちナデを行う。沈線は幅5～6mmで断面弧状になるものが多い。4は渦巻文，5は波状を呈するが，全体の文様構成は不明である。

11・12・19・21は胎土に雲母片を多量に混入した赤褐色の磨消縄文土器である。11・12はどちらも波状口縁の波頭部で，高く隆起した上端には長さ5～6cmの平坦面がある。この波頭部から沈線

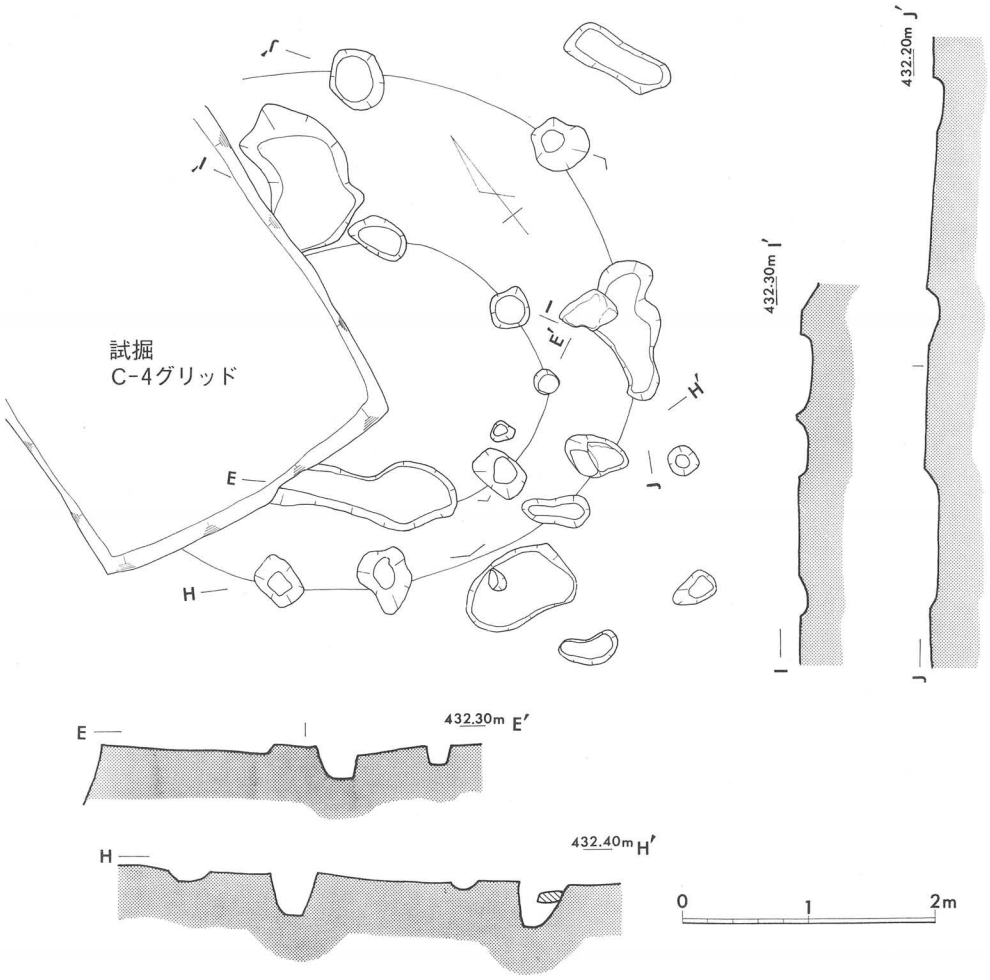


第58図　C区黒色土下面土壙実測図

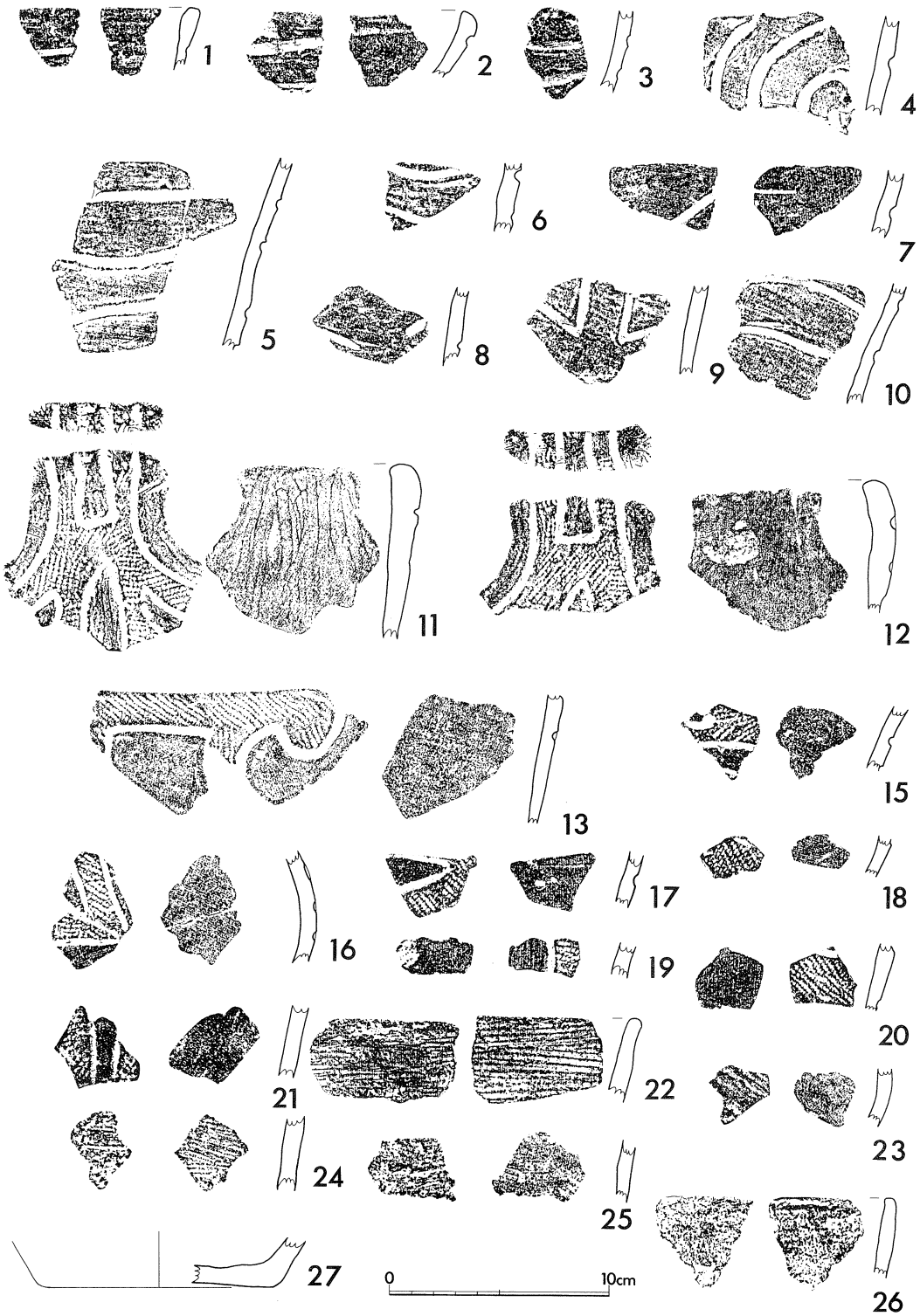
で区画された縄文帯が口縁にそって左右に広がり，直下にはO字文が垂下する。縄文は比較的撚りの細かいLRで，縄文帯の間には丁寧なミガキが施されている。焼成も良好で極めて精緻に作られている。当遺跡出土の磨消縄文土器に，これと同じ胎土，色調を呈するものは出土していない。

これに対し，13～18・20は通有の黒褐色～黄褐色を呈する磨消縄文土器で，幅3～4㎜の沈線にRLの縄文を施す。13は横位の磨消縄文の右端がJ字状文になるものと思われる。

22～26は粗製土器で，22・24は内外面ともに二枚貝条痕，23は内面ナデに外面二枚貝条痕を施しており，その他は内外面ともにナデ調整である。27は底部片で，底面と胴部への立ち上がりの境は丸く作り，底面は若干浮かしている。



第59図　C区黒褐色土下面住居跡状遺構実測図



第60図　C区黒褐色土下面出土土器実測図

〈土壙およびピット出土土器〉（第61・62図，図版54・55）

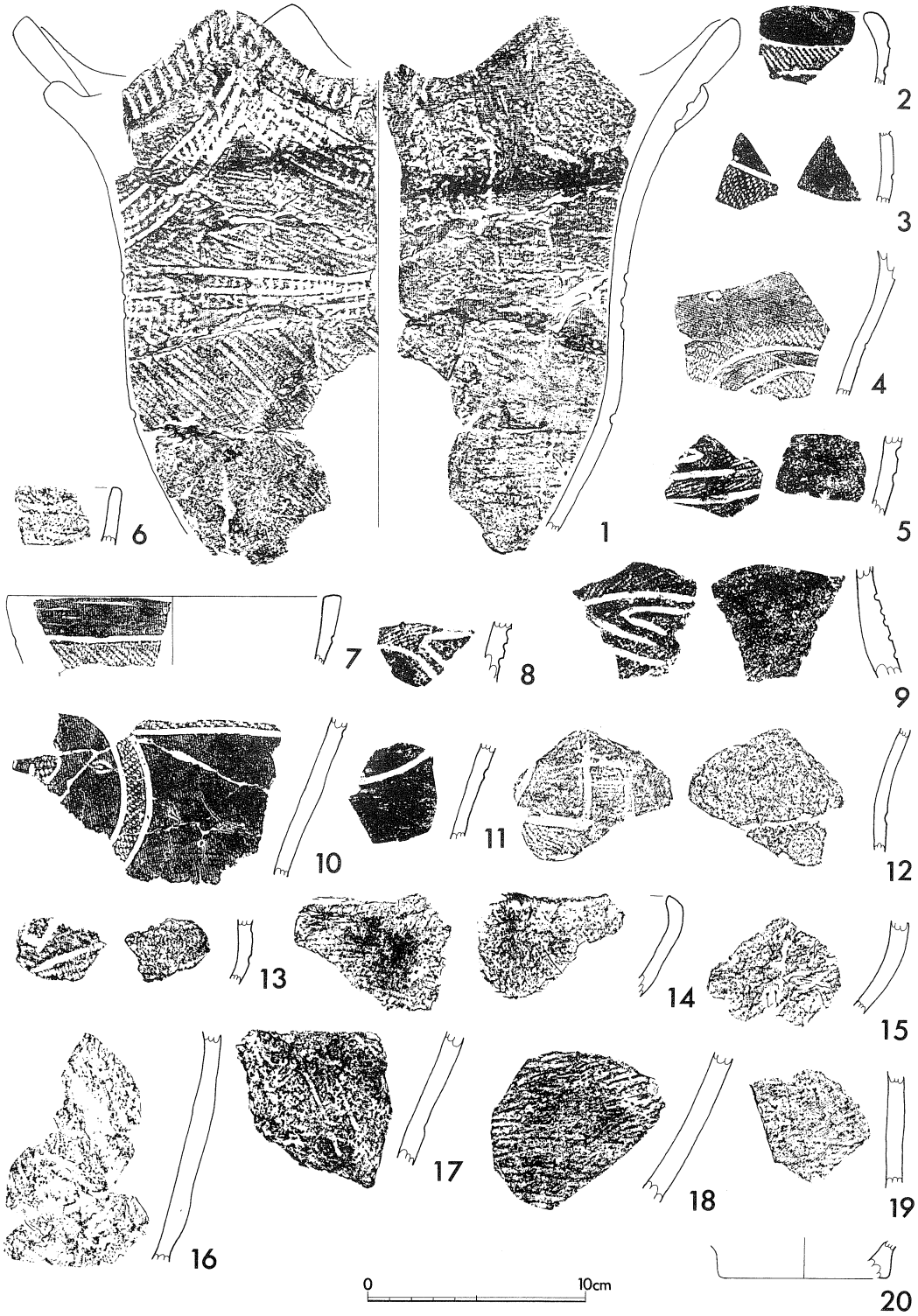
土壙で遺物が出土したのはSK25・26・29で，特にSK25では多数の土器片が出土した。第61図1～11・13～16・20，第62図4・5・7・9がそれで，第61図1のように全形が復元できるものも含まれていた。1は，6個の波頭と，その谷間に小突起をつけた特異な波状口縁を持つ深鉢形の土器で，口縁から胴部中程にかけて，三本沈線と二枚貝腹縁による刺突文が組み合わさったものである。三本沈線は，口縁下では口縁の形態に呼応するように，波頭の下に山形の先端が描かれており，頸部では横位に走っている。貝殻刺突文は，この三本沈線と直交するように，しかも三本の沈線で区画された2つの帯のそれぞれに充塡するように施されており，横位の三本沈線の部分では，貝殻刺突後上端の沈線をもう一度引き直している。横位の三本沈線の一部では，その下側に貝殻刺突文が斜めに徐々に広く食み出したところがあり，三本沈線がさらに斜めに下向していることが推定される。なお，貝殻刺突文は肥厚させた口縁の上面にも施されており，口縁谷部の小突起は断面三角形の粘土紐を口縁から垂下させたものである。器面は，内面が二枚貝条痕ののち丁寧なナデ，外面は二枚貝条痕ののち胴部上半にナデを施しているが完全には消えておらず，三本沈線と刺突文を施文したあとも，沈線からはみ出した刺突文を磨り消すようなことはしていない。

2～4・7・10は器厚5～7㎜の比較的薄手に作られた良質の磨消縄文土器で，2～4・7は深鉢，10は鉢形の破片である。深鉢形は肥厚させた口縁を内傾させて丸味を持たせるもの（2）と，ほぼ直口に近く開口させるもの（7）の2種類があり，頸部はわずかながら窄まる（4）。4はRLの縄文をころがしたのち沈線を入れるが，上端の沈線が施されていない。10はやや深めの鉢の体部片で，幅狭の縄文帯が退化したJ字状文を描いている。これらの磨消縄文は，縄文の施文もミガキも極めて精緻である。

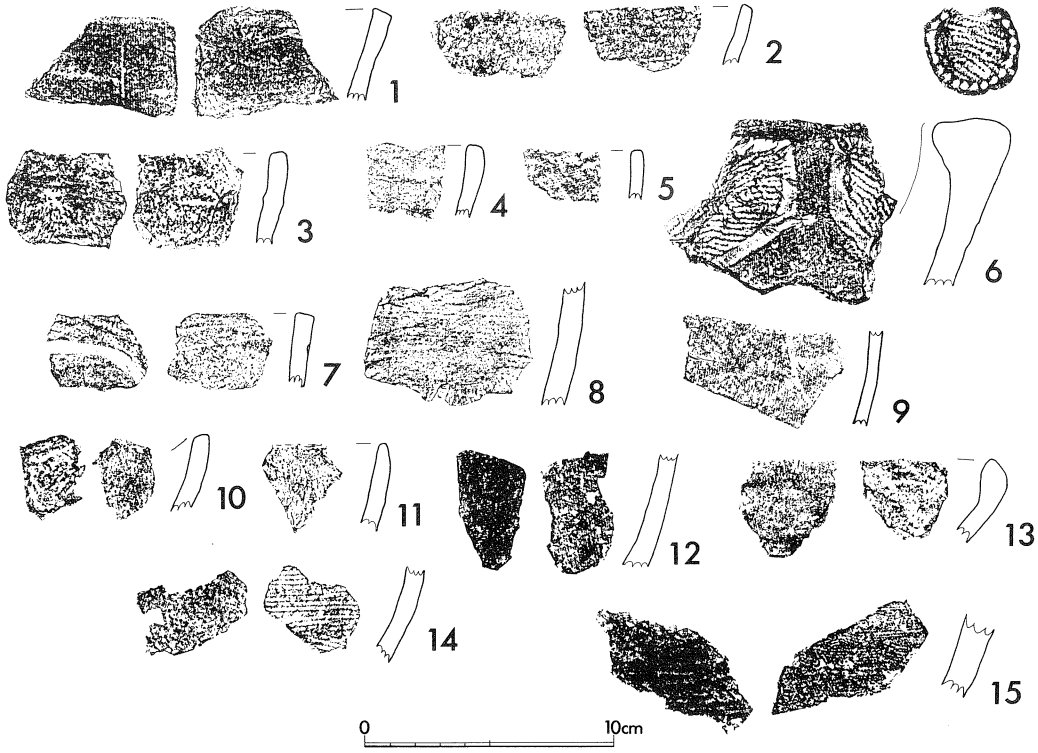
5・8・9は器厚7㎜以上のやや厚手の土器で，横位にレンズ状の磨消縄文を施す。13および第62図7は巻貝による擬似縄文を施した土器で，7は沈線で区画された口縁端側に施されている。11はナデ調整に沈線文を施した土器である。14・第62図4・5は粗製深鉢形土器の口縁部でナデ調整を行うが，14には二枚貝条痕が残っている。胴部片（15・16・第62図9）もナデである。

SK26からは20点余の土器が出土したが，図示したのは4点である。第61図12は深鉢の頸部で，縄文を施したのち，太い沈線による幾何学文様を施す。17～19は胴部下半で，17はナデ，18・19は二枚貝条痕ののちナデを行っている。SK29から出土した土器も細片が多く，第62図10はその中の粗製深鉢形土器である。波状口縁の波頭部で内外面ともにナデ調整である。

第62図1～3・6・8・11～15はC区のピットから出土した土器で，このうち6・13～15は住居跡状ピット列の出土である。粗製土器が多いが，6は磨消縄文のはいった深鉢形の波頭部で，上面には円形の平坦面を作り出し，周縁に円形刺突文を廻らせた中に縄文を施しており，外面は口縁に沿っ



第61図　C区黒褐色土下面土壙出土土器実測図(12・17～19:SK26，その他はSK25)



第62図　C区黒褐色土下面土壙およびピット出土土器実測図
(4･5･7･9:SK25，10:SK29，その他はピット内)

て断面の四角い幅広の沈線を窓枠状に廻らせた中に縄文が施されている。粗製土器はナデ調整のものが多いが，14は内面二枚貝，15は外面巻貝の条痕がそれぞれ観察される。

〈黒褐色土出土土器〉(第63～66図，図版56～60)

磨消縄文土器と沈線文土器，そして粗製土器が出土する。第63図１はＢ区の出土である。

第63図１～29は深鉢形の磨消縄文土器で，口縁は平口縁（1・12）もあるが大半は波状口縁である。磨消縄文には，直線，曲線によって描かれた幾何学文様の中に縄文が施されるもの（4・9・18・22）と，２本の沈線によって区画された文様帯の中に縄文が施されているものの２種類があり，後者の縄文帯が器面を廻るものが中心である。沈線には幅４～５㎜の太いもの（３・19）もあるが，２～４㎜程度のものがほとんどで，沈線を含めた縄文帯の幅も，1.2～1.5cmのやや細めのものと1.7～2.0cmの幅広のものの２種類がある。いずれも破片のため文様の全体的な構成は把握できないが，波頭部の文様として，縄文帯が山形にはいるもの（６・13）と，渦巻文や多条の縄文帯が集中して

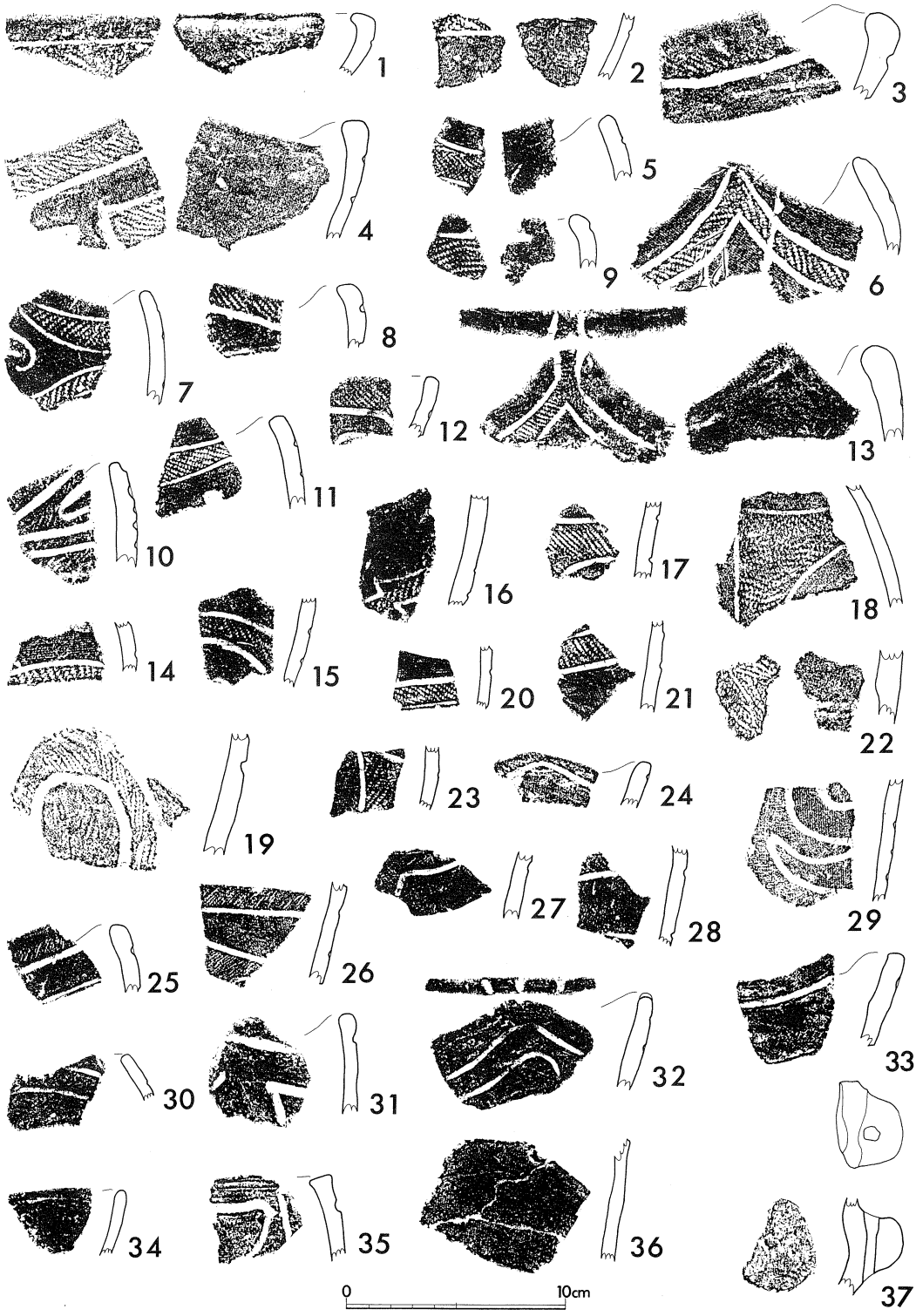
施されるもの（7・10）などバラエティに富んでいる。縄文の撚りはLRとRLの両方が認められ，RLがやや多いようであるが，25～29の特に細かい撚りの縄文はLRである。

第63図30～33・35・36，第64図1～3・5～10は，無文地あるいは条痕地に沈線文が施された土器群である。口縁は平口縁と波状口縁があり，幅広の沈線で磨消縄文と同じ文様を施すが，縄文は施されていない。第63図34は精製だが文様のないもの，第64図1は口唇部に幅広の工具による斜めの刻目と，外面にかなり太い沈線が施された土器である。また，第63図37は精製鉢形土器の胴部に取り付けられた，上下に穿孔された半円状の把手で，第64図22は縁帯文土器の口縁部に付けられた把手である。後者の沈線間には縄文が施されているものと推定されるが，遺存状態が悪く識別できない。

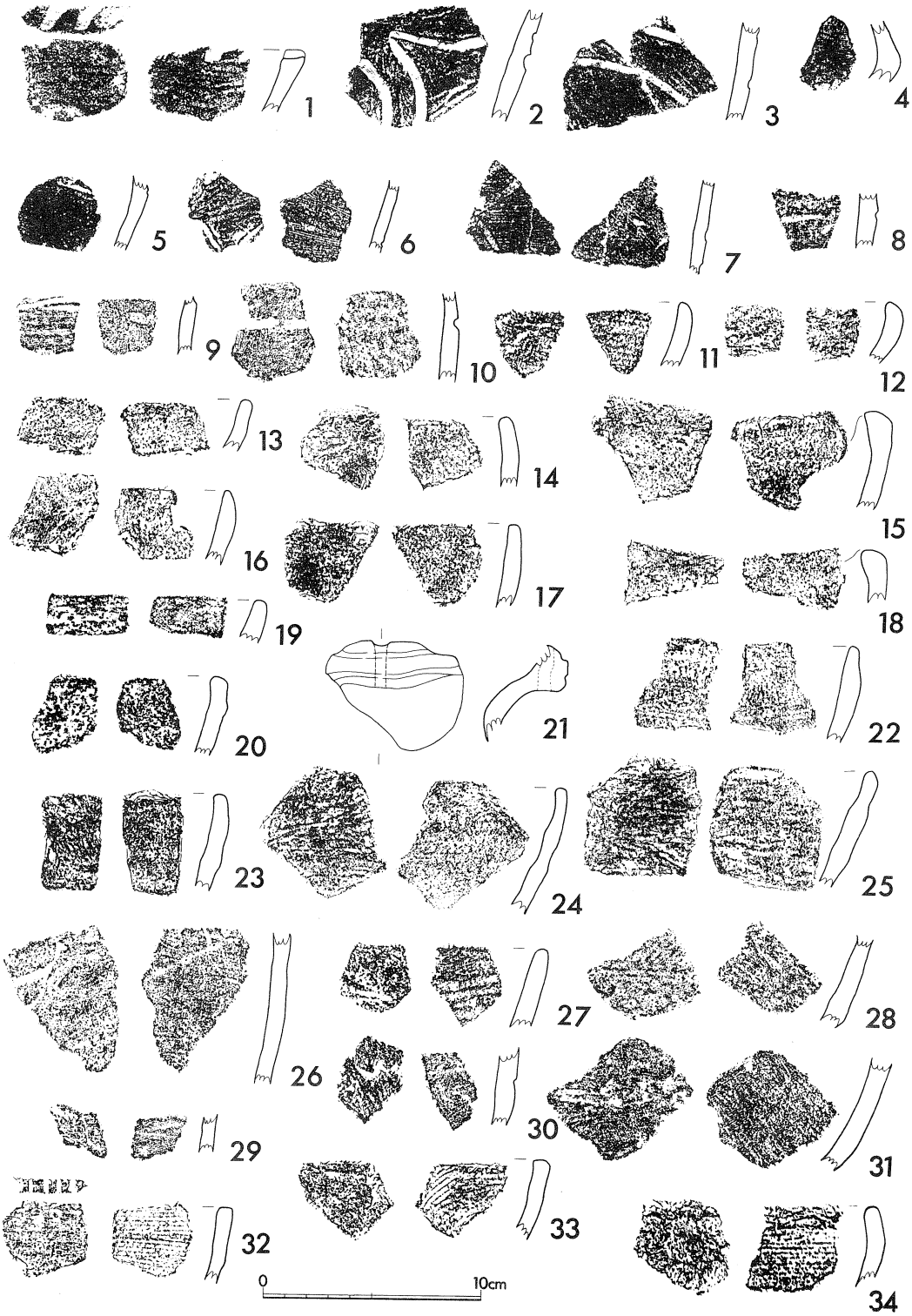
粗製土器もかなり出土しているが，いずれも小片である。器形的には，口縁は精製土器ほどにキャリパー状に内弯するものはなく，若干内湾ぎみに開口するものが多い。頸部はあまりくびれず，直立に近い形で，胴部も大きな張りは認められない。底部は平底である。器面調整にはかなりのバラエティがあり，第64図11～31は内外面ともにナデ調整を行うもので，そのうち24～31はナデの前に二枚貝による条痕調整も行っている。第64図32～34，第65図1～4は外面ナデ，内面横方向の二枚貝条痕調整で，第65図5～11はその逆に内面ナデ，外面二枚貝条痕を行うが，後者の場合，基本的には内面を二枚貝あるいは板目状工具で調整した（9～11）あとナデるものが多い。口縁端の形状がよくわかる土器は少ない。波状口縁よりも平口縁の方が多いようで，第64図32は口縁端に刻目が施されている。第65図12～27，第66図1～7は内外面二枚貝条痕で，口縁から胴部上半にかけては横位またはやや斜行，胴部下半から底部にかけては斜めまたは縦位に施される場合が多い。また，第66図8・9のように外面にケズリを施す土器も多量に出土しており，内面は二枚貝条痕ののちナデを行う場合が多い。

底部はいずれも平底で，高台のように底面の周縁に斜めあるいは下方に張り出しを設けて底部を高くしたもの（第66図17・18・20～23）と，台を付けず，底面を上側に窪ませるもの（11～13・15・19・24）の二通りがある。器面調整は大半が内外面ともにナデ調整であるが，11・12のみは外面ヘラミガキが施されており，精製土器の底部片である。底面径は7.5～9㎝が最も多く，10㎝前後のものがこれに続いている。

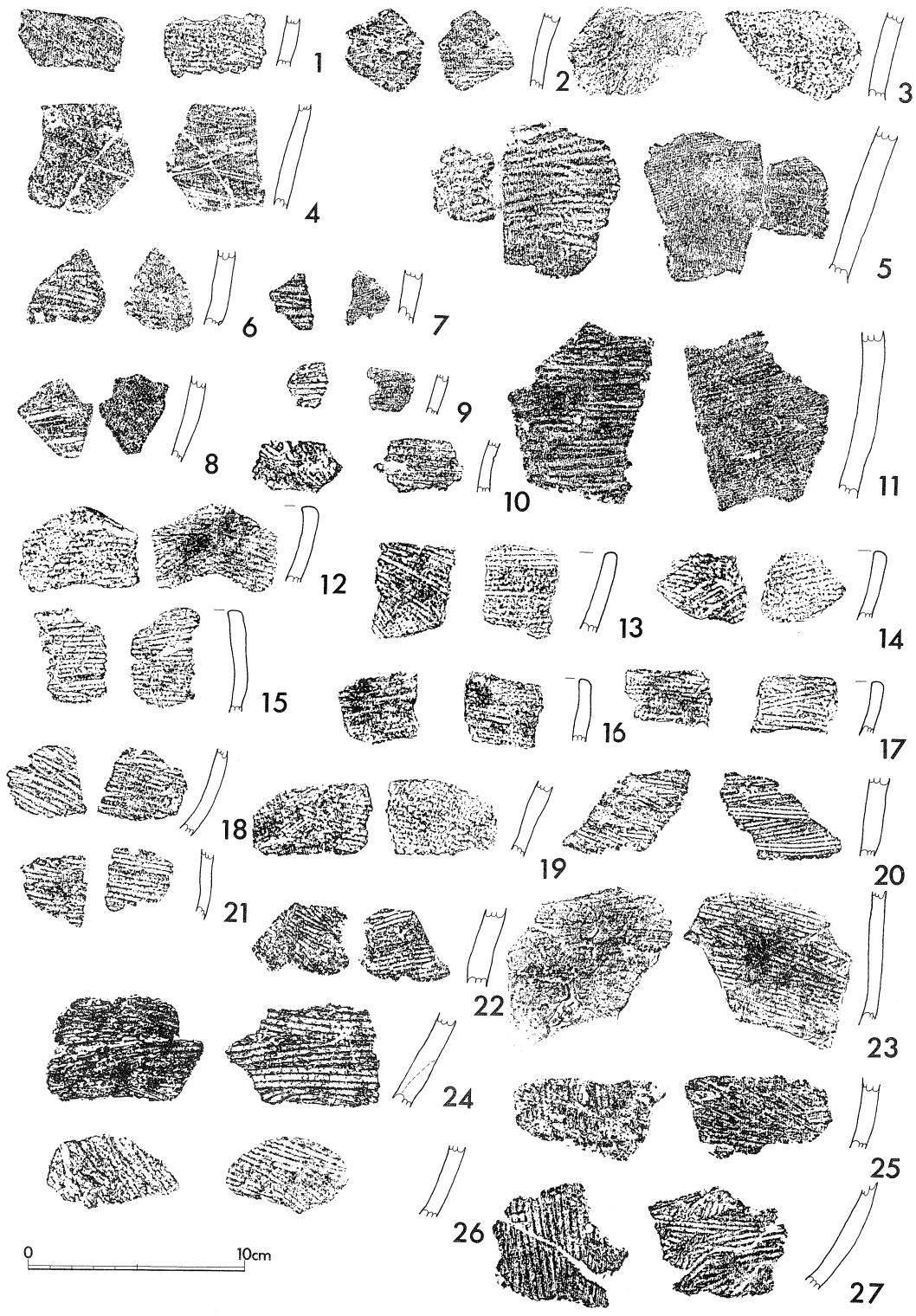
なお，第66図10は，肩部に巻貝による凹線を3条ほど廻らした，後期後葉～晩期と考えられる深鉢形土器である。凹線の継ぎ目部分に相当し，下段は一直線となるが，中・上段は凹線の端部が下段の一点に集中する形で下に曲がっており，凹線の集中部に巻貝の押圧などは認められない。凹線から上は丁寧なナデ調整で，凹線下側の肩部に稜線はない。内面には細かな二枚貝条痕調整が施されており，外面淡黄褐色，内面黒色を呈する。B・C区では，この時期のものはこれ1点のみである。



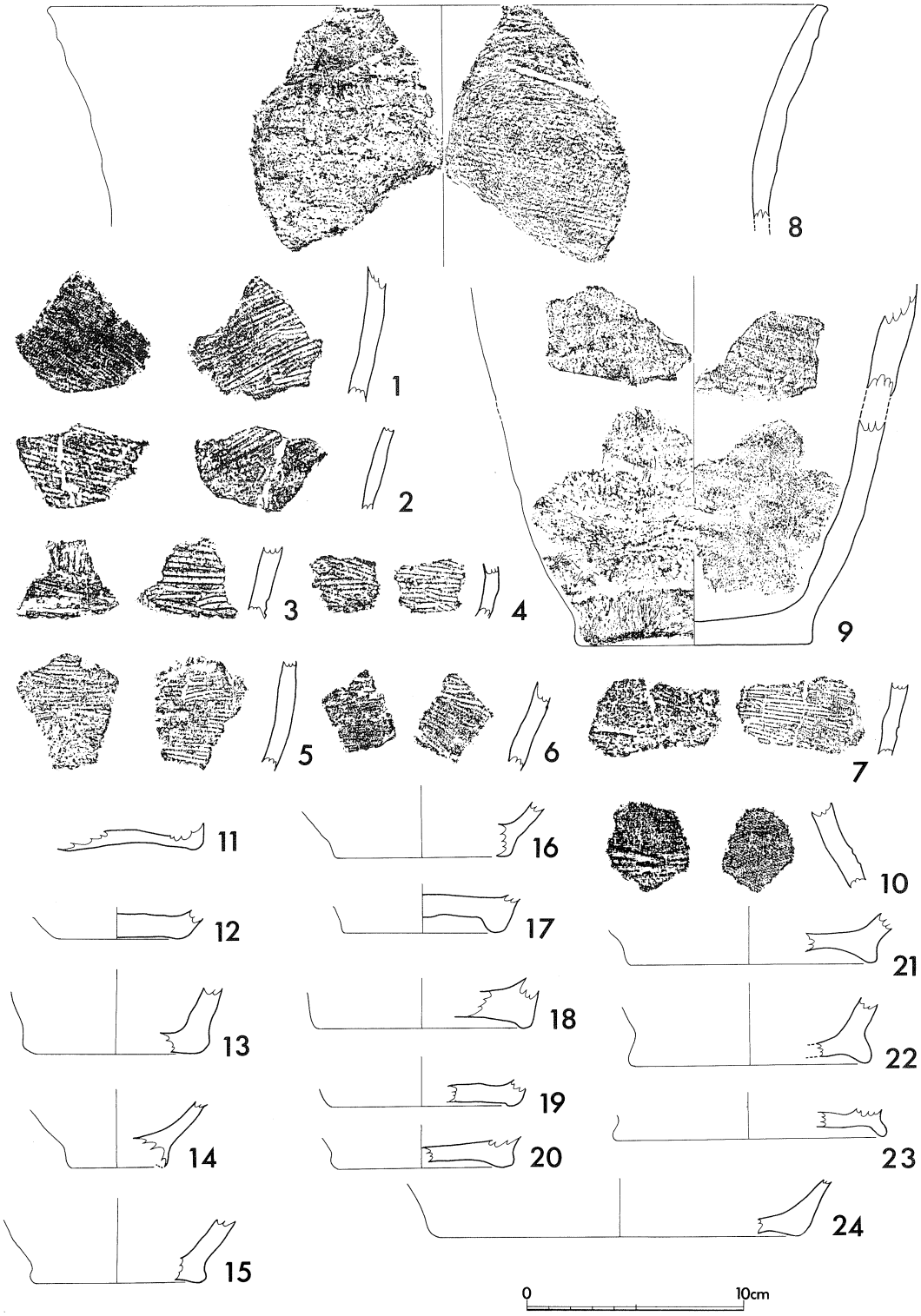
第63図　C区黒褐色土出土土器実測図(1)



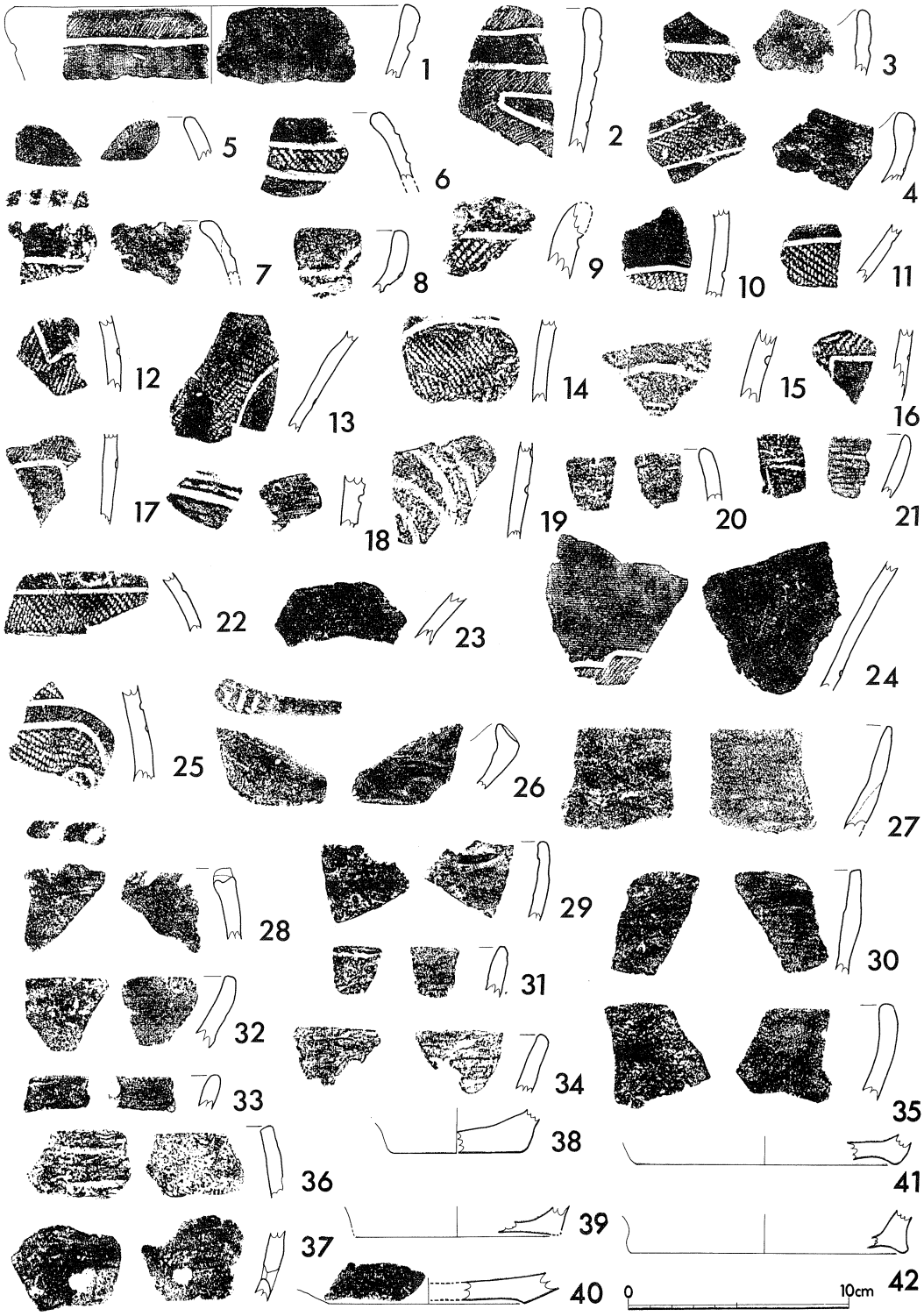
第64図　C区黒褐色土出土土器実測図(2)



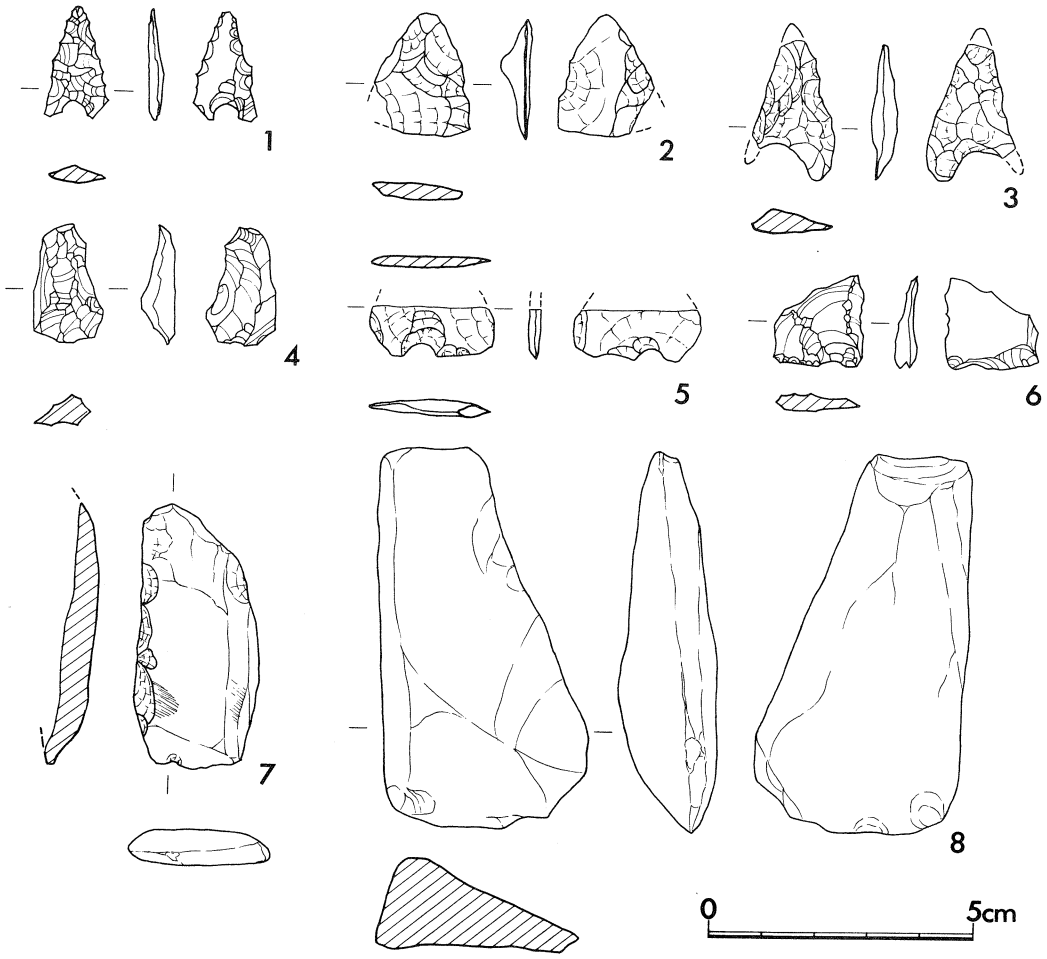
第65図　C区黒褐色土出土土器実測図(3)



第66図　C区黒褐色土出土土器実測図(4)



第67図　C区赤褐色土出土土器実測図



第68図　C区黒褐色土出土石器実測図(1)

〈赤褐色土出土土器〉（第67図，図版61）

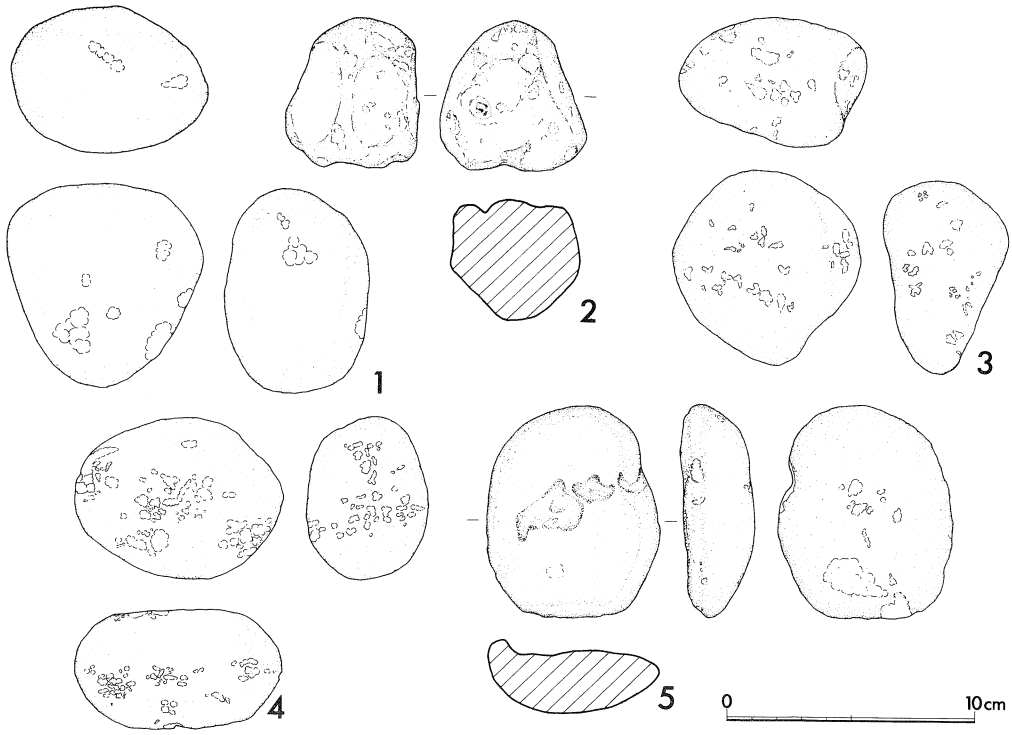
下層の黒褐色土と同様，磨消縄文土器，粗製土器類が出土するが，沈線文土器は含まれていない。磨消縄文は，器形，文様構成など黒褐色土出土土器とほぼ同じ特徴を有しているが，いくつか補足すると，1・2・24は明瞭な沈線によって区画された帯の中に，かなり撚りの細かいLRの縄文を施した土器で，磨消部のミガキも極めて丁寧である。淡褐色を呈しており，1の磨消部には赤色顔料のような赤い色素の付着が認められる。7は，ボール状に内湾する鉢形の土器の口縁で，口唇部に押圧状の刻目がある。25はJ字状文の面積の広い方に縄文がはいっている。8は小片でわかりづらいが，上の沈線から口縁側へ小さい入組文が施されていると考えられる。なお，10と13はSK25から出土した磨消縄文（第61図10および4）と同一個体である。また，19も第63図29と同じ文様が施されており，同一個体ではないものの，極めて近い関係の土器である。

粗製土器はナデ調整または二枚貝条痕ののちナデ調整を行ったもので，器形的には黒褐色土出土のものと変化ないが，26は波状口縁の波頭部に，28は平口縁の口唇にそれぞれ刻目が施されている。底部は底面径６㎝程度の小形のものから12.5㎝程度の大形品まで様々だが，底の分厚い土器は比較的少なく，40のような精製浅鉢形土器片も認められた。

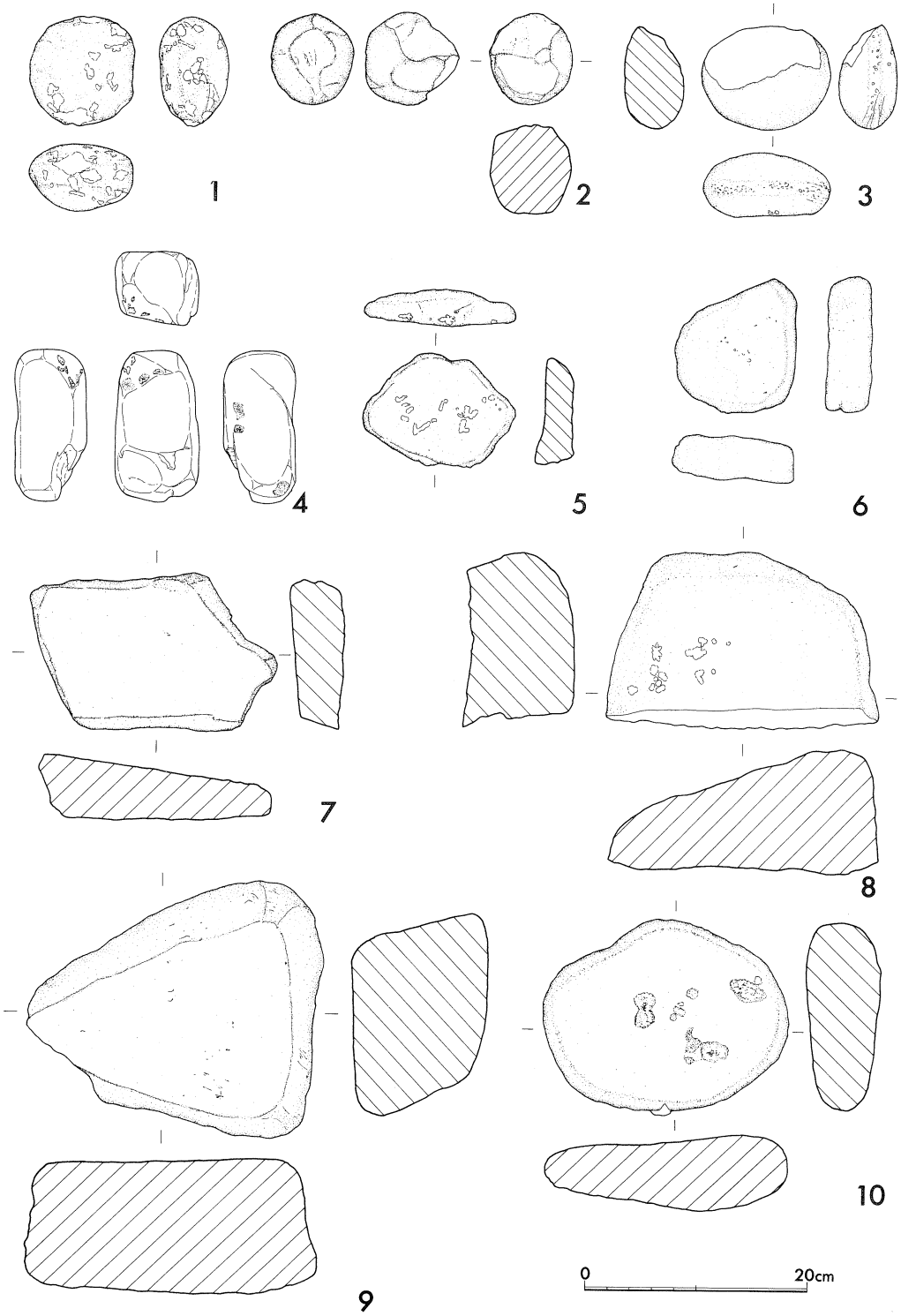
〈黒褐色土出土石器〉（第68～70図，図版62・63－1・64）

石器は遺構から出土したものはSK25から出土した石鏃（第68図３）１点のみで，その他は包含層の出土である。

第68図１～３・５は石鏃で，１は黒曜石製，２・３・５は安山岩製である。１は片面に縦長剝片の主要剝離面を大きく残し，一側縁から調整剝離を加えるとともにバルブ部分にわたぐりを入れたもので，全長20.5㎜，重さ570㎎を測る。２は平基式の剝片鏃でやはり主要剝離面を大きく残している。全長22㎜，現重量570㎎を測る。３はわたぐりが中軸線上に左右均等な位置に施されておらず，かえりが不均一になっている。側縁は若干内湾ぎみに変化する。現存長26㎜，現重量1,070㎎とやや大形である。５はわたぐりの基部から切損したもので脚部しか残っていないが，両面に大きな剝



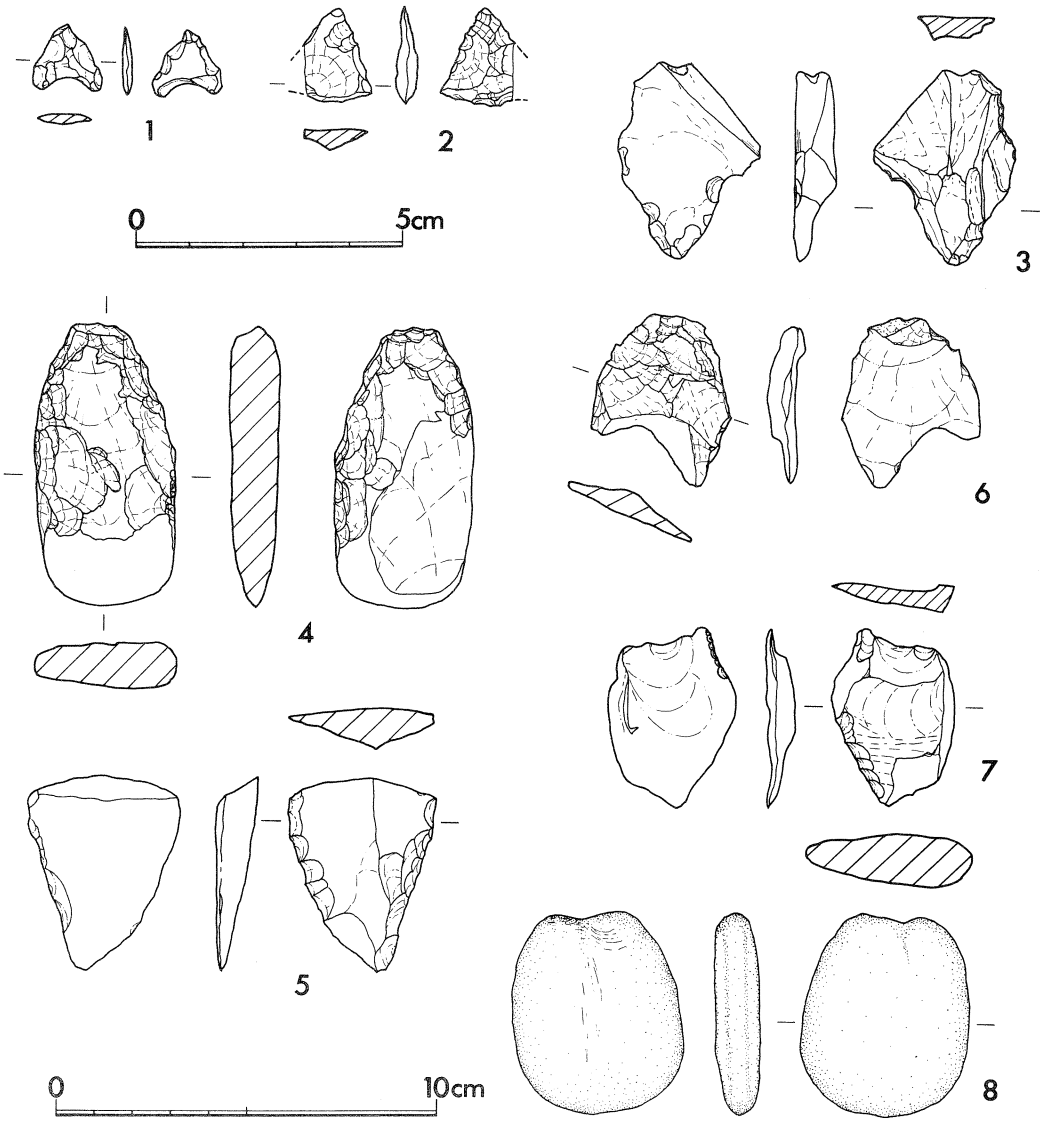
第69図　C区黒褐色土出土石器実測図(2)



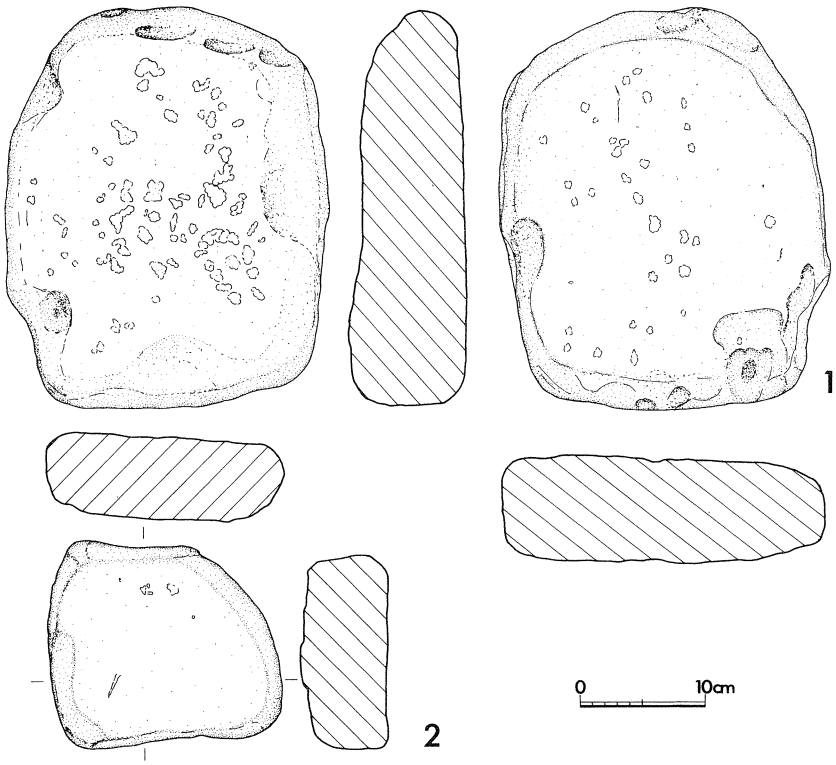
第70図　C区黒褐色土出土石器実測図(3)

離面を残しているのが観察される。

4は大分県姫島産の黒曜石の剝片で，縦長の剝片に粗い調整剝離が加わっているが用途は不明である。この姫島産黒曜石の当遺跡での出土点数は4も含めて総数6点ほどで，4以外はいずれもフレイク類である。4以外の出土地点は，F区火山灰下層（早期）で1点，F区第1黒色土（晩期），C区黒褐色土で各々2点である。6は小形の刃器で，横長の小剝片に平面剝離を加え，下端にブランティング状の剝離を施したものである。透明感の少ない黒曜石製である。7は安山岩製の小形磨



第71図　C区赤褐色土出土石器実測図(1)



第72図　C区赤褐色土出土石器実測図(2)

製石斧片で，当初は全面研磨されていたと考えられるが，欠損後側面に調整剝離を加え，スクレイパーとして再利用している。8は粘板岩製の河原石を転用した石斧で，上端の尖った部分を切断して基部とし，刃部にも若干の調整剝離を加えている。全長6.9cm，最大幅3.9cmを測る。

第69図および第70図1～3は敲石，磨石類で，花崗岩（第69図1～3），閃緑岩（その他）製の比較的丸い河原石を利用し，平らな面を磨面として使用し，敲石として使用する場合は特に部位に限定されない。第70図1・3は扁平な楕円形の閃緑岩で，表裏両面ともよく使用されて磨滅が進み，周辺部は敲打によって潰れて平らな面ができている。第70図4～10は，これらを受ける石皿類で，4～6は小形品，7～10は大形品である。石材としては閃緑岩（4・5は石英閃緑岩）が多く使われるほか，溶結凝灰岩（6～8）も利用されている。4は方柱状の石材の細長い面2面を使っており，その他は図の面を主に使用し，大形品は特に平坦面の端まで使用されている。

〈赤褐色土出土石器〉（第71・72図，図版63－2・64）

赤褐色土からは，石鏃，石斧，スクレイパーなどの刃器類のほか，大形の石皿なども出土した。

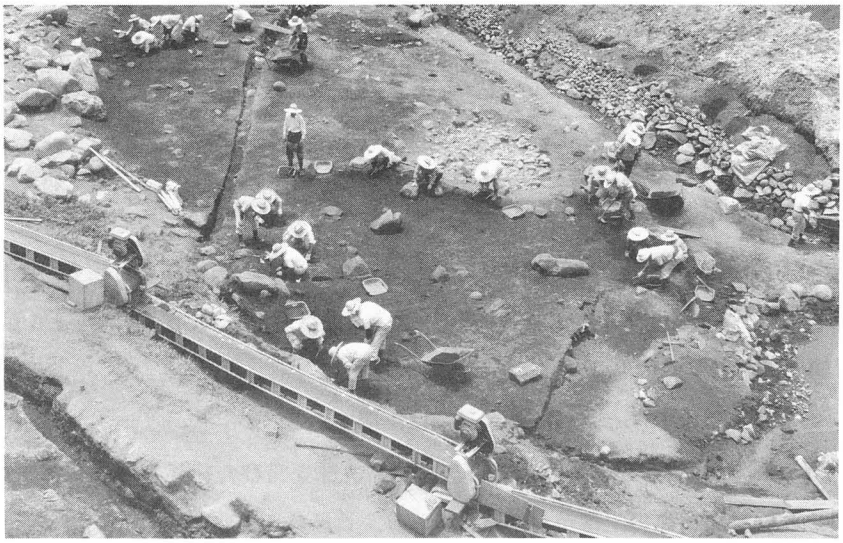
第71図１・２はともに安山岩製の石鏃で，１は全長1.17㎝，重さ200㎎の小形の鏃である。製品が小さいうえ風化が著しいため，調整の具合がはっきりわからないが，比較的粗い調整で済ませている。２は平基式の三角形鏃で，片面に主要剥離面がほとんど無調整のまま残り，背面にのみ粗い加工が加わる。３・６は安山岩製の石錐と考えられるもので，３は不定形な剥片の扁平に尖った部分を利用して，石鏃の側縁と同じような細かい刃部調整を加えており，先端付近は磨滅して丸くなっている。６も同様に剥片の先端の薄くなった部分を利用して，主に背面側に調整剥離を施し，錐としたものである。３・６とも主要剥離面にはほとんど手を加えていない。また６では，もう１個の突出部分にも少量の刃部加工を施して使用しており，先端部の磨滅がどちらも顕著である。

４は安山岩製の局部磨製石斧で，全長7.4㎝，現重量55.5ｇを測る。小形短柵状の石材を用いて両側から調整剥離を加えたのち，敲打によって器面を整えている。研磨は刃部のみで，図の右面にみえる大きな剥離は，完成後にできた剥離面である。基部側は徐々に細くなっており，先端は意図的に折られている。

５・７は安山岩製のスクレイパー類で，５は縦長の大きな剥片の途中から切断し，背面の両側縁と腹面の一側縁に刃部調整を施したもので，７は同様の剥片の背面を刃部加工したものである。

第72図は大形の石皿で，１はトナール岩質閃緑岩，２は花崗閃緑岩を用いる。１は両面，２は図の面のみ使用されており，１には敲打による表面の剥脱痕も顕著に認められる。

（足立克己）



郷路橋遺跡発掘調査風景

第３節　室町時代の遺構・遺物

１．Ｅ区掘立柱建物跡（第73図）

掘立柱建物跡は，２棟が重複する形で検出された。いずれも，調査範囲に制約があるため，建物全体の様子は不明であるが，SB01が主軸を北東から南西方向にとっているとみられるのに対し，SB02は南北方向となっている。SB02の東側には，これとほぼ主軸をそろえるように柵列・SA01が営まれているが，0.4mと近接しており，同時に存在していたとは考えにくい。

SB01は，検出した範囲では，３間×１間分の建物で，東西5.5m南北2.0mを測る。東西方向の柱穴間の心々距離は，Ｐ1－Ｐ2が2.0m，Ｐ2－Ｐ3が1.57m，Ｐ3－Ｐ4が1.7mである。柱穴はいずれもやや不整な円形で，大きさはＰ1が径57～68cm・深さ45cm，Ｐ2が径51cm・深さ28cm，Ｐ3が径65～82cm・深さ14cm，Ｐ4が径34～57cm・深さ42cmである。出土遺物としては，Ｐ1より染付碗小片，Ｐ2より染付碗２個体分が検出されている。

SB02も不明な点が多いが，３間×１間分の柱穴がみられる。規模は，南北6.3m，東西3.0mで，柱穴間の心々距離はＰ5－Ｐ6が2.0m，Ｐ6－Ｐ7が2.3m，Ｐ7－Ｐ8が1.7m，Ｐ8－Ｐ9が2.6mである。柱穴は不整な円形を呈し，大きさはＰ5が径37cm・深さ17cm，Ｐ6が径51cm・深さ28cm，Ｐ7が径57cm・深さ28cm，Ｐ8が径48cm・深さ22cm，Ｐ9が径65cm・深さ1.0cmである。これらのピットからは，遺物は出土していないが，SB02の内側にあるP10からは備前壺の破片が出土している。

SA01は，南北方向に並ぶ柵列とみられ，調査区内では7.7mが確認できる。各ピット間の距離は，P11－P12が2.15m，P12－P13が３m，P13－P14が2.4mである。ピットはいずれも円形で，大きさはP11が径25～42cm，深さ14cm，P12が径28～40cm，深さ14cm，P13が径60cm，深さ34cm，P14が径57cm，深さ42cmである。

２．出土遺物（第74図）

遺物は，いずれも小片が多いが，中国製白磁及び白磁青花碗，備前擂鉢，同壺，肥前系染付皿，同碗が出土している。このうち，遺構に伴うものは，第74図－３・４がＰ2，同－５がＰ1，同－８がP10より検出されたものである。

中国製白磁１は，皿の小片とみられるが詳細は不明である。

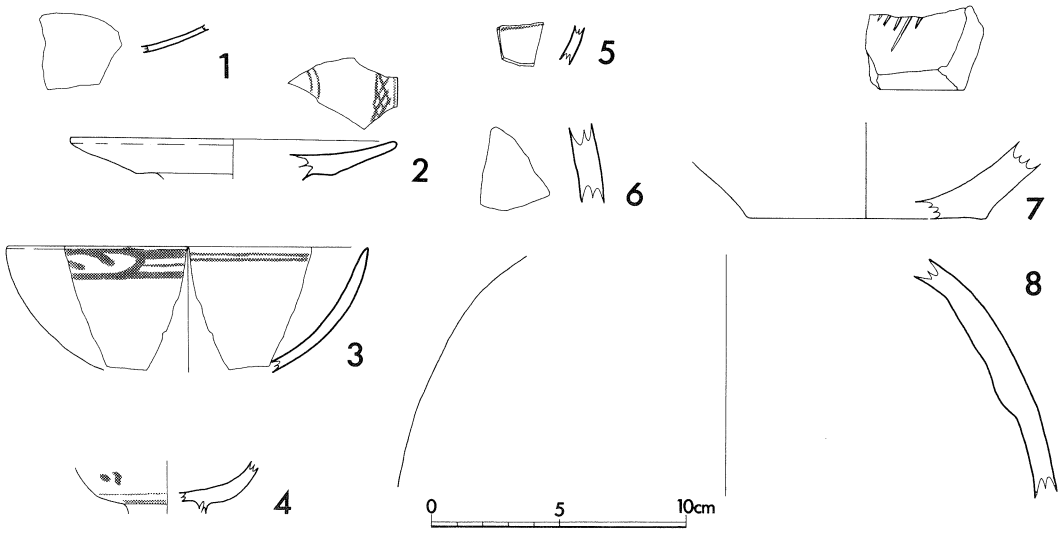
中国製白磁青花３・５は，碗の小片である。３は，丸味を帯びた体部を有し，復元口径14.2cmを測る。内外面には，灰白色の上釉がかけられており，口縁外面に唐草文様の文様帯が淡い青色で染付されている。５は，４と同様な色調を呈し，同一個体ともみられるが詳細は不明である。

第73図　E区第1黒色土下面掘立柱建物跡実測図

備前は，壺と擂鉢の小片がある。7は，擂鉢の在部で，粗い擂り目がみられるが見込みには及んでいない。よく使用されているため，擂り目はかすかに残る程度である。胎土中には，4㎜までの砂粒を含み，焼成は良好で，色調は灰茶色を呈する。6・8は壺の肩部である。よく張った丸味を帯びた形を呈し，外面には灰白色の自然釉がかかっている。胎土は2㎜大までの砂粒を含み，焼成は良好で，色調は外面が暗褐色，内面が黒褐色を呈す。

肥前系染付は，皿と碗がある。2は，皿の小片で，復元口径12.9cmである。内外面には灰白色の上釉がかけられており，口縁内面には四方襷文が描かれている。4は，碗の底部付近の破片である。内外面に白色の上釉がかけられ，外面には意匠は不明であるが文様がみられる。

以上の遺物の時期は，中国製白磁青花3・5が16世紀中葉，備前6・7・8は室町期，肥前系染付は江戸時代のものと考えられる。掘立柱建物跡に伴う遺物としては，P2で肥前系染付が出土しているが，これは混入品とみられ，中国製白磁青花，備前がその時期を示す遺物と思われる。したがって，E区の掘立柱建物跡は，室町時代後半に営まれたものと考えられる。



第74図　E区第1黒色土下面掘立柱建物跡出土遺物実測図

第４節　江戸時代の遺構・遺物

１．Ｇ区大鍛冶場跡（第75図・76図）

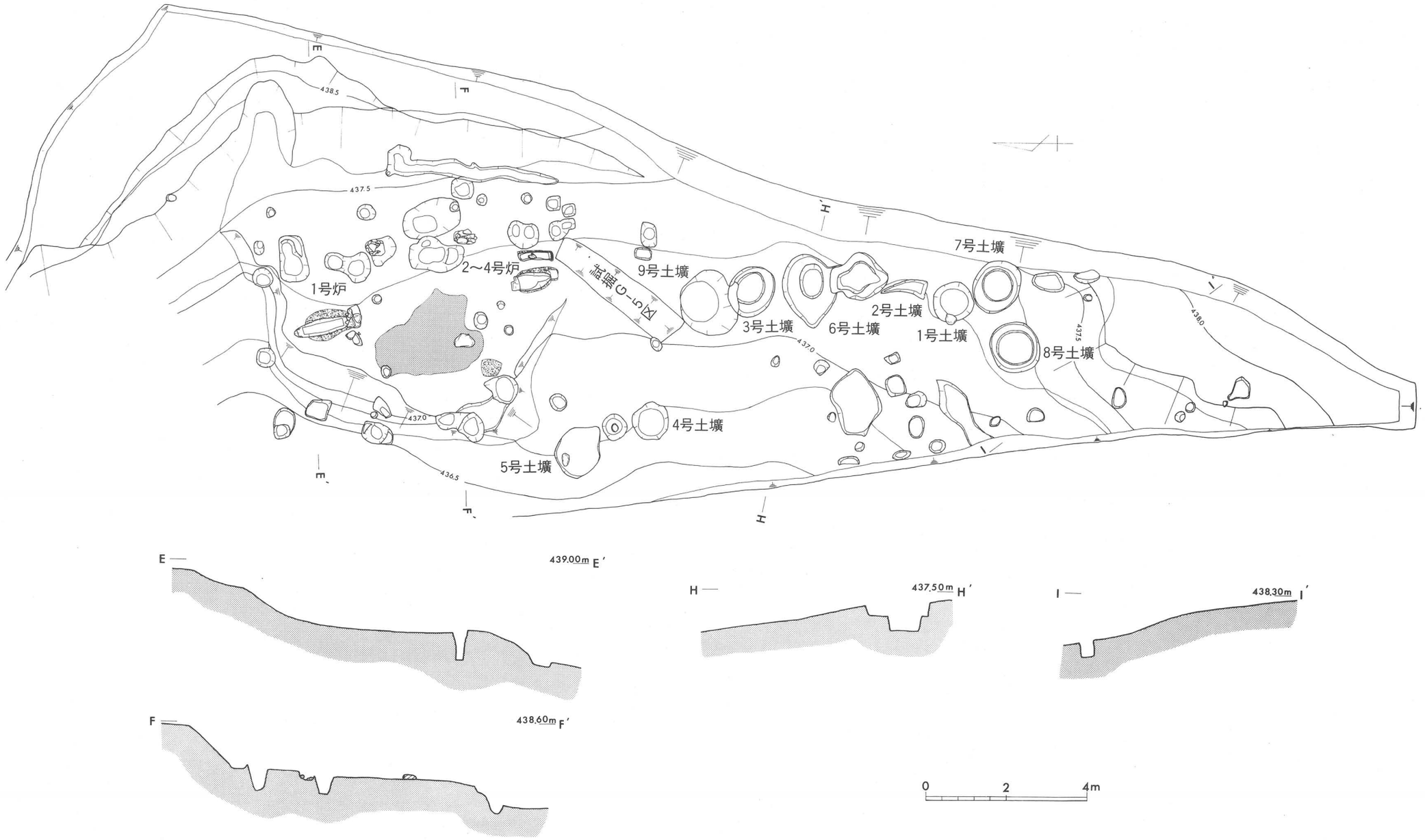
大鍛冶場は，鈩製鉄の作業場の１つで，高殿鈩で製造された銑に含まれている炭素を脱炭し，鍛造できる鉄に加工するための施設である。大鍛冶の工程は，左下場・本場の２つに分かれており，左下場では銑を半溶融状態にし左下鉄を作った。本場は，左下鉄をさらに加熱脱炭し，反復鍛錬を加えることによって，炭素量が均質な錬鉄を作る工程である。錬鉄は，形状が包丁に似ていることから包丁鉄とも呼ばれ，これが各地に出荷された。

遺構は，急峻な山の斜面裾部に位置しており，地山及び黒色土を断面Ｌ字形に削平した小さな平坦面に設けられている。平坦面は，南北10.8ｍ，東西6.8ｍを測り，西側は地山を１ｍあまり削り込んでいるが，東側は一部が流失しており，原状はとどめていない。大鍛冶場跡は，この平坦面にほぼいっぱいに営まれていたと考えられ，鉄砧石を中心に左下場・本場に相当する４基の炉とこれらの施設を覆う掘立柱建物跡が検出された。また，大鍛冶場跡の南側にある緩斜面には，黄褐色粘土を貼った円形土壙９基が南北に並んで営まれており，鉄滓やフイゴの羽口が出土したものがあることから関連する施設と思われる。

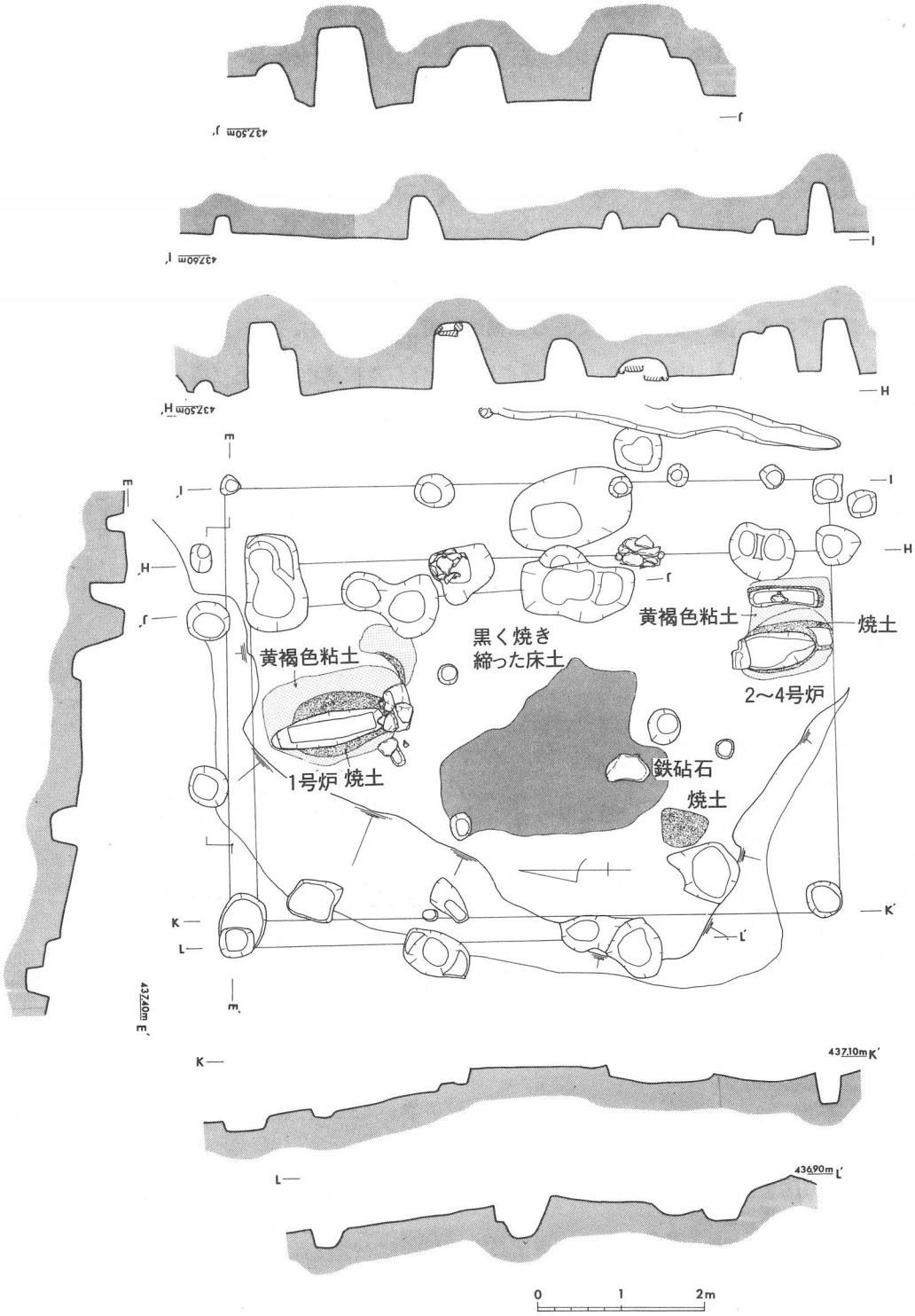
大鍛冶場を覆う掘立柱建物跡は，数度の建替が行われたのとみられ，柱穴やその配置に重複がある。これより復元される建物は，３間×４間及び２間×３間のものが考えられるが，柱穴の状況よりすれば，少なくとも３度は建替えられたものと思われる。建物の規模は，３間×４間のものが桁行7.2ｍ，梁行5.4ｍ，２間×３間のものが桁行6.8ｍ，梁行4.3ｍまたは3.7ｍである。柱穴は，前者があまり重複せず径20～30㎝と小さいものが多いのに対し，後者は重複しているものがあり径60～80㎝と大きいものが多い。建物の周囲の施設については，不明な点が多いが，東側では現状で長さ4.2ｍ，幅30～40㎝，深さ６～12㎝の浅い溝が検出された。

大鍛冶場跡内部の施設は，床面中央やや南寄りに鉄砧石が置かれ，北側に１号炉，南東側に２～４号炉が位置している。鉄砧石と１号炉の距離は2.4ｍ，２～４号炉とは1.6ｍとやや近接しており，各炉はいずれも南北方向に主軸をとって平行して営まれている。鉄砧石は，長さ50㎝，幅30㎝，厚さ12～18㎝を測る転石で，その周囲の床面は２～2.8ｍ位の範囲で黒く焼き締まった作業面となっている。また，鉄砧石の下では，長さ38㎝，幅30㎝，厚さ12㎝の板石が検出されており，１段階古い鉄砧石が埋め込まれたものか，あるいは鉄砧石が打撃によって沈むのを防ぐために置かれたものとみられる。

炉は，いずれも地上の障壁や鞴などの痕跡を失っているが，地下構造の遺存状況は良好である。



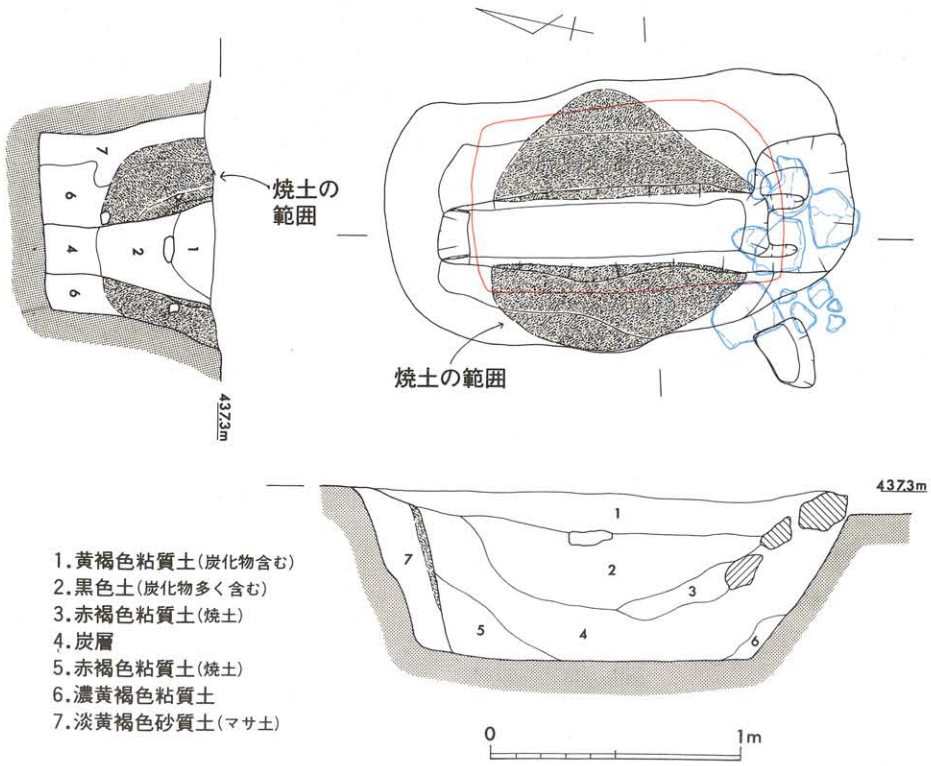
第75図　G区大鍛冶場跡地形測量図



第76図　G区大鍛冶場掘立柱建物跡実測図

地下構造は，規模や石の使用の有無など異なる点はあるが，いずれも基本的な構造は同様で，長方形の掘り方の中に黄褐色系の砂質土及び粘土を貼り，中央に炭を敷きつめた火窪とみられる部分をつくるものである。

１号炉（第77図）は，長さ1.85m，幅0.9～1.1m，深さ0.65mの隅丸長方形の掘り方をもつもので，中央に長さ1.3m，幅0.23～0.27mの炉床部分が設けられている。掘り方と炉床部の間には，外側に淡黄褐色砂質土（第７層），内側に濃黄褐色粘質土（第６層）が貼られており，炉床の上部を中心に強い火力を受けて，暗青灰色～赤褐色に変色した部分がみられた。炉床は，基本的には３層より成っており，最下層に焼土である赤褐色粘質土（第５層），炭（第４層）が敷かれ，その上に炭を多く含む黒色土（第２層），最上層には炭を含んだ黄褐色粘質土（第１層）がみられた。また，炉の南側小口にあたる部分には，長さ38cm，幅55cmの「煙道」状の施設があり，この上には掘り方の中程から上面にかけて石がかけられている。これは，炉床部を乾燥させるために，内部が焼かれた際に機能していたものとみられ，検出時には炭がいっぱいに充塡されていた。１号炉は，２

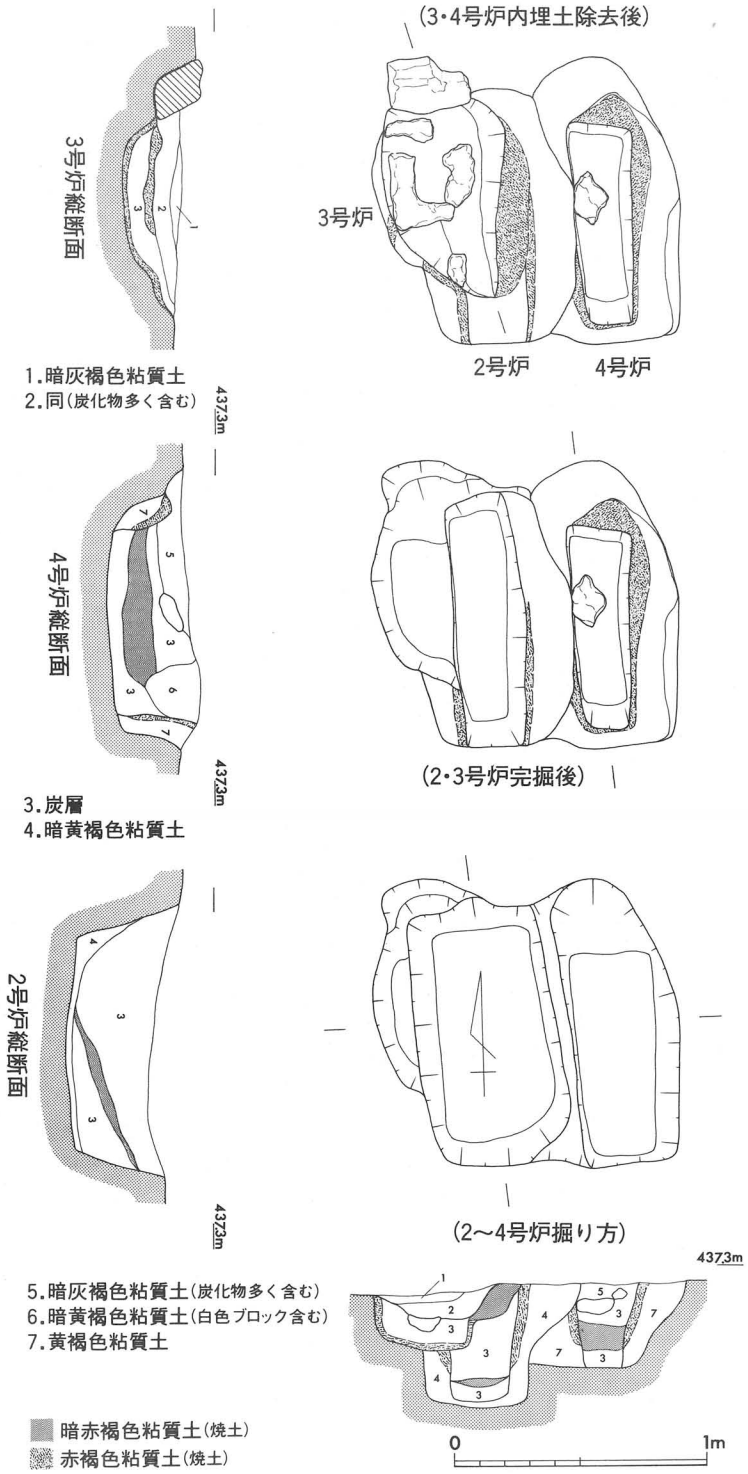


第77図　G区大鍛冶場跡１号炉跡実測図

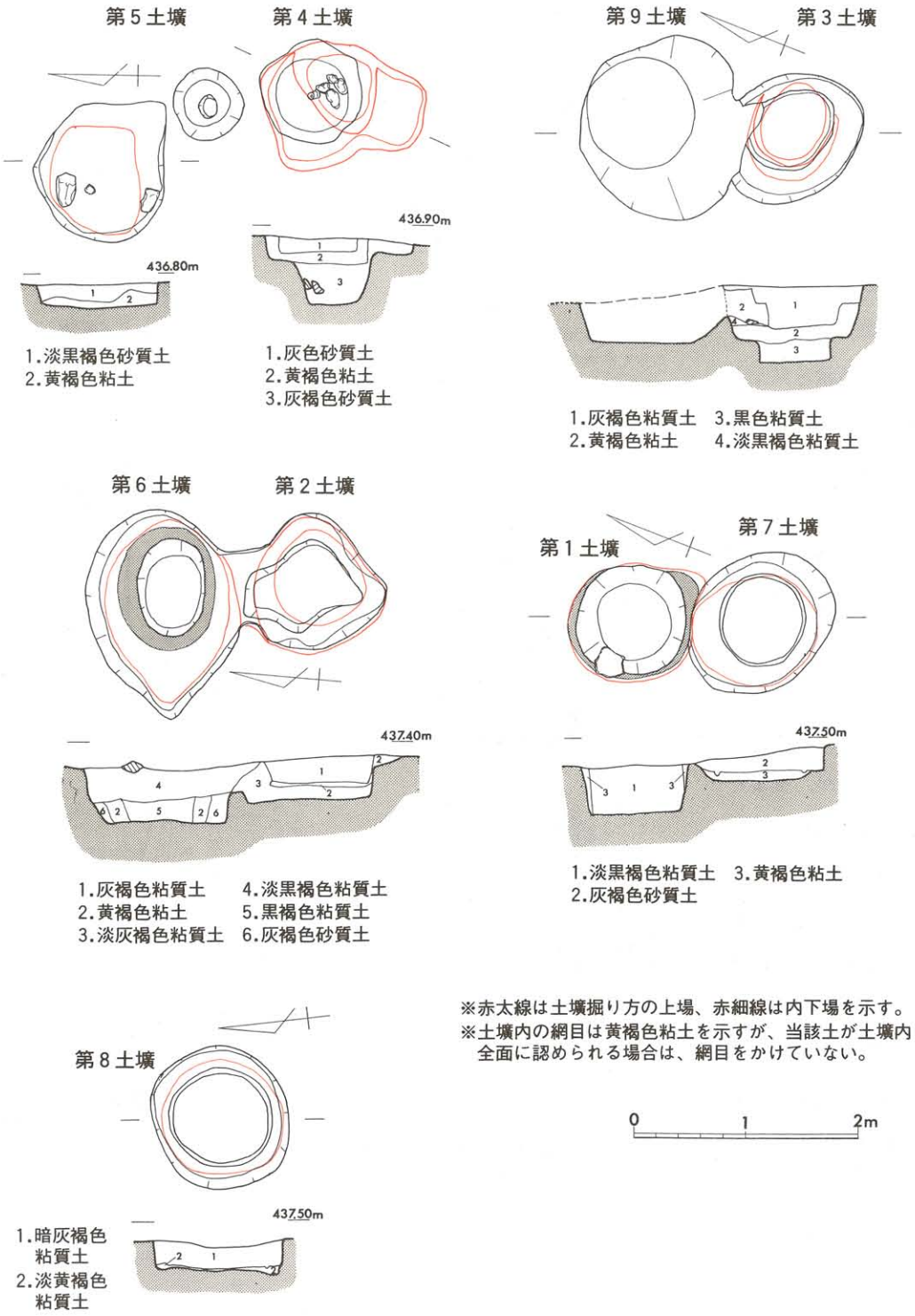
～４号炉に比較すると鉄砧石よりやや離れた位置にあり，左下場であったと考えられる。

なお，明確にはできなかったが，１号炉の東側に接するように，黄褐色粘土と焼土面がみられる部分があり，これが炉の１部であるとすれば，造り替えが行われたことが想定される。

２～４号炉（第78図）は，３基が重複しているが，東より順に４号炉→２号炉→３号炉と営まれていることが明らかである。その構造は，２及び４号炉がよく類似しており，長方形の掘り方の中に黄褐色系の粘土を貼り，中央に火窪とみられる炭を敷きつめた部分をもつものであるが，３号炉は，これらに比較すると



第78図　G区大鍛冶場跡2～4号炉跡実測図



第79図　G区大鍛冶場跡円形土壙実測図

小さく不整形で，北側小口に石を用いている点などに違いがある。

4号炉は，長さ1.15m，幅0.32～0.44m，深さ0.3～0.35mのやや不整形な掘り方を有している。内側には黄褐色粘土が貼られており，中央に長さ0.8m，幅0.18～0.25mの炉床が設けられている。炉床は，基本的には，下層より炭（第3層），暗赤褐色粘質土（焼土），炭の順に構成されており，上層の炭の上面にはスラグがみられた。

2号炉は，長さ1.05m，幅0.6m，深さ0.4mの長方形の掘り方をもつもので，4号炉を切って営まれている。掘り方の内部は，東西の長辺側に暗黄褐色粘質土（第4層）を貼っているが，南北の短辺にはみられないのが特色で，中央に長さ1.0m，幅0.3mの炉床が設けられている。炉床は，底面にも暗黄褐色粘土（第4層）を用いており，内部には暗赤褐色粘質土（焼土）を挟んで上下に炭が敷きつめられている。

3号炉は，長さ0.8m，幅0.5m，深さ0.2mの不整形なものである。内部は2・4号炉のように粘土を厚く用いておらず，焼けた暗赤褐色粘質土の上に炭が敷かれ，その上面に碗形状になったスラグと焼土面がみられた。北側小口部分では長さ32cm，厚さ15cmの石が検出されたが，これは鞴の送風管または羽口を固定するために用いられたものとみられることから，鞴は北側に置かれていたと推定される。

2～4号炉は，鉄砧石に近い位置に営まれており，本場に相当するものと思われる。

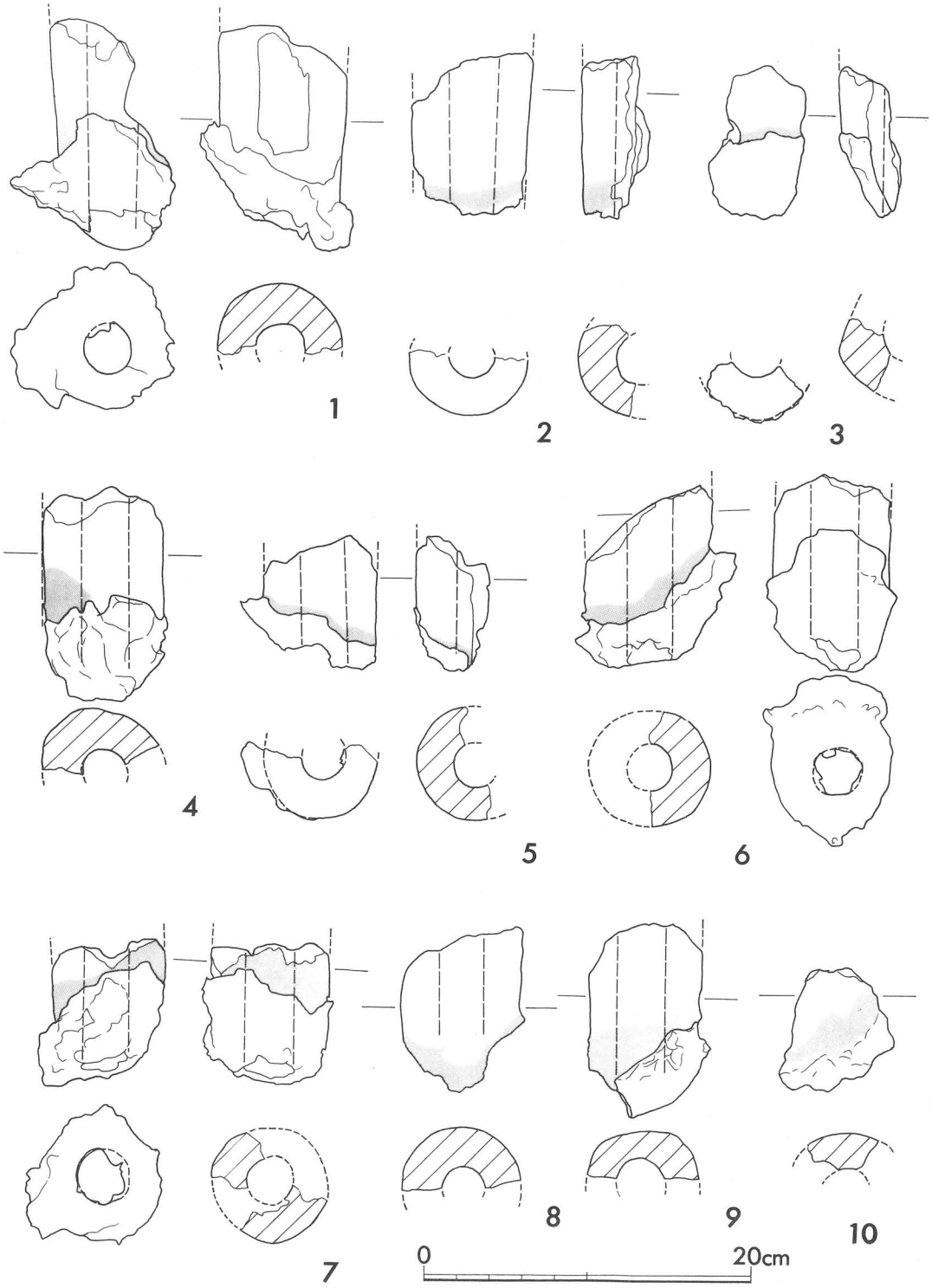
2．円形土壙（第79図）

円形土壙は，9基あり，調査区の東側に並ぶ1～3号土壙，6～9号土壙と，西側に並ぶ4・5号土壙に分かれて位置している。土壙の形状は，やや不整形なものもあるが，いずれも円形で内部に黄褐色粘土を貼っている。粘土の用い方は，3種類みられ，3・4号土壙のように底面，側面とも厚く粘土を貼るもの，1・6号土壙のように側面のみに用いるもの，2・5・7・8号土壙のように底面のみに貼るものがある。このうち，7・8号土壙に木桶を据えたとみられる痕跡がみられた。

3・4号土壙は，順に径1.1～1.3m，深さ0.5m，径0.9m，深さ0.2mを測るものである。共に粘土の下に，もう1段深い土壙が設けられており，前者は黒色粘質土，後者は灰褐色粘質土が堆積している。また，3号土壙中では磁器碗，4号土壙中では磁器碗，羽口，鉄滓が出土した。

1・6号土壙は，順に径1.1m，深さ0.4m，径1.3～1.9m，深さ0.44mを測るものである。粘土は，前者が側面に薄く用いられているのに対し，後者は掘り方の内側に径0.9～1.1mの範囲に厚く貼られており，掘り方は2号土壙を切っている。

2・5号土壙は，順に径1.1～1.2m，深さ0.4m，径1.0～1.2m，深さ0.2mを測るものである。前者は，掘り方の中に淡灰褐色粘質土を10cm程度入れたのちに粘土を貼っている。7・8号土壙は，



第80図　G区大鍛冶場跡出土遺物実測図(1)

各々径1.25m，深さ0.25m，径1.2～1.3m，深さ0.2mである。前者は径0.8m，後者は径0.9mの木桶の痕跡を浅い溝状に残している。また，８号土壙では，磁器片が出土した。

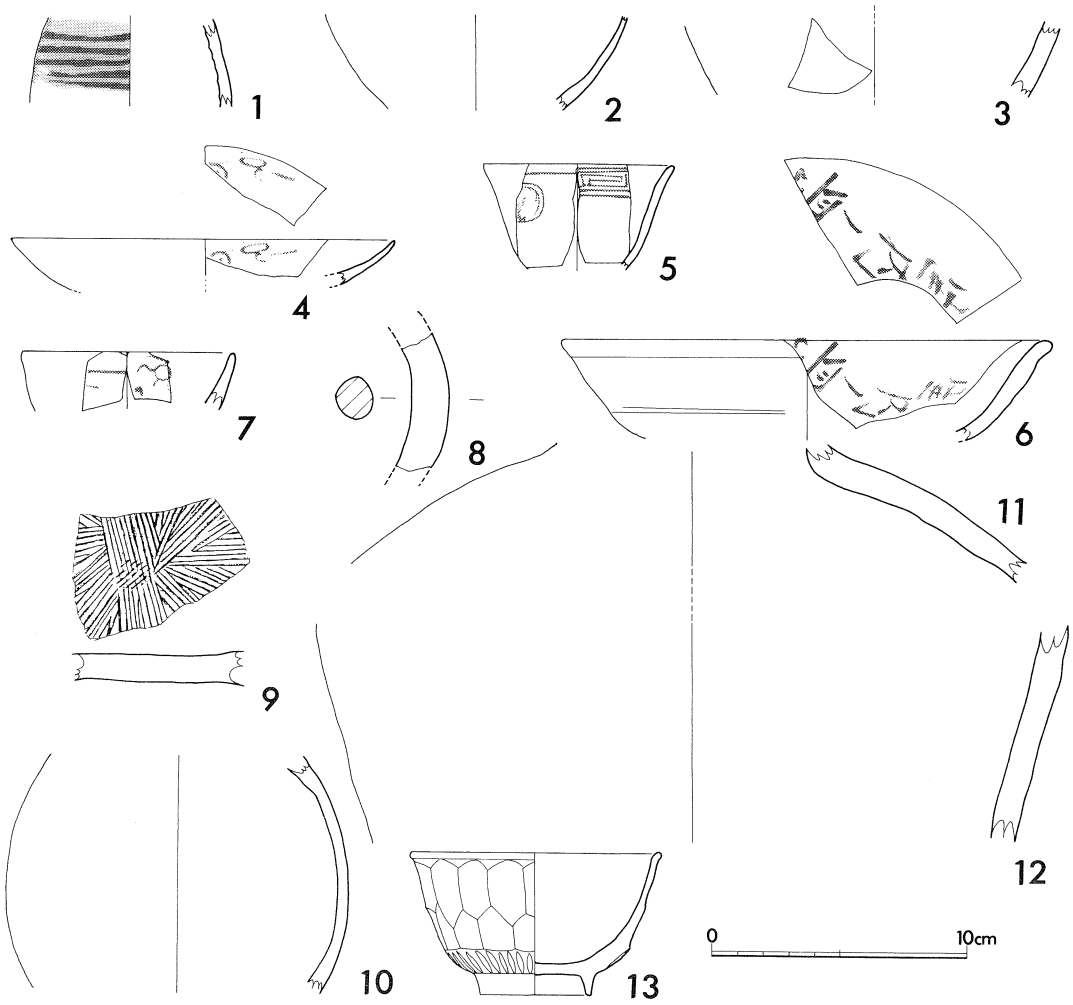
９号土壙は，内部の粘土の状況は不明であるが，径1.4～1.6m，深さ0.4mである。

３．出土遺物

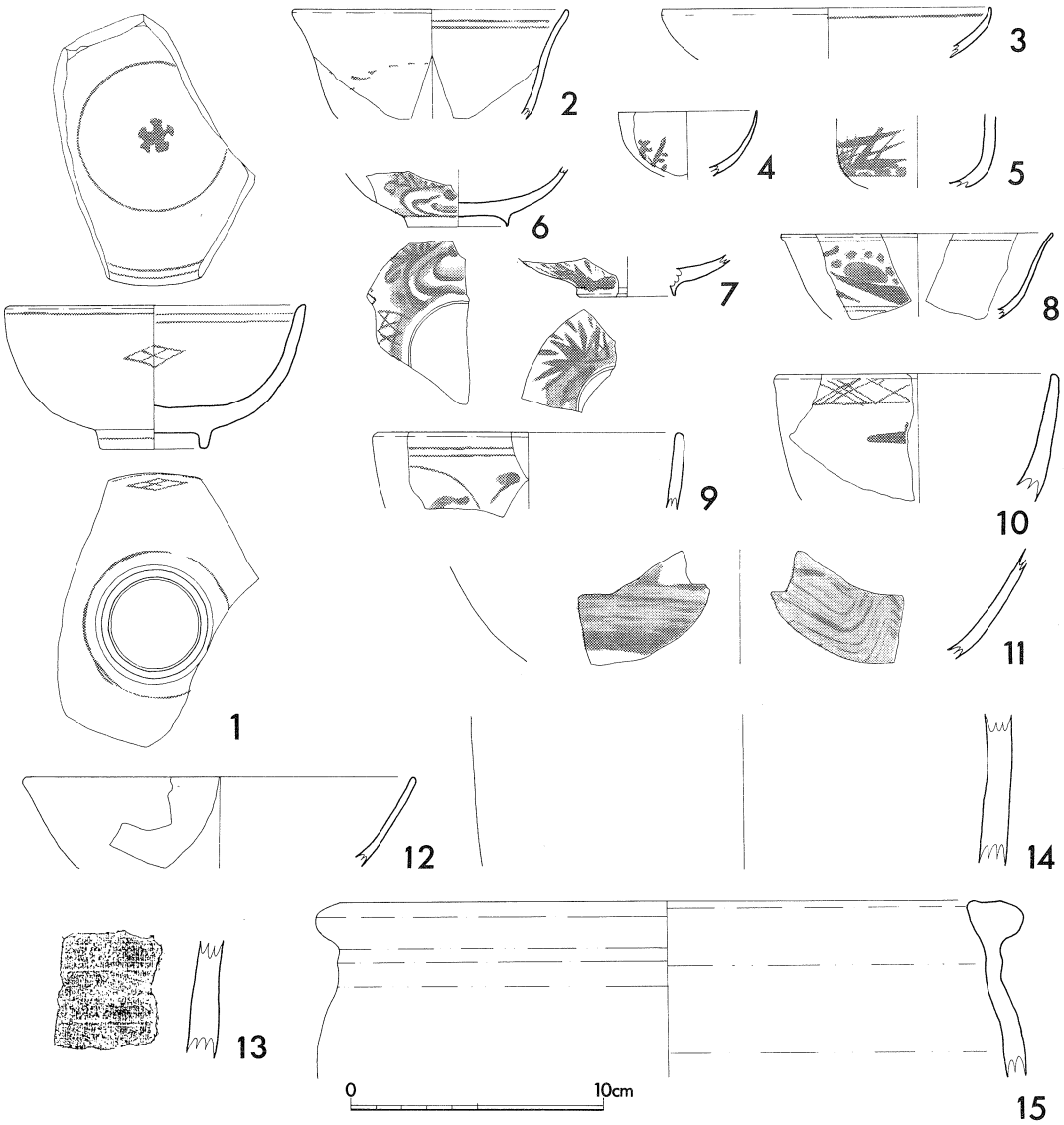
(1)　鞴羽口（第80図）

原位置を保つものはなく，７が４号土壙より出土した以外は，すべて大鍛冶場跡より排出されたスラグ層の中から検出されたものである。

羽口は，いずれも円筒形を呈しており，外径は6.8～7.6cm，内径は2.6～3.0cmである。



第81図　G区大鍛冶場跡出土遺物実測図(2)



第82図　G区大鍛冶場跡出土遺物実測図(3)

先端部は溶融状態になっており，これに接して淡黒灰色に変色した部分が認められる。胎土は，粗く5㎜大までの砂粒を含み，色調は灰白色～淡赤褐色を呈す。

(2)　陶磁器（第81・82図）

大鍛冶場跡より出土した遺物には，唐津系瓶，鉢，肥前系染付碗，同陶胎染付碗，備前壺，石見系皿，甕などがある。このうち，遺構に伴う遺物は，第81図－1が鉄砧石の下，同－2が3号土壙，同－3・13が4号土壙，同－4が8号土壙，同－6が大鍛冶場ピット中で検出されており，その他は大鍛冶場の覆土である黒色土層やスラグ層から出土したものである。

鞴羽口計測表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
内径（cm）	3.0	2.8	—	3.0	2.8	3.0	3.0	2.8	3.0	—
外径（cm）	7.6	7.0	—	7.2	7.0	7.2	7.0	7.2	6.8	—

唐津系瓶・第81図－1は，胴部の小片で，外面に濃緑釉がかけられている。唐津系鉢・第82図－11は，体部の小片で，茶色の上釉の上に，乳白色の釉で刷毛目装飾が行われている。

肥前系染付碗には，第81図－2・5・7，第82図－2・4・5・6・7・8がある。このうち，第81図－5及び第82図－2・8は，口縁の端部が外反する端反形碗である。5は，外面に丸に草花風の文様，口縁内面に雷文帯がみられる。2は，復元口径11.0cmを測るものであるが，外面の文様の意匠は不明である。8は，復元口径10.8cmで，外面に赤・青・黄色の3色で草花文が描かれている。第82図－4は，小形の坏で，復元口径5.5cmである。外面には草花文がみられる。第82図5・6・7は，底部の破片で，6・7は同一個体である。いずれも内面は無文であるが，外面に草花文が描かれている。

肥前系染付皿には，第81図－4及び第82図－3がある。4は，復元口径14.9cmを測る小片で，内面に意匠不明の文様がある。3は，復元口径12.9cmの小片で，口縁内面に1条の線がみられる。

肥前系陶胎染付碗には，第81図－3，第82図－9・10がある。このうち，9は復元口径12.4cmを測るもので，外面に2条の線と草花文が描かれている。10は，復元口径11.3cmで，口縁外面に四方襷文，その下に意匠不明の文様がみられる。いずれも，胎土の色調は灰色を呈し，文様は淡い紺色が用いられている。

備前壺には，第81図－11・12，第82図－13・14がある。11は頸部より肩部，12・13・14は胴部の破片で，11の外面には黄白色の自然釉がかかっている。いずれも，胎土は砂粒を含みやや粗く，焼成は良好で，色調は暗茶褐色を呈す。

石見系皿・第81図－6は，復元口径19.3cmで，やや深みのある体部を有している。内外面には，浅黄色の上釉がかけられており，内面には「宝または室内ノ皿山」という文字が書かれている。石見系甕・第82図－15は，復元口径27.8cmで，逆L字形に屈曲した厚い口縁部をもっている。内外面には黒褐色の来待釉がかけられている。

その他には，何らかの把手とみられる第81図－8，擂鉢の底部同図－9，壺同図－10，碗同図－13，第82図－1，同図－12がある。このうち，第81図－13は，口径9.8cm，器高5.5cmを測るもので，型打ち成形されたものとみられる。また，第82図－1は，口径11.8cm，器高5.7cmの染付で外面に菱形の文様，内面見込みにコンニャク印判による五弁花文が施されている。外面にみられる菱形の文

様は広島県の洞山焼にあり，山陽方面からもたらされたものと思われる。

以上の遺物の時期は，備前壺第81図－11・12，第82図13・14が最も古く，室町時代後半に遡る。肥前系陶胎染付第81図－3，第82図－9・10は18世紀代，肥前系染付のうち，端反形碗第81図－5，第82図－2・8は18世紀末～19世紀中頃に位置づけられている。また，大鍛冶場の柱穴より出土した石見系皿は，第81図－6は，江戸時代後期のものである。

第83図　D区石組遺構実測図

4．D区石組遺構（第83図）

遺構は，緩斜面に位置しており，不整形な掘り方の中に自然石による石組がみられる。掘り方の規模は，南北長5.6m，東西幅は北側で3.64m，南側で4.8m，深さは0.25～0.7mである。石組は，北から西側の辺を除いて，掘り方に沿うように設けられており，掘り方より内壁までの石積みの厚さは，東辺及び南辺が1.2～1.4mの厚く，北へ行くほど薄くなり消滅する。石積み内法は，南辺に沿うところで3.2mで，高さは最も高いところで0.6mで5段程度の石積みが行われている。また，東側の辺に沿うところでは大形の自然石が並べられており，幅30～40cmの溝状になっている。石組みの床面は，掘り方の掘削が下層の砂礫層に及んでいるため，これらが露出しており，円礫などが敷かれたような状況を示す。

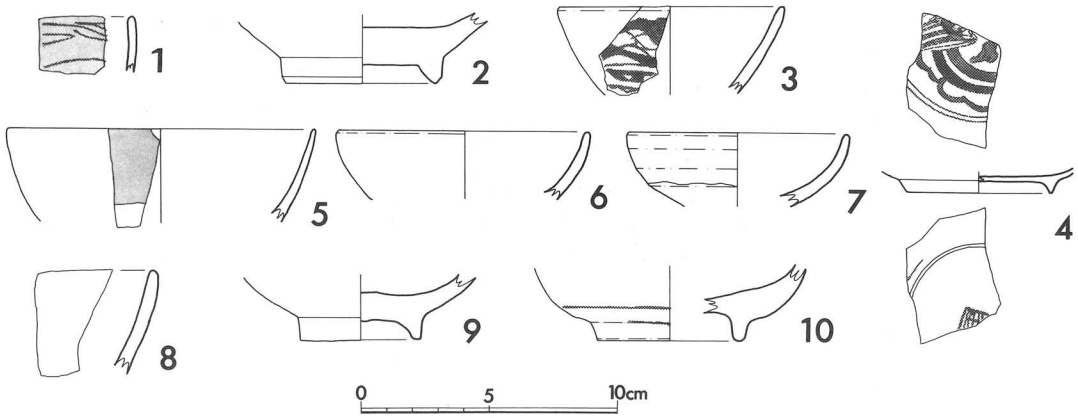
出土遺物（第84図）としては，中国製青磁碗，同白磁青花碗，皿，唐津系碗，肥前系陶胎染付碗がある。

中国製青磁碗には，1と2がある。1は口縁の小片で外面に唐草様の文様がみられる。2は，底部で器肉が厚い。

中国製白磁青花碗には，3と4がある。3は碗口縁の縁の小片で外面に草花文様の文様がみられる。4は皿の底部とみられ，見込みに文様がある他，高台の内側に裏銘がある。

唐津系碗には，5～9がある。このうち，5～7は内面及び外面に緑釉をかけたもので，上釉の範囲は高台には及んでいない。法量は5が復元口径12.0cm，6が9.8cm，7が8.6cmである。9は厚手の底部の破片で，内外面及び高台内部にも黄褐色を呈する上釉がかけられている。

陶胎染付碗には，10がある。底部の破片で胎土の色調は灰色を呈し，内外面及び高台内部にも上



第84図　D区石組遺構出土遺物実測図

釉がかけられている。外面には２条の線が紺色で染付されている。

以上の遺物の時期は，長期にわたっており，中国製青磁１・２は15世紀代，中国製白磁青花３は16世紀中頃，同４は16世紀末～17世紀初頭，唐津系５～９は17世紀前半，陶胎染付10は18世紀代のものとみられる。このうち，石組遺構に伴うものは，17世紀前半の唐津系碗で遺構の時期を示している。その他の遺物は，遺構を覆う茶褐色土より出土しており，周囲より流れ込んだものとみられる。

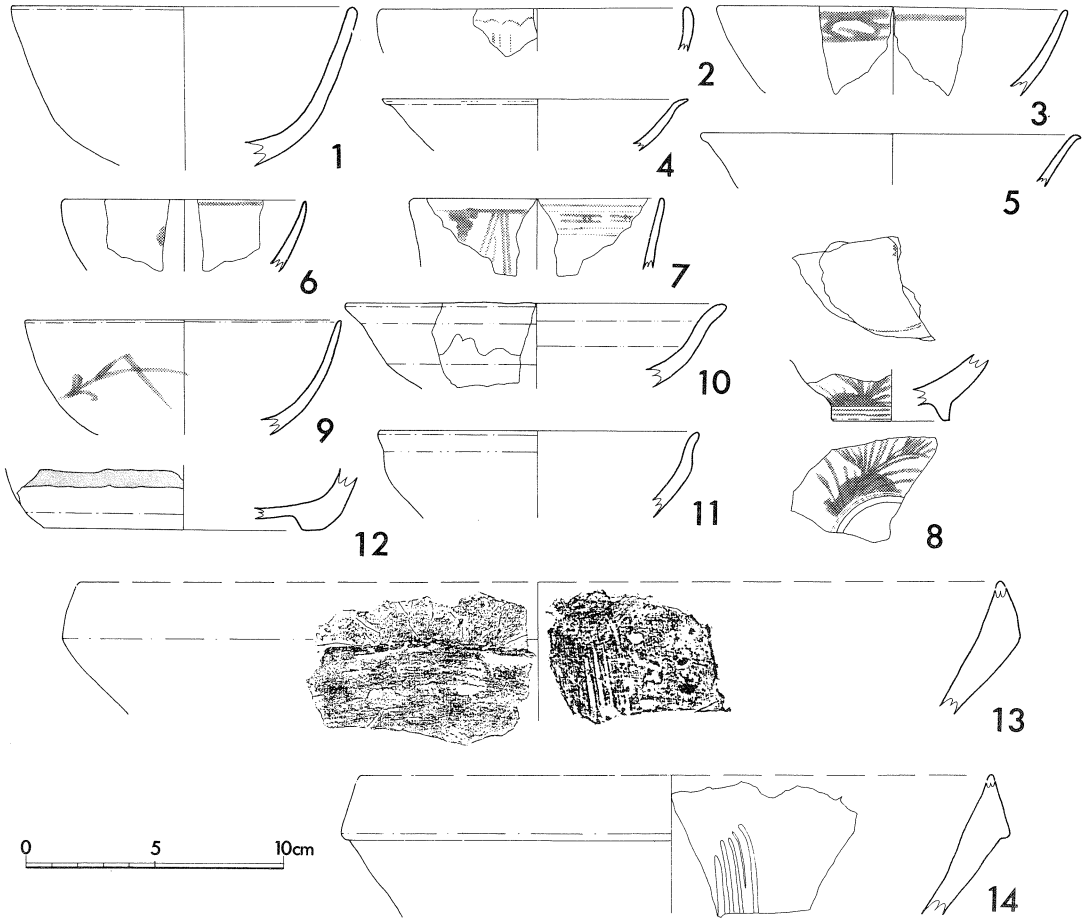
５．その他の出土遺物

遺構に伴わない遺物としては，陶磁器，鉄製品，石臼の他，縄文時代の尖頭器，石鏃がある。

(1)　陶磁器（第85図）

中国製青磁碗皿，同白磁碗，肥前系染付碗，唐津系碗，備前擂鉢が出土している。

中国製青磁１・２は，いずれも小片であるが深い器形をとるものと思われ，復元口径は１が13.2cm，

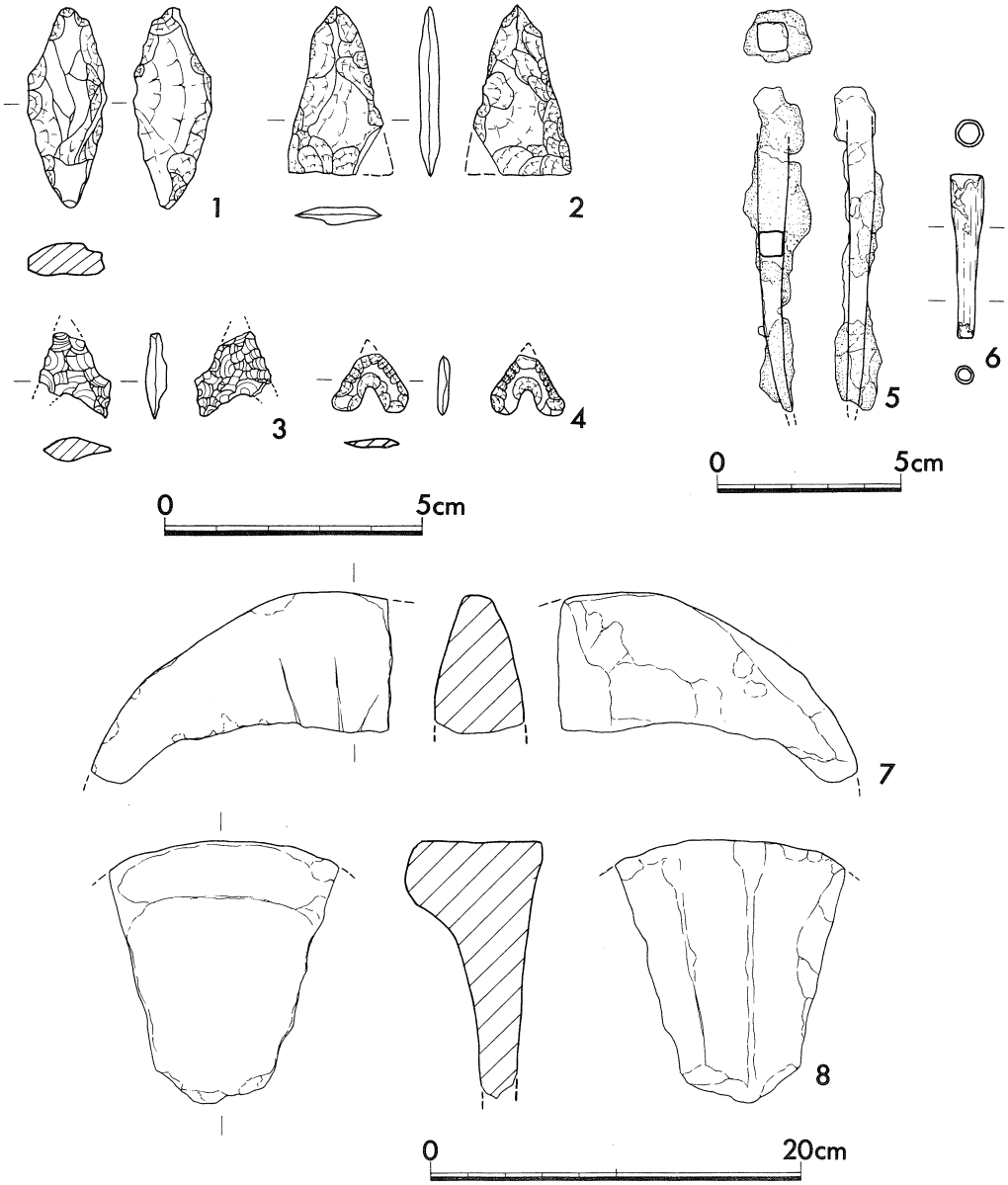


第85図　その他の出土遺物実測図(1)

2が11.8cmである。後者の外面には，細かい蓮弁文様がみられる。4は，1・2に比較すると淡い色調を呈し，浅い器形をとる皿で，口唇を外反させている。復元口径は11.8cmである。

中国製白磁青花碗3は，復元口径13.4cmを測り，口縁外面に文様帯をもつものである。6は，復元口径9.5cmで前者のように文様帯はみられないが，外面に意匠不明の文様がある。

中国製白磁皿5は，復元口径14.8cmで口唇を外反させている。



第86図　その他の出土遺物実測図(2)

肥前系染付碗７は，口唇がやや反る端反形を呈するもので，復元口径9.9cmを測る。外面の文様は意匠不明であるが，口縁内面には工字文帯がみられる。８は，碗の底部で，外面に草花文がみられる。

唐津皿10は，復元口径14.8cmを測り，内面及び口縁外面に上釉がかけられている。

天目碗11は，美濃または瀬戸とみられるもので，復元口径12.5cmである。

９は，色調が鈍く，在地系の磁器と思われる碗で，復元口径12.2cmである。外面には，草文がみられる。12は鉢などの底部と思われ，内面及び外面高台上まで上釉がかけられている。

備前擂鉢13・14は，共に口縁部の小片で，内面に粗い擂り目がみられ，外面には焼成時の重ね焼きのあとが残っている。

以上の遺物の時期は，中国製青磁碗２が16世紀前半，同１及び白磁５が16世紀代で，白磁青花３は16世紀中頃，青磁４は16世紀終り頃である。また，唐津10は17世紀代，肥前系染付のうち７は，18世紀末～19世紀中頃，備前擂鉢は口縁の形よりみて14世紀後半に遡るものとみられる。

(2)　金属製品・石臼（第86図）

５は，鉄製品で長さは現状で8.6cm，幅は0.6cmで，断面は方形を呈するが，用途は不明である。６は銅製のキセルの吸口で，断面は円筒状を呈し，長さは4.4cm，幅は0.4～0.9cmである。

石臼は，２種類がある。７は，断面がレンズ状を呈するもので，一方に擂り目が放射状に認められる。８は，断面に放射の擂り目があり平坦であるのに対し，一方は中央が大きく凹み周囲が縁状になっているものである。

(3)　石器（第86図）

いずれも石鏃である。

１は，安山岩製で長さ3.8cm，幅1.5cm，厚さは0.65cmの，有茎式の石鏃である。刃部・基部ともに粗い調整剥離が加えられているのみで，かえりが明確でない。片面に石核から割り取った際の面がよく残っている。

無茎の石鏃には，安山岩製（２・４）と黒曜石製（３）がある。２は基部が平坦な形をとるもので，長さは3.2cm，幅は推定で2.0cm，厚さが0.4cmである。３・４は，基部に抉りが入る凹基鏃で，前者は現状で長さ1.6cm，幅1.4cm，厚さ0.4cm，後者は長さ1.1cm，幅1.5cm，厚さ0.2cmである。

（角田徳幸）

第5節　自然科学分野の分析

(1)　郷路橋遺跡のテフラ

島根大学教育学部
三　浦　　清

市木郷路橋遺跡におけるF区の考古学的断面におけるテフラについて検討した。

検討方法としては断面から採取された土を水洗後実体顕微鏡下でよく観察しながら火山ガラスを採取し，電子顕微鏡下でいわゆるEPMA分析を行った。アカホヤAh火山灰は純粋な火山降下物が単層をなしているようにみえるのでこれから磁鉄鉱の分析も併用した（図版89－1）。

その結果を以下に示す。

①　黄色火山灰層

F区，6区にみられる黄色火山灰層で，いわゆるキナコ色を示している。顕微鏡下の観察では殆んど純粋な火山灰層で多量の火山ガラスからなっている。いわゆるバッブルウオール型の火山ガラスがその主部を示している。

火山ガラスのEPMA分析結果を図－1に示すが，SiO_2，TiO_2，MgO，CaO，FeO，K_2O，Na_2O，Al_2O_3の各値とその分布のパター

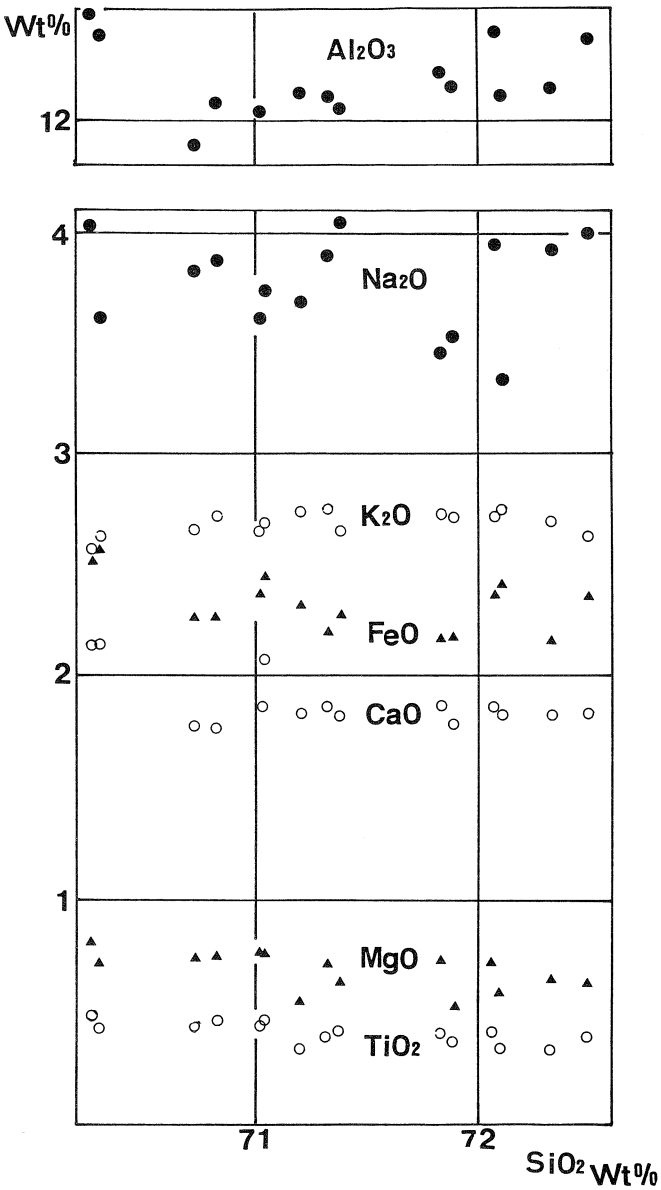


図-1　アカホヤ火山灰Ahの火山ガラスの化学組成

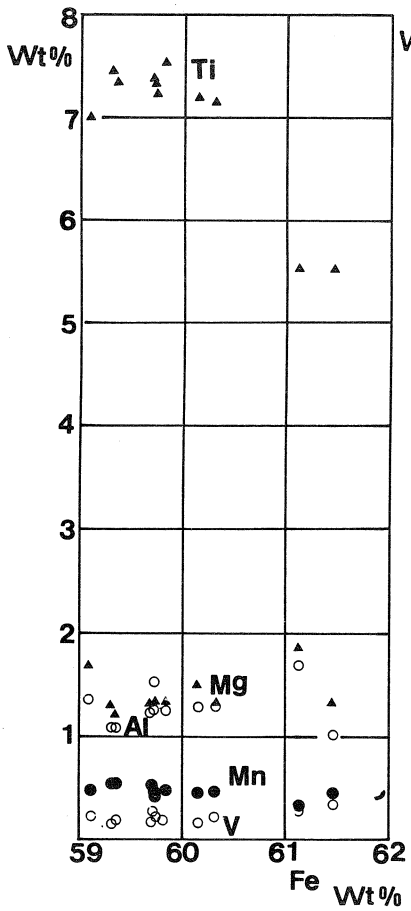
ンは明らかにそれがアカホヤ火山灰Ahの火山ガラスであることを示す。

このテフラ層に含まれる磁鉄鉱の分析値を図－2に示す。Ti，Mf，Aℓ，Mn，Vの各値とその分布パターンは大部分がアカホヤ火山灰Ahに由来するが，ただ，Ti値5～6％を示すものは混入物かも知れない。

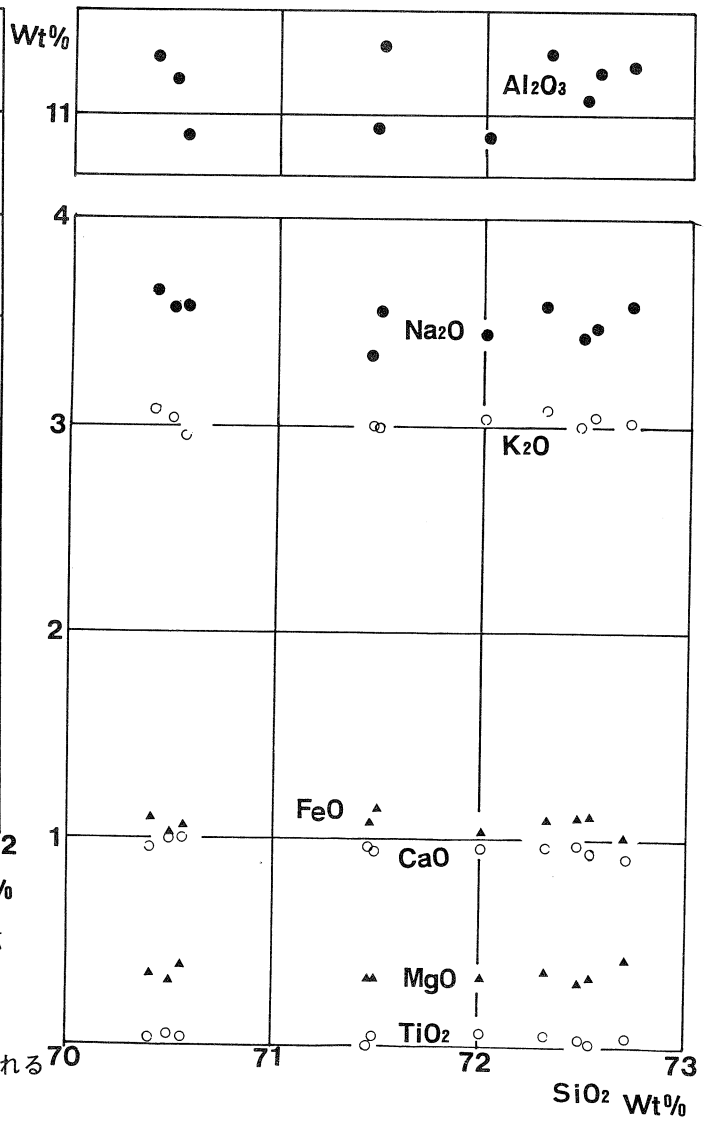
若干の異物混入が考えられるが，殆んど純粋なテフラ層とみることが出来，これをアカホヤ火山灰Ahの層準とみてよかろう。

②　最下部褐色砂礫層に含まれる火山ガラス

F区最下部層を構成する砂礫層中にも二次的堆積物としての火山ガラスが含まれる。これは一次



▲図-2　アカホヤ火山灰Ahの磁鉄鉱の化学組成



▶図-3　断面最下部砂礫層中に含まれる火山ガラスの化学組成

的に降下堆積したテフラ層が侵食されて二次的に移動堆積したものである。

図－3にはこの層準の火山ガラスの分析値を示す。Al_2O3，Na_2O，K_2O，FeO，CaO，MgO，TiO_2，SiO_2の各値とそのパターンは明確にアイラTn火山灰ATであることを示す。大切なことはこの層準には全くアカホヤ火山灰Ahを含まないことである。

アカホヤ火山灰Ahの降下年代は大体およそのところ6,100年以前とされ，アイラTn火山灰ATの降下年代は2万1,000年（現在のところこの降下年代はこれよりもさらに古く考えられ，2万3,000～2万5,000年以前ぐらいとみる人もいる）以前とされるので，この最下部褐色砂礫層の年代を示すものとみた方がよい。

(2)　郷路橋遺跡E区第2黒色土下面貯蔵穴出土トチの実の年代測定結果報告

名古屋大学アイソトープ総合センター
（現 名古屋大学年代測定資料研究センター助教授）
中　村　俊　夫

RESULTS OF ^{14}C MEASUREMENTS WITH THE TANDETRON ACCELERATOR MASS SPECTROMETER AT NAGOYA UNIVERSITY

Sample name	Meas.date (yy:mm:dd)	$\delta^{14}C$ (‰)	^{14}C age[4] (y BP)	^{14}C age[2] (y BP)	Meas.#
島根県郷路橋遺跡出土トチの実	:　　:			5140±100	NUTA－680

※ using ^{14}C half life of 5,570 years.

これはB.P.年代値であり，B.C.年代に換算するとB.C.3190±100年となり，従来の測定値では縄文時代前期中葉頃の値に近い。

しかし考古学的には，西日本におけるトチの実食用化の上限は縄文時代後期前葉であり，大きなズレがある。したがって本資料は今後の大きな検討課題を示唆しており，きわめて重要であると考えられる。

（名古屋大学文学部教授　渡辺　誠）

(3)　郷路橋遺跡鍛冶炉跡の自然残留磁気測定

島根大学理学部
伊藤晴明・時枝克安

1．はじめに

考古地磁気学的手法を用いて鍛冶炉跡の操業年代を推定するには，炉跡に残る焼土の自然残留磁気（NRM）方向を測定し，その方向（偏角と伏角Ｉ）を地磁気永年変化図にプロットして年代を読み取り求めることができる。

2．鍛冶炉跡の概要

郷路橋遺跡は島根県邑智郡瑞穂町市木（34°48′00″N，132°24′30″E）で中国横断自動車道建設工事に伴い発掘調査された遺跡の一つである。調査区域内のＧ地区で建物跡と４基の炉跡が検出されたが，この遺跡はたたら製鉄に伴う大鍛冶場であったことが判明している。[(1)] Ｇ地区の北端に位置する１号炉跡は長さ1.3m，幅0.4m，深さ0.7mを測るやや大型の炉で，鉄塊を溶かし不純物を除く左下場と考えられている。１号炉跡に残る焼土は赤褐色から黄褐色に変色し舟型状であったが，内側には炭化物があって黒褐色を呈していた。

Ｇ地区の中央よりやや南側に位置する２号，３号，４号炉跡は，切り合いの関係にあり，４号炉跡を切って２号炉が築かれ，２号炉跡を切って３号炉が築かれていた。２号および４号炉跡は長さ0.8mの長方形で，残存する焼土は焼きしめられて赤褐色から黄褐色を呈し垂直の壁面として残されていた。２～４号炉跡は１号炉跡より小形で包丁鉄を鍛造した本場と考えられている。

3．試料採取

考古地磁気測定のための試料採取は２回実施した。最初は1988年５月17日に１号炉跡の側壁焼土を採取し，舟型状の赤褐色～黄褐色に堅く焼きしめられた側壁焼土上面から31個の試料を採取した。

２回目の試料採取は２週間余り後の６月４日に行い，先に採取した１号炉跡の上部をカットし，同じ側壁焼土から13個採取した。次いで，新たに発掘された２～４号炉跡のうち，２号炉跡の東側壁焼土から15個，同じく西側壁から４個の計19個を２号炉跡で採取した。４号炉跡では，東側壁焼土から18個，北側壁面から２個の計20個の試料を採取した。３号炉跡は焼土の残りがよくないため採取しなかった（図版89－２）。

4．NRM測定

採取試料のNRMはすべて高感度無定位磁力計で測定した。各炉跡から得られたNRMの方向は図1に示す通りである。不安定な磁化か偏りの大きい方向をもつ試料はこの図から削除してあるが，2号炉跡と4号炉跡では半数以上の試料が除外されることになった。それは，2号，3号，4号炉跡が同一場所に近接して存在し切り合い関係にあるため，古い4号炉跡や2号炉跡の磁化方向が一

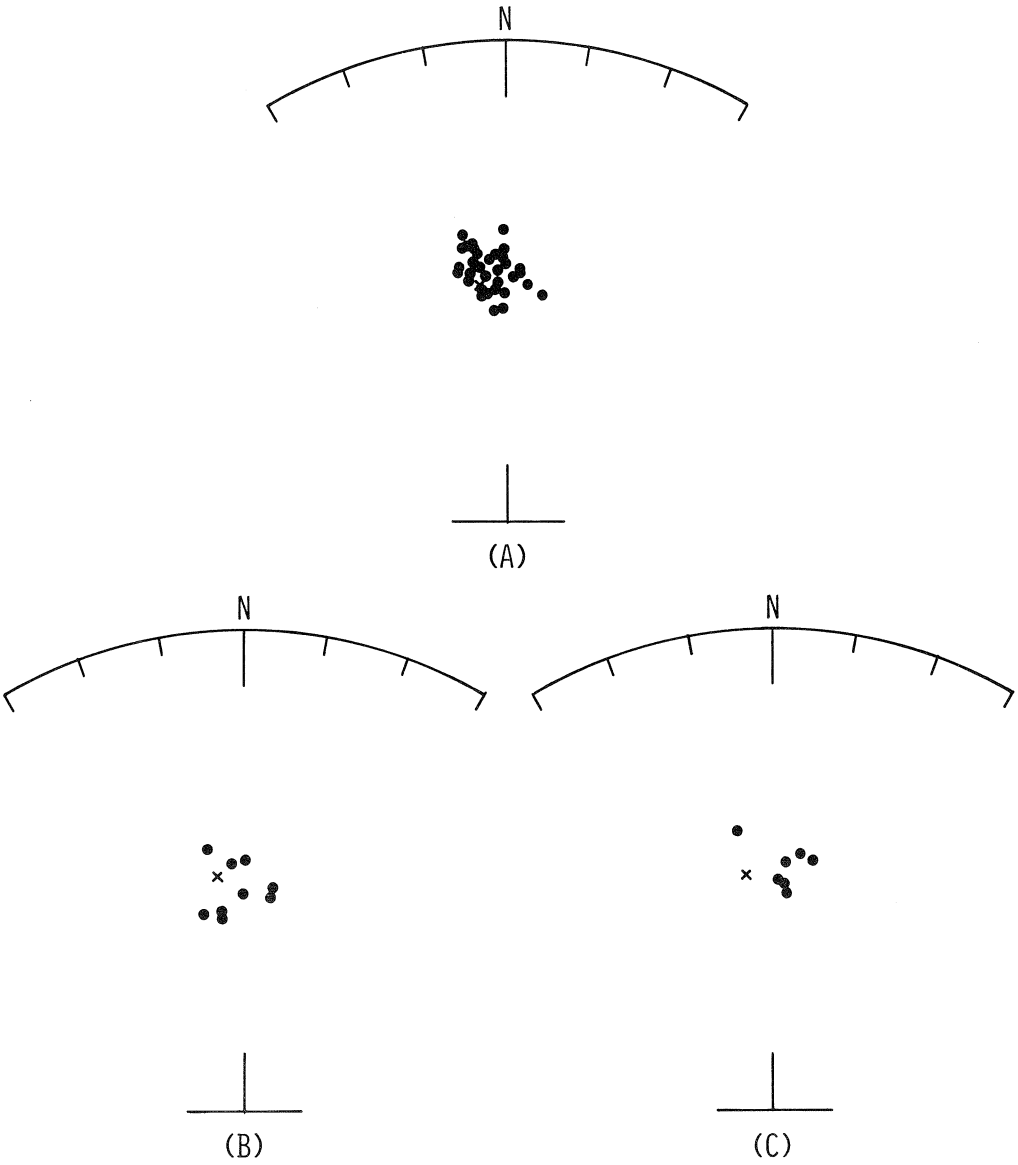


図1　郷路橋遺跡1号炉跡(A)，2号炉(B)，4号炉(C)のNRM方向

番新しい３号炉の構築や焼成により，一部攪乱されたことによると考えられる。１号，２号，４号炉跡の測定結果は下記の通りである。

１号炉跡	N＝33	２号炉跡	N＝ 9	４号炉跡	N＝ 7
	D＝−3.6°		D＝−2.0°		D＝2.6°
	I＝46.2°		I＝51.6°		I＝48.0°
	K＝272.7		K＝190.5		K＝230.0
	θ_{95}＝1.5°		θ_{95}＝3.7°		θ_{95}＝3.9°

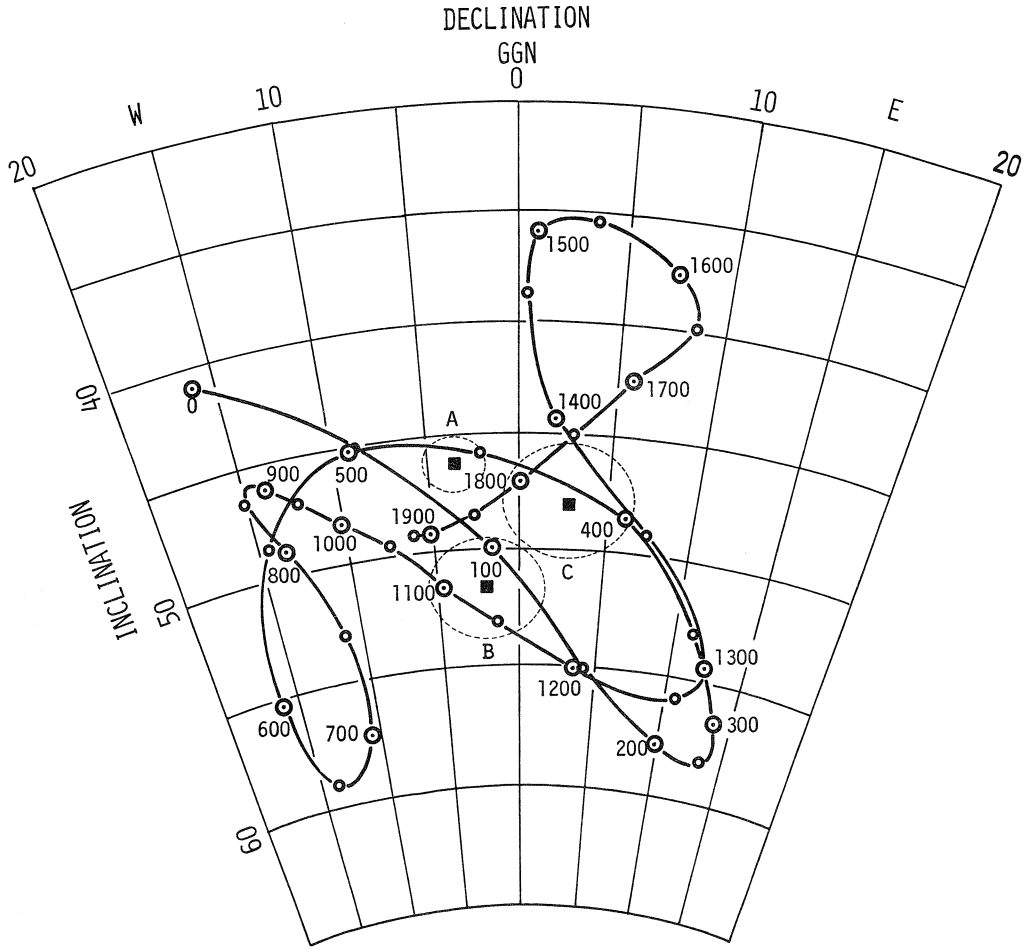


図２　地磁気永年変化曲線と１号炉跡(A)，２号炉跡(B)，４号炉跡(C)のNRM測定値（■印）

ここで，Nは試料数，Dは平均偏角，Iは平均伏角，Kは信頼度係数，θ_{95}は誤差角である。2号炉跡と4号炉跡の誤差角が少し大きくなっているのが気に掛かるが，前述のように4号炉は2号炉に切られ，2号炉は3号炉に切られていることに関係があると考えられる。1号炉跡では異なった焼土面で2回サンプリングしているが，NRM方向はバラツキも小さく，よいまとまりを示している。

5．推定年代

時間尺度となる地磁気永年変化曲線は広岡[(2)]による西南日本の地磁気永年変化曲線を使用する。図2は地磁気永年変化図に各炉跡から求めたNRMの平均磁化方向をプロットしたものである。推定年代は各測定点から曲線に垂線を下し，交点の年代を読み取ればよい。このようにして得られた各炉跡の推定年代は下記の通りである。

1号炉跡	A.D.1840±30
	A.D. 540±30
2号炉跡	A.D.1870±50
	A.D.1130±40
	A.D. 110±30
4号炉跡	A.D.1780±50
	A.D.1370±30
	A.D. 420±30

各炉跡から2つまたは3つの年代値が得られるが，この遺跡は江戸時代末のたたら製鉄に伴う大鍛冶場跡とみられるため，14世紀以前の年代値は省略することができる。従って，それぞれの推定年代は，1号炉跡が1840±30年，2号炉跡が1870±50年，4号炉跡が1780±50年，となる。以上，今回のNRM測定結果は，誤差を考慮に入れれば，4号炉跡が一番古い18世紀末の炉であり，1号炉跡と2号炉跡がほぼ同時期の19世紀中葉の焼成であったことを示している。

最後に，今回の試料採取に際し，種々のお世話になった島根県教育委員会の方々，特に発掘現場でお世話していただいた足立克己，角田徳幸の両氏に心から謝意を表する。

参考文献

（1）　島根県教育委員会 「郷路橋遺跡現地説明会資料」 1988年
（2）　広岡公夫 「考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向」 第四紀研究，第15巻，200－203，1977年

(4)　郷路橋遺跡（昭和62年度調査）出土鉄滓の調査

日立金属株式会社安来工場
冶金研究所　清　永　欣　吾

中国横断自動車道広島浜田線建設地内遺跡調査のうち，郷路橋遺跡より出土した鉄滓ならびに鉄滓中に噛み込んでいた木炭の調査を行いましたので，その結果を御報告します。

1．資　　料

資料鉄滓の外観を写真１に示す。褐色の拳大の塊で，凹凸が激しく多数の気孔をもつ。形状よりみて鍛冶滓と推定される（図版90－１）。

2．化学組成

鉄滓内部の比較的汚染の少ない部分より分析試料を採取し，粉砕後0.25ｇを量り取り，ICP溶液発光分光分析装置で試料の化学組成を定量した。また，別に0.25ｇを量りとり，赤外吸収法により試料中の炭素及び硫黄を定量した。さらに，５ｇの試料を用い，湿式化学分析により金属鉄（塩化第２水銀溶解重クロム酸カリウム滴定法），全鉄（３塩化チタン還元重クロム酸カリウム滴定法），FeO（２価酸化鉄）（重クロム酸カリウム滴定法），Fe_2O_3（３価酸化鉄）（T・Fe－Fe^{++}より算出）の定量を行った。

結果を表１に示す。

鉄滓中では，金属元素は大部分酸化物の状態で存在するので，表１の結果を用い，鉄滓中の各酸化物の量を求めると表２のようになる。

表1　試料の化学組成

（重量　%）

C 炭素	Si 珪素	Mn マンガン	P 燐	S 硫黄	Ni ニッケル	V バナジウム	Co コバルト	Cu 銅	Aℓ アルミニウム
0.018	8.98	0.35	0.44	0.031	0.0002	0.1174	0.002	0.0005	2.342

Ti チタン	Ca カルシウム	Mg マグネシウム	T・Fe 全鉄	FeO 2価酸化鉄	Fe_2O_3 3価酸化鉄	M・Fe 金属鉄
9.652	1.891	0.353	51.95	56.18	11.5	0.22

表2　試料の酸化物組成

（重量　%）

SiO_2	MnO	P_2O_5	V_2O_5	Al_2O_3	TiO_2	CaO	MgO	FeO	Fe_2O_3	計	造滓剤
19.24	0.45	1.01	0.21	4.42	16.09	2.65	0.59	56.18	11.5	112.34	26.9

注）　造滓剤＝（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO）

3．X線回折

粉砕試料を用い，X線回折により構成相の結晶物質の決定を行った。得られた回折線プロフィールを写真2に示す（図版90－2）。

この結果によれば，ファイヤライト（Fe_2SiO_4）が最も多く，ヴスタイト（FeO）がこれに次ぎ，そのほかにマグネタイト（Fe_3O_4）及びリウサイト（$KAlSi_2O_6$）を少量含むことがわかる。

4．ミクロ組織

断面のミクロ組織を走査型電子顕微鏡で観察した結果，ならびにその構成相につきEDX定性分析した結果を写真3に示す（図版91）。

板状の組織（A部）はファイヤライト（Fe_2SiO_4），粒状の組織はヴスライト（FeO），角ばった組織はウルボスピネル（Fe_2TiO_4），黒っぽい基質はSi，Ca，K，Feを含むガラス質である。

以上のほか，D部はリウサイト（$KAlSi_2O_6$）と思われるものでガラス基質中から針状に析出し，ファイヤライトと区別しにくい角形板状の結晶物（E部）はSi－Ca－Feの酸化物でワラステナイトであろう。X線回折で認められ認マグネタイトは発見できなかったが，代りにX線回折では認められなかったウルボスピネルが検出されている。

5．木　炭

鉄滓中に噛み込んでいた木炭片の断面組織を走査型電子顕微鏡で観察した結果が写真4である（図版92）。和鋼記念館の所蔵する「たたら炭の電子顕微鏡写真」と比較したが，明確に同一といえる組織のものはなかった。比較的類似しているものに松及びふくらしがある。

6．考　察

表3は各種鉄滓についての化学組成，鉱物組成の特徴を，大沢正己氏のとりまとめた結果[(1)]を参照し，筆者の調査結果を加えて整理しなおしたもの[(2)]である。

本調査結果と表3を比較した場合，表3に完全に合致するものはないが，比較的近いものは低Ti砂鉄原料を用いた製錬滓が高Ti砂鉄原料を用いた製錬滓あるいは精錬鍛冶滓である。その他のも

のはTiO_2量，造滓剤量などで相違が大きい。

低Ti砂鉄系原料による製錬滓の場合，TiO_2量がもっと少ないと思われ，高Ti砂鉄原料による低Ti砂鉄系原料による精錬滓の場合は全鉄分がもっと少なく，ヴスタイトの結晶がない可能性が高い。高Ti砂鉄系の精錬鍛冶滓の場合と比較すると本資料のTiO_2はほとんど砂鉄から入ってくることを考えれば，高Ti系砂鉄を原料として用いた可能性は大きい。精錬鍛冶の場合は，一度精錬した滓を用いるためやはりTiO_2は少なくなる。TiO_2約16％という量は精錬鍛冶滓として高すぎると考えざるを得ない。高Ti砂鉄による精錬滓と考えた場合本資料において全鉄分が多いのは精錬条件が悪く，鉄歩留が悪かったことにより説明でき，またヴスタイトが存在するするのは，砂鉄の還元が十分進まなかったことにより説明できる。ミクロ組織をみると，ファイヤライトの晶出状態，リウサイトやワラステナイトの晶出，TiO_2量が多いにもかかわらずウルボスピネルの晶出が少なく，マグネタイトが多い，木炭の噛み込みがあるなど，すべて精錬温度が低めで，還元が不十分であったことを示唆している。資料の外観から鍛冶滓と判断されたが，上記のような条件で生成した精錬

表３　原料による各種鉄滓の化学組織と鉱物組織の特徴

項目 / 組成		低Ti砂鉄原料（鋼押法）			高Ti砂鉄原料（銑押法）			鉱石原料		
		製錬滓	精錬鍛冶滓	鍛錬鍛冶滓	製錬滓	精錬鍛冶滓	鍛錬鍛冶滓	製錬滓	精錬鍛冶滓	鍛錬鍛冶滓
化学組成(%)	全鉄分	(27～58)	(50～70)	(60～65)	やや少ない* (25～45)	(47～63)	(50～53)	やや少ない (27～38)	不明	不明
	造滓成分	(16～52)	(5～33)	(10～15)	(20～45)	(8～30)	(7.52～)	(44～55)	不明	不明
	TiO_2	(2～10)	(0.1～2.0)	(0.1～0.7)	多い* (10～20)	多い* (0.2～3.2)	(0.06～0.19)	少ない* (0.3～0.6)	不明	不明
	V_2O_5 (%)	(0.1～0.5)	(0.002～0.3)	(0.01～0.3)	多い* (0.3～1.4)	多い* (0.01～0.4)	(～0.06)	少ない* (0.00～0.01)	不明	不明
鉱物組織	Fe_2SiO_4 (ファイヤライト)	○	○	○	○	○	○	○	(○)	(○)
	FeO (ヴスタイト)	○	○	○		○	○	△	(○)	(○)
	Fe_2TiO_4 (ウルボスピネル)	○			○	△				
	$FeTiO_3$ (イルメナイト)				△					
	その他		金属鉄	金属鉄		金属鉄	金属鉄		(金属鉄)	(金属鉄)

注）　○:多い，△:少ない，＊:低Ti砂鉄原料対比

滓ならば，写真１のような形状となっても不思議ではない。

以上の考察より，本資料は高Ti系砂鉄原料を用いた精錬滓であるが，昇温が不十分で還元も不十分であったものと推定する。

7．結　　言

調査の結果，本資料は高Ti系砂鉄原料を用いた精錬滓と推定する。しかし，精錬時の昇温ならびに砂鉄の還元は不十分で，良好な精錬は行われなかったものと考える。

なお，鉄滓中に噛み込んでいた木炭のミクロ組織から木の種類の決定を試みたが，保有標本と完全に一致するものはなかった。

本調査を行うに当たり，御協力いただいた日立金属株式会社安来工場冶金研究所，瀬崎主任，山田所員ならびに分析課本司所員に深く謝意する。

参考文献

（1）　大沢正己「日本製鉄史論集」P.85　昭和58年（たたら研究会）
（2）　清永欣吾「素 形 材」vol.26　NO.5　P.26　1985年５月

(5)　郷路橋遺跡出土鉄滓の調査（Ⅱ）

日立金属株式会社安来工場
冶金研究所　清　永　欣　吾

さきに，中国横断自動車道広島浜田線建設地内の郷路橋遺跡より出土した鉄滓につき調査し，高Ti系砂鉄原料を用いた製錬滓と推定したが[(1)]，遺跡の第２次調査の結果，新たに左下場跡と本場炉壁中より銑及び鉄滓と思われる資料が採取されたので，これらにつき金属学的調査を実施した。

1．資　　料

資料の明細及び外観をそれぞれ表１，写真に示す。写真の左側が（大）で右側は（小）資料を示す（図版93)。

2．化学組成

各資料より約５ｇの試料を採取し，化学分析を行った。結果を表２に示す。

なお，参考のために前回調査した郷路橋遺跡出土鉄滓の化学組成[(1)]も併載した。

表1　資　料　の　明　細

No	資　　料	明　　細	重量(g)
1	G区１号炉黄褐色粘土中(大)	炉壁粘土中に混入されていた鉄滓で，表，裏共光沢あり，厚さ10㎜で黒色，断面密	80
2	〃　(小)	炉壁粘土中に混入されていた鉄滓で，流れ出て固まった状態を呈し，表，裏共光沢あり，黒色，断面密	70
3	G　区　近　世　土　壙(大)	土壙の中にあった鉄滓で，表面に木炭を噛み，凸凹状で茶褐色，木炭採取	180
4	〃	〃	200
5	G区鍛冶遺構炉跡１号炉(大)	炉の中にあった鉄滓で，表面は軽石状，赤色のやや固い層は10㎜程度，その下は茶褐色の粘土	590
6	〃　(小)	炉の中にあった鉄滓で，軽石状で，やや黒色，一部茶褐色	110
7	G区鍛冶遺構４号炉(大)	炉の中にあった鉄滓で，黒褐色，表面凸凹状，ボロボロと落ちる	500
8	〃　(小)	〃	70
9	G区鍛冶遺構１号炉炉壁側	１号炉内中心より炉壁側にあった鉄滓，やや軽石状だが固い，木炭を噛み黒色	110
10	No５資料付着粘土	No５鉄滓の下辺付着粘土	

１号炉は左下場，４号炉は本場と推定されるものである。

3．顕微鏡組織

資料の顕微鏡組織を写真２～10に示す（図版94・95）。資料No．１～No．５及び資料No．９は鍛冶滓の特徴であるヴスタイトが晶出しているのが認められる。

資料No．６は化学組成から明らかなように鉄分が低くSiO_2及びAl_2O_3が多いことから炉材との共融物と思われる。

資料No．７，No．８は金属鉄の滓化したものと思われ，かつC量が３％以上あることから銑の滓化したものであろう。

4．構成相の解析

前項で観察した資料のうち，代表的なものを選び，走査型電子顕微鏡（SEM）による微細組織の観察ならびにEDX分析（エネルギー分散型X線分析）による局部的な定性元素分析を行った。また粉砕試料を用いてX線回折を実施し，構成結晶の同定を行った。

結果を写真11～24に示す（図版96～102）。

以上，資料No．１～No．９について結晶組織の検討を行った結果をまとめると表３の通りである。

表２　郷路橋鉄滓の化学組成

（重量　%）

No	資料	C	SiO_2	MnO	P	S	Ni	Cr_2O_3	V_2O_5	Cu	Al_2O_3	Na	K	TiO_2	CaO	MgO	T•Fe	FeO	Fe_2O_3	M•Fe
1	G区１号炉黄褐色粘土中(大)	0.037	22.71	0.13	0.13	0.030	0.09	0.07	0.051	<0.01	5.87	0.23	1.24	0.49	1.91	0.60	53.71	60.21	7.79	1.45
2	〃　(小)	0.035	22.25	0.15	0.13	0.026	0.09	0.07	0.049	<0.01	6.14	0.16	1.17	0.54	1.58	0.62	54.33	61.07	7.50	1.34
3	G区近世土壙(大)	0.57	21.06	0.37	0.15	0.029	0.02	0.03	0.12	<0.01	5.57	0.18	0.99	1.56	1.61	0.75	51.89	46.27	21.81	0.67
4	〃　(小)	0.19	23.28	0.85	0.12	0.024	0.06	0.06	0.29	<0.01	6.56	0.17	1.14	4.04	1.85	0.77	47.23	49.57	11.15	0.89
5	G区鍛冶遺構炉跡１号炉(大)	0.19	31.59	0.39	0.16	0.029	0.08	0.06	0.18	<0.01	7.13	0.50	1.16	2.06	1.16	0.55	38.65	38.51	10.86	1.12
6	〃　(小)	0.30	51.09	0.23	0.11	0.014	0.07	0.05	0.065	<0.01	16.70	0.37	1.92	1.04	1.27	1.00	16.22	8.62	12.97	0.45
7	G区鍛冶遺構４号炉(大)	3.17	11.98	0.06	0.29	0.035	0.02	0.02	0.028	<0.01	3.48	0.10	0.73	0.21	0.38	0.21	46.67	4.74	61.16	0.22
8	〃　(小)	3.88	19.99	0.08	0.26	0.039	0.02	0.02	0.036	<0.01	4.10	0.11	0.80	0.29	0.50	0.26	42.22	5.17	53.02	1.11
9	G区鍛冶遺構炉壁側１号炉	0.12	26.75	0.38	0.14	0.030	0.06	0.05	0.14	<0.01	7.26	0.19	1.42	1.75	1.89	0.81	44.72	47.42	9.48	1.23
10	No５鉄滓付着粘土	0.47	48.26	–	–	0.007	–	–	–	–	23.72	0.37	2.04	0.91	1.14	1.16	12.22	7.47	9.16	–
	郷路橋鉄滓(1)	0.018	19.24	0.45	0.44	0.031	0.002	–	0.21	0.0005	4.42	–	–	16.09	2.65	0.59	51.95	56.18	11.50	–

表3　各種鉄滓の構成組織

資料	ファイヤライト Fe_2SiO_4	ルウサイト $KAlSi_2O_6$	ヴスタイト FeO	ヘマタイト Fe_2O_3	マグネタイト Fe_3O_4	ウルボスピネル Fe_2TiO_4	シリカ SiO_2	ガラス質基地
No.1	○		○					Si-Aℓ-Fe-K-Ca
No.3	○	○	○	○			○	Si-Fe-Aℓ-Ca-K-Ti
No.4	○	○	○	○	○	○		Si-K-Aℓ-Fe
No.5	○	○	○	○	○		○	Si-K-Aℓ-Fe
No.6	○						○	Si-Aℓ-Fe-K-Ca-Ti
No.7	○	○	○	○	○	○	○	
No.9	○	○	○	○	○	○		

注）　No.4のウルボスピネルはEDX分析による。

5．考　　察

大沢正己氏[(2)]は古墳出土鉄滓の広汎な調査結果に基づき精錬滓と鍛冶滓の化学組成及び鉱物組成をまとめられている。

これに本銑滓の結果をまとめると表4の如くなる。

表4により資料が製錬滓か，鍛冶滓か，あるいは使用原料が砂鉄か鉱石（岩鉄）かについて考察してみる。

(1)　製錬滓か鍛冶滓か

鍛冶滓に対する製錬滓の特徴を列挙すると次の通りである。

①　全鉄分が低めである。（通常50％以下）

②　造滓成分が多い。（通常20％以上）

③　同一砂鉄原料を使用する場合，TiO_2が高めとなる。

④　ヴスタイト（FeO）の生成が少ない。

⑤　形状については，製錬滓が流動性のよい滑らかな面をもつのに対し，鍛冶滓は凹凸状である。

本資料についてみると造滓剤量は多いがTio_2は低め，これに対しT・Feはやや高めなことから製錬滓とは考えられない。従って鍛冶滓と推定される。

(2)　精錬鍛冶滓か鍛錬鍛冶滓か

鍛錬鍛冶滓に対する精錬鍛冶滓の特徴は次の通りである。

表4　原料による各種鉄滓の化学組成と鉱物組成の比較

名　称		化学組成（重量 %）								構成相
		SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	造滓剤量	TiO_2	V	T・Fe	
製錬滓(砂鉄)	福岡地方					16.8 ～39.8	1.1 ～8.2	0.006 ～0.576	37.5 ～57.6	W+F, W+M+F, M+F
〃	岡山地方					17.1 ～25.9	5.03 ～19.8	0.02 ～0.18	32.1 ～41.8	M+F, U+I+F
鉱石系製錬滓						44.5 ～54.9	0.35 ～0.57	0.007 ～0.010	27.5 ～38.0	F+(W/M)微量
製錬鍛冶滓	福岡地方					21.0 ～33.5	0.22 ～0.9	0.009 ～0.167	49.1 ～55.6	W+F
〃	岡山地方					21.4	5.6	0.12	51.7	W+M+F
鍛錬鍛冶滓	福岡地方					10.1 ～12.6	0.1 ～0.7	0.013 ～0.288	62.2 ～64.0	W+F
〃	岡山地方					7.52	0.06 ～0.19	0.06	50.1 ～64.0	W+F
No.1　(大)	瑞穂町郷路橋	22.71	5.87	1.91	0.6	31.09	0.49	0.029	53.71	W+F
No.3　(大)	〃	21.06	5.57	1.61	0.75	28.99	1.56	0.067	51.89	W+F+L+H+S
No.4　(小)	〃	23.28	6.56	1.85	0.77	32.46	4.04	0.162	47.23	W+F+L+H+M
No.5　(小)	〃	31.59	7.13	1.16	0.55	40.43	2.06	0.101	38.65	W+F+L+H+M+S
No.6　(小)	〃	51.09	16.7	1.27	1.00	70.06	1.04	0.036	16.22	F+S
No.7　(大)	〃	11.98	3.48	0.38	0.21	16.05	0.21	0.016	46.67	W+F+L+H+M+U+S
No.9	〃	26.75	7.26	1.89	0.81	36.71	1.75	0.078	44.72	W+F+L+H+M+U
郷路橋鉄滓(1)	〃	19.24	4.42	2.65	0.59	26.90	16.09	0.117	51.95	F+W+M+L+U

注）W:ヴスタイト，F:ファイヤライト，M:マグネタイト，H:ヘマタイト，U:ウルボスピネル，L:ルーサイト，S:シリカ
造滓成分：(SiO_2+Al_2O_3+MgO+CaO)

① 全鉄分が低めである。

② 造滓成分が多い。

③ 同一原料を使用する場合，TiO_2がやや高めとなる。

④ 金属鉄の混入が少ない。

本資料についてみると全鉄分がやや低めで，TiO_2はやや高く，また造滓剤量が多いことから精錬鍛冶滓と認められる。

(3) 使用原料は砂鉄か鉱石か

使用原料を区別する指標となるものはTiとV量である。砂鉄を原料とした精錬鍛冶滓の〔TiO_2〕/〔Fe〕の比を求めると，0.004～0.017%であるのに対し本資料は0.004～0.086%である。またV/Feの値を求めると福岡では0.0017，岡山では0.0023となる。一方，本資料は0.0003～

0.034となりやや低めの物もあるか，しかし文献（3）によると折り返し鍛錬が進むとV量は下がる傾向を示す実例からして，本資料は砂鉄を原料に用いた鉄滓であると推定される。

(4)　先に調査した郷路橋鉄滓との比較

先に調査した鉄滓（製錬滓と思われる）と本鍛冶滓の化学組成を比較すると，前者に比し本資料はSi，Aℓがやや高め，P，V_2O_5，CaO，TiO_2低めとなっており，特にTiO_2量が少ない。TiO_2，V_2O_5は砂鉄中に含有され，製錬時に鉄滓として除去されるため，その結果脱燐が進行し，製錬滓中のPが多くなったのであろう。

本資料のSiO_2，$Aℓ_2O_3$が多いのは，精錬鍛冶温度がかなり高めであったためと思われる。

(5)　その他

①　資料No.7，No.8は他鉄滓とは異なる組織を示しているのが認められる。また，本鉄滓は軟らかくボロボロと崩れ易いところから推察すれば温度がかかり半溶融状態に達したものではなく，比較的鉄分の多い粉状銑鉄が長年の堆積で酸化固結したものと思われる。

②　資料No.10鉄滓炉材は$Aℓ_2O_3$が高く，鉄分もやや高いことから粘土系のものが使用されていたものと思われる。

6．結　　言

島根県邑智郡瑞穂町郷路橋遺跡出土鉄滓について化学組成ならびに組織の調査を行った。結果を要約すると次の通りである。

(1)　No.1～No.6及びNo.9資料は砂鉄系原料を用いた精錬鍛冶滓と推定する。

(2)　No.7，No.8資料は銑鉄粉の滓化固結したものと思われる。

(3)　本調査により郷路橋遺跡における製鉄は砂鉄を原料として銑鉄を製造し，精錬鍛冶を行ったもので，製鉄技術としては鉄の収率は良好ではなく，鉄滓組成，ミクロ組織もそれぞれ異なっていることから安定した操業ではなかったと考えられる。

以上の調査は，日立金属株式会社安来工場冶金研究所で実施した。

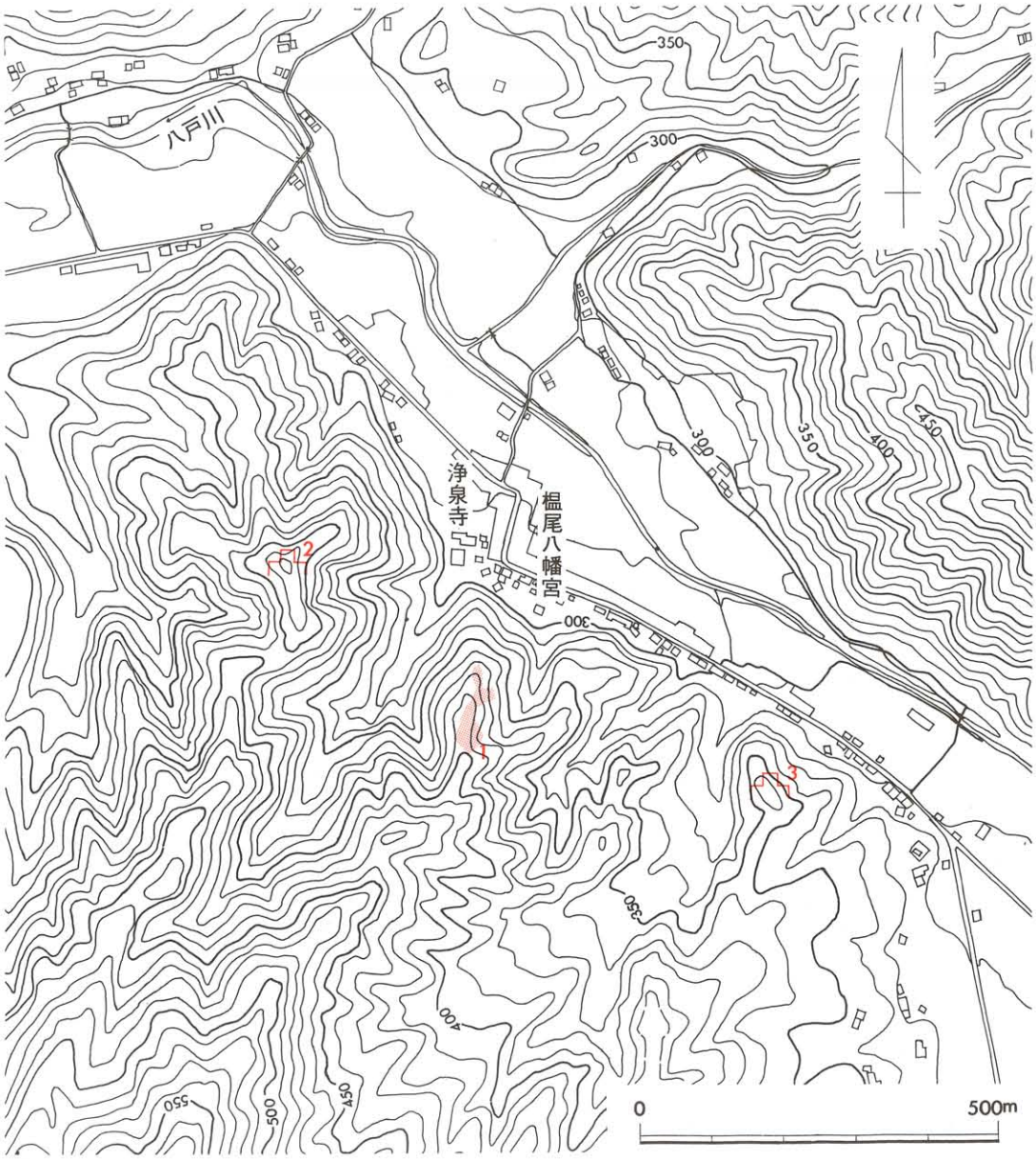
参考文献

（1）　清永欣吾　「郷路橋出土鉄滓の調査」　島根県教育委員会提出　昭和63年8月4日
（2）　大沢正己　「古代出土鉄滓からみた古代製鉄，日本製鉄史論集」　P119　たたら研究会　1984年
（3）　清永欣吾，佐藤豊　「鳥上作刀鍛錬場における鍛錬鍛冶滓について」（たたら研究大会で発表）
昭和59年12月1日

第Ⅱ章　滝ノ屋谷城跡

1．調査の概要

本城跡は，邑智郡瑞穂町大字市木字滝ノ屋谷6634－3外に所在し，丸瀬山（標高1,021）から北側に延びる尾根上に位置している。城跡頂上部（主郭）の標高は約400mで，付近の集落から主郭平

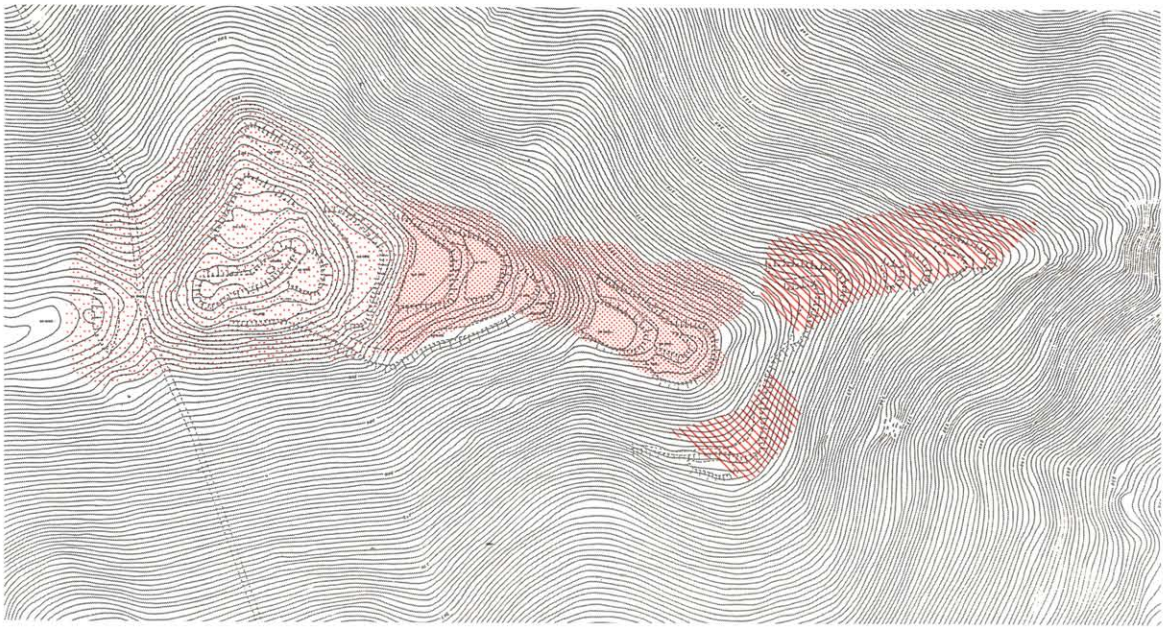


第１図　滝ノ屋谷城跡の位置(1.滝ノ屋谷城跡、2.桜尾城跡、3.堀城跡)

坦面までの比高差は約100mを測る。ここからは，眼下に瑞穂町市木の街並を一望することができ，谷を挟んだ北西300mには桜尾城跡，東側400mには堀城跡が位置しており，いずれも間近に見ることができる（第１図，図版103－１）。

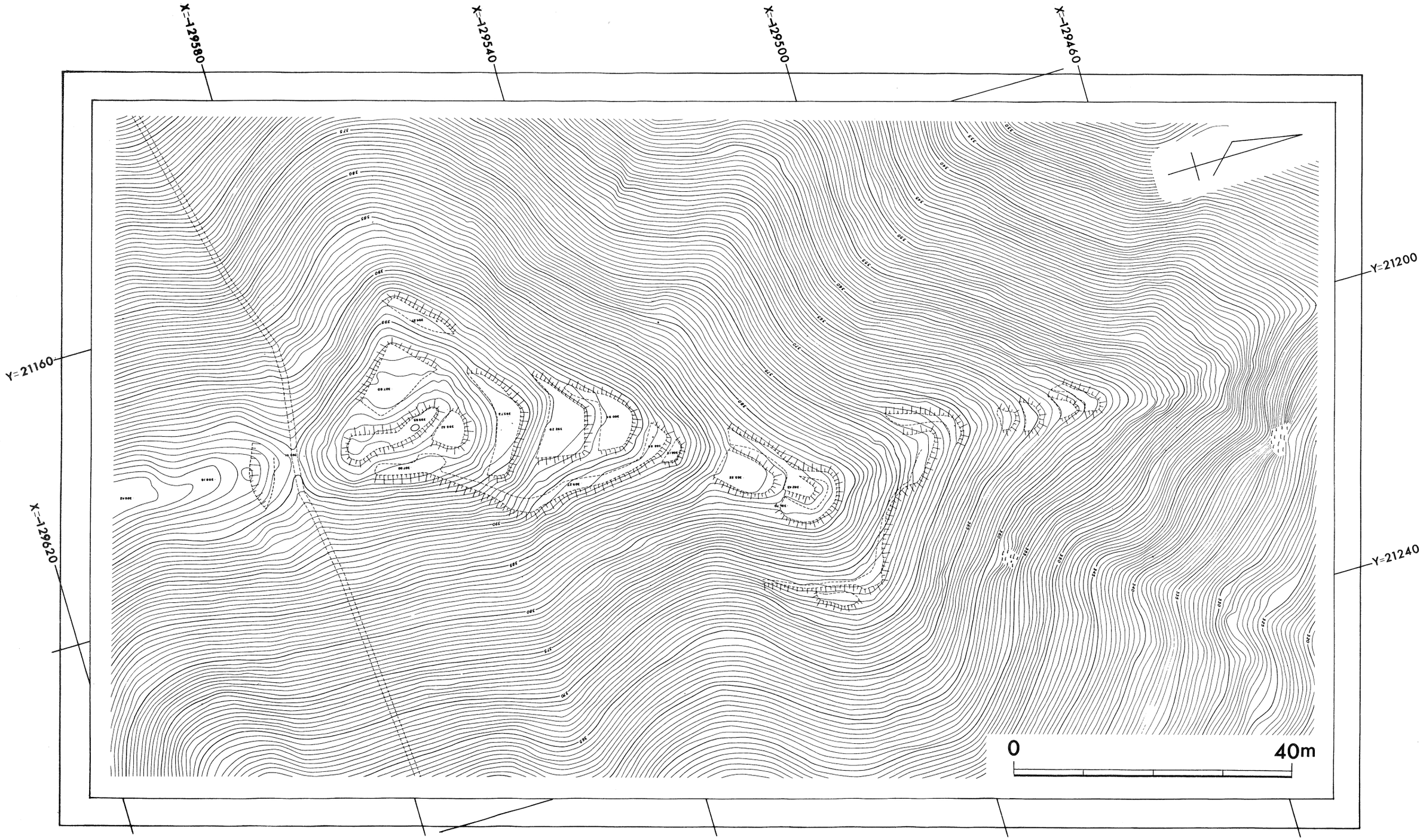
この城跡は中国横断自動車道広島浜田線建設工事中の平成元年11月６日に発見され，直ちに遺跡の取り扱いについて道路公団と協議した結果，橋脚建設の工程上，城跡の北端部分のみでも早急に工事に着手したいとのことであり，やむを得ずその部分について急遽調査を実施することとなった。この城に関しての記録は全く残っておらず，所在地の小字名が滝ノ屋谷であることから滝ノ屋谷城跡と称することにした。

滝ノ屋谷城跡は，丸瀬山から北に延びる痩せ尾根を削平して造られている。表面観察の結果，南に，長さ約16m，幅約12m，深さ約４mを測る堀切を配した土塁状の高まりを持つ加工段が認められ，そこから北東方向に６つの加工段とその先端からさらに北方向に延びる丘陵突出部，加工段先端の東側にある傾斜の緩やかな斜面を範囲とする山城であることを確認した（第３図）。調査では，便宜的に土塁状の高まりを持つ加工段を主郭，以下北に向かって順次１～６郭（中央郭群）とし，６郭の北側下方にある平坦面（北０郭）とそこから北方向に延びる丘陵突出部（北１～６郭）を北郭群，加工段先端の東側にある傾斜の緩やかな斜面を東郭と呼称することにした。平成元年度の調査では北郭群（北０郭を除く）と東郭，平成２年度調査では２～６郭，北０郭について調査を行った

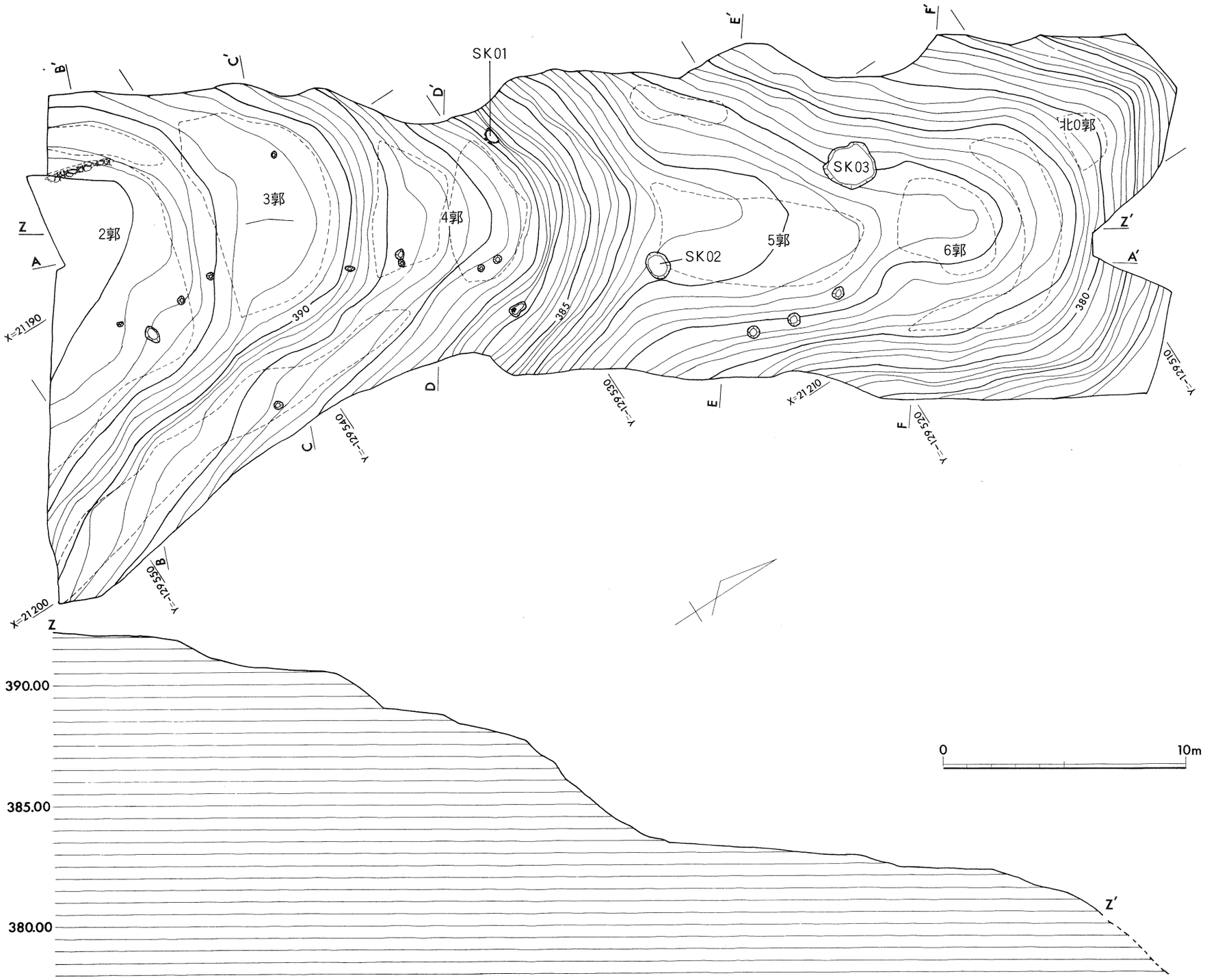


平成元年度調査区　　平成２年度調査区　　保存区域（工事対象外）

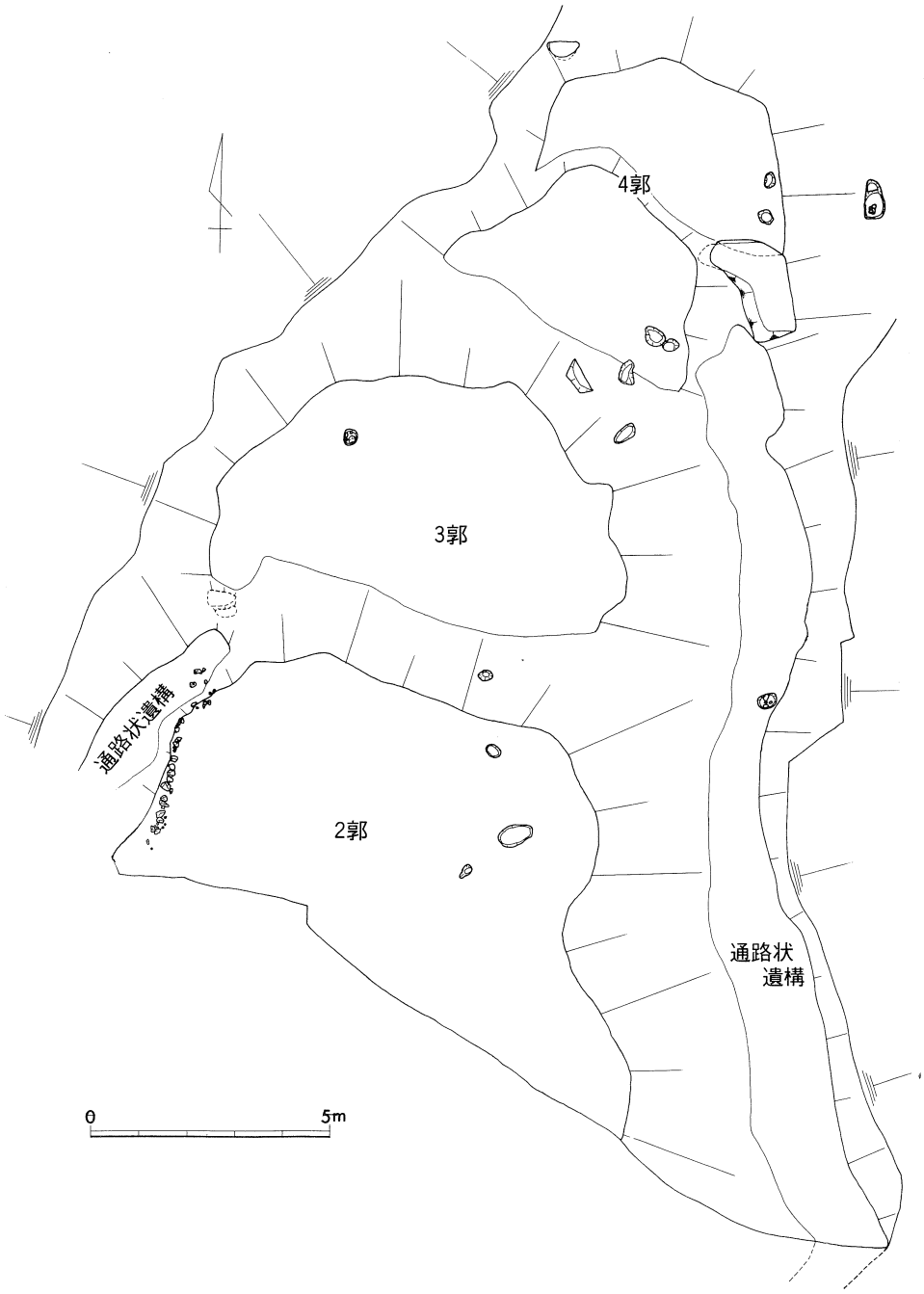
第２図　滝ノ屋谷城跡調査区図



第３図　滝ノ屋谷城跡調査前地形測量図



第 4 図　中央郭群地形測量図（調査後）



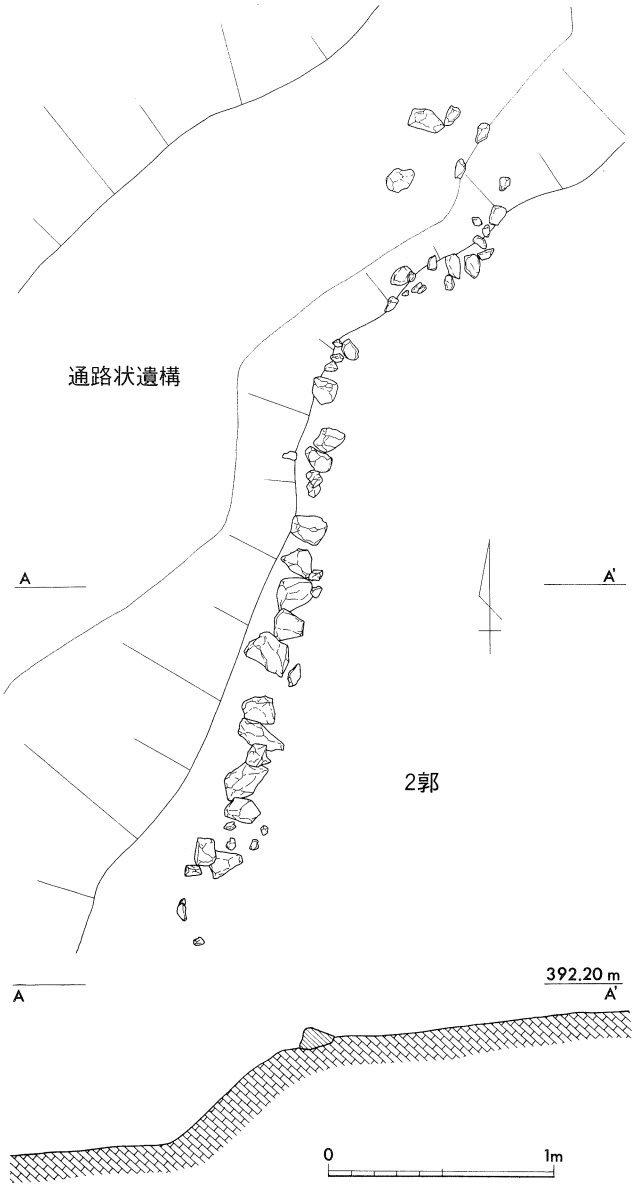
第５図　２～４郭遺構図

（第２図）。調査範囲は２郭以北の部分で，主郭と１郭，主郭南の堀切は調査区から外れることになった。

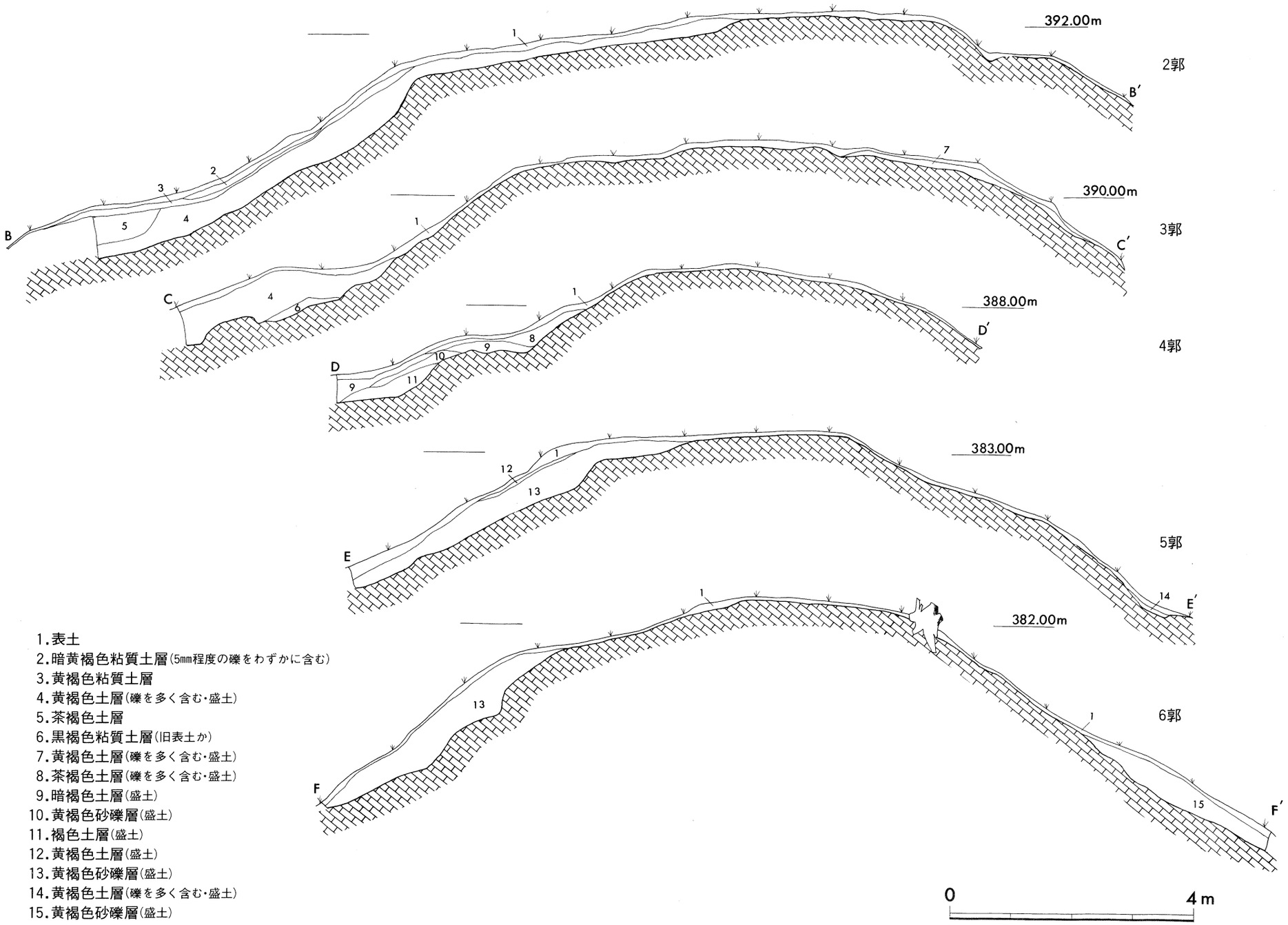
２．遺構と遺物

(1)　第２郭

２郭は１郭の北側下方約3.3mに位置し，１郭との比高差は約３mを測る。平面プランはほぼ台形に近い形で，東西方向に約11m，尾根筋に約５mの規模を持つ。南側の斜面を約47度に削り出して平坦面が造成されていた。郭の東西両側ではそれぞれ通路状に延びる平坦面（通路状遺構）を検出した（第５図，図版109－1・110－2・111－1）。西側のものは，２郭とは約50cmの段差があり，幅約１mを測り，２郭北西隅から３郭に続いている。東側のものは２郭の下方，比高差約2.2mの所にあり，郭との間の斜面は約28度の斜度を持つ。幅約２mを測るもので，南側は階段状に主郭付近から延び３郭東端をまわって，北方向には４郭付近まで続く。50～80cmの盛土で造られている。盛土は，各郭の両側に，通路状の平坦面を成すために盛られており，先端方向（北方向）には見られなかった（第７・８図）。郭の西端には，郭造成時に削り出されたと思われる人頭大から拳大の自然石が，約４mに渡って並べられており，西側の通路状遺構との間に明確な区切りが成されていたようである（第６図，図版109－１）。同様のものは東側通路状遺構にも見られる。また，柱穴状のピットが２個見られるが，地山の岩盤が露出した部分と合わせ，建物があった可能性も考えられる。

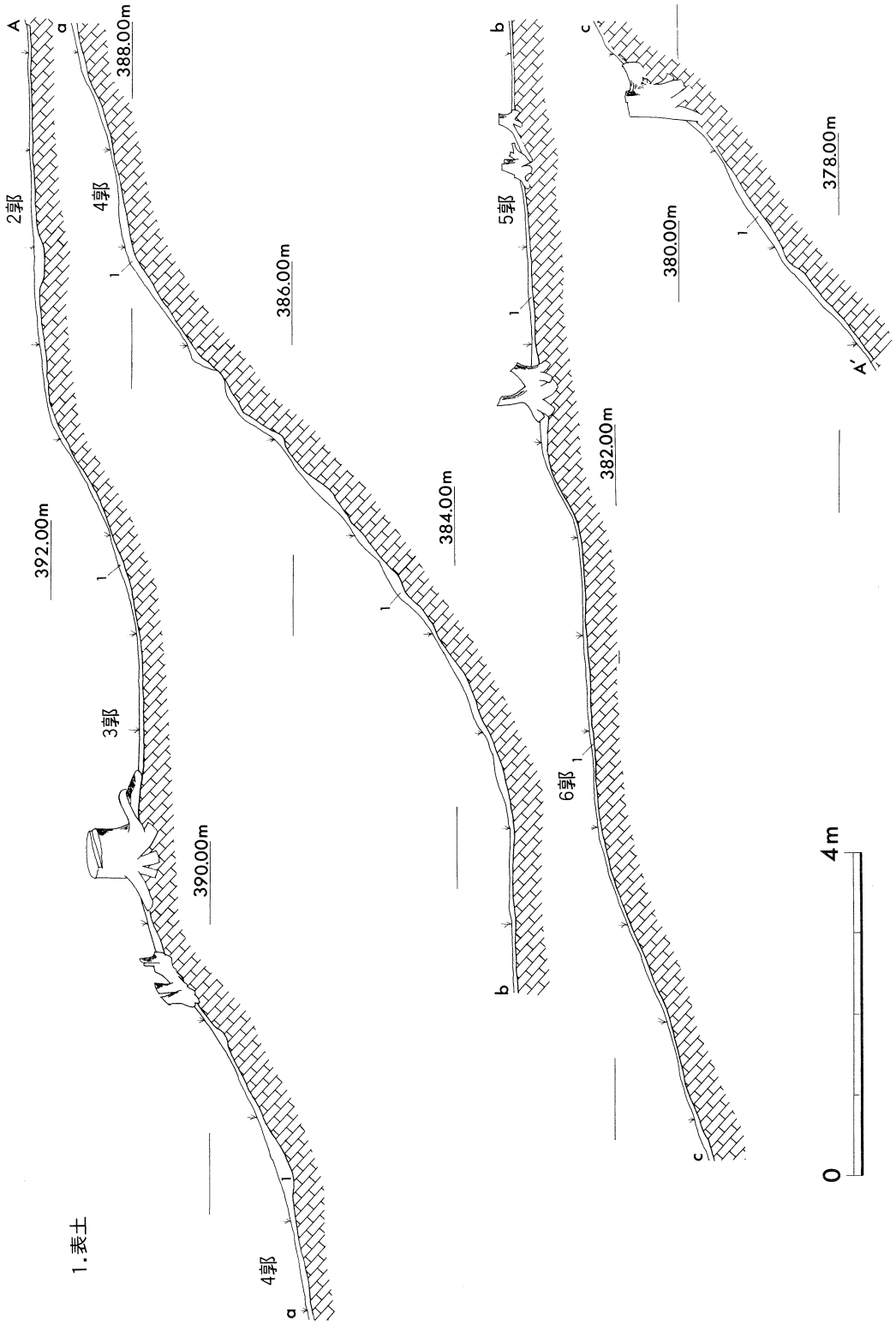


第６図　２郭西側石列実測図



1.表土
2.暗黄褐色粘質土層(5mm程度の礫をわずかに含む)
3.黄褐色粘質土層
4.黄褐色土層(礫を多く含む・盛土)
5.茶褐色土層
6.黒褐色粘質土層(旧表土か)
7.黄褐色土層(礫を多く含む・盛土)
8.茶褐色土層(礫を多く含む・盛土)
9.暗褐色土層(盛土)
10.黄褐色砂礫層(盛土)
11.褐色土層(盛土)
12.黄褐色土層(盛土)
13.黄褐色砂礫層(盛土)
14.黄褐色土層(礫を多く含む・盛土)
15.黄褐色砂礫層(盛土)

第７図　中央郭群土層断面図(２～６郭)



第８図　中央郭群土層断面図（A～A′）

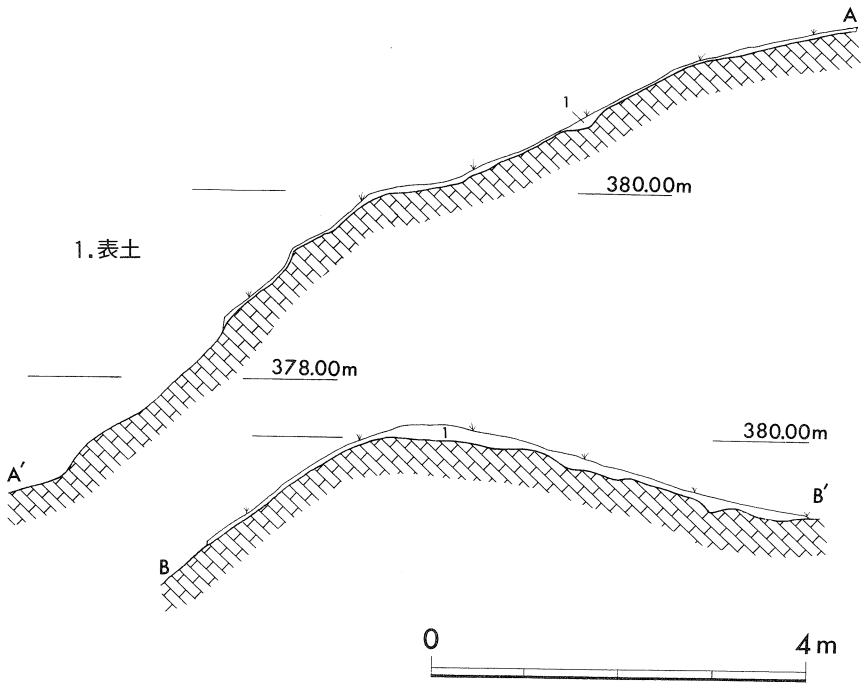
(2) 第3・4郭

3郭の平面プランは半円形に近い形で，規模は東西方向に約8.5m，尾根筋に約5mであり，2郭とは約1mの段差を持つ。4郭は約40cmのなだらかな段差で区切られた，ほぼ台形に近いプランを持つ2つの平坦面（東西方向に約5.5m，尾根筋に約2.5m・東西方向に約6m，尾根筋に約3m）からなり，3郭とは1.5mの段差で区切られていた。4郭の西側部分は，一部獣が掘った穴のため崩れていた。2郭と3郭との斜面に1個，3郭西側から1個，3郭と4郭との斜面から2個，4郭東側から4個のピットが検出されたが，それぞれの性格は不明である。4郭の先端から5郭に続く西側斜面には，径約80cm，深さ約25cmの半円形の土坑（SK01）があり内部には炭や焼土が含まれていた（第5図）。

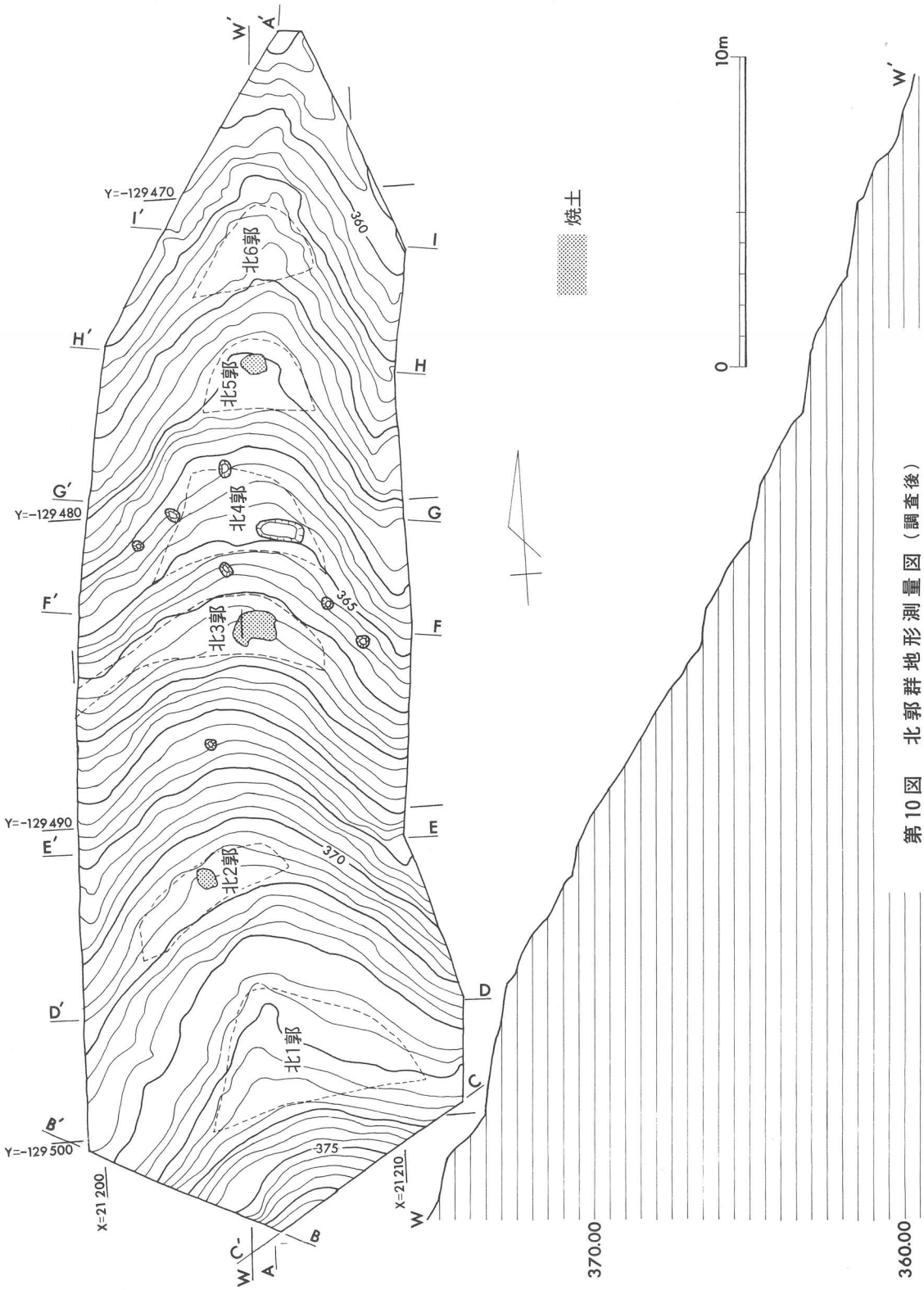
2郭同様3郭も尾根筋方向には盛土は見られず，両側にのみ盛土が施され通路状の平坦面を形成していた（第7・8図）。東側の盛土を除去したところ，下方からピットが4個認められた。これらは盛土工事を行う時に何らかの形で利用されたものではないかと考えられる。

(3) 第5・6郭

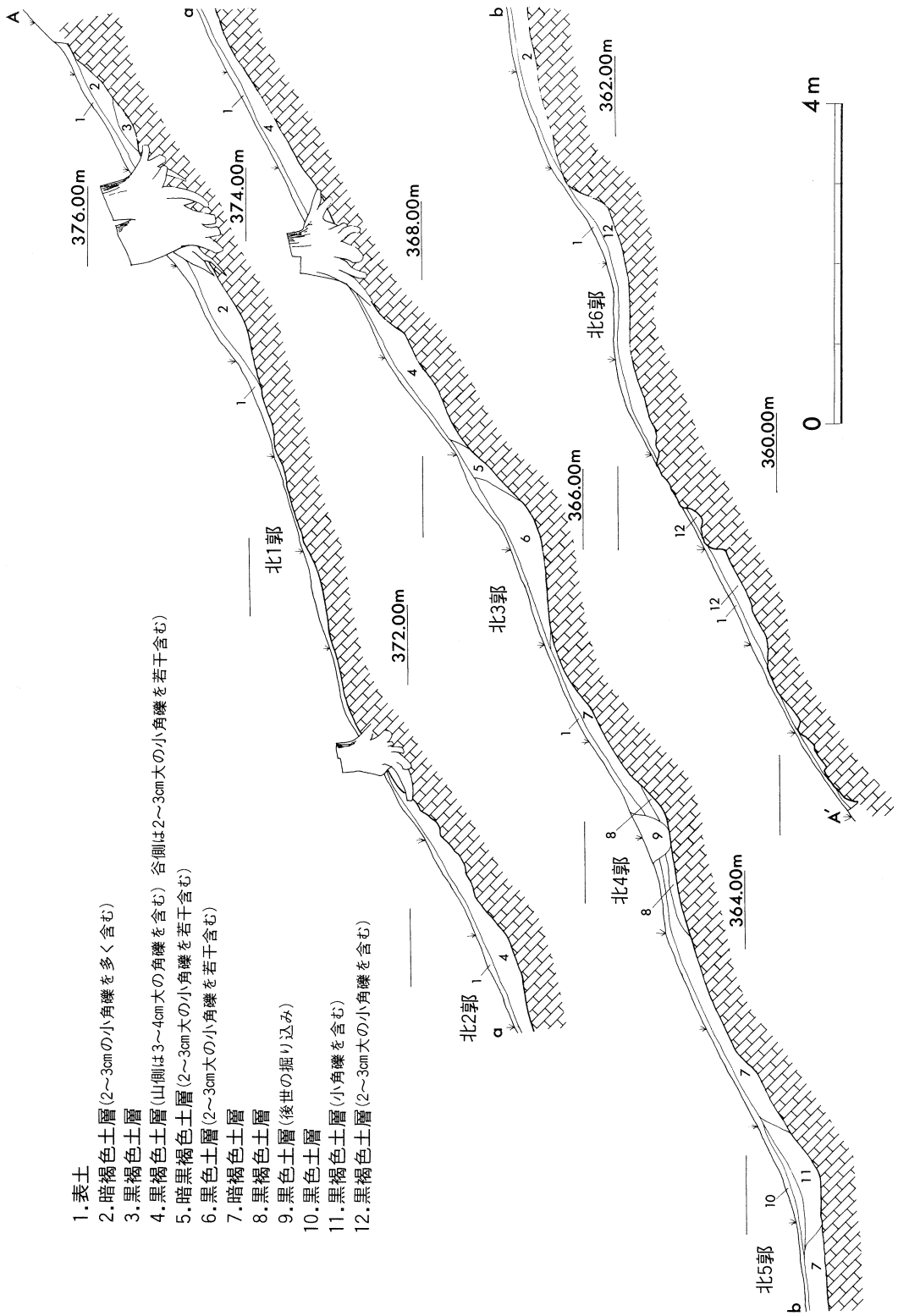
5郭は，4郭とは約5mの比高差があり，郭の南側を約39度に削り出して平坦面が造られていた。平面プランは，長方形に近いもので，その規模は東西方向に約3.5m，尾根筋に約9mを測るもので



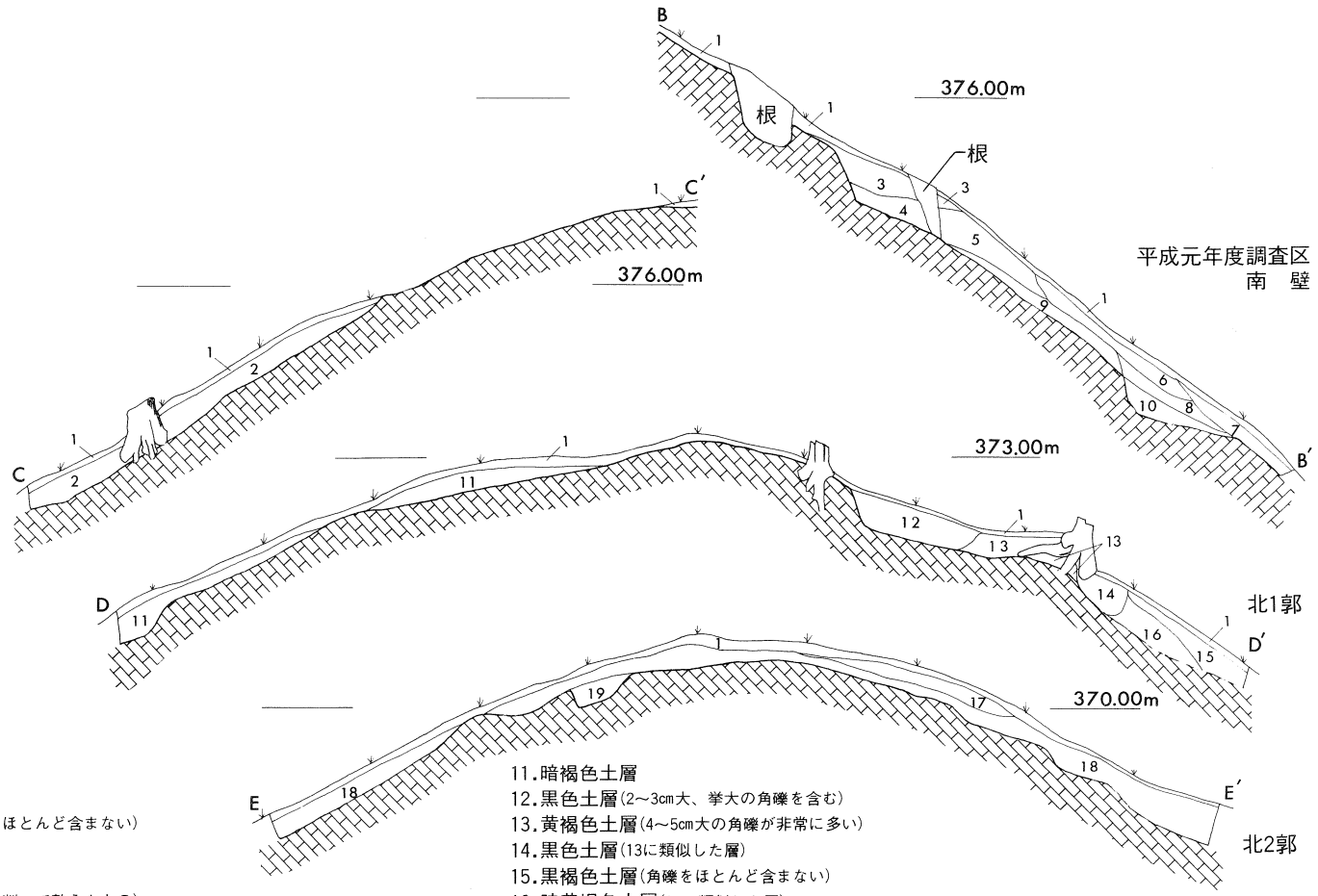
第9図　北0郭土層断面図



第10図　北郭群地形測量図（調査後）

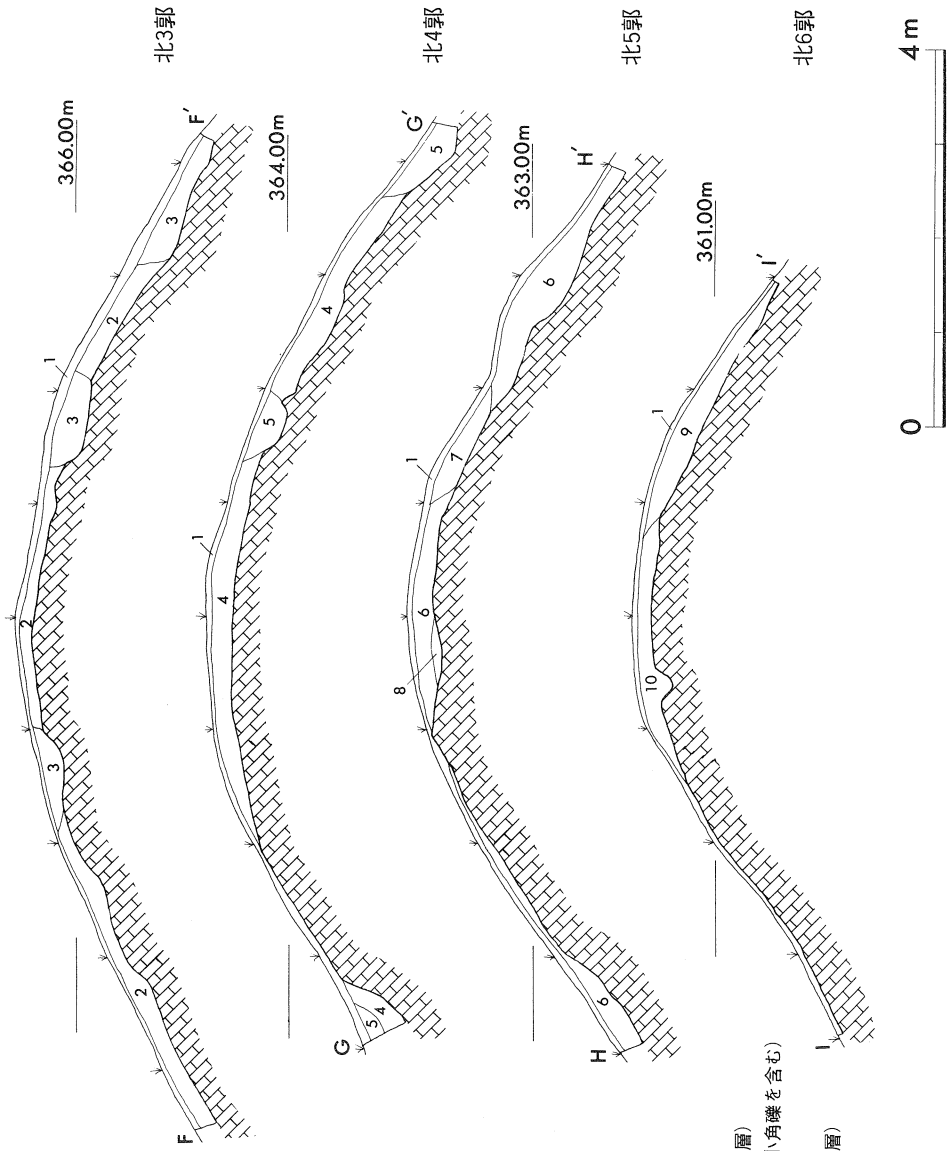


第11図　北郭群土層断面図（A～A′）



1.表土
2.黒褐色土層(角礫をほとんど含まない)
3.暗黒褐色土層
4.暗黄褐色土層
5.黄褐色土層(地山を削って整えたもの)
6.暗黄褐色土層(角礫は少ない、盛土の流れたもの)
7.暗褐色粘質土層(角礫は少ない)
8.黒褐色土層(角礫は少ない)
9.暗褐色土層(旧表土)
10.暗褐色土層(角礫を含む)
11.暗褐色土層
12.黒色土層(2～3cm大、拳大の角礫を含む)
13.黄褐色土層(4～5cm大の角礫が非常に多い)
14.黒色土層(13に類似した層)
15.黒褐色土層(角礫をほとんど含まない)
16.暗黄褐色土層(14に類似した層)
17.暗黒褐色土層(3～4cm大の角礫を若干含む)
18.黒褐色土層(3～4cm大の角礫を若干含む)
19.暗褐色土層

第12図　北郭群土層断面図(北1・2郭)



1.表土
2.暗褐色土層
3.黒褐色土層
4.暗褐色土層(3に類似した層)
5.黒褐色土層(2～3cm大の小角礫を含む)
6.暗褐色土層
7.黒褐色土層(6に類似した層)
8.黒褐色土層
9.暗褐色土層
10.黒褐色土層

第13図　北郭群土層断面図（北3～6郭）

ある。６郭は，５郭と約50cmの段差を持つなだらかな斜面で区切られており，東西方向に約3.5m，尾根筋に約４ｍの規模を持つものである。５郭西側斜面と６郭の周りからも通路状の平坦面が検出された。この他，５郭北端と西側斜面より土坑がそれぞれ１基（SK02，SK03），東側斜面よりピット３個（径約40～50cm，深さ約16～38cm）が検出された。SK02は径約１ｍ，深さ約10cm，SK03は径約２ｍ，深さ約20cmのほぼ円形もので共に焼土や炭化物を含んでいた（図版110－１）。それらの性格は不明である。東側斜面のピット３個は，斜面にそってほぼ一線に並び，柵列を成していた可能性が高い（第４図）。盛土の状況は２～３郭同様に東西方向にのみ施されていた（第７・８図，図版112－１）。

(4)　北郭群（第10図，図版117－１・２）

北郭群は６郭から北方向に延びる尾根上にほぼ一直線に並んだ７つのやや小規模な郭を備えている。この７つの郭を南から順に北０～６郭と呼称した。

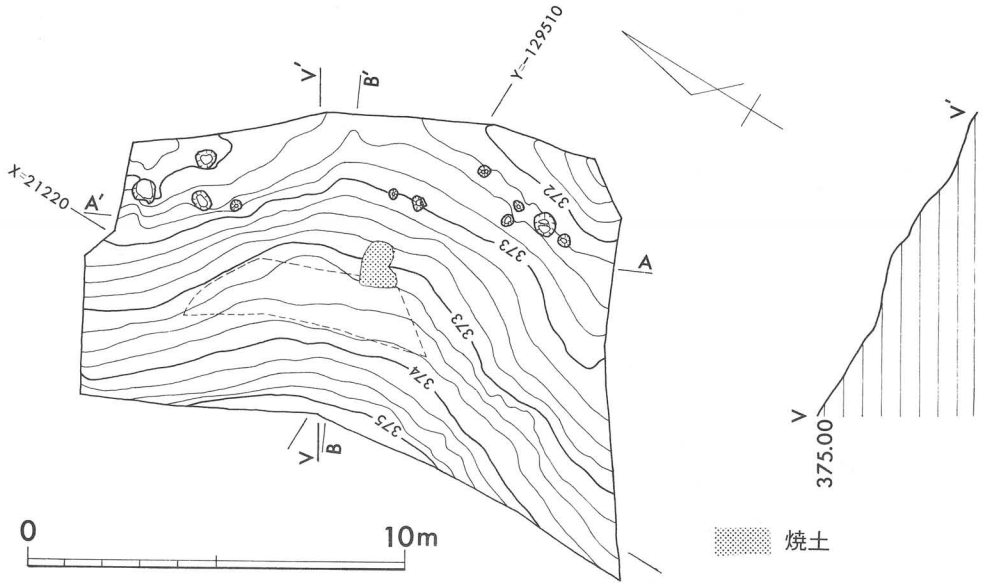
北０郭は６郭のすぐ北側下方にあり，東西方向に約2.5m，尾根筋に約1.5mの半円形の平坦面であった。北１郭は北０郭の北側下方にあり，２つの郭の比高差は約７ｍを測る。南側の斜面を約40度に削り出し，東西方向に約７ｍ，尾根筋に約４ｍの台形に近い形の平坦面が造られていた。

北２郭は，尾根のやや西側にあり幅約1.5m，長さ約1.5mの長方形に近い加工段である。平坦部のほぼ中央に約0.7×0.5mの楕円形に広がる焼土を確認した。また，北３郭に続く西側斜面よりピット１個（径約30cm，深さ約20cm）を検出した。

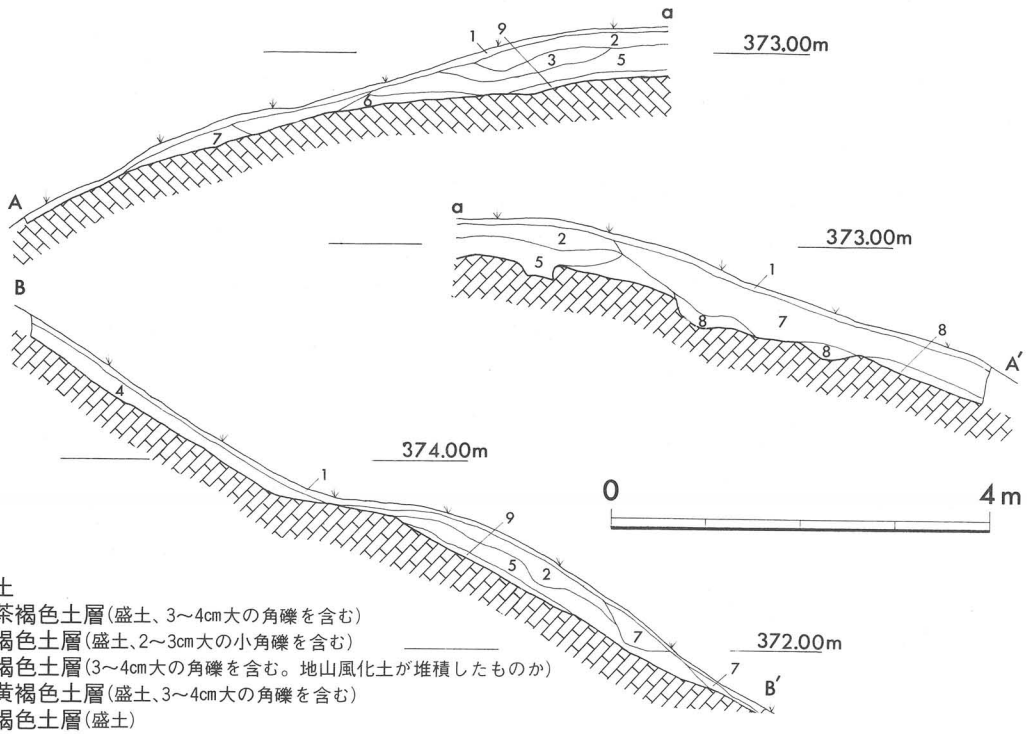
北３郭は，東西方向に約７ｍ，尾根筋に約２ｍの規模を持つ加工段である。土層断面の観察から，地山を掘り込んで造ったことが確認できる（第11図）。また，東側斜面からピットが３個（径約35～45cm，深さ約17～35cm）確認され，東側に柵列があったことが考えられる。その他，平坦部のほぼ中央に，約1.3×1.0mの範囲で焼土が確認された。

北４郭は，北３郭同様に地山を掘り込んで造った加工段であることが土層断面の観察より確認された（第11図）。その規模は，東西方向に約５ｍ，尾根筋に約３ｍのもので，平坦部の東側から土坑が１基確認された。この遺構は長方形を呈するもので，長さ150cm，幅60cm，深さ15cmを測るものであるが，その性格は不明である（図版116－１）。また，西側斜面からピット３個（径約30～50cm，深さ約20～25cm）が確認され，北３郭と同様の柵列があったことが考えられる（図版115－２）。５郭の東側斜面，北２郭西側斜面，北３郭の東側斜面と，ここで確認されたピットの検出状況から，東側，西側と交互に柵列を設けるという防御形態をとっていた可能性が考えられる。

北５郭は，東西方向に約3.5m，尾根筋に約2.3mの加工段であり，土層断面の観察から地山を階段状に削平した跡がはっきりと認められた（第11図）。また，ここでも北２・３郭同様に平坦部の中央に約0.7×0.6mの範囲で焼土を検出した。



第14図　東郭地形測量図（調査後）

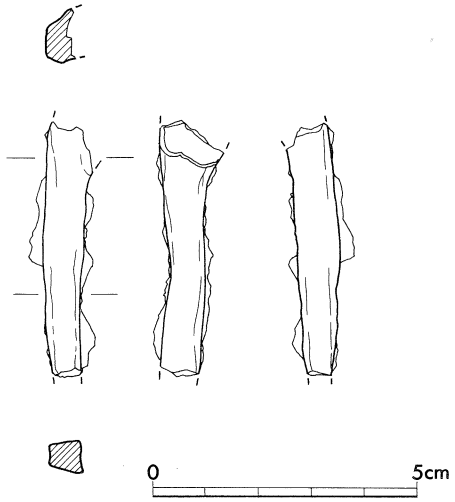


第15図　東郭土層断面図

北６郭も，北５郭同様に地山を階段状に削平した東西方向に約４ｍ，尾根筋に約2.3ｍの規模を持つ加工段である。

(5)　東郭（第14図）

６郭の北東側斜面下方やや離れたところに主部があり，南北方向に約6.5ｍ，尾根筋に約1.5ｍの規模を持っている。この平坦面は，中央郭群からも，北郭群からも離れており，独立した形になっている。６郭からの斜面は約35度の斜度を持ち，比高差は約7.5ｍを測る。平坦部の東側から斜面にかけて約1.3×1.1ｍの範囲で焼土が認められた。土層断面の観察の結果，平坦部中央から東側斜面にかけて30～50㎝の盛土が施されており，この郭の東側は盛土によって造成されていたことが確認された（第15図）。また，平坦部周辺の斜面から11個のピットが確認され，そのうちの一つから鉄釘が出土した（第16図，図版118－２）。これらのピットは柵列を成すものと考えられる。出土した鉄釘は全面にサビが付着した長さ4.8㎝，太さ0.8㎝のもので断面四角形を呈す。頭部と先端部は欠損していた。



第16図　東郭出土鉄釘実測図

３．小　　結

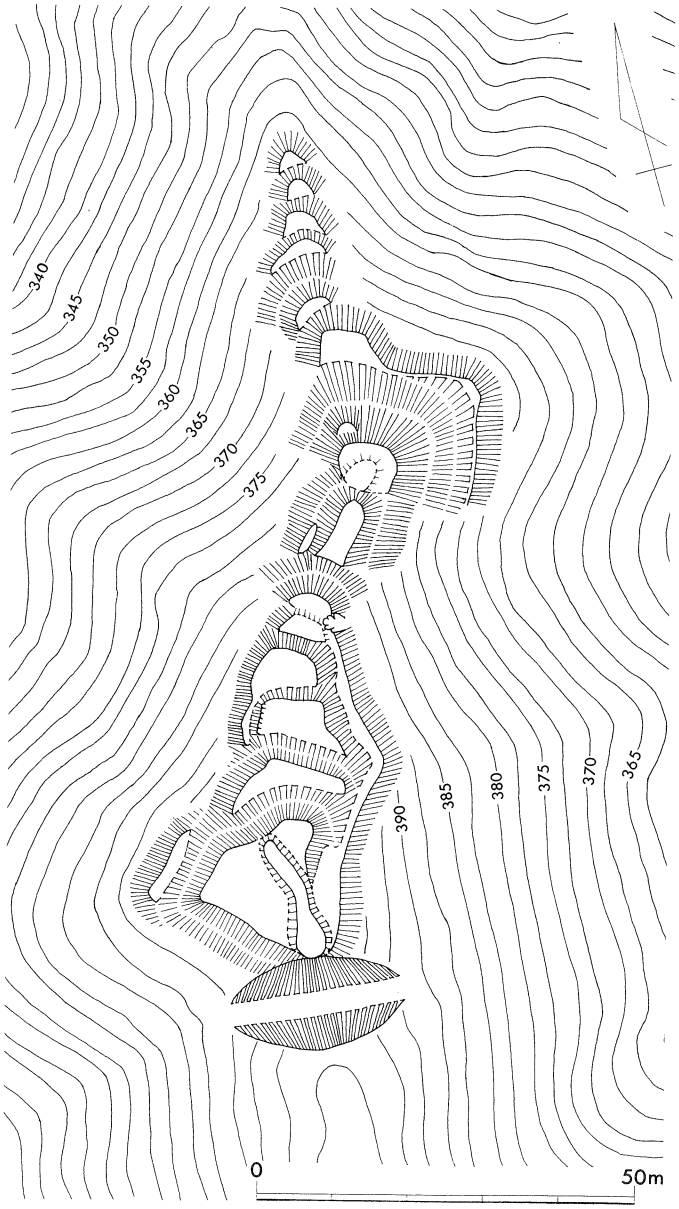
今回調査を実施した滝ノ屋谷城跡は，文献等の記録がなく，調査でも主郭・第１郭等の山城の主要部分を含まなかったこともあり，築城時期や築城者を示すような資料は得られなかった。しかし，郭の造成方法や配置等について幾つかの知見を得ることができたので，以下にその特徴を述べ，この山城の持つ性格について簡単に考察し，まとめとする。

滝ノ屋谷城跡では，建物跡の存在は確認できなかったが，第２郭西側で確認された石列の性格を考えると，建物の側片を区画するものだったのではないだろうか。通路状遺構の側縁にも同様の石列は見られるが，第２郭の石列に比べやや粗雑に並べられている印象を受ける。第３郭以下の郭には見られないことから，単に平坦面の側縁に並べられていたものとは考え難い。第２郭では柱穴状のピットも確認されており，岩盤の露出している東側部分にまたがる掘立柱建物が存在したことも考えられる。

建物以外の施設では，第５郭，北３郭，北４郭の下方斜面に柵列と考えられるピット列が見られるが，これらの郭では，尾根の主軸に対し左右に広がる斜面のどちらか一方のみに柵列を備えていたものと考えられる。北３・４郭でのピットの検出状況から推察すると，互いに隣接する郭では柵

列を配した斜面と配さない斜面が交互に位置するようにされていたことが予想され，山城の中心部へ向かう進入路をジクザグに配していた様子を窺うことができる。

郭の造成は，中央郭群では尾根を切り崩し，その土を周囲に盛ることによって平坦面を造成している。その場合の盛土は，尾根の主軸方向には見られず，東西の両斜面にのみ施され，郭の平坦面を広げると共に，一段下がった位置に通路状に平坦面を配することに使用されている。同時に調査を行った森迫城跡では，主軸方向も含めた３方向に盛土が行われており，滝ノ屋谷城跡中央郭群の場合とは異なっている。しかし，北郭群と東郭では，盛土の方法に特徴は見られず，中央郭群と他の郭では，郭の造成方法が異なるようである。各郭の配置は，丘陵高所から北に延びる尾根の先端部に至るまで段階状に配されているが，主郭背面に当たる南側では堀切と小さな平坦面を配するのみで，複雑な施設は見られない。緩やかな尾根が長く南に延びることから，非常時の退路となる部分であろう。中央郭群の各郭は比較的大きく，通路状遺構を配している点等，整備された状況が見られるが，北郭群や東郭は規模も小さく，多くの郭の平面形が半月形を呈すなど，粗雑に造られている印象を受ける。



第17図　滝ノ屋谷城縄張図

主郭部は調査区からは外れたが，表面観察からも特徴的な造成を窺うことができる。滝ノ屋谷城

跡が位置する尾根の山頂部は完全には削平されておらず，中央付近を土塁状に残し，その西側に小さな平坦面を造成している。隣接する桜尾城跡や堀城跡，ほぼ全面調査を行った森迫城跡では主郭部に十分な広さを持つ平坦面が確保されており，異なる印象を与えるものとなっている。また，第２郭東隅から第１郭には２ｍ程の幅で緩やかに延びる斜面があり，段階状に通路が通じていたものと思われる。中央郭群東側の通路状遺構とした部分はこの斜面に通じており，第４郭付近から延び，第２・３郭の横を通り，階段状に上って第１郭につながると思われる。

以上までに滝ノ屋谷城跡の特徴について述べてきたが，この中で特に注目される点は，主郭付近の造成と，郭群毎で郭の形態・規模が異なる点であろう。

主郭の造成については，平坦面が狭すぎることから，造成途中の状況とも思われるが，一般に山城は山頂部から削平を始め，時間的経過と共に周囲の郭群を整備していくもの[(1)]と考えられており，滝ノ屋谷城跡の場合も土塁に守られた小規模な主郭の完成した状況と見ておきたい。それらの仮定を事実と考えた場合，第２郭から第１郭に延びる斜面（階段？）は，第１郭に突き当たった後，土塁を回らなければ主郭に入ることができない。第２・３郭の横を通る通路状遺構や北３・４郭に見られる柵列（？）の配置と共に，侵入者に対して側面を攻めるための工夫が行われていたのであろうか。

また，郭群毎による形態・規模の違いについては，時期差や築城者の違いと考える積極的根拠は無く，中央郭群と北郭群の連続性から，同一時期に同一の築城者によって造られたものと想像できる。多田暢久氏は，『陣城プランの特徴について』と第する論文で，陣城が築かれる理由は合戦に備える軍勢の野営地の確保と，敵の攻撃に耐え得る陣地としての機能の二つの側面があり，陣城はその二つの要求の反映として縄張りとして整備された部分（本郭部）と，緩斜面を確保しただけの部分（駐屯部）の二重構造を取る[(2)]，とされている。滝ノ屋谷城跡の場合，主郭から第２郭付近にかけて土塁や通路等を複雑に配し，縄張りとして整備した部分と，第５郭から北郭群，東郭での柵列が見られる程度で，小規模な平坦面を配しただけの部分に分けることができるように見える。このような状況を多田氏の言うような二重構造を持つ陣城と仮定した場合，東郭，北２・３・５郭に見られる焼土や土坑（SK02・03）の存在は，駐屯部での野営の状況を示すものと解釈できないだろうか。

今回の調査では前述の通り十分な資料を得ることができなかったことから，築城年代や築城者については想像の域を出ない。仮に陣城と考えた場合，市木地区では，14世紀の南北朝の内乱の頃[(3)]と，16世紀中頃の毛利勢力の石見進入の頃[(4)]に戦闘が行われたことが伝えられており，その頃に市木地区で陣城が築かれた可能性は高い。しかし，安芸国と境を接する地理的状況もあり，これ以外の期間にも緊張状態が続いていたことも考えられ，時期決定は困難である。また，陣城と考えるには駐屯

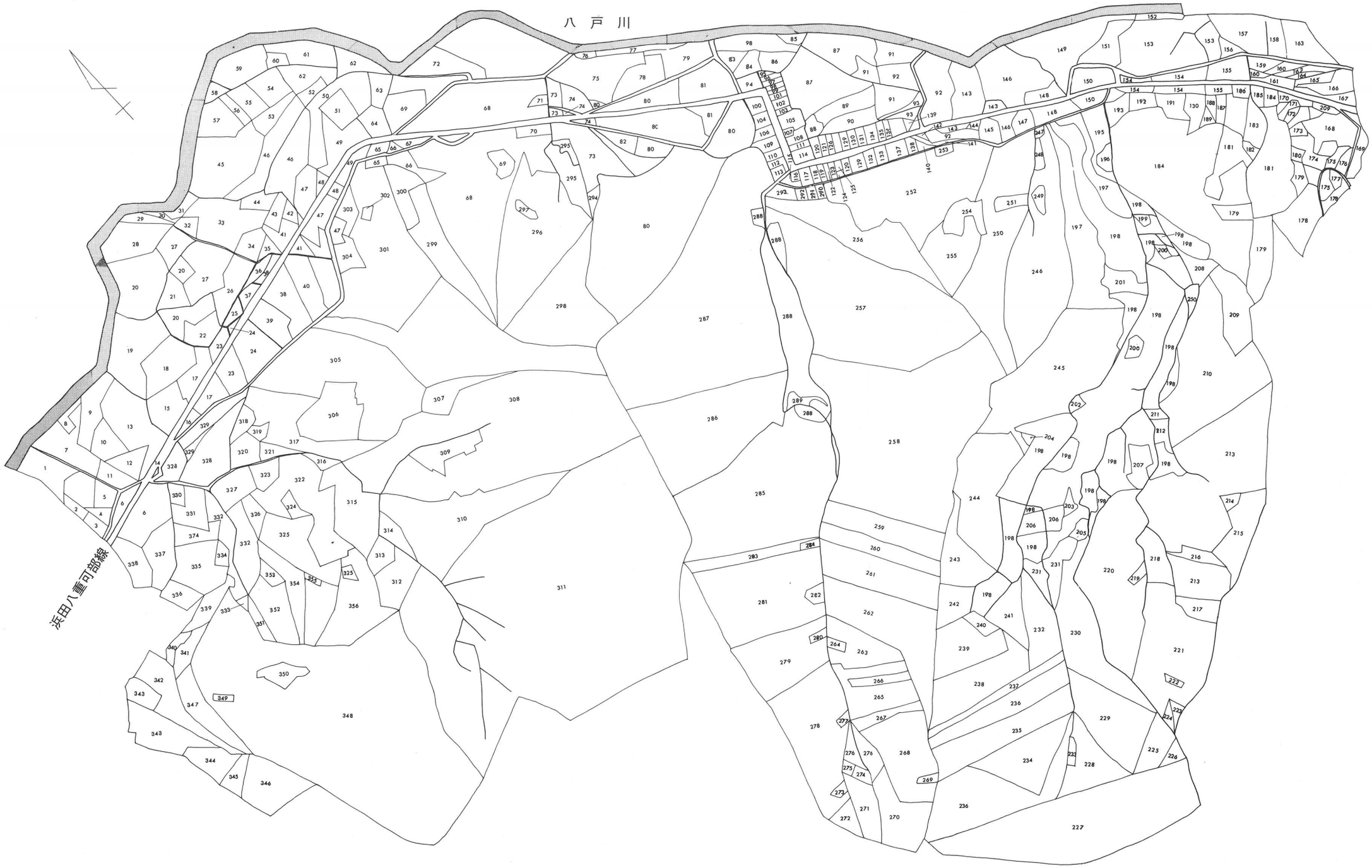
部である第５郭から北郭群・東郭が狭すぎるようにも思えることから，隣接する桜尾城跡や堀城跡に付属する施設であった可能性も否定できない。

島根県内での中世山城の発掘調査は数例しか行われていないが，今後急増することが予想される。現時点では，山城の構造から築城時期や築城者を推定することはできないが，資料の増加と共に，築城時期や築城者の他，各山城の持つ性格についても検討していくことが必要であろう。

（林　健亮，佐伯徳哉，森山敏広）

註

（１）　吉川正他　『琢道城跡発掘調査概報』　瑞穂町教育委員会　1989年
（２）　多田暢久　『近江の城 第32号』「陣城プランの特徴について」　近江の城友の会　1989年
（３）　1350年頃市三坂において，安芸国の吉川宇治と石見国の南朝方勢力との戦闘があったことが伝えられている。第Ⅸ章参照。
（４）　1561年末から1562年初頭に，吉川元春が福屋氏の領内に進入したと考えられる。第Ⅸ章参照。



第18図　堀城、滝ノ屋谷城、桜尾城、森迫城跡周辺切図